

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11

平成 6 年度発掘調査報告  
(第 1 分冊)

平成 7 年 3 月

鎌倉市教育委員会

# 序 文

鎌倉市教育委員会

教育長 米 倉 雄二郎

近年、鎌倉の街は、古い家屋や店舗の建て替えが相ついでいます。その中で、埋蔵文化財に影響を及ぼす大規模な工事も多くなりました。このため昭和59年度からは国庫・県費の補助を受けて個人専用住宅等については鎌倉市教育委員会が独自に発掘調査をするようにしてきました。

しかし急速な都市化・再開発が進む中で、調査が順調に進んできただとはいません。

郷土の文化財を守るということは国民の責務がありますが、当市のように市街地の中心と遺跡の中心が全く重なってしまうという条件のもとでは、特に市民の皆様のご理解なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘は不可能であるといえましょう。皆様のご協力をお願い申し上げる次第です。工事計画策定に当たってはできるだけ早くから当委員会との協議を行い、文化財保護の方策を煮つめていって頂きたいと思います。

本書は平成5年度に、国庫・県費補助を受けて、鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅・店舗併用住宅建設等に伴う発掘調査の記録です。本書が鎌倉の歴史を明らかにするために少しでも役立つことを祈念すると共に、調査実施に際してお世話になった調査員をはじめ多くの方々に、心からお礼申し上げます。

## 例　　言

1. 本書は平成5年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係わる発掘調査報告書（2分冊）である。
2. 本書所収の調査地点及び所収分冊は別表のとおりである。
3. 現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財保護課が実施した。
4. 出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財保護課が保管している。
5. 各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

# 総 目 次

## (第1分冊)

序文	I
例言	II
平成6年度の概観	V

### 1. 名越ヶ谷遺跡（大町四丁目1880番6外地点）

第一章 歴史的環境	5
第二章 検出した遺構の概要	5
第三章 出土した遺構と遺物	7
第四章 まとめ	9

### 2. 笹目遺跡（笹目町302番5地点）

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	19
第二章 検出した遺構と出土した遺物	19
第三章 まとめ	40

### 3. 米町遺跡（大町二丁目2315番外地点）

第一章 調査地点概観	55
第二章 調査の概要	61
第三章 調査結果	65
第1節 遺構面の概要と層序	65
第2節 検出遺構と出土遺物	67
第四章 まとめ	120

### 4. 名越ヶ谷遺跡（大町三丁目1217番1地点）

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	145
第二章 調査の概要	146
第三章 検出された遺構	149
第四章 出土遺物	158
第五章 まとめ	175

### 5. 由比ヶ浜南遺跡（長谷二丁目118番2外地点）

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	193
第二章 調査の経過と堆積土層	196
第1節 調査の経過	196
第2節 堆積土層	197

第三章 検出された遺構と出土した遺物	198
第1節 中世の遺構と遺物	198
第2節 古代の遺構と遺物	207
第四章 まとめと考察	214
<b>6. 若宮大路周辺遺跡群（由比ガ浜一丁目123番5地点）</b>	
第一章 調査地点の位置と歴史的環境	231
第二章 調査の概要	234
第三章 調査結果	237
第四章 まとめ	246
 <b>(第2分冊)</b>	
<b>7. 材木座町屋遺跡（材木座二丁目217番6地点）</b>	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	12
第二章 調査の経過と堆積土層	15
第1節 調査の経過	15
第2節 堆積土層	16
第三章 検出された遺構と出土した遺物	18
第1節 検出され遺構	18
第2節 出土した遺物	34
第四章 まとめと考察	65
<b>8. 長谷觀音堂周辺遺跡（長谷三丁目97番4地点）</b>	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	87
第二章 発見された遺構と遺物	92
第1節 中世（第4面）	92
第2節 近世（第3面）	100
第3節 近代（幕末～明治 第2面）	133
第4節 近代（明治～大正 第1面）	141
第5節 その他の出土遺物	157
第6節 出土動物遺存体	160
第7節 長谷觀音堂周辺遺跡の花粉化石	186
第8節 長谷觀音堂周辺遺跡の粒度分析	196
第三章 まとめ	204
<b>9. 上杉氏憲邸跡（淨明寺一丁目699番外地点）</b>	
第一章 調査地点概要	219
第二章 調査の概要	224
第三章 調査結果	226
第四章 まとめ	268

# 平成6年度調査の概観

平成6年度の緊急調査実施件数は10件で、対象面積は903m<sup>2</sup>である。前年度の10件、1130m<sup>2</sup>と比較し面積において減少している。これは平成4年度以降に顕著に表れた、経済情勢の後退現象の影響を反映せざるを得ない緊急発掘調査の宿命的な問題点が、未だに解決を得ないことに因む結果であろう。

6年度の調査原因の内訳は、自己用住宅（宅地造成を含む）が3件、自己用店舗等併用住宅が3件、共同住宅との併用住宅が1件で、他に自己用住宅に係わる車庫用地造成による調査が3件であった。

6年度調査の特記事項としては北条高時邸跡（地点2）で小町大路に平行する大溝を検出した点や、北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡）（地点6）で若宮大路の堅固な路面を確認し得たこと、また若宮大路周辺遺跡群（地点9）では今小路の路面とその沿道に形成された家屋群の存在を捉えられたことなどが挙げられる。以下、各地点の調査に至る経過と調査成果の概要を紹介する。

## 1 宇津宮辻子幕府跡

遺跡内の小町大路に東面し「日蓮辻脱法跡」と大路を挟んで向かい合う箇所で実施された、平成5年度からの継続調査である。調査により同幕府存立期を含む13世紀前半期の造構が削平により消滅したことが確認でき、後代に大規模な地形改変が行われたと考えられる。また花粉分析作業により、地山層からプラントオバールが検出され、中世以前に水田が形成されていたと推定された。

## 2 北条高時邸跡

宝戒寺境内地を中心とした遺跡内の、小町大路に西面する箇所に所在する。平成6年3月、自己用住宅建設に伴う事前相談があり、基礎掘削深度から埋蔵文化財に対する影響は無いものと判断された。ところが、施工者が計画を変更し杭打工事に着手したため直ちに工事の中止を要請し、発掘調査を必要とする事態であることを説明し、所定の手続きを経たうえで7月25日から調査を開始した。調査により、12世紀末期から14世紀代にかけて築造された大路に平行する4期の大溝を検出し、更に17世紀代の縁石跡が発見され、宝戒寺境内領地図と比較し得る良好な近世造構を発見するなどの成果が得られた。

## 3 倉久保遺跡

倉久保遺跡内の北側山腹地に所在する。平成6年2月、開発申請に伴う事前相談を受けて試掘調査を実施し、調査が不可避であることを確認したうえで所定の手続きを経て、同年7月27日から自己用区域を対象に調査を開始した。調査により6軒に及ぶ弥生時代後期及び奈良・平安期の住居跡を検出し山崎地区に多い古代集落遺跡の新たな資料が得られたのである。

## 4 大倉幕府周辺遺跡群

調査地点は幕府跡の正面を東西に走行する六浦路に南面する箇所に所在する。平成6年2月、自己用住宅建築に係わる事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議を進めた。その結果、当初計画されていた杭の数が最少必要数に限定されたため、杭位置を中心に調査を実施することとした。8月8日から開始した調査によって、16世紀代の版築面等を検出し、関取橋の伝承と併せ、極めて興味深い資料が得られたものと評される。

## 5 浄妙寺旧境内遺跡

浄妙寺の南西方向、六浦路に面する箇所に所在する。平成6年10月、自己用住宅建設に伴う事前相談があり車庫区域を対象に試掘調査を実施した。その結果本調査の必要性が確認されたため、所定の手続きを経て12月16日から調査を開始したのである。調査により、古墳時代の包含層等を検出した。

## 6 北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡）

遺跡内北側の、若宮大路に西面する箇所に位置する。平成5年4月開発申請に伴う事前相談があり、試掘調査によって発掘調査が不可避であることを確認し、所定の手続きを経たうえで7年1月20日から自己用区域を対象とした調査を開始した。その結果、從前に発見された若宮大路沿いに走行する堀造構と比べて、最も残存状態が良好な堀を検出すると共に、13世紀中半期の大路の路面を表出した。同面は極めて堅固で保存状態も良く、若宮大路の第一級の大路資料と評される。

## 7 鶴岡八幡宮旧境内遺跡

遺跡内の鶴岡文庫西側に所在する。平成6年10月、自己用住宅建設に伴う事前相談があり車庫区域を試掘調査することとしたが、工事が一部先行したためこれを中止し必要な協議と手続きを経て、7年2月9日から調査を開始した。調査により鶴岡八幡宮僧坊関連と考えられる建物遺構等を検出する成果を得られた。

## 8 天神山城

北野神社を頂部に祠る天神山の南麓に所在する。平成5年10月、開発申請に伴う事前相談があり、試掘調査を実施したところ近世から古代に至る遺構面を検出した。このため所定の手続きを経て、2月13日から自己用区域を対象として調査が開始された。現在調査中であるが、18世紀代の水田跡とその周辺の道路、側溝等が検出されている。

## 9 若宮大路周辺遺跡群

遺跡内の今小路に西面する箇所に所在する。平成6年9月、自己用店舗等併用住宅建設に伴う事前相談があり、試掘調査を実施することとした。同調査結果により本調査の必要性が確認されたが、当該地が車道に近接した地点にあるため安全面を配慮して杭打箇所を先行調査し、杭工事終了後に残余の区域を継続調査することとした。7年3月9日に自己用区域を対象として着手した調査により、今小路と思しき道路遺構と、その西側の今小路沿道に構築された方形堅穴建物などの家屋群が検出されている。

## 10 覚園寺旧境内遺跡

覚園寺が所在する薬師堂ヶ谷内に位置する。平成7年1月、自己用建築に伴う事前相談があり、試掘調査の結果により車庫区域を対象として調査を実施することとした。所定の手続きを経たうえで、3月22日から始められた調査により、14世紀後半期から15世紀にかけて築造された掘立柱建物跡などが検出されている。

## 平成6年度発掘調査地点一覧

(調査実施順)

No.	遺跡名	所在地	調査原因	種別	面積	調査期間
1	宇津宮辻子幕府跡 (No.239)	小町二丁目 389番1	自己用住宅	官衙	150m <sup>2</sup>	6.3.28～ 6.6.28
2	北条高時邸跡 (No.281)	小町三丁目 426番3	自己用診療所 併用住宅	城館	70m <sup>2</sup>	6.7.25～ 6.9.8
3	倉久保遺跡 (No.226)	山崎字清水塚 1550番1外	自己用住宅に 係る宅地造成	集落	340m <sup>2</sup>	6.7.27～ 6.10.7
4	大倉幕府周辺遺跡群 (No.49)	雪ノ下字天神 562番29	自己用住宅	都市	30m <sup>2</sup>	6.8.8～ 9.9.8
5	淨妙寺旧境内遺跡 (No.408)	淨明寺三丁目 6番3外	自己用住宅に 係る車庫造成	寺院	18m <sup>2</sup>	6.12.16～ 6.12.20
6	北条小町邸跡(泰 時時頼) (No.282)	雪ノ下一丁目 377番7	自己用店舗 併用住宅	城館	52m <sup>2</sup>	7.1.20～ 7.2.28
7	鶴岡八幡宮旧境内 (No.56)	雪ノ下二丁目 75番16	自己用住宅に 係る車庫造成	寺院	35m <sup>2</sup>	7.2.9～ 7.3.11
8	天神山城 (No.384)	山崎字宮廻 765番	自己用住宅 併用共同住宅	城館	120m <sup>2</sup>	7.2.9～ 7.4.27
9	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	御成町 788番3外	店舗併用 自己用住宅	都市	63m <sup>2</sup>	7.3.13～ 7.4.30
10	覺園寺旧境内遺跡 (No.435)	二階堂字平子 412番1外	自己用住宅に 係る車庫造成	寺院	25m <sup>2</sup>	7.3.22～ 7.4.15

## 本書所収の平成5年度調査地点

(掲載順)

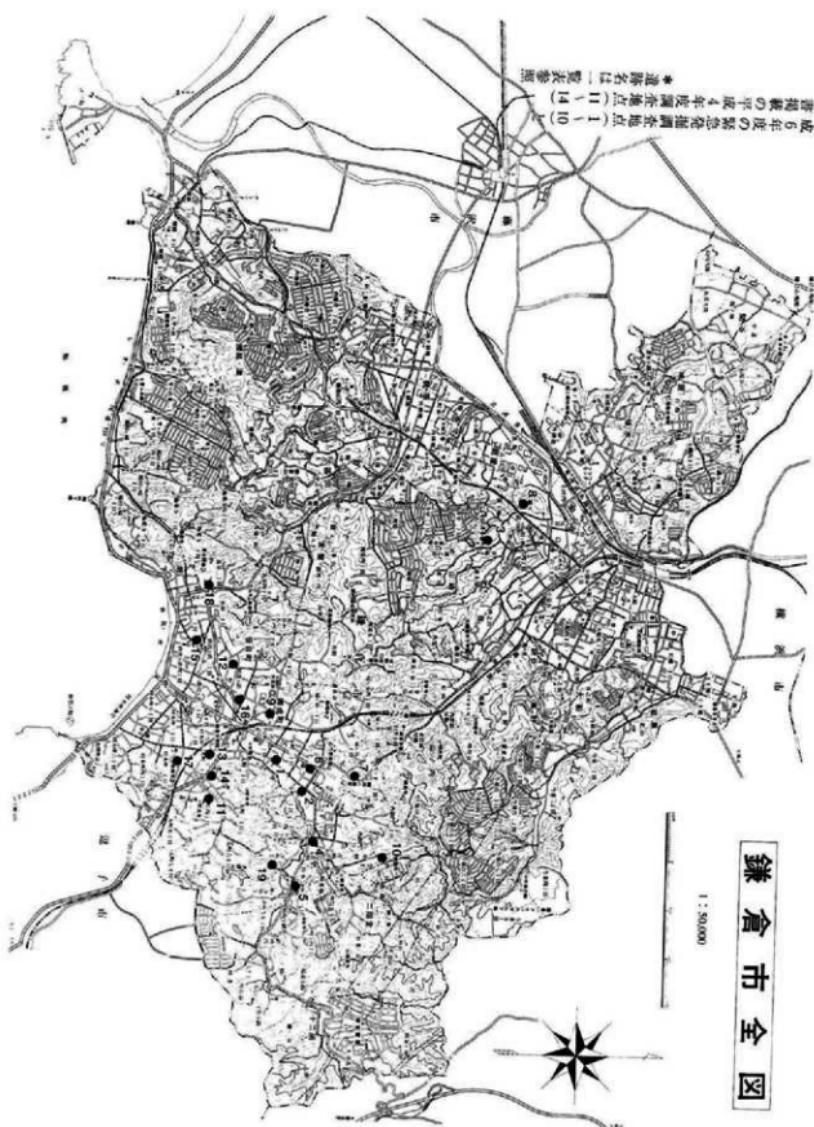
No.	遺跡名	所在地	調査原因	種別	面積	調査期間
11 ①	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町四丁目 1880番6外	自己用住宅	都市	80m <sup>2</sup>	5.5.3～ 5.5.24
12 ①	箕目遺跡 (No.207)	箕目町 302番5	自己用住宅	都市	200m <sup>2</sup>	5.6.1～ 5.9.8
13 ①	米町遺跡 (No.245)	大町二丁目 2315番外	自己用住宅 併用共同住宅	都市	100m <sup>2</sup>	5.7.12～ 5.9.6
14 ①	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町三丁目 1217番1	自己用店舗 併用住宅	都市	200m <sup>2</sup>	5.7.6～ 5.8.24
15 ①	由比ヶ浜遺跡 (No.315)	長谷二丁目 188番2外	自己用住宅	都市	60m <sup>2</sup>	6.2.17～ 6.3.18
16 ①	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	由比ヶ浜一丁目 123番5外	自己用住宅	都市	40m <sup>2</sup>	6.3.10～ 6.3.26
17 ②	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目 217番6外	自己用住宅に 係る道路整備	都市	80m <sup>2</sup>	5.9.10～ 5.10.16
18 ②	長谷観音堂周辺遺跡 (No.296)	長谷三丁目 39番4外	自己用店舗 併用住宅	都市	190m <sup>2</sup>	5.10.18～ 5.12.28
19 ②	上杉氏憲邸跡 (No.258)	浄明寺一丁目 699番外	自己用住宅 併用共同住宅	城館	30m <sup>2</sup>	5.11.25～ 5.11.30

①……第1分冊  
②……第2分冊

# 鎌倉市全図

1 : 50,000

本番地図の平成4年度測量各地区(1-10)  
\* 道路名は一覧表参照  
平成6年度の緊急危険地図(1-10)



な ごえ が やつ  
1. 名越ヶ谷遺跡

大町 4 丁目1880番 6 地点

## 例　　言

1. 本報は鎌倉市大町4丁目1880番6に所在する名越ヶ谷遺跡の発掘調査報告である。

2. 調査は個人専用住宅建築に先立って実施された。

3. 調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成5年5月3日から同年5月24日にかけて実施した。

4. 本報は第1章、第2章、第4章を田代郁夫が、第3章を大坪聖子、田代郁夫が執筆し、編集を土屋浩美が行った。

また、資料整理、図版の作成は土屋浩美、早野慈子、浜野洋一、大坪聖子、伊丹まさか、水上桂子、清水菜穂、岩元道子、谷下田厚子、辻きよ子、八杉陽子、根本志保、松原康子、瀬田浩美の協力を得た。

5. 本報に使用した写真は造構を梅木信之が、遺物を佐々木靖が撮影した。

6. 調査体制は以下の通りである。

調査主任 田代郁夫（日本考古学協会会員）

調査員 浜野洋一・土屋浩美・梅木信之

調査補助員 早野慈子・田代幸子

作業員 ㈲鎌倉市シルバー人材センター

7. 発掘調査及び本書作成に際し、下記の方々よりご協力、ご教示を賜った。記して深く感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

中田 英（神奈川県教育委員会）・中野晴久（常滑市民俗資料館）・藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）・後藤建一（湖西市教育委員会）・松尾宣方・玉林美男・永井正憲・馬淵和雄・福田 誠（鎌倉市教育委員会）・大三輪龍彦・手塚直樹・河野真知郎・斎木秀雄・宮田真・宗臺秀明・大河内勉・木村美代治・原 廣志・菊川英政・宗臺富貴子・瀬田哲夫・清水菜穂・菊川 泉・沙見一夫・佐藤仁彦・根本志保・シルバー人材センター鎌倉市高齢者事業団（山下陽一郎・原田昌幸）

## 本文目次

第一章 歴史的環境	5
第二章 検出した遺構	5
第三章 出土した遺物	7
第四章 まとめ	9

## 挿図目次

図-1 遺跡位置図	4
図-2 遺構全体図	6
図-3 土層堆積図	8
図-4 出土遺物	10

## 図版目次

図版1 調査区全景・調査区北壁	11
図版2 出土遺物	12



図1 遺跡位置図

# 第一章 歴史的環境

本遺跡は鎌倉市大町4丁目8-7に所在する。若宮大路の下馬交差点から名越を抜けて逗子に向う現在の国道134号線に沿って名越四つ角を過ぎ、すぐに安国輪寺に向う二叉路を左に入り、滑川の支流左岸をわずかに北上したところにある。

本遺跡地は鎌倉の旧名越地区内に包括される。かつて中世においては鎌倉の東南部から逗子にかけての広大な地域を漠然と名越と称していたようである。旧名越地区は大きく二つの大きな谷戸から構成されている。北側の谷戸には山王谷、駿遊堂口、名越大谷などの地名の付された支谷がある。これらの支谷内にはいわゆる「やぐら」が多く分布し、かつて多くの寺院が営まれていたであろうことが想像される。南側の谷戸には大町大路から鎌倉七切り通しのひとつ名越坂の切り通しを経て三浦郡へと通ずる中世の幹線道路が通っている。名越坂は旧東海道のコースにあたると考えられており、重要な交通路として整備されたようである。このように名越一帯は鎌倉への出入り口のひとつとして重要な役割を果たしており北条時政をはじめとする名越北条氏の居館の他にも多くの御家人達が居住していたであろう。鎌倉の防衛と一方では都市への人々の盛んな出入りといった両極の機能を担った場所といえよう。また付近には都市の周縁に通有の性格である葬地としての役割を果たしたと考えられる遺跡が多く検出されている。本遺跡地は南側の谷戸入り口部にあたり、滑川の支流左岸に接して位置している。

# 第二章 検出した遺構

南北12.5m、東西5.5mの調査区には80~90cmの盛り土が堆積していた。これを重機で掘削したところ、細かな山砂を主体とするが、かなり土壤化の進んだ茶褐色の土が表れた。大量のかわらけ破片と炭化物の微粒を含むことから、中世の包含層と判断し、以降手振りで作業を進めた。この包含層から遺構は検出されず、20~30cmの厚さで堆積していた。この包含層を取り除くと、調査区南壁では、黄褐色の砂層で暗褐色の粘性のある土をブロック状に含む中世の地山と考えられる土が表れるが、この中世地山層は調査区北側に向かって緩やかに傾斜しながら低くなり、この地山層上には黄褐色砂と粘性のある暗褐色土がブロック状に混じり合い、土丹粒、かわらけ、炭化物を含む土層が調査区の北側に向かって厚く堆積する。この層は4層に分層できる。これらの層を除去したところ幾つかの溝及び柱穴、土壙等を検出した。

## a. 柱穴について

南壁に長い調査区壁に、ほぼ平行して数条の溝を検出した。この溝底から互いに近接して柱穴が列状に掘込まれていた。溝の幅は20cm内外で、柱穴の規模もほぼ同様である。各溝間の時間差は調査区南壁のセクションでは確認できなかった。覆土は一樣に遺構上層の包含層の土質と同様で、時期差は認められない。溝中の柱穴の掘り方はおよそ方形を呈し、底部も方形であることから杭列とは考えられない。柱穴の深さは平均20cm前後である。

この他に、柱穴が検出されているが、これらもある程度列状に配置されており、かつて溝を作なっていたかの様である。

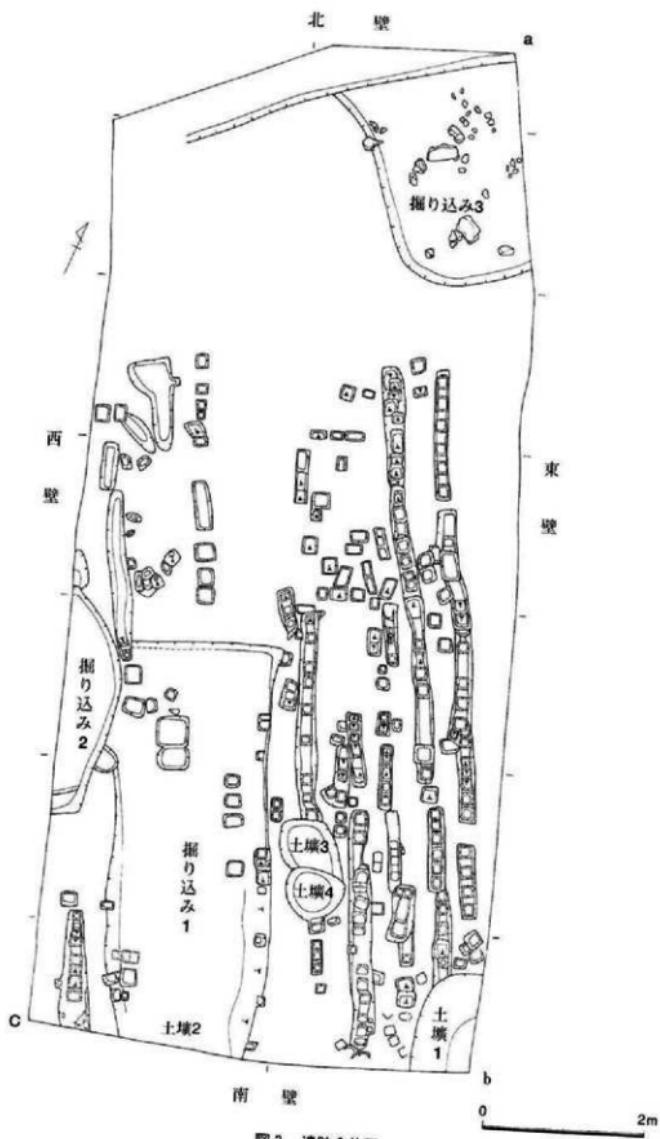


図2 遺跡全体図

#### b. 土壌について

##### 4基の土壌を確認した。

土壌1は調査区東南隅に一部検出したにとどまる。深さは約70cmである。覆土はレンズ状に堆積しており、かわらけ破片と炭化物を含んでいた。出土遺物はかわらけの粒子ともいえる破片だけである。土壌2は調査区南側で検出した。上端は径は150cm、底径は100cmである。覆土はやはりレンズ状の堆積を示し全体に炭化物や破片を含んでいた。土壌底部の覆土最下層には10cm程の厚さで焼土が堆積していた。出土遺物はかわらけの破片だけである。

土壌3・4は調査区ほぼ中央で検出した。土壌4を土壌3が切っている。これらの土壌の規模は、上端の径が60~70cmで、底径は40~50cmである。深さは20~30cmで、覆土はいずれもレンズ状堆積を示す。出土遺物はない。

#### c. 方形、不整形の掘り込みについて

掘り込み1は調査区南東に検出した方形の浅い掘り込みである。掘り込みの南側は調査区南壁の外に広がるため確認できなかった。短辺約200cm、長辺は確認できる範囲で、約500cmである。深さは浅く10~20cmである。

掘り込み1を切って掘り込み2が調査区南壁にかかって検出された。形状は不整形で深さ40cm前後である。

掘り込み3は調査区北側の旧河川（後述）側で検出した。やはり不整形を呈し、調査区北壁にかかり、旧河川側に開く。10~20cm内外の土丹塊と鎌倉石が掘り込み内に散在していた。

これらの掘り込みはいずれも遺物の出土もなく、性格などは不明である。

以上の遺構を伴う生活面は南から北にむかって傾斜しているが、調査区北壁際に至って大きく落ち込む。湧き水が激しく、調査区外の北側道路に接して東西に現代の河川が流れていることから、谷戸内を流れていた河川の流路の左岸の可能性があろう。

## 第三章 出土した遺物（図-4）

### 土壌1

かわらけは89片、常滑窯3点・鉢2点、山茶碗窯南部系鉢1点が出土した。どれも小片で実測不可能であった。

### 土壌2（1~5）

1、2は、かわらけ小皿。回転糸切り。14世紀代。法量は1が8.1~2.1~5.4で、2が7.4~2.2~4.2である。土鉢2のかわらけの総数は40片でそのうち白かわらけ1点であった。3は、山茶碗窯系こね鉢。口辺部小片。山茶碗窯は計5点であった。4は、常滑窯窯、中野編年6タイプのもの。常滑窯は5点で、鉢が1点である。口辺部小片。5は、上面布目、下面繩目の平瓦である。他にも、山茶碗窯系鉢3点、瀬戸灰釉平碗1点、青白磁梅瓶1片、手焙り2点である。

### 土壌3（6、7）

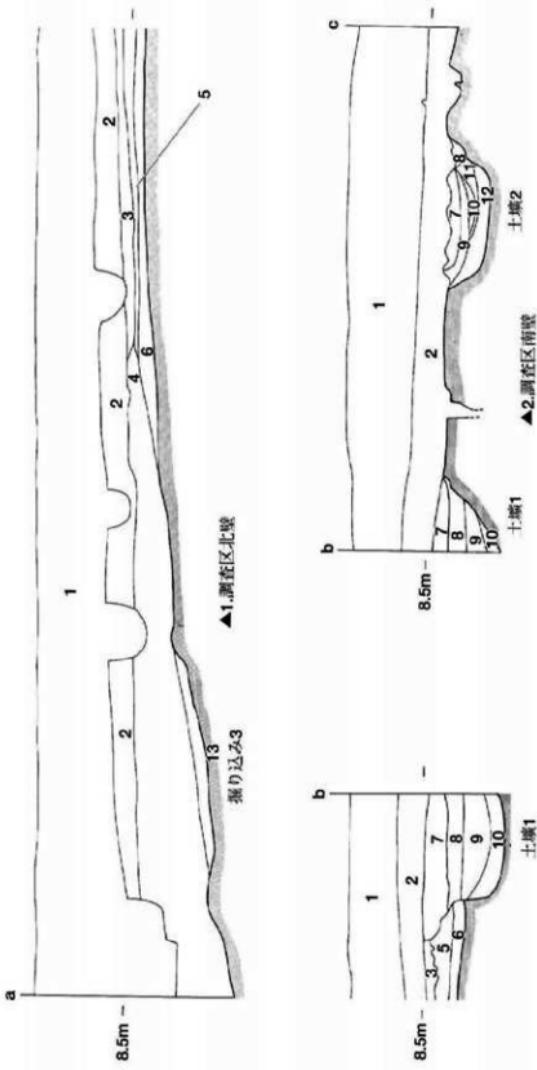


図3 土層堆積図

6は、かわらけ小皿。回転糸切り。14世紀代。全部で45片である。法量は8.0-2.0-5.5である。7は鉄釘片で、幅が0.8cmである。他には常滑窯が8点、鉢が2点、薺口壺1点、龍泉窯青磁鉢III類が1点、土師器甕1点、鉄製品1点が出土している。

#### 土壤4(8~12)

8、9は、かわらけ小皿。回転糸切り。14世紀代。法量は8が8.3-2.0-5.0で、9が7.8-1.5-5.4である。総数は49片である。10は山茶碗窯系こね鉢は1点のみで、内面使用痕が摩耗がみられる。11は、青白磁の大型の合子の蓋で、1点のみ。天井部は鳳凰文が、印花されている。法量は口径が8.4cmで、器高が1.9cmである。12は古錢で1点あり、元祐通宝で行書であり、初銘は1086年、北宋である。他の遺物は、常滑は甕が8点、鉢1点、渥美窯が1点、龍泉窯青磁碗I-5-b類2点、中国産褐釉壺2点、鉄製品2点がみられる。

#### 土壤5(13~16)

13は、かわらけ小皿。回転糸切り。14世紀代。黒く焼されている。法量は9.0-2.3-6.4である。かわらけは20片程度である。4は常滑窯甕で、中野編年6aにあたる。合計17片である。15は渥美窯の口縁部片で、1点のみである。16は瀬戸のやや小型の瓶子の底部片で底径が7.1cmである。藤沢編年の中期ものか。他の瀬戸は鉢1点、平腕1点がみられる。他には備前播磨鉢1点、鉄釘は数本出土している。

#### 第1面包含層(17~21)

17は常滑窯の甕の口縁部片で、中野編年の7タイプである。常滑は甕が48点、鉢が1点見られる。18は瀬戸窯の口折れ盤片で、1点のみ。藤沢編年前期のIVにあたる。20は瀬戸窯の瓶子または壺の類で、胴部片のみで3点みられる。他の器種では、壺が1点、卸し皿2点、平腕1点、入子が1点みられる。19は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片で、このほかに2点みられる。21は龍泉窯青磁、碗I-5-bタイプで口縁部のみである。このほかに龍泉窯青磁は、鉢のIII類が1点みられる。他の出土遺物はかわらけ199片(内、手づくねが1点)、瀬戸・美濃播磨鉢1点、土師質手培り1点、白磁碗IV類1点、鉄釘11点、滑石製鍋1点出土している。

#### 2B南ピット覆土

かわらけ5片、土師器の杯1点、甕3点である。どれも小片のため実測不可能であった。

#### 2面溝覆土

土師器の甕5片のみであった。ほかの遺物は検出されなかった。

臺法量は、口径一器高一底径の順で、単位はcmである。また貿易陶磁の分類は、森田分類を使用した。

## 第四章まとめ

今回の調査で出土した遺物は14世紀代を中心としている。従って遺跡の時期も概ね該期を中心としているといえよう。検出した遺構は細い幾条もの溝とその中に穿された方形の無数のピットからなっている。

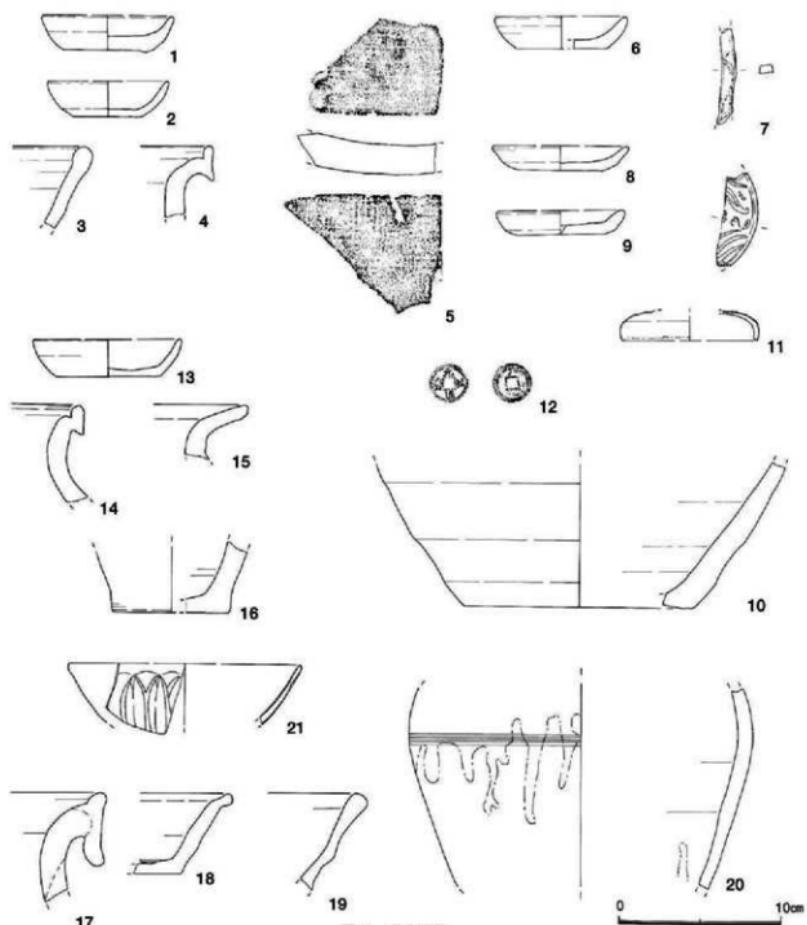


図4 出土遺物

る。ピットはあくまでも溝底に掘られたもので、ピット底面は平坦で杭を突き刺した痕跡ではないようである。この幾条もの布掘り状の溝が同時期に構築された構造物を意味するのか、時期差をもって変遷するのかは確認できなかった。滑川支流の左岸に近接することから、同時に存在した柵（しがらみ）の一種かとも思われるが、各ピットが杭跡ではなさうなことから今のところ否定的な感想を持っている。あるいは、遺跡地一帯が砂質に富んだ土壤であること、南方海側からの川風を防ぐための防風施設かも想像している。いずれにしても、類例を待つかなかろう。

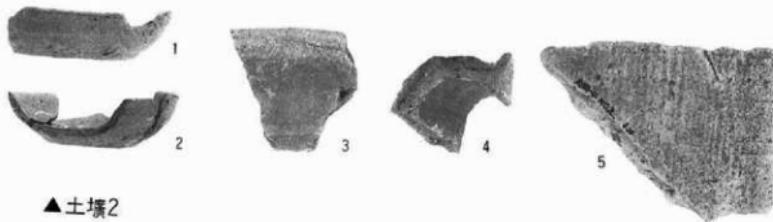
この他、中世地山層下から古代の土師器細片が出土している。実測に耐える程のものは無いが、付近に古代の遺跡が存在する可能性はある。



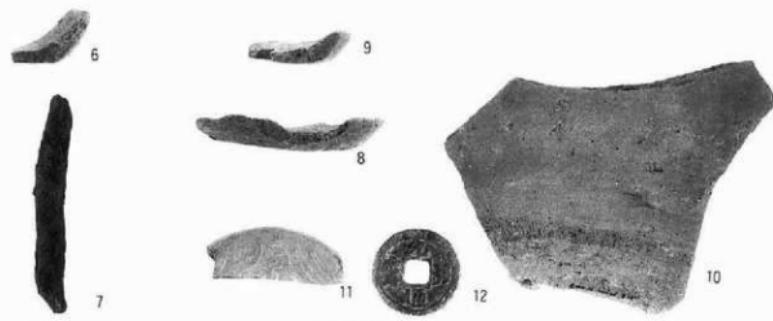
▲1 調査区全貌



図版2

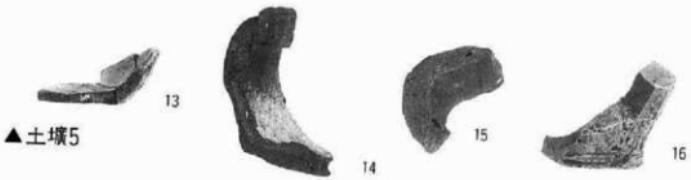


▲土壤2

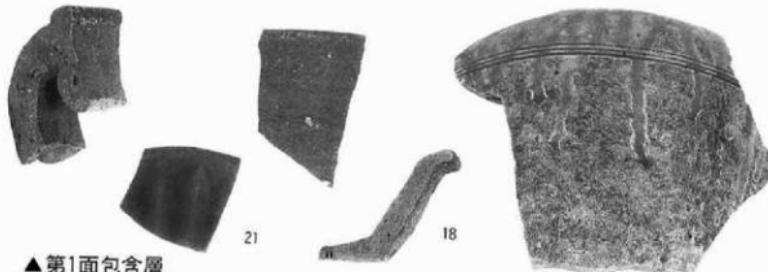


▲土壤3

▲土壤4



▲土壤5



▲第1面包含層

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名							
巻次	第1分冊						
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
シリーズ番号	11						
編集者名	田代郁夫						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号						
発行年月日	西暦1995年3月						
ふりがな	しょざいち	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村 遺跡番号	...	...			
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市大町 四丁目	204	231		19930503～ 19930524	80	自己用住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
名越ヶ谷遺跡	中世都市遺跡	奈良・平安時代	遺物包含層	土師器、かわらけ、常滑、青磁等	布掘り状の溝と方形のビットを検出。	テンバコ2箱	
		鎌倉時代末～ 南北朝期 (14世紀代)	柱穴列 土壤 方形・不正形掘り込み 3穴 布掘り状の溝	4穴			

2. 笹目遺跡 (No. 207)

笹目町302番5地点

## 例　　言

1. 本報は鎌倉市笛目町302番5に所在する笛目遺跡の発掘調報告である。
2. 調査は個人専用住宅建築に先立って実施された。
3. 調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成5年6月1日から同年9月8日にかけて実施した。
4. 本報は第1章、第4章を田代郁夫が、第2章を松山敬一郎が、第3章を大坪聖子・浜野洋一が執筆し、編集を土屋浩美が行なった。  
また、資料整理、図版の作成は土屋浩美、早野慈子、大坪聖子、浜野洋一、伊丹まさか、水上桂子、清水菜穂、根本志穂、谷下田厚子、石元道子、松原康子、辻きよこ、瀬田浩美が行なった。
5. 本報に使用した遺物写真は佐々木靖が撮影した。
6. 調査体制は以下の通りである。

調査主任 田代郁夫（日本考古学協会会員）

調査員 錦実・浜野洋一・土屋浩美・松山敬一郎・梅木信之

調査補助員 早野慈子・田代幸子・村上久和・遠藤雅一

7. 発掘調査及び本書作成に際し、下記の方々よりご協力、ご教示を賜った。記して深く感謝の意を表する次第である。（継承略・順不同）

中田 英（神奈川県教育委員会）・中野晴久（常滑市民俗資料館）・藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）・後藤建一（湖西市教育委員会）・松尾宣方・玉林美男・永井正憲・馬淵和雄・福田 誠（鎌倉市教育委員会）・大三輪龍彦・手塚直樹・河野真知郎・斎木秀雄・宮田真・宗臺秀明・大河内勉・木村美代治・原廣志・菊川英政・宗臺富貴子・瀬田哲夫・清水菜穂・菊川 泉・沙見一夫・佐藤仁彦・根本志穂・他鎌倉市シルバー人材センター（山下陽一郎・原田昌幸）

## 本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境.....	19
第二章 検出した遺構と出土した遺物.....	19
第三章 まとめ.....	40

## 挿図目次

図-1 遺跡位置図.....	18
図-2 第1面全測図.....	20
図-3 道路状遺構及び暗渠.....	23
図-4 第2面全測図.....	25
図-5 第3面全測図.....	27
図-6 遺構図.....	28
図-7 出土遺物(1).....	29
図-8 出土遺物(2).....	30
図-9 出土遺物(3).....	31
図-10 出土遺物(4).....	32
図-11 出土遺物(5).....	33
図-12 出土遺物(6).....	34

## 図版目次

図版1 上 第一面全景.....	41
下 切り石組暗渠.....	41
図版2 上 柱穴列.....	42
下 3号方形堅穴建築柱.....	42
図版3 上 道路状遺構第Ⅳ版塗層.....	43
下 同上(東半分).....	43
図版4 上 第2面全景.....	44
下 道路状遺構第Ⅴ版塗層.....	44
図版5 船載品・瀬戸整品.....	45
図版6 常滑製品・備前播磨・山茶碗窯系製品・瓦質製品・銭.....	46
図版7 かわらけ.....	47
図版8 かわらけ・その他の製品.....	48



図1 遺跡位置図

# 第一章 遺跡の位置と歴史的環境

調査地点は鎌倉市笛目町302番5に所在する。旧市街の南西、JR鎌倉駅から西南約700mにある。南に開口する笛ヶ谷と東に隣接する佐助ヶ谷開口部の接するあたりである。一帯は字塔ノ辻と称され、現在の六地蔵の交差点を西に入る路地付近に塔ノ辻があったと想定されている。調査区はこの路地を南に進み、現在の長谷方面から入ってくる路地との交差点付近、塔ノ辻の路地の南に接して位置している。天保三年(1838)の扇ヶ谷村絵図(鎌倉の古絵図2 鎌倉国宝館図録16 昭和44)の笛ヶ谷と佐助ヶ谷を画する山の端に「七觀音」とあるところの南東にあたる。

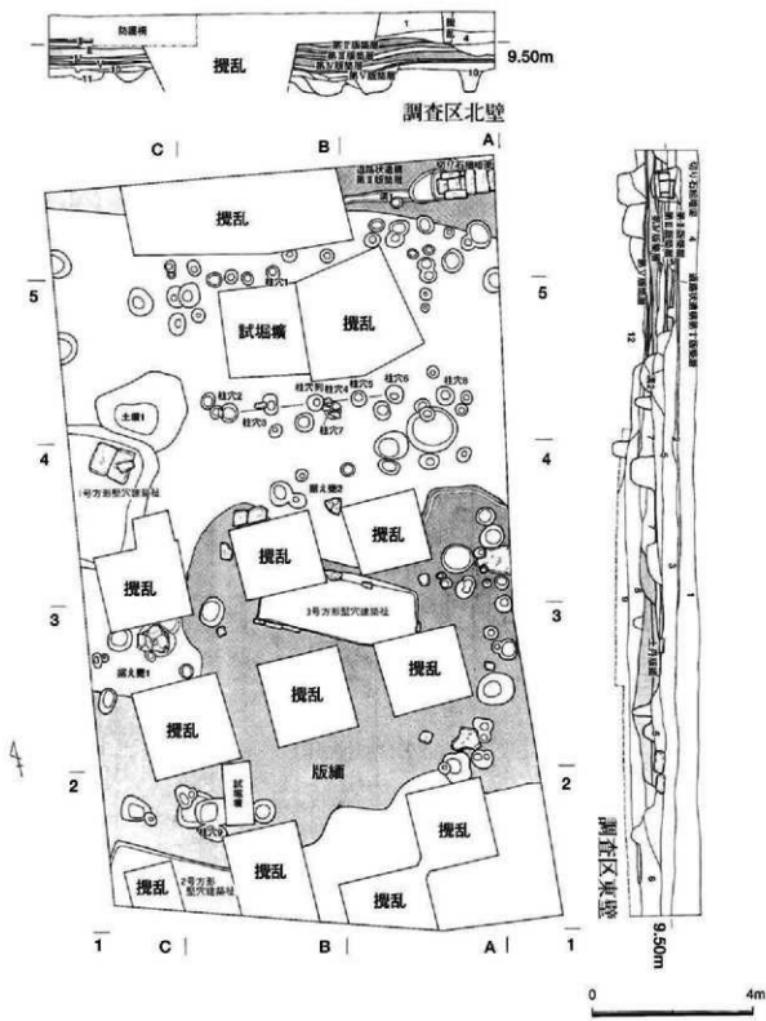
笛目遺跡を取り巻く周辺の遺跡について概観すると、笛目ヶ谷の入り口西側には、笛目遺跡(鎌倉市笛目町330番-1 地点)があり(笛目遺跡発掘調査報告書 平成3年 大河内勉)、昭和63年に発掘調査が実施され礎石建物や溝などの遺構が検出された。更に笛目ヶ谷奥の西側山腹には佐々目ヶ谷櫻並郷内横穴、佐々目ヶ谷斎藤邸内横穴群(一部やぐら転用)が知られており(鎌倉市史考古編 昭和34年 赤星直忠)、また長楽寺周辺にも横穴墓が広く分布している。また、やぐらも多く分布しており、昭和63年度には市内急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査で笛目遺跡内やぐらを(昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書 平成2年)、このやぐら群と一連のものであると考えられる長谷小路周辺遺跡内やぐらを平成5年度に調査している。この他、前述した本調査地点の北側に接して走る路地の更に3軒北側の地点を平成5年に調査している(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10 平成6年)。

# 第二章 検出した遺構と出土した遺物

調査区は南北約17m、東西約11mのほぼ長方形である。グリッドは一辺4m×4mで、東西方向をアルファベット、南北方向を数字で呼称した。

調査区内には厚さ40cm~50cmの近現代表土層が堆積していた。その下には厚さ30cm~50cmの中世遺物包含層が堆積し、この下から3枚の生活面を検出した。調査当初、試掘データをもとに表土を重機により掘削し、そのレベルで遺物包含層の中世後半、近世の遺構の残痕を確認すべく調査を行なったが、既存建築の基礎による攪乱のため面的な調査が困難であったため、この遺物包含層を除去したところ、この下から広範な版築面を検出した。この版築面は厚くしっかりとしたところで、2~3枚の土丹層で構成されている。最上層の土丹層上で方形堅穴建築址の部材と考えられる鎌倉石の切り石が、数点検出されている。この土丹層は北側で若干低くなっている、南側部分と面を合わせるように薄い土丹層が版築されている。この積み増された薄い土丹層を第1a面としたが、実際には調査南側の第1面が北側ではこの薄い土丹層の下に潜り込んでいる。従って、南側の第1面とこれにツラを合わせた北側の薄い土丹層を調査区全体の第1a面とし、南側土丹層が北側で潜り込んでいく部分を第1b面とした。調査区中央付近に特に厚く地業されていた第1b面を除去すると、暗灰褐色砂質土が約20cm~40cm程堆積していた。この層の上面を第2面とした。第2面の下位には、調査区北側で黄褐色沙、調査区南側で貝砂を多く含む暗灰褐色砂質土で構成される第3面を検出した。

第1面からは更に上層から構築されていると考えられる鎌倉石の切り石による暗渠や柱穴列、第1a



## 図2 第1面全測図

## 調査区壁土層説明

- |            |                           |
|------------|---------------------------|
| 1. 表土      |                           |
| 2. 明茶褐色土   | 砂質味やや強く、締まりに欠ける。          |
| 3. 茶褐色土    | 細かい土丹を多く含む。               |
| 4. 茶褐色土    | 細かい土丹を多く含む。3層に比べやや茶色味が強い。 |
| 5. 暗茶褐色土   | 細かい土丹を含み、やや砂質味をおびる。       |
| 6. 暗茶褐色土   | 拳大の土丹を少量含む。               |
| 7. 暗茶褐色土   | 細かい土丹を少量含み、砂質味が強い。        |
| 8. 暗灰褐色土   | 全体に砂質味が強い。細かい土丹を少量含む。     |
| 9. 暗灰褐色砂質土 | 貝砂を含む。縮まりにやや欠ける。          |
| 10. 暗灰褐色土  | 細かい土丹を少量含み、黄褐色砂を混入する。     |
| 11. 明灰褐色砂  | 細かい土丹を少量含む。炭化物を混入する。      |
| 12. 黄褐色砂地山 |                           |

面上からは方形堅穴建築址、掘え甕施設などを検出した。また第1b面の調査区北側では第1a面で確認した東西方向の道路の南側に沿って溝を検出した。この東西道路は第3面の時期から構築されている。

砂質である上、激しい湧水と降り続く豪雨のため造構の上端を確認するに留まつたものが多い。

### 第1面上層検出造構

#### A. 切り石組暗渠

東西道路状造構上の東側B-5グリッドで検出した。この暗渠は鎌倉石の切り石で組まれている。道路状造構最上層の土丹版築面検出時に暗渠の蓋部分を確認した。この暗渠が構築された時期は定かではないが、調査区東側の上層観察によれば、道路状造構の更に上層から掘り込まれている。これら道路状造構より時期的に下ることは確実である。切り石は西側部分で抜き取られており、造存しているのは蓋の部分4枚、両側壁が各4枚、底部が6枚である。各切り石材の規模（長辺×短辺×厚さ）は、蓋材が西側から65cm×25cm×17cm、76cm×28cm×13cm、62cm×22cm×19cm、52cm×不明×19cmある。側壁材は南側が西から61cm×21cm×28cm、24cm×20cm×22cm、30cm×26cm×23cm、27cm以上×18cm×23cm×23cmである。底部材は西から35cm×28cm×11cm、34cm×34cm×15cm、30cm×52cm×13cm、30cm×59cm、覆土は黒味の強い暗茶褐色土で、堆積状況は一気に埋められたかのようである。暗渠の掘り方は長さ170cm幅80~90cm、深さ20cmである。掘り方の覆土は土丹粒子を多く含む暗茶褐色土である。

暗渠の東西方向と軸を一にする幅20~30cm、深さ5~10cmの浅い溝（溝1）が伸びている。暗渠の掘り方の残痕であろうか。

#### B. 柱穴列

B、C-4グリッド、4ラインの北約1mで検出した。4ラインにはほぼ平行する。柱穴列は表土掘削した時点で確認しており、第1面より上層の面に穿たれたものであることは確実である。これら柱穴の覆土はいずれも砂質に富み明茶褐色を呈する。柱穴の規模（径×深さ）は西から柱穴4が47cm×29cm、柱穴5は2穴重複している可能性があり長径52cm・短径38cm×38cm、柱穴6は44×34cm、柱穴7は38cm×34cm、柱穴8は45cm×46cmである。この柱穴列に対応し、覆土を同じくする柱穴は確認されなかった。各柱穴の柱間は西から芯々でそれぞれ118cm、102cm、105cm、87cmである。各柱間は一定

しないが、覆土が同質であることから柵列状の施設であった可能性がある。柱穴列の方向は前項の暗渠の方向とほぼ平行関係にある。後述する道路状遺構の方向とは若干ずれている。

#### 第1辺上検出遺構

##### A. 方形堅穴建築址

###### a. 1号方形堅穴建築址

本址はD-3グリッドで検出した。1面より上層から掘り込まれた可能性も否定できないが、第1面上に構築されたものと考えた。調査区外西側に展開するため全体の規模は把握できない。東壁の長さ2.95m、北壁の長さ2.0m以上、南壁長さ1.3m以上である。湧水が激しく、床部分の構造等は定かではないが、底面までの深さは約70cmである。底面の標高は8.4mである。覆土は暗褐色土を主体とし、堅穴内南側半分には底面近くにまで及ぶ大量の焼土が混入していた。この部分から焼けた壁材と思われる焼土塊が多量に出上した。覆土中にはこの他、破碎した鎌倉石が多く含まれていた。堅穴北壁際の底面近くに鎌倉石の切り石を3枚検出した。このうち2枚は壁材の倒れたものの可能性もあるが、床面の部材として据えられていたものと考えられる。これら2枚の切り石は長辺約70cm~80cm、短辺約45cm、厚さ約10cmである。またこれらの上に重なっていた切り石は40cm×25cm×12cmである。前述したように覆土中に多量の焼土が混入し、切り石の上にも焼土が厚く堆積していた。焼失建物の可能性がある。なお底面に据えられた切り石の上約10cm程のところから瀬戸内鉄軸仏華瓶が1点ほぼ完形で出土している。

###### b. 2号方形堅穴建築址

本址はC、D-1グリッドで検出した。第1面、土丹による版築地業面に掘り込まれている。本址構築後に版築地業された可能性もある。本址上には現代のコンクリート基礎が乗っており遺存状況は最悪で、実際、調査時には2面検出時に確認した。本址の大半は調査区外に展開しているため全体の規模は北壁部分を除いて不明である。北壁の長さは約5.0mである。覆土は土丹粒を含む砂質味の強い暗褐色土を主体とする。壁の高さは約50cmで、底面の標高は8.5mである。建築部材やその据え方等の痕跡は確認できなかった。

###### c. 3号方形堅穴建築址

本址はB、C-2、3グリッドで検出した。第1面、土丹による版築地業面に掘り込まれている。本址構築後に版築地業された可能性もある。やや南壁の長い長方形を呈し、通例の方形堅穴建築址とは形状をやや異にする。北壁の長さは約3.60m、南壁の長さは3.98m、東壁の長さ1.48m、西壁の長さは少なくとも40cm以上の壁高を有していたものと思われる。南北軸はN-12°-Eを示す。覆土は頭壁の一部に鎌倉石の切り石がほぼ直立して検出された。これらの切り石は上端を削平されているが、東壁の2枚の切り石は高さ約20cm、幅55cm、厚さ10cmと高さ約25cm、幅25cm、厚さ12cmである。検出したこれらの切り石は直立の具合から、ほぼ原位置を留めているものと考えられる。北壁、西では切り石等は検出されなかつたが、北壁のプランの乱れた状況は切り石を意図的に取り除いたかの様にも思われる。本址底面は砂質味の強い暗褐色土であり、やや荒れた感がある。切り石の一部から腐食の進んだ板材の痕跡を検出し、また底面の切り石上、壁際の一部からも腐食した板材の痕跡を検出した。かつて壁面および床面の切り石上に板材が張られていたものと思われる。掘り方は東壁と北壁の一部を除いて確

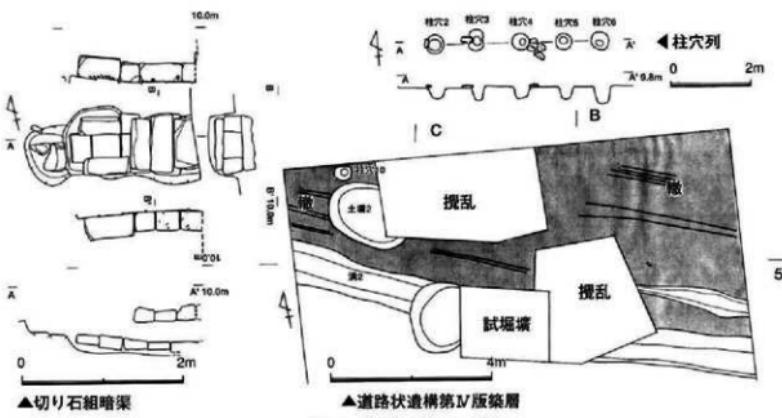


図3 道路状造構及び暗渠

認できた。暗茶褐色土を覆土としている。土壤を切っている部分では拳大の土丹塊を多く含んで強固に突き固められている。

#### B. 道路状造構

道路の性格上、繰り返される土丹版築による改修と南側に展開する生活面との対応関係は非常に難しい。従って、ここでは第1面で検出した道路状造構だけでなく、その下層に積み重ねられている土丹版築層まで含めて述べる。第3生活面の時期にこの部分はわずかな高まりを見せており、この時期に道路状造構第V土丹版築層がまず造られたものであろうか。

さて本址は調査区北端で検出した。東西方向に延びると想像され、5ラインからやや北に振れる。調査区東側セクションから判断すると大きく5枚の土丹版築層から構成され、また部分的にかつ連続的に改修が繰り返されたようで、各土丹版築層が部分的に接着している。

道路状造構第I土丹版築層はB-5グリッド付近の狭い範囲で検出した。本層はセクションで確認する限り、路肩南側で道路状造構第II土丹版築層と接着しており、この層の改修の際に版築されたものであろうか。調査区東壁セクションの観察から道路状造構第I土丹版築層は標高9.7mである。

道路状造構第II土丹版築層は擾乱に切られるC-5グリッドを除くB-5、C-5グリッドで検出した。方向は5ラインに対して約10°北に振れている。調査区東壁セクションの観察によれば、本層は調査区東北コーナーから約2.5mのところまで人頭大の土丹塊を主体に強固に突き固められているが、南側路肩部分にかけては極めて弱い版築層である。B-5グリッドに位置する擾乱の壁セクションに本層に対応する版築層が表れていないことから、面的にも路肩部分の版築が弱いといえよう。D-5グリッド付近で本層は下層の道路状造構第III土丹層と接着し、この間に間層を持たない。東西方向の標高は東側で約9.6m前後、西側で9.65mで西から東にむかって緩やかに下るようである。南北の道路横方向の標高は路肩部分で約9.5mとゆるやかな傾斜を持って下る。

道路状造構第III土丹版築層は調査区東壁セクションによれば北端で上層と接着している。これは調査区北側の擾乱を挟んで東側についても面的に追える。擾乱の西側では西端のみに確認され、この部分では下層の第IV土丹版築層を利用しているようである。本層は擾乱東側では第II土丹版築層の直下にあり、

ほぼ同じ傾斜をみせるが、攪乱の西側の標高は約9.4mである。

道路状造構第IV土丹版築層はここで述べている道路状造構のなかで最も厚く強固に版築されている。人頭大の土丹塊を中心に突き固められている。本層も上層と同じく部分的に攪乱されているが、南側路肩部分が5ラインの更に南側に展開しているため、道路南側ラインのほぼ全容を知ることができる。調査区東壁および北壁のセクションでも他層と異なり一連の強固な土丹版築面を構成していることが観察できる。道路面の標高は西側で約9.4m、東側で9.3mと西から東へ緩やかに下がっている。

面上に道路と平行して東西方向に数條の細く浅い溝を検出した。幅約10cm、深さ約8cmである。轍の可能性があろう。本土丹版築面に伴うと考えられる南側路肩に沿う溝を検出した。幅約80~100cm、深さ約30~40cmである。溝の東部分で長さ約30cm程の極細い板状の木材を検出したが、溝の構築部材かどうかは不明である。いずれにしても、しっかりとした造りの溝ではないように思える。

道路状造構第V土丹版築層は土丹によって版築された最終道路面である。版築面の面的な拡張性はBラインの東側では上層のそれと一致するが、西側ではやや南へ拡張し、5ライン方向に平行して走っているようである。調査区東壁のセクションからもわかるように第IV土丹版築層に比して版築は薄く弱いが、面的に途切れることなく全体に比較的きれいな土丹面を形成している。標高は上層と同様に西から東に向って緩やかに傾斜しており、西側で9.1m、東側で9.0mである。また、道路面中央付近から南側路肩部分の向って傾斜しており、北側で9.1m、南側路肩部分で8.8mである。土丹版築面上には第IV面と同様の数條の浅く細い溝を検出した。同様に轍の可能性があろう。第V土丹版築層を除去すると、その下は中世地山と考えられる黄褐色砂層である。この地山は道路状造構の南側の最終生活面の地山と連続するものであるが、道路部分で一段高く、この上に第V土丹版築層が形成されている。

### C. 据え壁上層

#### a. 据え壁1

D-2、3グリッドで検出した。土壤内に常滑の大甕が据えられていた。胴部下半約1/3が残存していた。土壤は長軸94cm、短軸76cmで、甕との間に約5cmの間層が認められた。この覆土はやや締まりに欠ける灰褐色砂質土である。土壤の上端は確認面で標高9.5m、土壤底部で8.9mである。

#### b. 据え壁2

C-3グリッドで検出した。土壤内に据えられていること、据え壁1と同様である。常滑大甕の胴部下半約1/3が残存していた。土壤と甕との間層は0~10cm程度で、やはり灰褐色のやや締まりに欠ける覆土である。土壤上端は確認面で標高9.3m、土壤底部で8.7mである。

### D. 柱穴及び土壤

#### a. 柱穴1

調査区全体で多くの柱穴を検出したが、全体図に示す通り、攪乱が激しく配列の検討は不可能であったが、C-5グリッド検出した柱穴1は比較的多く遺物が出土したので取り上げた。径約35cm、深さ約20cmである。

#### b. 土壤1

1号方形堅穴建築址によって切られている。長径約2.2m、短径約1.8mである。遺物は細片が多い。

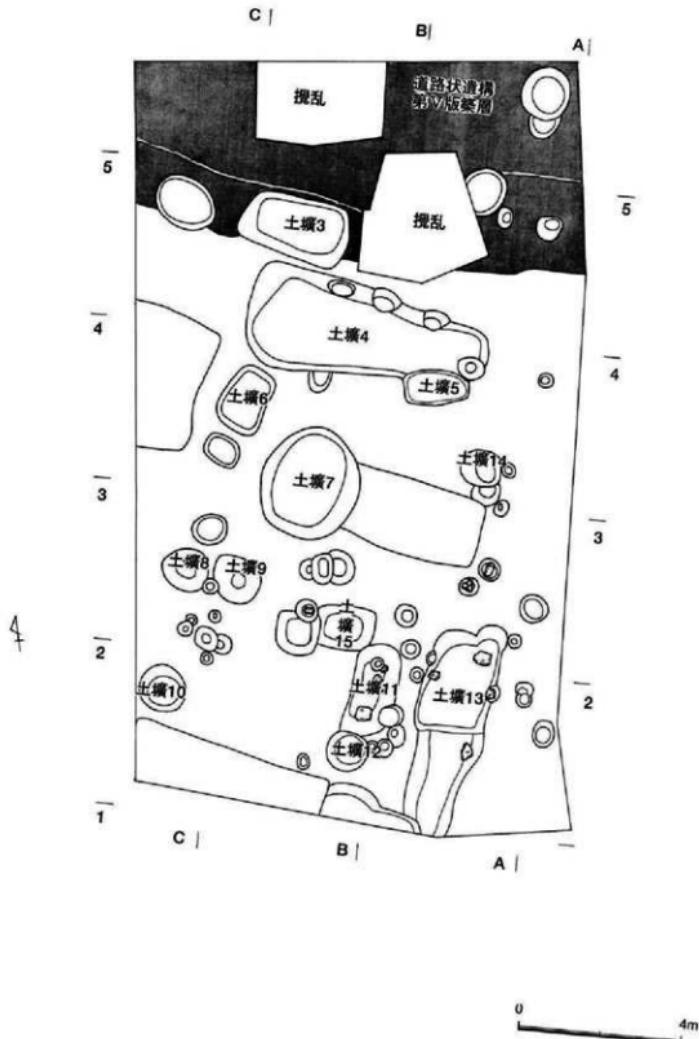


図4 第2面全測図

## 第2面上検出遺構

第2面は土丹による版築地盤がなされておらず、40cm程の厚さで堆積する暗灰褐色砂質土の上面を一応生活面としたもので柱穴、土壙等は本層上面および本層中からも検出している。建物の配置を推定できる柱穴は検出できなかった。従って、比較的遺物を多く出土した土壙について以下記す。

### A. 土壙

#### a. 土壙3

調査区5ラインの南側で検出した。道路伏造構第V土丹版築層を切って掘り込まれている。長径約2.6m、短径約1.5m、深さ約40cmである。覆土は有機質に富む暗褐色土で、遺物を多く含む。性格は不明。

#### b. 土壙4

B、C-3、4グリッドで検出した。長径約6.08m、短径は東壁が約1.1m、西壁が約2.5mである。深さは西側で約60cm、東に向って浅くなり東側で約30cmである。覆土はやや締まりに欠ける暗褐色土で、遺物を含む。性格は不明である。本址は南東コーナーで土壙9に切られている。

#### c. 土壙7

C: 2、3グリッドで検出した。長径約2.8m、短径約2.4m、深さ約85cmである。ほぼ円形である。覆土は有機質に富む暗褐色土である。遺物を含む。

## 第3面上検出遺構

第3面は調査区北側で黄褐色砂質土、南側で貝砂を多く含む暗灰褐色砂質土で構成され、中世地山層である。調査区南側での湧水が非常に激しく、砂質土であるため、8月の多量の降雨と相俟って、ポンプアップする間もなく遺構が溶けてしまう様であった。従って、調査区北側では比較的遺構が実測できているが、調査区南側では、ほとんど遺構を図化できない状態であった。全測図中の遺構の精粗はこのためである。調査区南側では方形堅穴建築址と思われる遺構を3基検出した。この他南側では3基の方形土壙を検出したが、図化できたのは29号土壙だけである。調査区北側の柱穴群は攢乱がひどく配列は不明である。

#### a. 4号方形堅穴建築址

B、C、D-2、3グリッドで検出した。確認した規模は長辺約5.7m、短辺約3.9mである。位置の確認に留まり、精査できていない。若干の遺物が出土している。土壙29に切られている。

#### b. 5号方形堅穴建築址

C、D-1、2グリッド検出した。確認した規模は長辺約4.7m、短辺約3.6mである。遺構範囲の確認しかできなかった。

#### c. 6号方形堅穴建築址

B、C-1、2グリッドでのみ、その一部を検出した。3号、4号方形堅穴建築址に大半を切られて

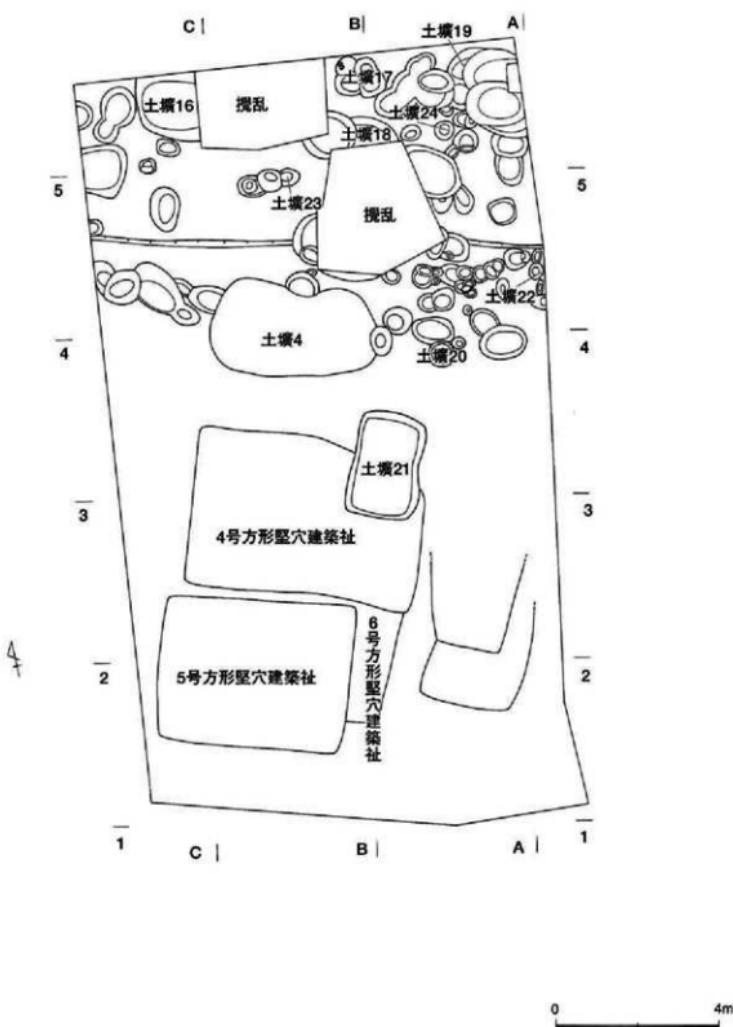


图5 第3面全测图

いる。確認できた範囲は東壁と南壁の一部だけである。

d. 土壌21

B、C-2、3 グリッドで検出した。長辺約2.6m、短辺約1.6mの方形を呈する。深さ約25cmである。覆土は暗灰褐色土である。

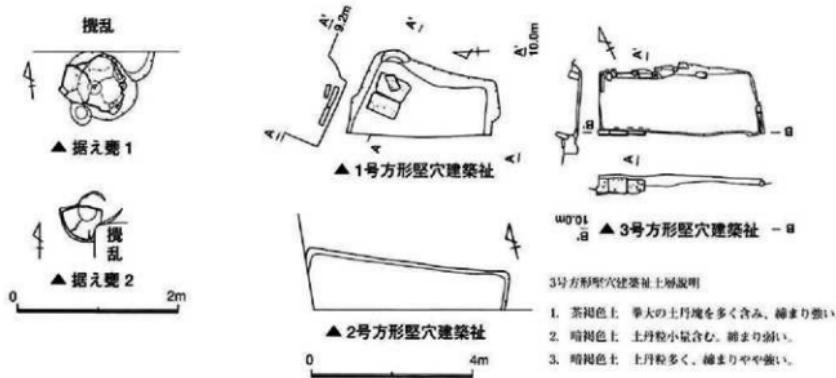
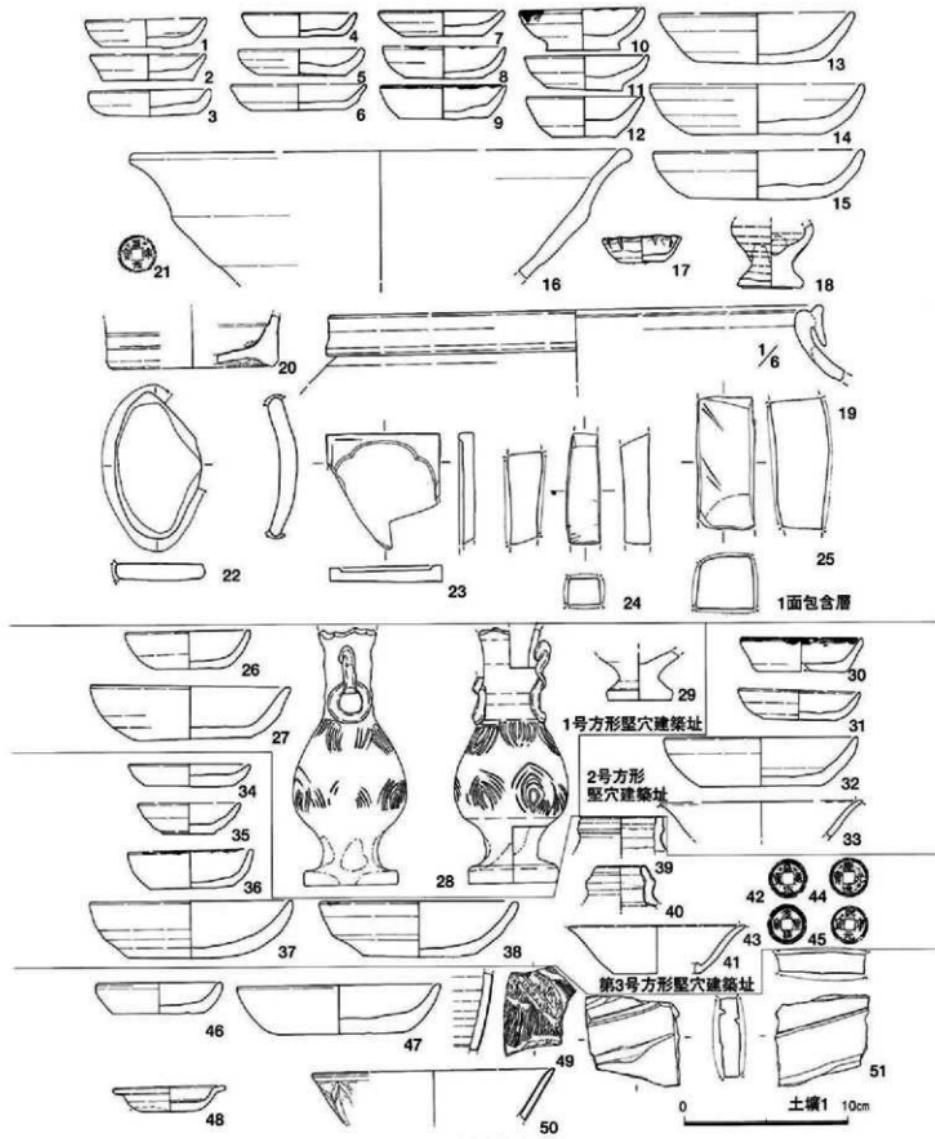


図5 遺構図

3号方形堅穴建築社土層説明

1. 茶褐色土 奉大の土丹塊を多く含み、縋まり強い。
2. 暗褐色土 上丹粉小量含む。縋まり弱い。
3. 暗褐色土 上丹粉多く、縋まりやや強い。



### 図7 出土遺物(1)

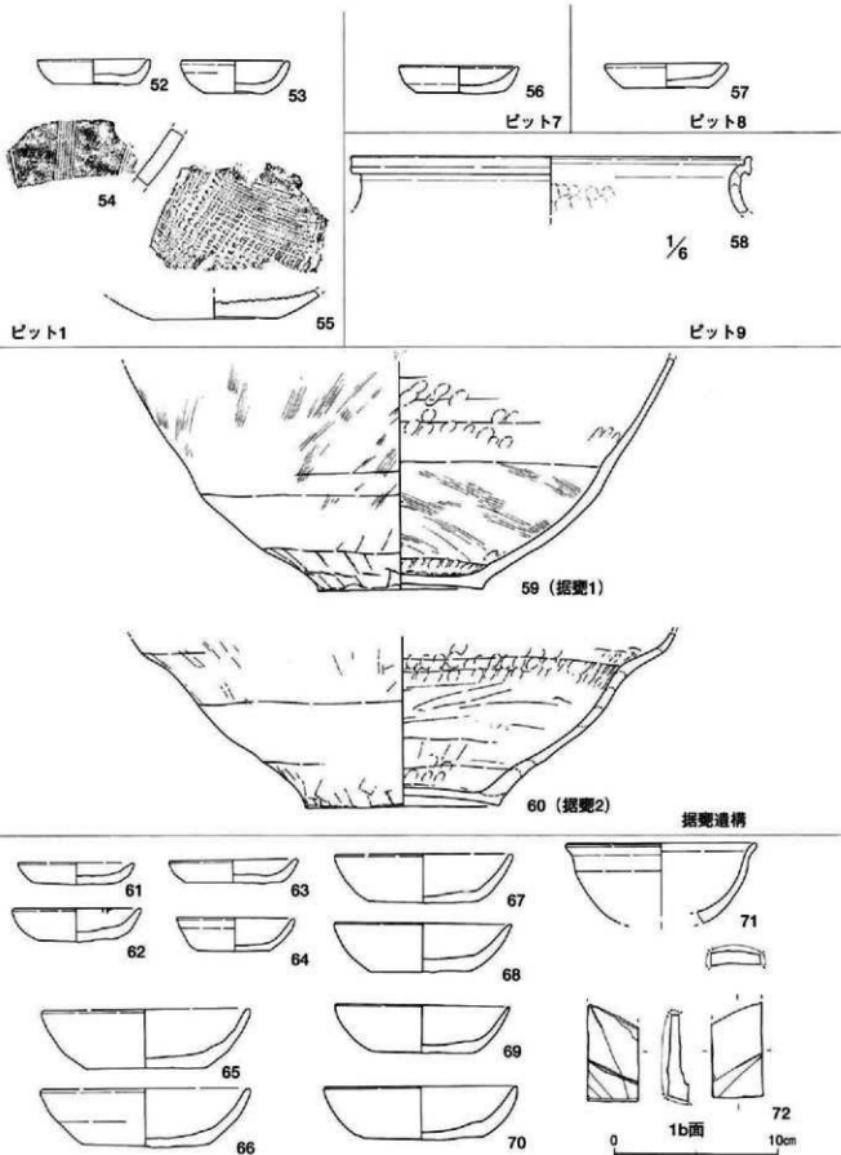


図8 出土遺物 (2)

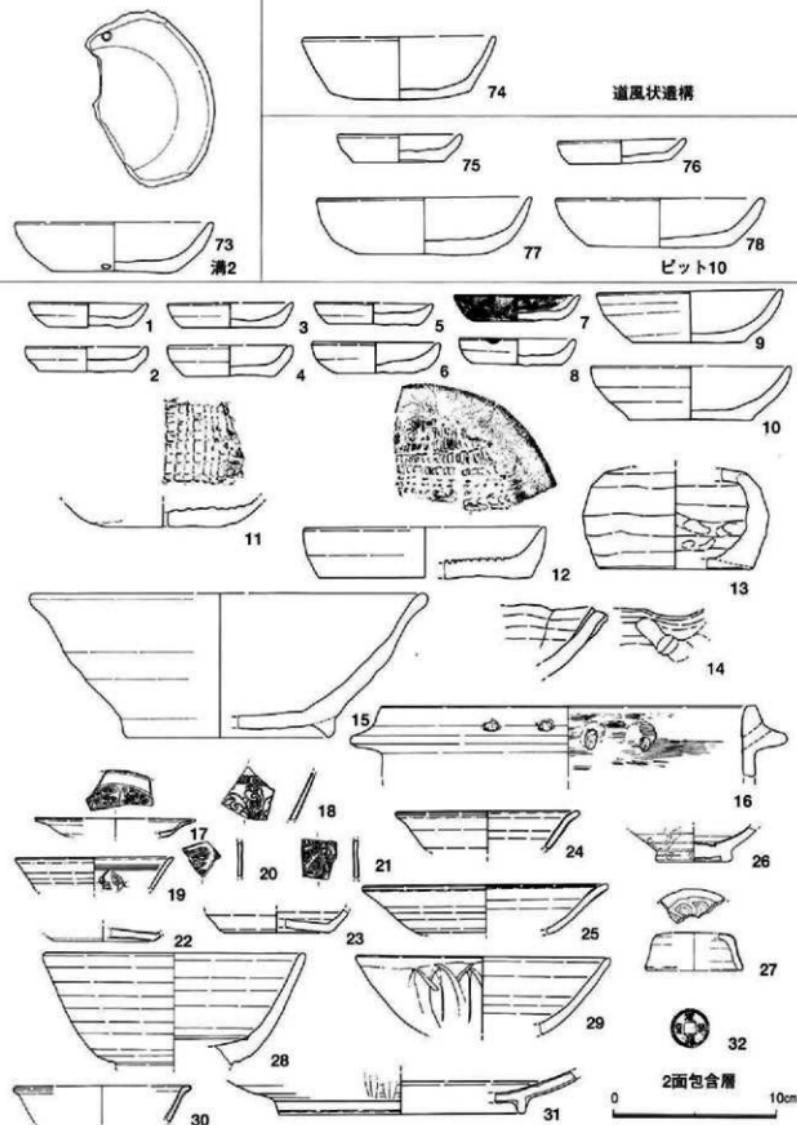


図9 出土遺物 (3)

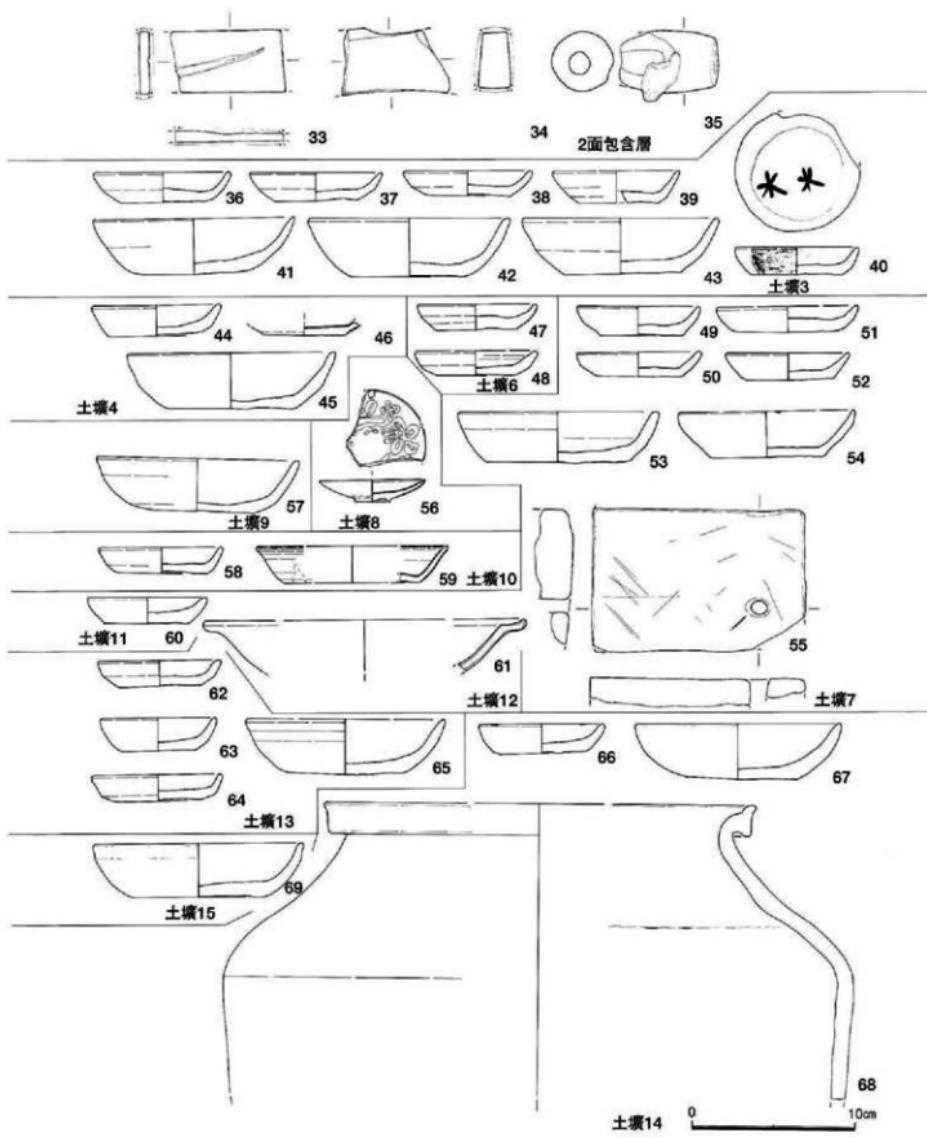


图10 出土遗物 (4)

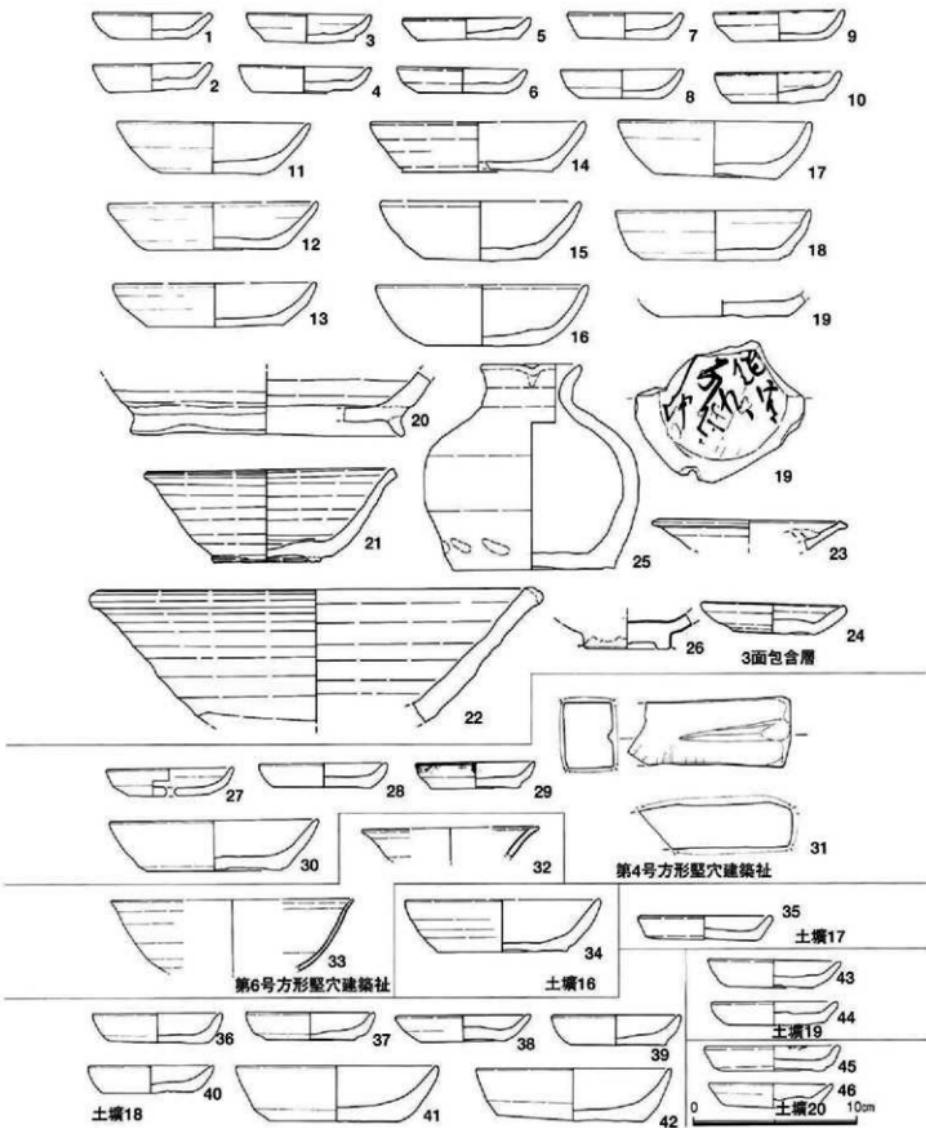


图11 出土遗物 (5)

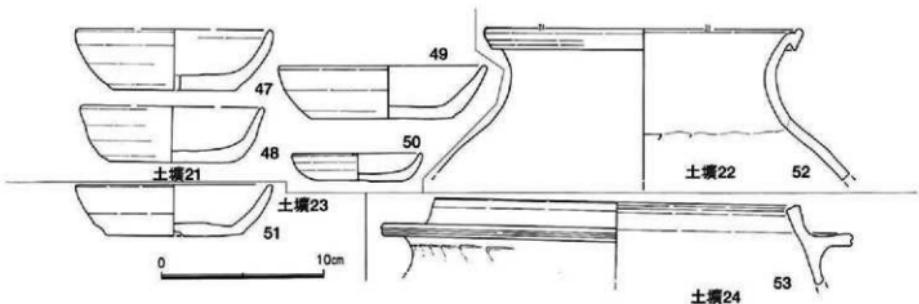


図12 出土遺物 (6)

# 出土遺物観察表

## 第1面

	種類	出土地点	特徴・器種	法量: 口径、器高、底径	備考
1	かわらけ (小)	包含層	回転糸切り	(7.3) 1.6 (5.5)	
2	かわらけ (小)	包含層	回転糸切り	(7.0) 1.6 (5.6)	
3	かわらけ (小)	包含層	回転糸切り	7.3 1.6 5.6	
4	かわらけ (小)	包含層	回転糸切り	7.2 1.5 5.0	
5	かわらけ (小)	包含層	回転糸切り	7.6 1.6 5.3	
6	かわらけ (小)	包含層	回転糸切り	8.2 1.6 5.7	
7	かわらけ (小)	包含層	回転糸切り	7.6 1.6 4.8	
8	かわらけ (小)	包含層	回転糸切り	(7.6) 2.0 (5.0)	
9	かわらけ (小)	包含層	回転糸切り	(7.8) 2.1 (5.4)	
10	かわらけ (小)	包含層	回転糸切り	7.5 2.5 4.6	
11	かわらけ (小)	包含層	回転糸切り	7.5 2.1 4.6	
12	かわらけ (小)	包含層	回転糸切り	7.2 2.5 4.0	
13	かわらけ (大)	包含層	回転糸切り	(11.8) 3.1 7.4	
14	かわらけ (大)	包含層	回転糸切り	(12.9) 3.0 7.6	
15	かわらけ (大)	包含層	回転糸切り	(13.0) 3.0 8.4	
16	山茶碗系	包含層	こね鉢	(30.0) — —	北部系美濃須衛型
17	瀬戸窯	包含層	入子 (小)	(4.8) 1.5 (2.8)	藤沢中期
18	瀬戸窯	包含層	仏草瓶	— — (4.0)	藤沢中期
19	常滑窯	包含層	甕	(60.0) — —	中野8タイプ
20	青白磁	包含層	梅瓶底部	— — (10.4)	
21	鉢	包含層	聖宋元宝		篆書 北宋、初鉢1101年
22	櫛目山茶碗	包含層		全長9.0、厚さ1.0	
23	鏡	包含層		幅7.0、厚さ0.6 1.0	
24	砥石	包含層	中砥	残存長6.7、幅2.0	
25	砥石	包含層	中砥	残存長8.0、幅3.6	
26	かわらけ (小)	第1号方形堅穴建築址	回転糸切り	7.5 2.3 4.7	
27	かわらけ (大)	第1号方形堅穴建築址	回転糸切り	12.2 3.2 7.3	
28	瀬戸窯	第1号方形堅穴建築址	仏草瓶	— — (5.7)	藤沢中期ⅠまたはⅡ
29	瀬戸窯	第1号方形堅穴建築址	仏草瓶 (小)	— — (3.8)	藤沢中期ⅠまたはⅡ
30	かわらけ (小)	第2号方形堅穴建築址	回転糸切り	(7.4) 2.1 (5.2)	
31	かわらけ (小)	第2号方形堅穴建築址	回転糸切り	(7.5) 2.1 (5.2)	
32	かわらけ (大)	第2号方形堅穴建築址	回転糸切り	(11.8) 3.0 (7.4)	
33	白磁	第2号方形堅穴建築址	皿K類	(30.0) — —	
34	かわらけ (小)	第3号方形堅穴建築址	回転糸切り	7.2 1.4 4.9	
35	かわらけ (小)	第3号方形堅穴建築址	回転糸切り	(6.4) 1.9 (3.4)	
36	かわらけ (小)	第3号方形堅穴建築址	回転糸切り	(7.8) 2.3 (5.0)	
37	かわらけ (大)	第3号方形堅穴建築址	回転糸切り	(12.6) 3.5 (7.7)	
38	かわらけ (大)	第3号方形堅穴建築址	回転糸切り	(12.8) 3.4 (7.0)	
39	青白磁	第3号方形堅穴建築址	梅瓶口劉部	(3.2) — —	
40	青白磁	第3号方形堅穴建築址	梅瓶口劉部	(3.2) — —	
41	白磁	第3号方形堅穴建築址	皿K類	(10.6) 3.9 (5.3)	
42	鉢	第3号方形堅穴建築址	皇宋通宝		楷書、北宋、初鉢1039年
43	鏡	第3号方形堅穴建築址	元豐通宝		篆書、北宋、初鉢1076年
44	鏡	第3号方形堅穴建築址	慶元通宝		篆書、南宋、初鉢1195年
45	鏡	第3号方形堅穴建築址	熙寧元宝		楷書、北宋、初鉢1068年
46	かわらけ (小)	土壤1	回転糸切り	(7.6) 1.9 5.6	
47	かわらけ (大)	土壤1	回転糸切り	(12.4) 3.0 (7.8)	

48	瀬戸窯	土壤1	口折れ小皿 梅瓶胸部	6.4 小片 (15.0)	1.5 —	3.7 —	藤沢中期I~II
49	青白磁	土壤1	龍泉窯碗1-5-b類	全長5.6			
50	青磁	土壤1					
51	挿り常滑	土壤1					
52	かわらけ(小)	柱穴1	回転糸切り	6.8	1.5	5.2	
53	かわらけ(小)	柱穴1	回転糸切り	(6.4)	2.1	(3.6)	
54	備前窯	柱穴1	振り鉢	小片	—	(7.7)	藤沢後期
55	瀬戸窯	柱穴1	おろし皿	—	—		
56	かわらけ(小)	柱穴7	回転糸切り	7.4	1.5	5.5	
57	かわらけ(小)	柱穴8	回転糸切り	(7.4)	1.5	(5.2)	
58	常滑窯	柱穴9	甕口縁部	49.6	—	—	中野6aタイプ
59	常滑窯	甕遺構	甕底部	—	—	(20.2)	
60	常滑窯	甕遺構	甕底部	—	—	(24.0)	
61	かわらけ(小)	Ib面構成土	回転糸切り	(7.2)	1.3	(5.4)	
62	かわらけ(小)	Ib面構成土	回転糸切り	8.0	2.0	4.9	
63	かわらけ(小)	Ib面構成土	回転糸切り	8.0	1.4	6.0	
64	かわらけ(小)	Ib面構成土	回転糸切り	7.3	2.0	4.5	
65	かわらけ(大)	Ib面構成土	回転糸切り	12.9	3.6	7.3	
66	かわらけ(大)	Ib面構成土	回転糸切り	(13.0)	3.5	(7.8)	
67	かわらけ(大)	Ib面構成土	回転糸切り	(11.0)	3.0	(6.6)	
68	かわらけ(大)	Ib面構成土	回転糸切り	(12.4)	3.0	(7.8)	
69	かわらけ(大)	Ib面構成土	回転糸切り	10.7	3.0	6.0	
70	かわらけ(大)	Ib面構成土	回転糸切り	11.9	3.2	7.2	
71	瀬戸窯	Ib面構成土	天目茶碗	(11.6)	—	—	
72	砥石	Ib面構成土	仕上砥	幅3.1、厚み0.5~1.3			藤沢後期以降か?
73	かわらけ(大)	甕2	回転糸切り	(12.4)	3.0	(7.6)	孔あり
74	かわらけ(大)	土壤2	回転糸切り	(12.0)	3.8	(8.6)	孔あり
75	かわらけ(小)	柱穴10	回転糸切り	7.8	1.6	5.7	
76	かわらけ(小)	柱穴10	回転糸切り	8.0	1.4	6.2	
77	かわらけ(大)	柱穴10	回転糸切り	13.2	3.4	8.3	
78	かわらけ(大)	柱穴10	回転糸切り	(13.0)	3.0	8.8	

## 第2面

種類	出土地点	特徴・器種	法量: 口径、器高、底径	備考
1	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	7.2 1.5 5.2
2	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	(7.4) 1.5 (6.2)
3	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	(7.6) 1.5 5.8
4	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	(7.6) 1.9 (5.6)
5	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	(7.4) 1.3 5.6
6	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	7.8 1.9 4.8
7	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	7.6 1.6 5.4
8	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	7.1 1.6 5.5
9	かわらけ(大)	包含層	回転糸切り	11.3 3.2 6.9
10	かわらけ(大)	包含層	回転糸切り	(12.2) 3.3 7.6
11	瀬戸窯	包含層	おろし皿	— — (7.0)

12	瀬戸窯	包含層	おろし皿	(14.7)	3.1	(13.0)	藤沢前期か?
13	常滑窯	包含層	高口壺	—	—	(9.7)	
14	常滑窯	包含層	片口鉢	小片			
15	山茶陶窯系	包含層	こね鉢	(24.0)	8.9	(12.2)	北部系
16	土器賀釜	包含層	鰐釜	22.0	—	—	
17	白磁	包含層	皿X類	(8.9)	—	—	
18	白磁	包含層	碗X類体部	小片			
19	白磁	包含層	皿X類	9.8	—	—	
20	白磁	包含層	皿X類底部	小片			
21	白磁	包含層	皿X類底部	小片			
22	白磁	包含層	皿X-1類	—	—	(6.2)	
23	白磁	包含層	皿X-1類	—	—	(6.4)	
24	白磁	包含層	皿X-1類	(11.3)	—	—	
25	白磁	包含層	皿X-2類	(15.2)	—	—	
26	白磁	包含層	碗X-1類	—	—	(4.8)	
27	青白磁	包含層	梅瓶	頭部(5.0)器高2.3底径(6.0)			
28	青磁	包含層	龍泉窯碗I-1類	(16.3)	—	—	
29	青磁	包含層	龍泉窯碗I-5-b類	(16.3)	—	—	
30	青磁	包含層	龍泉窯碗II類	(16.3)	—	—	
31	青磁	包含層	龍泉窯碗III類	(16.3)	—	—	
32	錢	包含層	元豐通宝				篆書 北宋 初鉄1076年
33	砥石	包含層	仕上げ砥	幅3.9、厚さ0.6			
34	砥石	包含層	中砥	幅3.4、厚さ1.8			
35	ふいごの羽口	包含層	回転糸切り	幅3.7、孔1.5			
36	かわらけ(小)	土壤3	回転糸切り	8.1	1.9	5.2	
37	かわらけ(小)	土壤3	回転糸切り	7.9	1.8	5.1	
38	かわらけ(小)	土壤3	回転糸切り	7.7	1.6	5.2	
39	かわらけ(小)	土壤3	回転糸切り	7.8	2.0	4.9	
40	かわらけ(小)	土壤3	回転糸切り	7.4	1.7	5.6	
41	かわらけ(大)	土壤3	回転糸切り	12.2	3.5	7.7	
42	かわらけ(大)	土壤3	回転糸切り	(11.3)	3.6	7.0	
43	かわらけ(大)	土壤3	回転糸切り	11.9	3.4	7.2	
44	かわらけ(小)	土壤4	回転糸切り	8.0	1.9	5.8	
45	かわらけ(大)	土壤4	回転糸切り	(13.0)	3.6	(7.8)	
46	同安窯青磁	土壤4	皿I-1-a類	—	—	(5.0)	外底墨書きあり
47	かわらけ(大)	土壤6	回転糸切り	7.1	1.6	4.9	
48	かわらけ(大)	土壤6	回転糸切り	(7.2)	1.6	(4.8)	
49	かわらけ(小)	土壤7	回転糸切り	7.7	5.0	1.7	
50	かわらけ(小)	土壤7	回転糸切り	7.8	1.4	5.3	
51	かわらけ(小)	土壤7	回転糸切り	(8.8)	1.6	(6.4)	
52	かわらけ(小)	土壤7	回転糸切り	7.3	1.6	6.7	
53	かわらけ(大)	土壤7	回転糸切り	12.4	3.1	9.0	
54	かわらけ(大)	土壤7	回転糸切り	(11.0)	2.8	(7.0)	
55	滑石製品	土壤7	滑石	長13.1、幅8.8			
56	青白磁	土壤8	皿	(6.6)	2.3	2.2	
57	かわらけ(大)	土壤9	回転糸切り	12.3	3.2	7.2	
58	かわらけ(小)	土壤10	回転糸切り	7.4	1.6	5.4	
59	白磁	土壤10	皿X類	(12.0)	2.2	(8.4)	
60	かわらけ(小)	土壤11	回転糸切り	(7.2)	1.6	(5.2)	

61	青磁	土壤12	杯Ⅲ類	(19.6) — —	
62	かわらけ(小)	土壤13	回転糸切り	7.3 1.6 5.1	
63	かわらけ(小)	土壤13	回転糸切り	7.7 1.7 5.1	
64	かわらけ(小)	土壤13	回転糸切り	7.7 1.7 5.1	
65	かわらけ(大)	土壤13	回転糸切り	(12.1) 3.4 7.7	
66	かわらけ(小)	土壤14	回転糸切り	7.6 1.8 5.2	
67	かわらけ(大)	土壤14	回転糸切り	(12.8) 3.3 (8.0)	
68	常滑窯	土壤14	甕	(26.4) — —	中野6aタイプ
69	かわらけ(大)	土壤15	回転糸切り	13.0 3.2 8.0	

### 第3面

種類	出土地点	特徴・器種	法量: 口径、器高、底径	備考
1	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	7.4 1.6 4.3
2	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	7.4 1.7 5.5
3	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	7.6 1.3 5.5
4	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	8.2 1.6 6.1
5	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	8.0 1.3 6.3
6	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	7.8 1.6 5.4
7	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	7.2 1.6 5.5
8	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	7.4 1.3 5.0
9	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	7.8 1.6 5.5
10	かわらけ(小)	包含層	回転糸切り	7.8 1.8 5.8
11	かわらけ(大)	包含層	回転糸切り	(11.7) 3.2 (6.4)
12	かわらけ(大)	包含層	回転糸切り	(12.3) 2.1 (8.0)
13	かわらけ(大)	包含層	回転糸切り	12.4 2.2 8.3
14	かわらけ(大)	包含層	回転糸切り	(13.0) 3.1 (9.4)
15	かわらけ(大)	包含層	回転糸切り	(12.4) 3.6 (7.2)
16	かわらけ(大)	包含層	回転糸切り	(13.0) 3.7 (7.0)
17	かわらけ(大)	包含層	回転糸切り	11.7 3.4 7.5
18	かわらけ(大)	包含層	回転糸切り	(12.3) 2.1 (8.0)
19	かわらけ(大)	包含層	回転糸切り	— — 7.8
20	常滑窯	包含層	こね鉢	— — (17.0)
21	常滑窯	包含層	山茶碗	15.6 5.7 6.7
22	常滑窯	包含層	こね鉢	(28.0) — —
23	瀬戸窯	包含層	おろし皿	(12.0) — —
24	東海系山田	包含層	小皿	9.0 1.8 5.0
25	常滑窯	包含層	小壺	6.3 13.0 10.0
26	龍泉窯青磁	包含層	碗Ⅰ類	— — 5.4
27	かわらけ(小)	第4号方形窪穴建築址	回転糸切り	7.8 1.1 5.0
28	かわらけ(小)	第4号方形窪穴建築址	回転糸切り	7.7 1.5 6.0
29	かわらけ(小)	第4号方形窪穴建築址	回転糸切り	(7.8) 1.0 5.4
30	かわらけ(大)	第4号方形窪穴建築址	回転糸切り	(12.7) 3.1 (8.2)
31	砥石	第4号方形窪穴建築址	中砥	幅4.4、厚み3.0
32	白磁	第6号方形窪穴建築址	皿Ⅰ類	(5.5) — —
33	白磁	第6号方形窪穴建築址	碗Ⅰ類	(11.0) — —
34	かわらけ(大)	土壤16	回転糸切り	(12.0) 3.2 8.0

35	かわらけ（小）	土壌17	回転糸切り	7.9	1.5	6.8	
36	かわらけ（小）	土壌18	回転糸切り	7.8	1.8	6.0	
37	かわらけ（小）	土壌18	回転糸切り	(7.8)	1.8	5.5	
38	かわらけ（小）	土壌18	回転糸切り	(8.0)	1.8	(5.1)	
39	かわらけ（小）	土壌18	回転糸切り	7.8	1.9	5.8	
40	かわらけ（小）	土壌18	回転糸切り	8.2	1.6	5.1	
41	かわらけ（大）	土壌18	回転糸切り	12.0	2.3	9.1	
42	かわらけ（大）	土壌18	回転糸切り	12.2	3.4	8.1	
43	かわらけ（大）	土壌19	回転糸切り	8.2	1.7	5.2	
44	かわらけ（大）	土壌19	回転糸切り	7.8	1.5	6.0	
45	かわらけ（大）	土壌20	回転糸切り	8.4	1.5	6.0	
46	かわらけ（大）	土壌20	回転糸切り	7.7	1.5	5.6	
47	かわらけ（大）	土壌21	回転糸切り	(12.9)	2.9	(7.5)	
48	かわらけ（大）	土壌21	回転糸切り	11.6	2.8	8.2	
49	かわらけ（大）	土壌21	回転糸切り	12.6	2.4	8.2	
50	かわらけ（大）	土壌21	回転糸切り	7.9	1.2	5.4	
51	かわらけ（大）	土壌23	回転糸切り	12.2	3.2	8.4	
52	常滑窯	土壌22	慶	(72.0)	—	—	中野5タイプ
53	土器質釜	土壌24	飼釜	(21.9)	—	—	

貿易陶磁は、森田分類で行ない、国産陶磁については、常滑市の中野晴久氏、瀬戸市の藤沢良祐氏、潮西市の後藤健一氏から御教示いただいた。

### 第三章　まとめ

今回は、長引く豪雨と激しい湧水等、最悪の条件下での調査となってしまったが、それでもわずかばかりの成果は得ることができたよう思う。ひとつは、六地蔵方面から本遺跡地方面に通する路地付近は塔の辻と呼称されているが、この道路に一部かかりながら平行する道路状遺構を検出できたことである。当該遺構の北側は調査区外に展開するために果たして道路遺構と確定できるか否かは今後の付近の調査を待つしかないが、繰り返し行われている土丹による版築事業のありかた、面上の轍とも思える浅い溝の存在、道路状遺構より上層の遺構ではあるが、暗渠の存在などは土地の一定の区画を想定させるものであり、ここでは一応道路と考えておく。これに対して、道路状遺構の南側には方形竪穴建築跡が存在していた事実は、方堅自身の調査は満足なものではなかったが、やはり貴重な発見といえよう。

調査区全体にわたって大きな攢乱が各所にあり、柱穴等の配置がまったく解釈されなかったのは残念である。

表土層下の遺物包含層からは、若干の15世紀代の遺物も出土しているが、各地業面から出土している遺物は14世紀代を中心としており、手捏ね成形のかわらけが出土していない点もこの遺跡の特徴かも知れない。道路状遺構に関しては、14世紀に5枚の土丹による版築事業が繰り返され、調査区南側の事業と様相を異にしている。生活面と道路状遺構との性格の違いであろうか。先年、小範囲ながら極近くを調査しており、そこからも土丹による版築地業層を2枚検出している。今回検出した地業層との関連性を今後の課題としたい。



▲第一面全景

▶切り石組増築



図版2



▶ 3号方形竪穴建築址





▲道路状遺構第百版築層



▲同上(東半分)

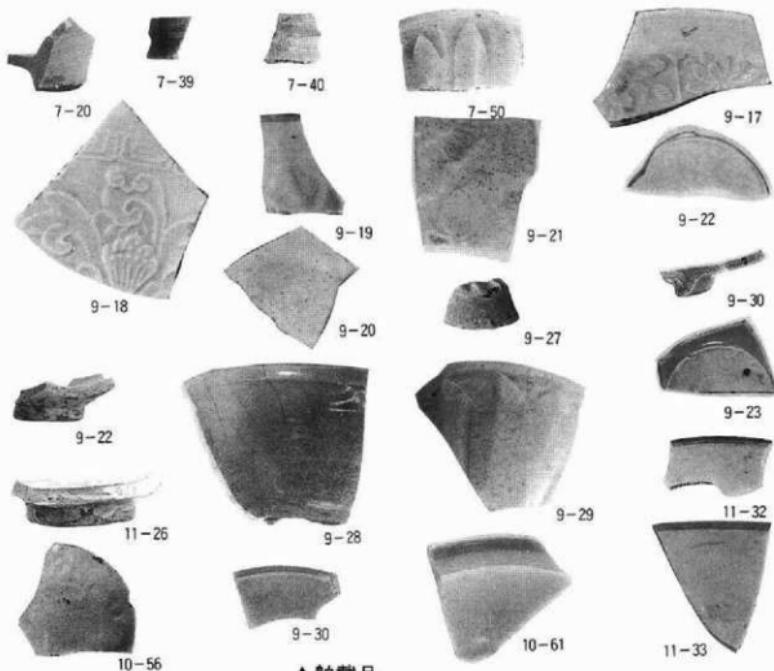
図版 4



▲第2面全景

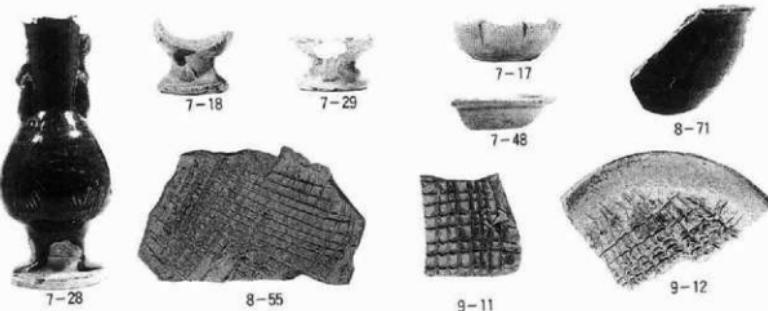
►道路状遺構第V版築層



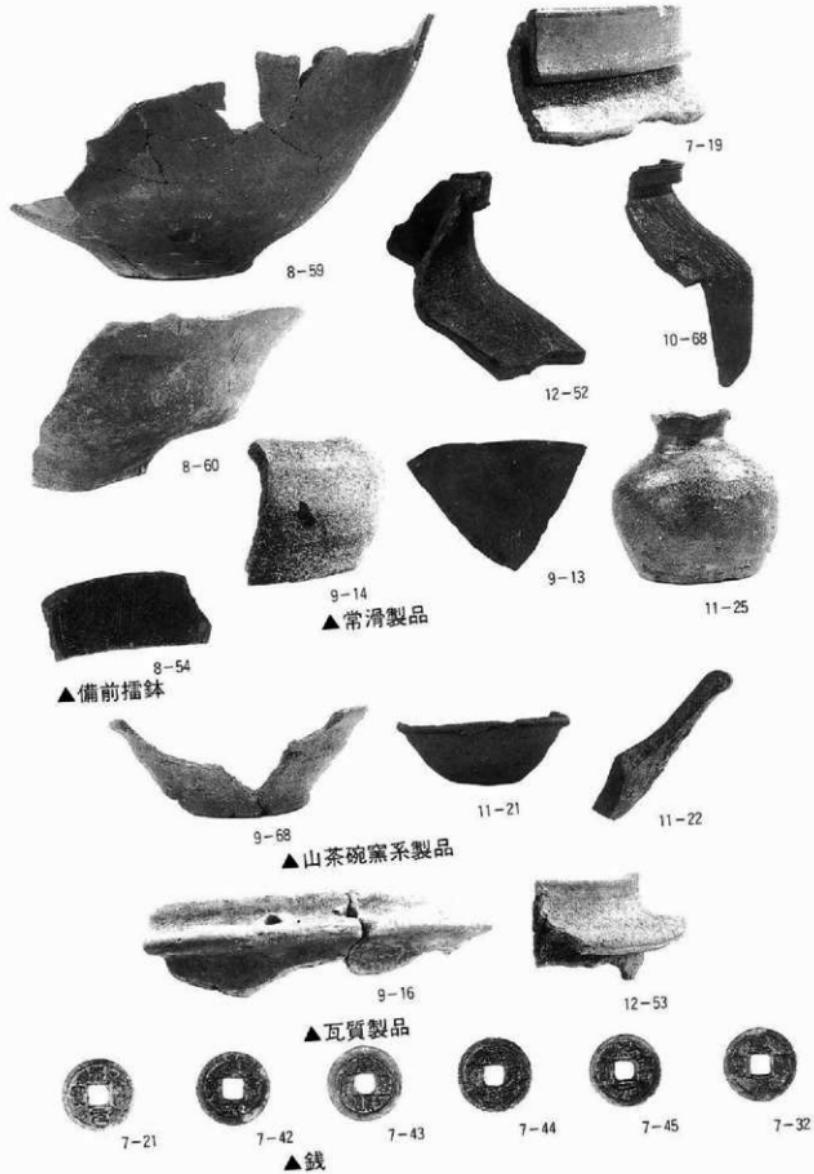


▲舶載品

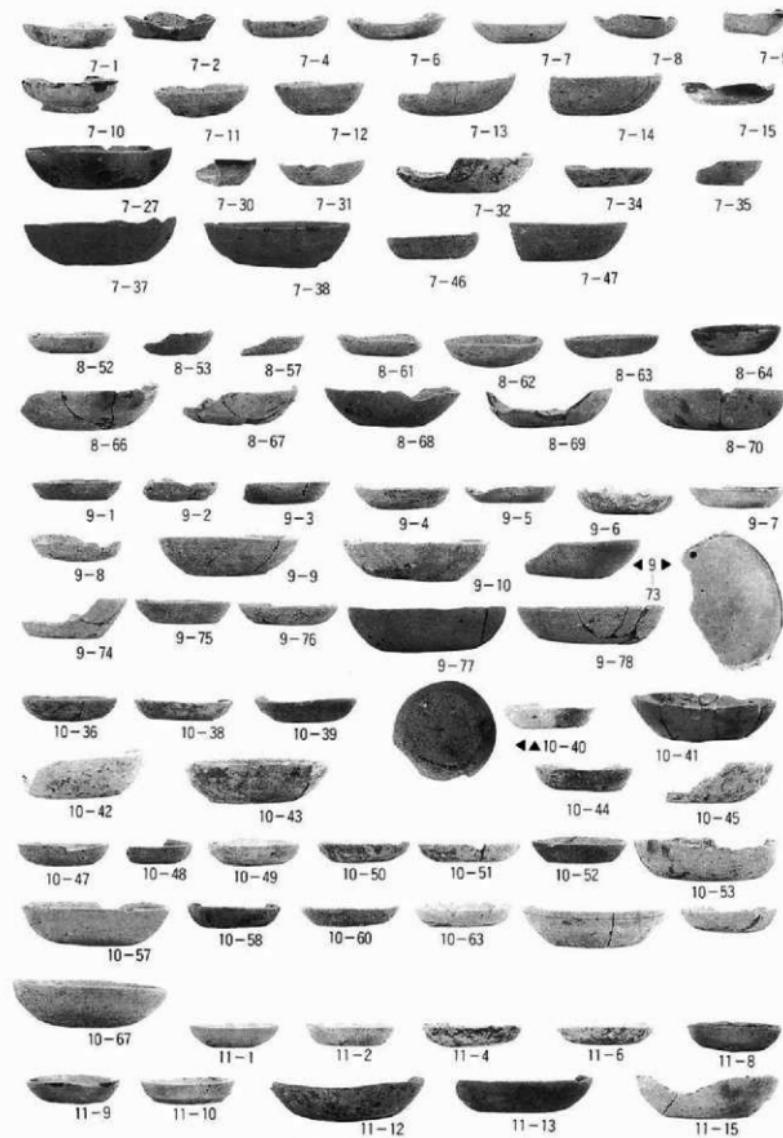
▼瀬戸製品



図版6

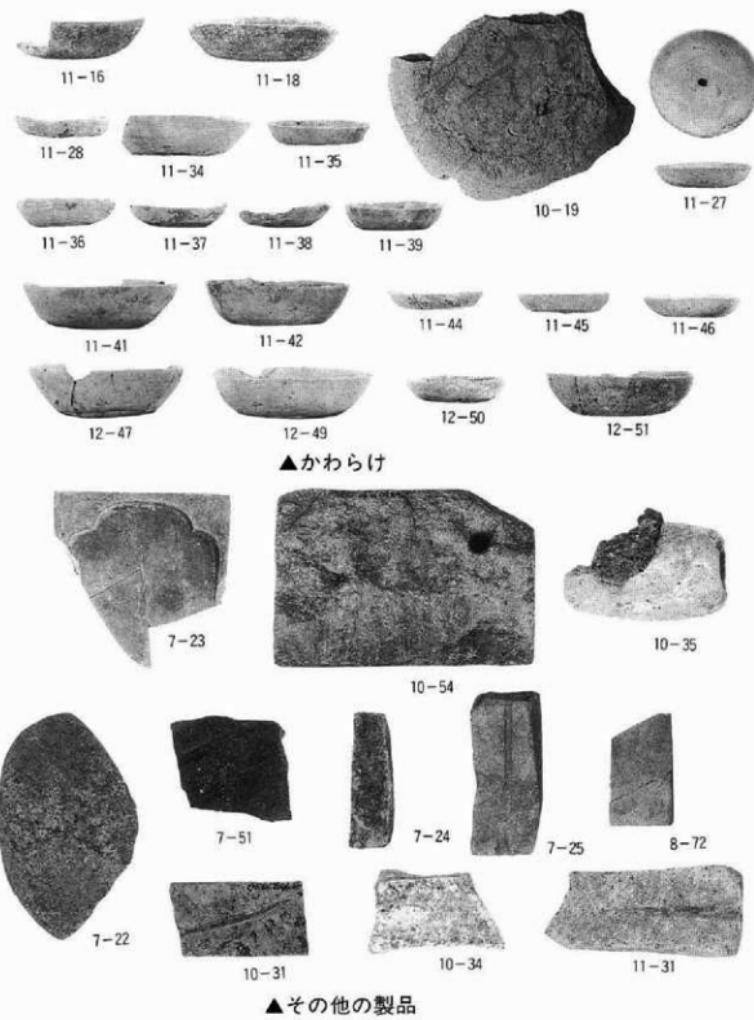


図版 7



▲かわらけ

図版8



# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうしほうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名							
巻次	第1分冊						
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
シリーズ番号	II						
編集者名	田代郁夫						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号						
発行年月日	西暦1995年3月						
ふりがな	しょざいち	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°	'	"	m <sup>2</sup>
ささめいせき 篠目遺跡	神奈川県鎌倉市篠目 町	204	245				19930601～ 19930908
							200
							自己用住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
篠目遺跡	中世都市遺跡	室町時代 14世紀末～ 15世紀	方形堅穴建築址 道路状遺構 掘え縫 柱穴	3棟 1条 2基	古瀬戸・仏草瓶、かわら け、常滑窯口壺・壺・ こね鉢、山皿、青磁蓮 弁文碗等	塔ノ辻と係わる道路状 遺構、その南側で方形 堅穴建築址を検出。	
		南北朝期 14世紀	土壙	3穴		テンバコ34箱	
		鎌倉時代末 14世紀初頭	方形堅穴建築址	3棟			

3. 米町遺跡 (No. 131)

大町二丁目2315番外地点

## 例　　言

1. 本報は、鎌倉市大町二丁目2315番外地点における共同住宅（自己用含む）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2. 発掘調査は国庫補助事業として、1993年7月12日から同年9月6日までおこなわれた。

3. 調査体制は次のとおり。

担当者　馬淵和雄

調査員　園部雅之・太田美知子・黒崎真理・及川加代子（内業）・渡部律子（同前）

調査補助員　折茂由利・丹行正・森本康二・坂倉美恵子・山上玉恵・兼行俊枝（内業）・青木綾子・蒲谷由利子・龍山千恵子

調査協力者　岡陽一郎・木村美代治・川村四志男・太田兵四郎・岸名富雄・寺平義夫・松崎靖弘・山口一義・香川尚美・西川秋雄

4. 本報作成担当は次のとおり。

原稿執筆　馬淵

遺物実測　及川・渡部・黒崎・坂倉・山上・兼行

同墨入れ　同　上

遺構図整理　黒崎・折茂・森本・坂倉・山上・馬淵

表作成　折茂

編集　馬淵

5. 出土遺物等、本発掘調査に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

# 本文目次

第一章 調査地点概観	55
第二章 調査の概要	61
第三章 調査結果	65
第1節 遺構面の概要と層序	65
第2節 検出遺構と出土遺物	67
第四章 まとめ	120

# 挿図目次

図1 本地点と近辺の主な調査地点・旧跡	56
図2 調査地点位置図	57
図3 善宝寺寺地図	59
図4 方眼設定図	61
図5 遺構全図・土層図	折込み
図6 遺構配置図	66
図7 建物1・同出土遺物	73
図8 建物2・3・同出土遺物	74
図9 建物4・柱穴列1	75
図10 土壌1・3・同出土遺物	76
図11 土壌2	77
図12 土壌2出土遺物	78
図13 土壌5・6・7・同出土遺物	82
図14 土壌8・9・同出土遺物	84
図15 土壌10・同出土遺物	86
図16 井戸1	87
図17 井戸1出土遺物(1)	88
図18 井戸1出土遺物(2)	90
図19 溝1・2	91
図20 溝1上層出土遺物(1)	92
図21 溝1上層出土遺物(2)	94
図22 溝1上層出土遺物(2)	96
図23 溝1下層出土遺物	97
図24 溝2出土遺物(1)	100
図25 溝2出土遺物(2)	102
図26 溝3(破碎岩充填道構)出土遺物	103
図27 据甕・同出土遺物	104
図28 土師器埋納穴・同出土遺物	105
図29 上部包含層出土遺物	107
図30 炭化層上面出土遺物(1)	109
図31 炭化層上面出土遺物(2)	110
図32 炭化層出土遺物(1)	112
図33 炭化層出土遺物(2)	114
図34 下部包含層出土遺物	115
図35 その他遺構からの出土遺物	117
図36 類似遺構例	120
図37 錦倉市内における便所遺構類例	122

# 表目次

表1 建物1出土遺物観察表	73
表2 建物3出土遺物観察表	75
表3 土壌1出土遺物観察表(1)	77
表4 土壌1出土遺物観察表(2)	79
表5 土壌2出土遺物観察表(1)	79
表6 土壌2出土遺物観察表(2)	80
表7 土壌2出土遺物観察表(3)	81
表8 土壌5・6出土遺物観察表(1)	81
表9 土壌5・6出土遺物観察表(2)	83
表10 土壌7出土遺物観察表	83
表11 土壌8出土遺物観察表	85
表12 土壌9出土遺物観察表	85

表13 土壌10出土遺物観察表	85	表31 炭化層上面出土遺物観察表(1)	108
表14 井戸1出土遺物観察表(1)	89	表32 炭化層上面出土遺物観察表(2)	110
表15 井戸1出土遺物観察表(2)	90	表33 炭化層上面出土遺物観察表(3)	111
表16 溝1上層出土遺物観察表(1)	93	表34 炭化層出土遺物観察表(1)	111
表17 溝1上層出土遺物観察表(2)	95	表35 炭化層出土遺物観察表(2)	113
表18 溝1上層出土遺物観察表(3)	96	表36 炭化層出土遺物観察表(3)	114
表19 溝1下層出土遺物観察表(1)	98	表37 下部包含層出土遺物観察表	116
表20 溝1下層出土遺物観察表(2)	99	表38 その他遺構からの出土遺物観察表(1)	118
表21 溝2出土遺物観察表(1)	101	表39 その他遺構からの出土遺物観察表(2)	119
表22 溝2出土遺物観察表(2)	102	表40 調査区全体遺物構成	125
表23 溝2出土遺物観察表(3)	103	表41 土師器技法別構成	125
表24 溝3出土遺物観察表(1)	103	表42 国産陶磁器種構成	125
表25 溝3出土遺物観察表(2)	104	表43 中国産陶磁器種構成	125
表26 据置出土遺物観察表	104	表44 土師器溜り出土遺物構成	126
表27 土師器埋納穴出土遺物観察表	106	表45 同出土土師器技法別構成	126
表28 上部包含層出土遺物観察表(1)	106	表46 同出土国産陶磁器種構成	126
表29 上部包含層出土遺物観察表(2)	107	表47 同出土中国産陶磁器種構成	126
表30 上部包含層出土遺物観察表(3)	108		

## 図 版 目 次

図版1 1. 調査地点から紙園山を望む	127	図版6 1. 溝1(北から)	132
2. 全景(南から)		2. 溝3破碎岩充填状況	
図版2 1. 土壌1(西から)	128	3. 溝1北端部	
2. 据置遺構		図版7 1. 繼敷	133
3. 土壌1内常滑窯口壺出土状況		2. 土師器埋納穴	
図版3 1. 土壌2(土師器溜まり)	129	3. 土師器埋納穴	
2. 集石遺構(東から)		4. 南壁柱穴 磁板出土状況	
3. 土壌5(南から)		図版8 出土遺物(図7~15)	134
図版4 1. 土壌7瀬戸卸皿出土状況	130	図版9 出土遺物(図16~23)	135
2. 土壌9(西から)		図版10 出土遺物(図24~28)	136
3. 土壌10(西から)		図版11 出土遺物(図29~31)	137
図版5 1. 井戸1(南から)	131	図版12 出土遺物(図32~35)	138
2. 同上内竹出土状況			
3. 井戸中段岩盤波蝕台表面の貝類生息穴			

# 第一章 調査地点概観

## 立地

調査地点は大町四つ角の東南、逆川と大町大路との間にある。国道134号（旧道）から南に約60m、旧「小町大路」である南北の市道からは東に約40mの位置にある。現在の地番は鎌倉市大町二丁目2315番外。

鎌倉旧市街東南部を流れる逆川（さかさがわ）はその源を衣張山および名越の山塊に発し、名越ヶ谷という大きな谷を開拓した後、市内大町の中心部を流れ、材木座上河原で滑川に合流する。名越ヶ谷で南に向かって流れているこの川は、谷を出たところではほぼ直角に向きを変え西に向かう。材木座海岸の形成する砂丘が東西に立ち塞がって、越えることができないためである。川は砂丘の北側裾に沿って約300m西流し、今度は北に向きを変える。そして40mほどで南に向かい、やがて滑川に流れ込む。この途中の北に流れのところが、あたかも逆流しているように見えるので、この名がついたらしい。

さて、若宮大路の東側を横大路東端から材木座まで南北に通じる道路は、かつて小町大路と呼ばれていたという。この道を南下して国道134号を「大町四つ角」で横切り、さらに40mほど行くと逆川を渡る。この橋を魚町橋という。さらに南約50mの地点に東に入る路地がある。ここを入れるとすぐにまた逆川を渡る。この地点では、川はその名通り、北に向かって流れている。この橋を逆川橋というが、発掘調査地点はこの逆川橋を過ぎて20mほど行ったところの南側にあり、ちょうど路地が屈曲して北に折れる角に当たる。

調査地点はまた逆川が北に向きはじめる屈曲点の北に接しており、今みられる護岸工事が施される以前は、ほぼ川岸といつてもよい位置にある。

## 歴史的環境

調査地点前面の路地は大町八雲神社の社頭を南北に通じる道の南端でもある。この道は二ノ鳥居並びの東端に位置する蛭子（ひるこ）神社から滑川右岸を南下し、比企ヶ谷の妙本寺、常榮寺、および八雲神社を過ぎ、国道134号をよぎって調査地点前にいたる。この付近の歴史的環境は八雲神社の存在を抜きにして語れないが、その前に鎌倉の都市構造の中に一帯を位置づけておきたい。それにはまず、国道134号の沿革をみておく必要がある。なお、地名等は便宜上現在のものを併用する。

古く大化元年（645）に五畿七道制が定められてから、奈良時代の宝亀二年（771）まで、鎌倉には東海道が通じていた。この道は、下りでいえば、相模国府から太平洋岸を通り、おそらく現在の極楽寺坂から鎌倉に入る（極楽寺坂切通は鎌倉時代に開削されたと伝えるが、星井寺のように律令期からの寺が道の脇に存在していることからみて、當時から開けていたのは確実である）。そして長谷小路、六地蔵交差点を経て鎌倉郡を東進し、今の若宮大路を横切って名越から沼浜（現在の逗子市）に抜ける。さらに三浦半島の脊髄を横断して東京湾側に出て、横須賀市走水の辺から房総半島に渡り、常陸国にいたった。

だが宝亀二年、それまで東山道に属していた武藏国が東海道に編入されたのにともない、東海道は相模国府から相模原を横切り、多摩丘陵を越えて武藏国府に出る、という経路に変更される（「光仁天皇」条『続日本紀』三十一）。とはいえ、この道がなお房総往還の大動脈として機能していたことは確実で、鎌倉も、正規の道筋を外れたとはいえた交通の要衝として、いまだ重要な位置を保っていたことは間違



図1 本地点と近辺の主な調査地点・旧跡

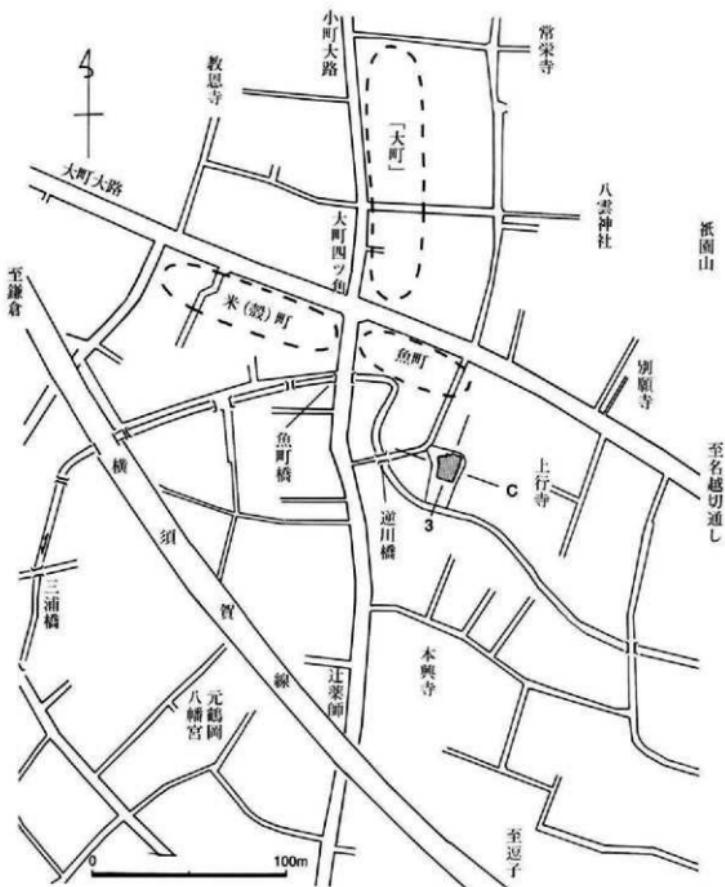


図2 調査地点位置図

図1 地点名

1. 大町二丁目2315番地他地点 (本地点)
2. 逆川橋
3. 大町二丁目933番地点
4. 魚町橋
5. 辻葉師堂
6. 由比若宮 (元鶴岡八幡宮)
7. 材木座一丁目144番3地点
8. 龍藏寺跡
9. 五所神社
10. 長勝寺
11. 大町二丁目2411番2地点
12. 名越ヶ谷道路
13. 八雲神社 (紙園天王社)
14. 紙園山
15. 清興建設ビル用地地点
16. 妙本寺遺跡
17. 本覚寺境内遺跡 (本堂地点)
18. 本覚寺旧境内遺跡
19. 若宮大路周辺遺跡群 (御成町868番地点)
20. 若宮大路周辺遺跡群 (御成町872番地点)
21. 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡 (鎌倉女学院用地)
22. 圓覺堂橋
23. 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡 (由比ヶ浜二丁目1034番外地点)
24. 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡 (由比ヶ浜二丁目1037番外地点)

ない。

問題は、かつての東海道が現在のどの道に当たるか、である。これについて、確証はないが、筆者は国道134号がそうであろうと考え、『鎌倉市史 総説編』(高柳1959)のいう、これよりも一本南側の道(「車大路」か)だという説を探らない。その理由は、この道のうち六地蔵から斜行して下馬四つ角にいたる部分の存在である。こここの部分は、発掘調査によって少なくとも13世紀代には確認できるが、なぜ若宮大路や今小路、大町大路などの軸線に規制されずに存在しているのだろうか。おそらく、頼朝期の街区整備によって修正することが無理な、それ以前からの幹線道路であったからではないか。そうであればその道こそが、当時なお重要なと思われる、かつての東海道であることは間違いない。下馬四つ角から「塔ノ辻」を通り、佐助山に向かう大町大路の西半分は、おそらく鎌倉期の造作である。

なお今のところこの付近で古代の遺構が発見された例はないが、近在の遺跡分布や幹線道路脇という立地からみても、そう遠くない将来に検出が期待されよう。

さて鎌倉時代に入ると、国道134号線は若宮大路の東側では「大町大路」となる。そして、調査地点付近も繁華な商店街となつたらしい。

大町大路は、言うまでもなく、中世鎌倉の南側を通過する東西幹線道路である。調査地点はこの道から50mほど南にある。繰り返しになるが、大町大路は西端を御成山南側支尾根の麓に発し、若宮大路と「下馬四つ角」で交差した後、東の名越に抜ける。この間、今小路との交点に「塔ノ辻」という名称をとどめ、また小町大路との交点は「大町四つ角」と呼ばれる。「下馬四つ角」は騎乗の者がここで下馬の礼をとるのでこの名があるが、それを裏付けるように、相模国津久井郡串川光明寺所蔵の明応六年(1497)頃と推定される「善宝寺領図」には、若宮大路の「置石」が、ちょうど大町大路の並びで途切れている(図3)。「置石」とはいわゆる「段葛」のことである。この絵図については後にも触れる。

大三輪龍彦によれば、「塔ノ辻」の地名はもう一箇所、鶴岡八幡宮前面の「横大路」東端、すなわち横大路と小町大路の交差する場所にも残っているといい、この二箇所の塔ノ辻と大町四つ角、および扇ヶ谷にある今小路と武藏大路の交点に囲まれた内部が、中世都市鎌倉の中核にあたるという(大三輪1989)。それはおそらく正しいが、ここでは先にも少し触れた、大町大路に平行して一本海岸寄りを通る道路について、簡単に言及しておこう。

この道路は「車大路」かとも言われ、現在では断続的ではあるが、大町大路の南約150mを筆目ヶ谷入口から名越まで通じ、若宮大路との交差点からは、先立っての発掘調査により一ノ鳥居の柱根が検出されている。この道の今大路との交点には「六地蔵」が置かれ、また小町大路との交点には「辻の薬師堂」がある。一ノ鳥居の東南には新居(荒居とも)閻魔堂が、足利尊氏のころから元禄年間まで存在していた。これらは明らかな境界標識である。さらにここから以南では、中核部とは全く異なる遺構である堅穴建物が無数に検出され、丈尺制の施行を示す地割りが認められない。しかも、いたるところ大量の人骨が出るという、決定的な特徴がある。こういった事実は、こより海側が都市鎌倉にとって外界であることを明白に示している。

なお、道路の存在と堅穴建物の群別化をもって、丈尺制が浜にも施行されていたかのように主張する論者がいるが(齊木1994・宗臺1994など)、人の生活が存在すれば通路が確保され、所有物にまとまりができるのは当たり前の話である。問題は、浜と中核部が遺構のありかた、土師器溜まりの有無、等全く相異なる様子を示していることに尽きる。中核部のどこに堅穴建物が群集し、人体が埋められているだろうか。誰の目にも明らかな両者の差異から目を逸らして論を展開するのは、いかにしても無理であ

20

さて、以上の事実を念頭に置くと、調査地点の位置について、興味深い事実が浮かび上がってくる。すなわち、調査地点のある大町大路と車大路との間の帯状の部分は、次のような曖昧な性格を帯びていると見做さざるを得ない。すなわち、都市鎌倉の中核部にも属さず、かといって外でもない、すぐれて両義的な場所ということになる（馬淵1994）。そして、次に述べる鎌倉中の商業地区のうちのいくつかは、この帯状の地域のなかに位置している。

周知のように、鎌倉幕府は建長三年（1251）と文永二年（1265）、市内の商業地区を指定する法令を出した。前者（以下A）は執権北条時頼により、後者は（以下B）は同長時による。その指定地とは次のとおり。

A——大町・小町・米町・龟谷社・和贺江・大倉社・氣和飛板山上

B——大町・小町・魚町・穀町・武藏大路下・須地賀江橋・大倉辻(法令の地の文には九ヶ所があるが、表示は以上七ヶ所)

これらの詳しい位置については別の機会に論じたいが、このうちで調査地点に近いのはAの大町・米町、Bの大町・魚町・穀町である。Bの穀町はおそらくAの米町であり、Aの和賀江を放棄した替わりに、Bの魚町が加えられたとみた。魚町については、従来甘繩郷にあるとされていたが、嘉暦三年（1328）六月十一日の「朽木文書」に「甘繩魚町」とあって「魚町」とは明らかに区別されているところから、最近の地名改変まで大町に残っていた魚町付近だと考えられる。土地の年配者によれば、大町大路南側の、大町四つ角の東を「魚町」、同じく西を「米町」と呼んでいたという。現在も逆川に掛かる小町大路の橋は「魚町橋」という。先にも触れた串川光明寺所蔵、明応六年（1497）頃の「善宝寺領

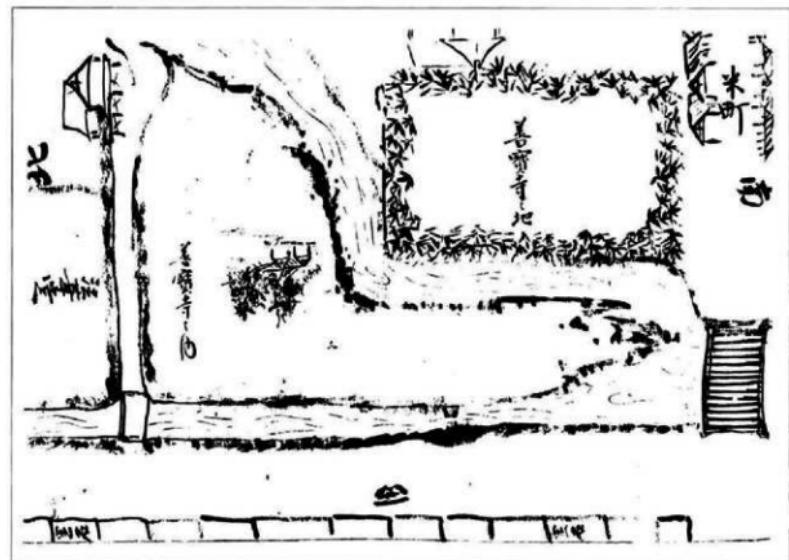


図3 善宝寺寺地図（「鎌倉国宝館図録」第16集より）

図」でも、「米町」の位置は大体この付近である。とすると、調査地点は「魚町」の範囲に含まれることになる。なお「善宝寺」は大町大路の北側、滑川左岸にあったという庵寺である。

さて実は問題は、從来自明のようにいわれてきた「大町」の位置である。「米町」と「魚町」がこのようにかなりの確度で推定可能ならば、「大町」は行き場に困るからだ。候補としては、大町四つ角北側、八雲神社の前面が最も有力であろう。あるいはもうひとつ、若宮大路の西側にあった可能性も否定しきれない、と思う。というのも、鎌倉が範を取った平安京には、朱雀大路を挟んで東西にそれぞれ市が存在していたからである（東市・西市）。若宮大路西側の大町大路南辻は昭和30年ごろまで大町という地名であったことから、この付近に「大町」と呼ばれる商業地区があったとしても、さほどの違和感はない。

いずれにせよ、位置を確定することは困難だが、他の商業地域も含め、おおむねこれらが中核部の縁辺に沿って置かれていることは確かである。特にAからBへの地点変化に、その傾向が強く現れているように見える。おそらくこの時点で、鎌倉幕府は中核域とそれ以外の場所とを、明確に区別したのである。市場というものが内と外との境界に置かれるとするなら、これはその象徴的な例だというべきだろう。なぜなら、先に書いたように、この大町大路と一の鳥居並びに挟まれた帶状の地域は、鎌倉の内にも外にも届かない、すぐれて両義的な場所であるからだ。なお、図2におよその推定域を示しておいたので参照されたい。

鎌倉幕府滅亡後、南北朝期から室町時代前期にかけて、鎌倉が徐々に顕勢に入ったのは否めないようだが、なお調査地点一帯が商業地として繁栄を保っていたのは間違いない。この時代を語るとき見遁してならないのは、大町四つ角にある八雲神社の存在である。これは紙園天王社とも呼ばれ、永保年間（1081～1084）に新羅三郎義光によって勧請されたと伝わる。おそらく、北東の鬼門鎮守社である荏柄天神社、南東の御靈神社、北東の佐助稻荷神社とともに、鎌倉の四隅を守る都市神として同時に設けられたのであろう。これについては、別に書いたのでここでは略す（馬淵1994）。

さて、八雲神社の祭礼は鎌倉祇園会と呼ばれ、中世後期にはおおいに栄えた。それを担ったのは商人・職人らしいゆる「町衆」であるが、彼らの多くは日蓮宗徒だったという。鎌倉時代、日蓮宗は名越付近に押し止められていたが、15世紀後半になると鎌倉の中心部まで進出する。二ノ鳥居東南の本覚寺・大巧寺がそれである。彼らの教説拡大についての詳細は重要な検討課題だが、紙幅の都合上省略する。ともかく、調査地点一帯が同宗の勢力下にあったことは間違いない。この点に関しては、本章末に挙げた参考文献を読まれたい。

#### 引用文献

- 大三輪龍彦1989 「都市鎌倉の道と地域」『中世日本の諸相』下巻 吉川弘文館 316頁  
齐木秀雄1994 「『浜池』『雅考』『中世都市研究』第3号 148頁ほか  
宗臺秀明1994 「長谷小路周辺遺跡 由比ヶ浜三丁目228・229番外（No.236）」長谷小路周辺遺跡発掘調査団  
高柳光寿1959 「鎌倉市史 総説編」吉川弘文館 270頁（1979再版）  
馬淵和雄1994 「武士の都鎌倉——その成立と構想をめぐって——」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』（『中世の風景を読む』2）新人物往来社 21～22頁

#### 参考文献

- 佐藤博信1991 「『快元鎌都記』の世界像」『日本歴史』523号  
藤本久志1993 「中世鎌倉の祇園会と民衆」『神奈川地域史研究』11号  
松尾潤次1993 「中世都市鎌倉の風景」吉川弘文館  
福浅治久1994 「東国の大蓮宗」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』（『中世の風景を読む』2）新人物往来社

## 第二章 調査の概要

### 調査にいたる経緯

この点に関しては、下の文献を参照されたい。

「平成5年度調査の概観』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10』鎌倉市教育委員会 1994

### 調査方法

調査に当たってはまず、試掘調査によって判明していた近・現代の整地層を重機によって排除した。深さは、場所によって異なるが、現地表下約30cmまでである。この層を除くと中世期の包含層が現れるが、近世の造構はここではおそらく削平されており、検出できなかった。

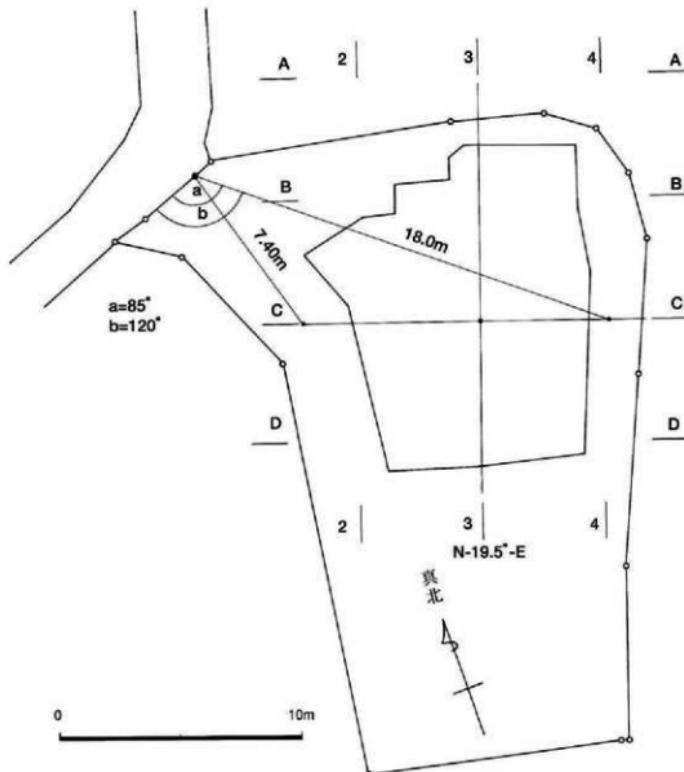


図4 方眼設定図

当調査には現地表（調査区北東角の道路面）から100cmという深度規制があり、それ以下は調査できなかったが、調査区壁際は部分的に深掘りして、規制深度下の層位を観察した。

調査区は南北13.5m×東西12mの不整形で、面積は約100m<sup>2</sup>である。

測量方眼の設定は次のような方法で行った。

設計基点は、図4に示したように調査地点入口（北西角）の境界杭を使用した。そして、その基杭と南東のもう一本の杭を結ぶ線を基線にし、任意の東西軸を調査区に振り出した。その角度と距離については、図4を参照されたい。また、調査区の最長部に当たる位置の東西軸上に任意の点を設け、南北軸の基点とした。これらを基点にして、北から南に向かアルファベットの東西軸を、西から東に向か算用数字の南北軸を、それぞれ5m間隔で配した。各方眼区画の呼称は、北西角の軸線交点によって示される。なお、調査区北東の南北路地、および大町大路との直交・平行関係を重視したため、南北軸は真北には一致せず、19.5° 東に偏差がある。

#### 調査経過

調査は7月2日、重機による表土掘削とともに開始、至近距離に逆川があるためかなりの湧水があったが、9月6日、機材を撤収して終わった。その間の経過については、以下に記す日誌抄録を参照されたい。

- 7月14日 調査区北辺から包含層を掘削し、中世面の露頭作業に入る。
- 7月20日 北半部精査と遺構掘り上げ開始。
- 7月27日 測量方眼の設定。
- 7月29日 南半部精査と遺構掘り上げ開始。
- 8月10日 中央部破碎岩投込み遺構写真撮影。
- 8月16日 調査区西南部遺構検出作業。
- 8月23日 南北土層ベルト除去。
- 8月26日 溝・井戸等写真撮影、平面実測。
- 9月1日 全景写真撮影。
- 9月2日 平面実測。
- 9月3日 調査区壁土層断面実測。

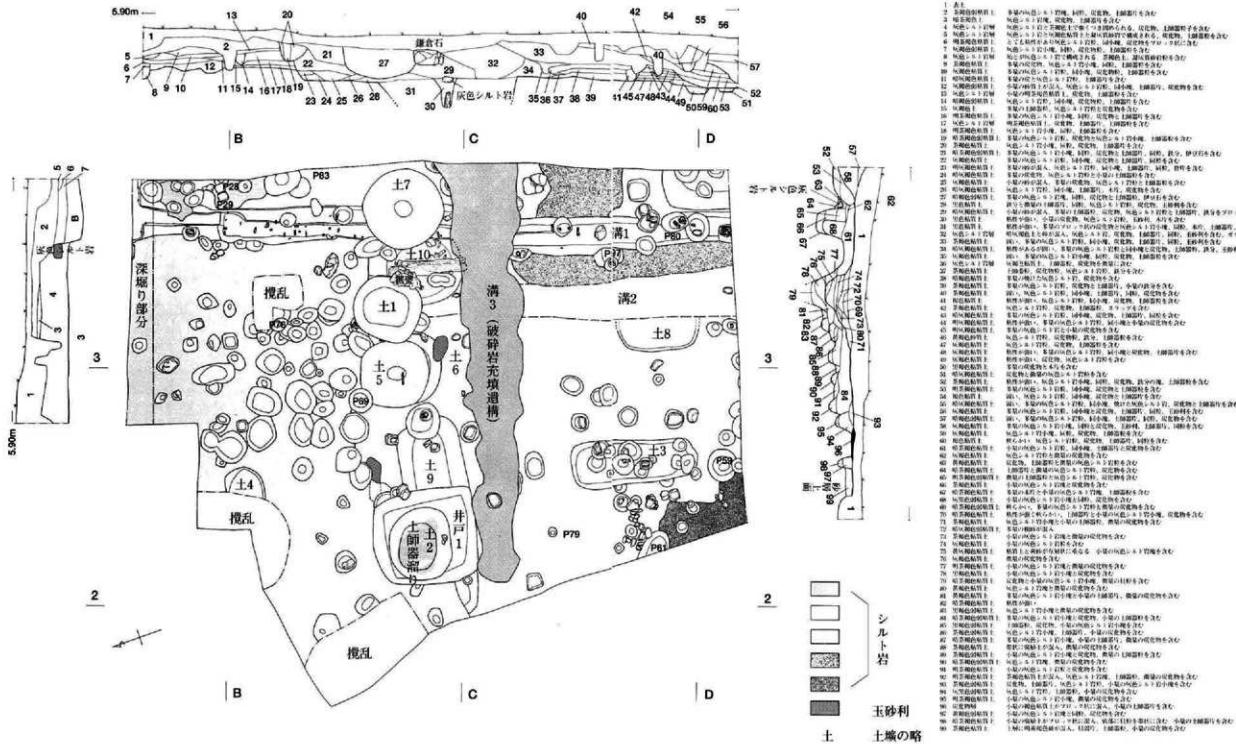


図5 造構全図・土層図

## 第三章 調査結果

### 第1節 遺構面の概要と層序

#### 1. 概要

遺構面は調査区の北から南に向かって、なだらかに傾斜している。これは南側の隣地が逆川となっているためであり、現在の河川擁壁までも調査区から12mほどしかない。おそらく、中世期には調査区南端から河川流路まで、ほんの数歩の距離であったと推定できる。

面の状況は、調査区中央部付近を境にして、南部と北部とで大きく異なる。すなわち、北側にはほぼ全面にシルト岩（「土丹」と呼ばれる、当地方で産出された岩盤を破碎したもの）の厚い地業層が認められ、標高も5.3m前後あるが、南側にそれはみられず、標高も4.4～4.8mと低くなる。

シルト岩地業層の切れる調査区中央部は、一段低くなる段状部が東西に帯状に形成され、土壙・井戸などが横に連なって存在する。地業面の上には、掘立柱建物の一部かとも思われる柱穴の並びがいくつか認められたが、それらはいずれも地業面の範囲内で完結しているので、この段状部が居住域の南辺を示しているのは確実である。このことはこの帶状地帯の南辺に、区画を表すとみられる溝状の窪みがあることからも裏付けられよう。なおこの溝状遺構には後に大量のシルト岩塊が投げ込まれ、溝としての機能が消されている。段状部の西寄りには井戸があり、そのさらに西側の調査区西壁際になると、段はなだらかな傾斜となる。地業面は、段状部ではこの部分にのみ存在する。

南側の低位部分は、中世期にはおそらくほとんど河川敷といつてもよい場所だが、それでも土壙や柱の並びが存在するので、人の居住があったのは間違いない。この部分の西側には、岩塊の投げ込まれた隅丸長方形の土壙が検出され、一帯からは牆の羽口がいくつか出土した。また、調査区西南角には破碎シルト岩を敷いた面もある。

南側には隅丸長方形の土壙脇に、礎石らしい石の並びが認められた。その延長線上の中央部にも石の並びがあったので、いちおう一連の石列としておいた。

調査区東辺には南北の溝が平行して2条あり、いずれも数度の浚渫が認められるが、うち1条は地業によって北半が埋められているのに対し、もう1条の方は長く使用されたことが窺われる。2条の溝の間は畠状に高く残る。

#### 2. 層序

近・現代の整地層は、調査区のほぼ全面を約30cm程度の厚みで覆っている。この層を除くと中世期の包含層が現れるが、近世の遺構はおそらく削平を受けており、検出できなかった。

調査区北側では、近・現代層下の中世包含層は10cmほどで、それを除くと先述のシルト岩地業面が現れる。この地業層は60cmもの厚みがある。中世期を通じ長く使用されたらしく、上面の出土遺物にはかなりの年代幅が認められる。ただ、この層を除去すると規制深度を越えるため、当調査では北壁際を深掘りするにとどめざるを得なかった。

南側に明瞭な地業層はない。土質はおおむね砂質で、川に向かって緩やかに傾斜している。遺構の重複はあるが、上部の削平によって多くが单一の面から検出された。

以上の土層の詳細については、図5を参照してほしい。

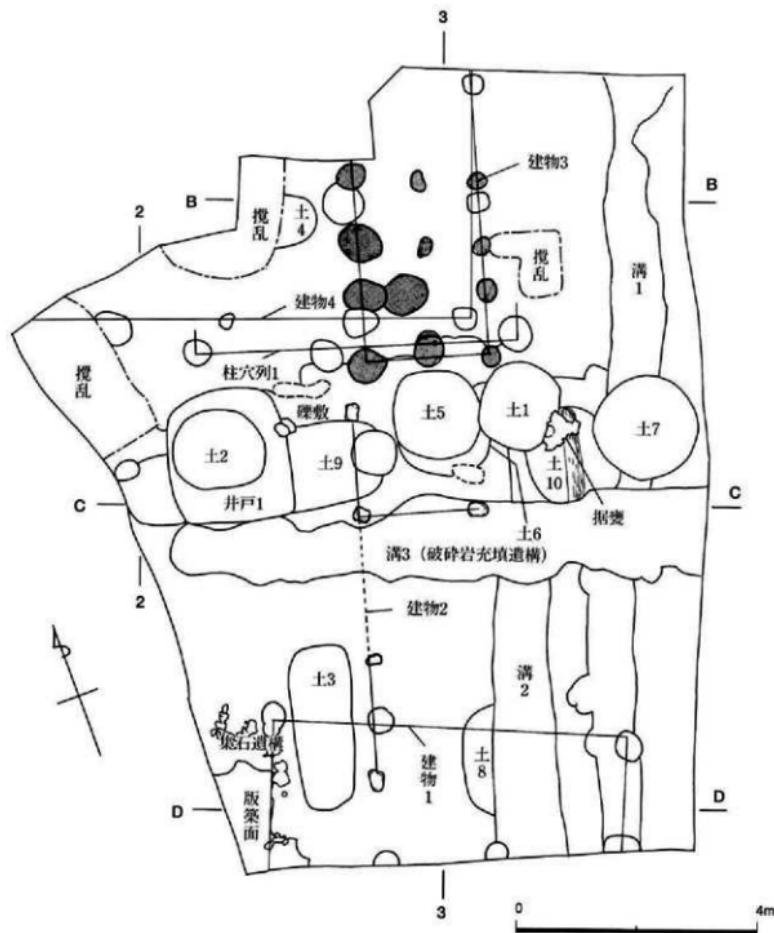


図6 遺構配置図

## 第2節 検出遺構と出土遺物

ここでは遺構を個別に説明するが、数値等の詳細は挿図を参照されたい。記述に際しては、あらかじめ大きく4つの群に分けておく。すなわち、1. 北半部地業面上の遺構群・2. 中央段状部の遺構群・3. 南半部低位面上の遺構群・4. 南北溝その他、の4群である。

以上の群別に従って記述していくので、遺構の順列は必ずしも遺構番号の順にはなっていないことを断っておきたい。

なお、これらのなかには、建物あるいは柱穴列としてにわかに首肯しがたいものもあるが、規模・配列等の要件を満たしていれば、ひとまず一連のものであると考え、ここに取り上げておいた。

### 1. 北半部地業面上の遺構

掘立柱建物2棟・柱穴列1列・土壙1基がある。

#### 建物3

東西2間×南北3間の規模で南北に主軸を持つ。西側の列に比べ、東側の列が小さいなど、柱穴の大きさに差異があり、違和感もなくはないが、配列からいって一連の建物と判断した。柱間は1m内外と短いが、鎌倉中期以降市内で普遍的にみられる2mの柱間の、ちょうど半分である。

後述の建物4の柱穴6と本址柱穴7が接しているが、切り合った部分が僅かのため、先後関係は確認できなかった。また柱穴列1の柱穴3と本址柱穴11は、同一の場所にあるが、前者が後者に重なっているので本址が古い。

柱穴からの出土遺物には常滑・舶載陶磁器などがあり、その年代は13世紀後半である。またこの建物3はその位置からいって、その南側の土壙5・6と関連する可能性がある。本址西側の土壙4との関係は不明。

#### 建物4

北西部が調査区外に出ているが、現況で南北2間×東西3間の規模があり、東西に主軸を持つ。これも柱穴規模が不統一だが、それぞれ大体2mという、中世鎌倉に普遍的な間隔での並びが認められるので、建物として抽出しておく。

先述のとおり、建物3の柱穴7と本址の柱穴6が重複するが、先後関係は確認できなかった。柱穴列1や中央部の土壙群・井戸等との関係も不明。

柱穴出土遺物はない。

#### 柱穴列1

地業面の南辺に沿って、東西方向に4口の柱穴が並んでいる。東側は溝1の手前約2mにあるが、西側の延長には擾乱壙があり、不明である。柱間は西から220cm・160cm・200cmと不規則だが、ほぼ同規模の柱穴なので、列としておきたい。規模は現況で3間。

建物3と重複するが、本址が新しい。

柱穴出土遺物はない。

#### 土壙4

北西部にあり、西側を擾乱に切られている。浅い逆台形の断面形状を持つ、直径80cm以上の不整円形土壙。他遺構との関係が分からず、性格は不明。

出土遺物なし。

## 2. 中央段状部の遺構

土壙6基・井戸1基・据置造構1基・溝（破碎岩充填造構）1条・柱穴9口・礎敷造構などが、いくつも切りあって検出された。また、一部の土壙を跨ぐように、南半部低位面から伸びた礎石列がこの部分に続いている可能性もある。

### 土壙1

段状部のやや東寄りにある、直径140cm前後の円形土壙。断面は皿形、もしくは浅い椀形。

溝2の上にあり、土壙5・6を切る。常滑の据置造構の西半分を壊している。一帯の遺構群中では最も新しい。

北半部地業面上の建物群との関係が把握できず、性格は不明。

出土遺物には土師器・東海産陶器・青磁・鰐羽口などがある。底面から土師器皿と常滑窯口壺が出土した（図版2-1・3）。後者はまことに残念ながら、写真撮影後盗難に遭って失われたが、中野晴久氏によれば、13世紀第3四半期に生産がほぼ限定されるものである（中野6a期——全国シンポジウム「中世常滑焼をとおって」資料集1994など）。この年代観は渥美の甕を除けば、おおむね領けることができ、本址の年代比定だけでなく、共伴の土師器の年代についても有力な手掛かりを与える。

### 土壙2

調査区西壁寄り、井戸1の上層に位置する。大量の土師器と炭が投げ込まれた円形土壙。井戸が埋められる一連の過程中での投棄の可能性もあるが、割合に整った逆台形の断面をしている上、底面がかなり焼けているので一定期間露頭していたと判断し、ひとまず独立の遺構としてあつかう。

長径150cmあまりで、中に90個体強の土師器が一括投棄されている（破片点数では509点）。すべてロクロ成形種（R種）が占め、しかもその大半が小型品である。

出土遺物の年代は、常滑こね鉢や青磁などの年代からみて、13世紀第3四半期ごろを中心としていると考える。

### 土壙5・6

2基がほとんど重なるように存在する。5が6よりも新しい。いずれもすり鉢状で、後述の土壙7などとよく似た形をしている。

5・6とも底面に、茶色もしくは黒褐色の柔弱な繊維質土が堆積しており、ここから、便所遺構に特徴的な出土遺物として最近注目されているウリ科植物の種子が出土している。またおそらく便所と考えられる、後述する土壙10出土の板と同様の残片が出土しているところから、本址もそうである可能性が高い。

出土遺物の年代は、土師器と青白磁、常滑産のいわゆる山茶碗窯こね鉢からみて、13世紀第2四半期～第3四半期に位置づけられる。

### 土壙7

調査区の東寄りにある、整った円形をしたすり鉢状土壙。直径170cmと大きいが、形状は前出の土壙5・6によく似ている。堆積土にも共通性が認められるところから、これもまた便所である可能性があるといえる。

肩位的には溝1の上層と下層の間に属する。

出土遺物の年代は、土師器からみて13世紀第2四半期に比定できよう。堆積土最上層から13世紀後半の瀬戸卸皿が出土しているが、本址にともなうとは考えにくい。

### 土壤9

調査区西壁寄りにあり、井戸1に切られる。長さ4.3m、幅1.4mと大きく、段状部の軸線に沿って東西に掘られている。建物2を構成する礎石2個に挟まれているが、年代差はつかめず、あるいは同時に存在した関連施設である可能性もある。平面は長楕円形で、逆台形に近い断面を持ち、全体として舟形を呈する。

底面の中軸線上には、2mの間隔で2枚の礎板が置かれ、何らかの上部構造の存在を示唆する。それが何であるかは想像の域を出ないが、土壤自体の形状が市内で検出された便所遺構の例（「政所跡」2面土壤2——『政所跡』政所跡発掘調査団1991-27頁）に共通するようにも見えるので、これもあるいは便所の可能性がある。だとすると、この2枚の礎板は、踏み板を下から支えたり固定したりする柱の基礎であることも考えられる。もう一つの可能性としては、水溜めのような施設を想定できよう。いずれにせよ、市内の調査ですでにいくつか検出されているこの形態の土壤については、いずれ検討を加えてみたい。

出土した土師器の年代は、手づくね成形種（T種）の器形からみて、大体13世紀第2四半期ごろと考える。

### 土壤10

調査区東寄りにある、長径1.65mの円形土壤。深さ60cm強で、断面は逆台形を呈する。層位的には、土壤1・7・溝1などに切られ、また常滑の据縫遺構も上に載っているので、一帯では最も古いことになる。

ここからは、2枚の同じ長さの板が重なって出土した。この板はおよそ土壤の直径に等しい長さがある。土壤の床には数本の長い杭が打たれ、その先端は土壤上端よりも若干突き出るぐらいうさまで伸びている。2枚の板は、その側面が2本の杭に接して置かれているので、ちょうど横方向のずれが防がれた形になる。杭の位置からみて、2枚の板はそれぞれがずれないように、平行して置かれていたと考えられる。これを復元すると、図15に示したような形態になり、藤原京で検出された便所遺構と同様のものであることが理解できる。すなわちこの土壤は便槽であり、2枚の板は踏み板であると考えられよう。板はおそらく、もう2枚の板と井桁状に組まれて使われていた可能性がある。

出土遺物はT種の土師器や常滑、同安窯系の青磁などで、12世紀後半～13世紀初頭に比定される。

### 井戸1

西壁近くに、土壤9を切って存在する方形井戸。先述のように、上に土壤2が載る。掘方は2m前後あり、やや北に偏った位置に水を溜める深掘り部分がある。

検出面から約1.1m（海拔3.68m前後）に岩盤の波触台があるが、掘方はここまで止まり、以下は1辺約90cmの溜部となる。井戸枠は波触台上に直接立てるが、木質が遺存しており、溜部よりも若干広く1.18mほどある。

溜部の上部には、廃絶の際に入れられたとみられる竹が遺存する。また、土師器がいくつか投げ込まれた状況も認められた。

なお波触台の上面には二枚目の生息穴がいくつもあけられている。

出土遺物には土師器R種・常滑甕・同山茶碗窯系こね鉢・束口系甕・青磁・板草履芯・人形などがあり、このうち、常滑こね鉢は大体13世紀第3四半期に位置づけられる。またここからはそのほか、繩文・縄羽口・大型の擦石など、職能民に関わるかと思われるような遺物が出ていることも注目される。人形の出土は井戸廃絶儀礼と関係するのだろうか。

### 据置造構

土壇10上面で検出された常滑の据えられた造構。土壇10よりはむろん新しいが、土壇1には西半分を壊されている。

胴下部の脇にシルト岩が当てられて固定されている。常滑の年代は、口縁部を欠くために詳しく述べられないが、層序からいって13世紀中ごろとみるのが妥当である。近辺の、便所とみられる土壇に關係する、水溜めのような施設であろう。

### 礫敷造構

土壇や井戸などの検出されないところでは、一部に円碟を敷いた痕跡が確認された。まとまりとして明確に認識できたのは、図6に示した2ヶ所だけだったが、一体にこの段状部には面上や包含層中に円碟が多く含まれていた。おそらく、便所や井戸、水溜めといった施設の集まった場所であること、また北半部地業層の南辺で、軒端の出る位置に相当することなどがその理由であろう。

### 溝3（破碎岩充填造構）

土壇群と南側低位面との境目付近に、東西の溝がある。この溝は浅いV字形の断面で、幅1~1.4mほどあり、東側は調査区外に伸びるが、西側は井戸1の西辺と端を接するように完結する。

これもまた土壇群や井戸など、水と関連する施設に付随すると思われる。

中には灰色の粘土が堆積していたが、のちに大量の半人頭大破碎シルト岩が投げ込まれて、埋められている。これはおそらく、溝を埋めると同時に、道として使うことを企図したものと推定できるが、上部を削平されているために、明確な証拠は把握できなかった。なおこの投げ込みの時期は、15世紀代と推定できる。

出土遺物には、土師器R種・常滑こね鉢・罰付土鍋などがあるが、13世紀代から15世紀代まで含まれており、溝の存続年代が示されている。

### 建物2

冒頭に述べたとおり、南半部の低位面にある礎石列がここまで伸びている。しかし、あるいはこれは前記溝3を境に別々の建物として認識したほうがよいかもしれない。いちおうここでも採り上げておく。

位置的には土壇の一部(5・6・9)を覆うことになるが、このうちどれに付随したものかは不明である。また北半部地業面上の建物のどの柱列とも、直線上に並ばない。

もし低位面の礎石列と繋がったものならば、地業面上の居住区と南側を結ぶ、繋ぎ廊下状の建物である可能性がある。

## 3. 南半部低位面の造構

掘立柱建物1棟・礎石建物1棟・土壇2基・集石造構1などがある。

### 建物1

柱穴の間隔が不統一で若干の違和感を残すが、南壁寄りに同規模の柱穴の列が2列あり、いちおう建物として抽出しておく。

南側は調査区外に伸び、現況で東西3間×南北1間以上の規模がある。北側列の東から2本目が土壇8・溝2によって消滅している。

柱穴からの出土遺物には竜泉窯画花文青磁碗・土師器(R種・T種)・常滑甕・不明土製品などがある。おおむね13世紀前半までのものとみてよいが、前出中野晴久氏の編年では、常滑甕は口縁形態から

13世紀第2四半期に比定されよう。土壙8・溝1・2などと重なるが、本址が古い。建物2・土壙3とは、いずれとも切りあっておらず、新旧は不明。

#### 建物2

中央部やや西寄りに、2m間隔で二つの礎石を検出した。これを北に延長すると、先述した土壙群にかかる礎石列に行き当たる。溝3をはさんで別の列とも考えられるが、一直線なのでひとまずつながったものとして扱う。また北から二つ目の礎石から1間分東に礎石が1個あり、これらを含めると、東西1間×南北3間の規模になる。

南側の2個の礎石は、後述する土壙3東辺に平行して置かれているように見える。あるいは何らかの関連があるのかも知れない。

出土遺物はないが、他造構との関連から、大体13世紀中葉～後半にかけてのものとみてよかろう。

#### 土壙3

調査区西寄りにある長梢円形、もしくは隅丸長方形の土壙。2.7m×1mの大きさで、深さ25cmほどある。

出土遺物がなく、年代は決めつけがたいが、これも前記建物2などと同様と考えられる。この土壙付近から鉱滓が何点か出土していることは特筆される。

#### 土壙8

溝2に東半分を削られているが、現況で長さ1.7mほどの梢円形土壙。深さ10cmと浅い。性格不明。

出土遺物の年代は、他造構と同じく、13世紀中葉前後であろう。

#### 集石造構

調査区西南角に、シルト岩による弱い版築面があり、その北側に凝灰岩切石やシルト岩、安山岩などの集石がある。石はどれもかなり焼けている。

一見無秩序な散在状況にみえるが、東側に3つの凝灰岩切石が並んでおり、この部分では意図的な配置が認められる。性格・年代とも不明ながら、これも鉱滓の出土と関係する可能性もある。

### 4. 南北溝その他

調査区東側に2本の平行した溝が、検出された。両方とも何度も改修されているが、片一方が断続的ながらも中世期を通じて存続していたのに対し、もう片一方は途中で、北半分が地業によって埋められている。

また大体この溝に沿った位置に、土師器を埋納した穴が3穴発見されている。

#### 溝1

東壁寄りを北から南に流れる。北端は、東西溝かともみえる木組みと直交する。南端はいずれ逆川に流れ込むのだろう。断面はおおむねU字形で、下層では部分的に箱型をしている。北壁近くに木の側壁が残っているが、南に行くにつれ木質遺存状況は悪くなる。

幅は、2度の掘り返しがあるので掘みにくいか、北域の側壁が遺存しているところでは約30cmほど、南壁際ではおよそ60～70cmほどの掘方をもつ。北から約1.6m下ったところに浅い段状部があるが、性格はよく分からぬ。また、C軸の辺りでやや西に軸線がずれる。

先に書いたように、土壙7は層位的にはこの溝の上層と下層の間にあるが、それが溝の一時的な移動によるものかどうかは、判断がつきかねる。土壙10とも切り合うが、本址が新しい。

出土遺物は、上層については13世紀前半から15世紀代のものを含むが、下層は13世紀前半を中心とす

る。上層は混入を免れていないようだが、主体は13世紀第3四半期にあり、他の遺構との年代的な不一致は認められない。

#### 溝2

溝1の約70cmほど西へ、平行して走る溝である。断面形状もU字形で、溝1とよく似ているが、この溝の北半分は、中世のある時点に、シルト岩地棄層によって潰されている。北半分は、深度規制のために全掘していないが、深い擾乱層や北壁際の深掘り部の土層断面から類推した。

幅は南壁際で約1.2m、土壤1に切られる段状部付近で約80cm、北壁際で約1.2mある。

先に溝1はC軸付近でやや西に軸線がずれると書いたが、本址もそれと呼応するように、西にずれている。おそらく、2本がこの時期同時に存在していたと考えられ、してみるとその間に畝状に掘り残された部分があることになる。このような2本の溝のあり方は、例えば、今小路西遺跡扇谷一丁目131番1地点(『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5』鎌倉市教育委員会 1989)にも例がある。

出土遺物には土師器・常滑窯・青磁画花文碗・瀬戸平碗などがあり、年代的には13世紀前半から15世紀代まで含まれている。

#### 土師器埋納穴

溝1にかかって、土師器を底面に埋置した穴が3穴検出された。いずれも年代的には13世紀前半までに属する土師器で、2を除き、溝1よりも新しい。このような儀礼は、筆者の調査した杉本寺周辺遺跡群の鎌倉時代初期の層からも検出されているが(目下資料整理中)、詳しい性格などについては、今後の検討課題である。

### 5. 包含層などからの出土遺物

包含層や、以上で採り上げなかった柱穴などからも遺物が出土している。詳細は図と表を参照してほしいが、大体13世紀前半から15世紀ごろまでのものがみられる。主体は13世紀中～後半にあり、鎌倉のもっとも繁栄していた時代に、この遺跡もまた盛行期にあったことが分かる。

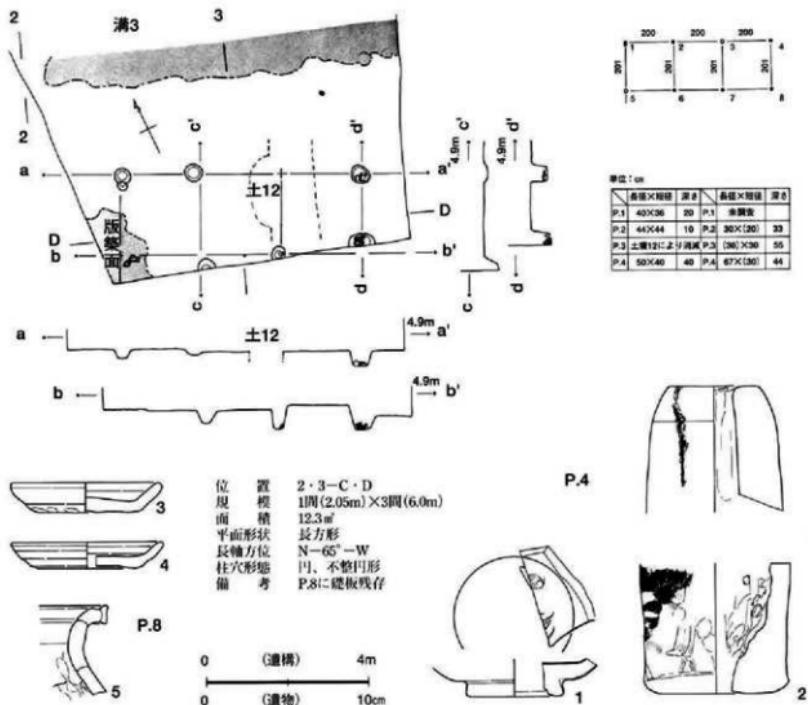


図7 建物1 同出土遺物

1	青磁 龍泉窯 碗	法量 底径6.0cm 器高(2.3cm) 素地 灰色 きめ細かい 激氣孔有り 胎土 粘土褐色半透明 高台内漏筋	成形 ロクロ 高台削り出し 釉薬 灰褐色 文様 内底面花文 焼成 良好
2	不明土製品 (2破片)	法量 長さ(8.0cm 7.7cm) 最大径9.0cm 内径(3.0cm) 胎土 砂粒、シルト岩粒、雲母含む きめ細かい	成形 棒に粘土を巻いて成形 指頭ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
3	土師器	法量 口径9.3cm 底径6.0cm 器高1.8cm 胎土 鈎状物質、雲母含む ややきめ細かい	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
4	土師器	法量 口径9.4cm 底径6.0cm 器高1.85cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 灰褐色 焼成 良好
5	常滑 壺	法量 器高(5.5cm) 色調 雪茶色	成形 線積後ナデ 内面指面麻有り 胎土 灰黒色 砂粒、小石、長石含む 焼成 普通

表1 建物1 出土遺物観察表

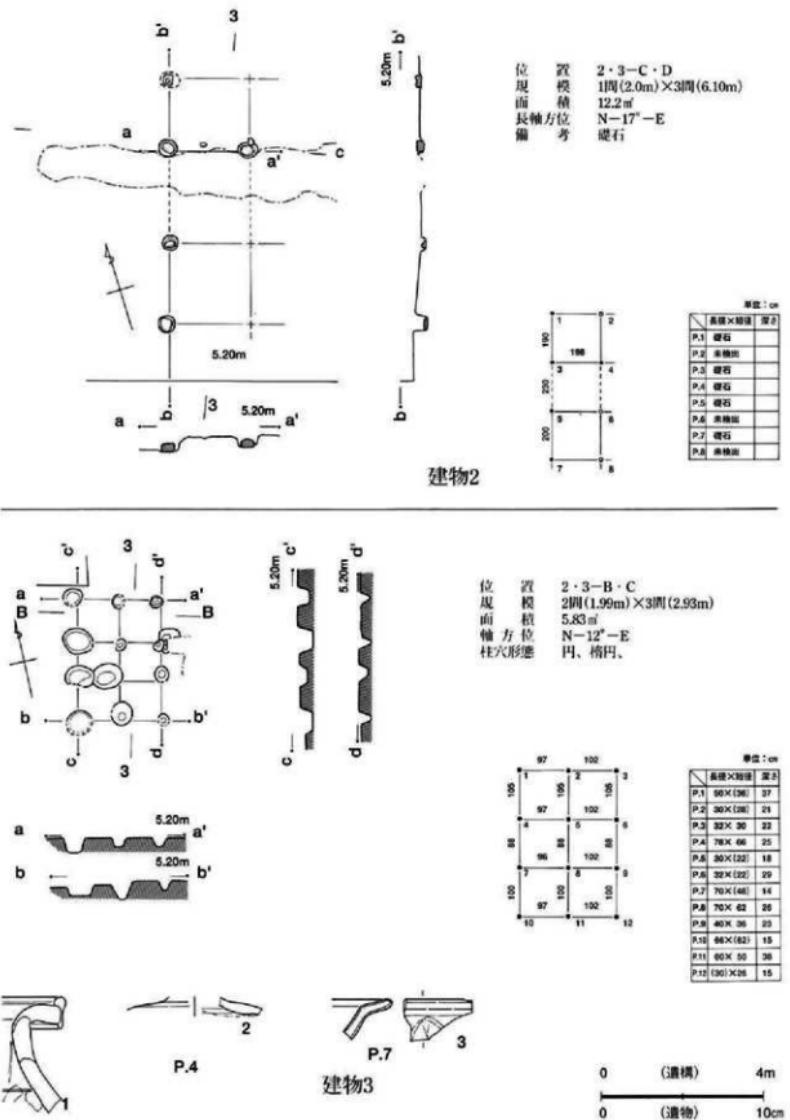


図8 建物2・3 同出土遺物

1	常滑壺	法量 器高(7.2cm) 色調 暗灰褐色 口縁と肩部に少量の落灰	成形 轉模後ナデ 焼成 普通	内面指痕有り 焼成 普通	胎土 灰色 砂粒含む	小石、長石含む
2	青白磁壺	法量 器高(1.3cm) 焼成 良好 二次焼成を受ける	成形 ロクロ 焼成 普通	素地 灰白色 砂粒含む	釉薬 淡水青色半透明	
3	青磁 龍泉窯折筋体	法量 器高(2.5cm) 釉薬 青灰色不透明 貫入有り	成形 ロクロ 焼成 良好	文様 外面単蓮弁 焼成 良好	素地 灰白色 砂粒含む	気孔有り

表2 建物3 出土物観察表

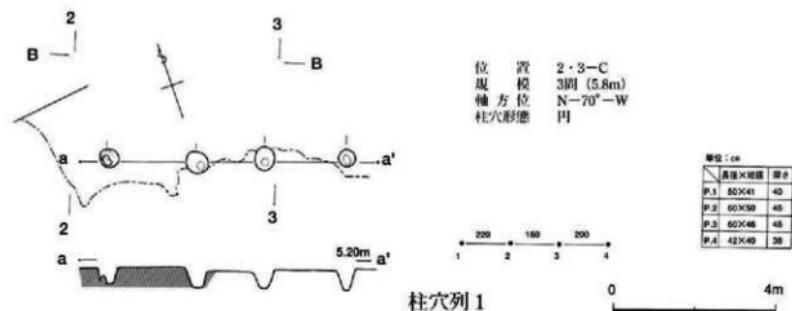
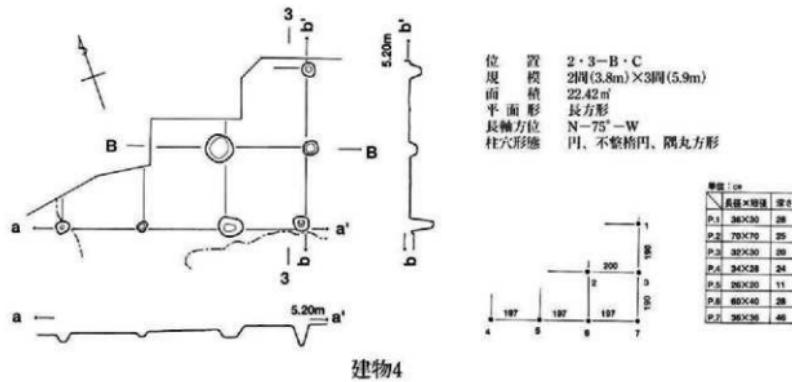


図9 建物4・柱穴列1

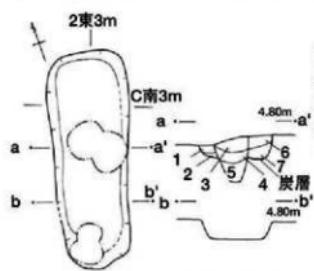
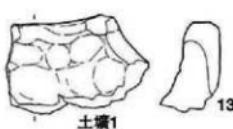
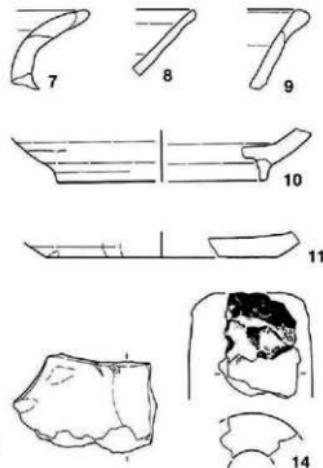
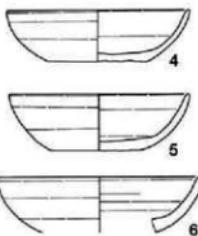
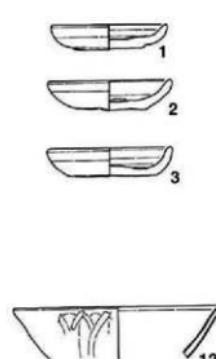


位 置 3-B  
平面形状 椭円  
断面形状 椭形  
長 短 径 144cm  
深 底 径 134cm  
主軸方位 44cm  
N-41°-E

- 1 暗赤褐色粘質土、炭化物、灰色シート岩片を含む。
- 2 暗赤褐色粘質土、多量の褐色シート岩片を含む。
- 3 黑褐色粘質土、多量の炭化物を含む。



常滑窯口臺

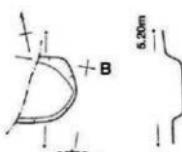


位 置 2-C  
平面形状 隅丸及方形  
断面形状 逆台形  
長 短 径 270cm  
深 底 径 100cm  
主軸方位 25cm  
N-15°-E

- 1 暗褐色粘質土、炭化物、灰白色シート岩片を含む。
- 2 黒褐色粘質土、小量の炭化物、灰色シート岩片を含む。
- 3 暗褐色粘質土、多量の炭化物、灰色シート岩片を含む。
- 4 黑褐色粘質土、多量の炭化物、灰色シート岩片を含む。
- 5 暗褐色粘質土、多量の褐色シート岩片を含む。
- 6 黑褐色粘質土、多量の褐色シート岩片、同小粒、炭化物と土師片を含む。
- 7 暗褐色粘質土、多量の炭化物、灰色シート岩片を含む。

土壌3

位 置 2-A・B  
平面形状 不規円形  
断面形状 椭形  
長 短 径 80cm以上  
深 底 径 80cm  
主軸方位 20cm



土壌4



図10 土壌1・3 同出土遺物

1	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母、赤色小粒含む	口径7.2cm 底径4.3cm 器高1.55cm 口径7.7cm 底径4.4cm 器高1.87cm 口径7.7cm 底径5.4cm 器高1.8cm 口径15.3cm 底径6.0cm 器高3.2cm 口径11.1cm 底径5.75cm 器高3.5cm 口径2.7cm 器高(3.4cm) 器高(4.1cm)	成形 ロクロ 外底面削除糸切り 板状圧痕有り 色調 淡褐色 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好	ロクロ 外底面削除糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好	外底面削除糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 淡褐色 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好	板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 淡褐色 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好 焼成 良好
2	土師器						
3	土師器						
4	土師器						
5	土師器						
6	土師器						
7	埋 美 燒	法量 胎土 砂粒、雲母、赤色小粒含む	器高(4.7cm) 黒色不透明 口縁部、肩部にハケ塗り	成形 輪縫後ナデ 焼成 普通	胎土 砂粒、雲母、針状物質含む	小石含む やや粗い	色調 灰褐色
8	山茶碗	法量 胎土 砂粒	成形 焼成 良好	胎土 砂粒、針状物質含む	粗い	色調 灰褐色	

表3 土壤1 出土遺物観察表(1)

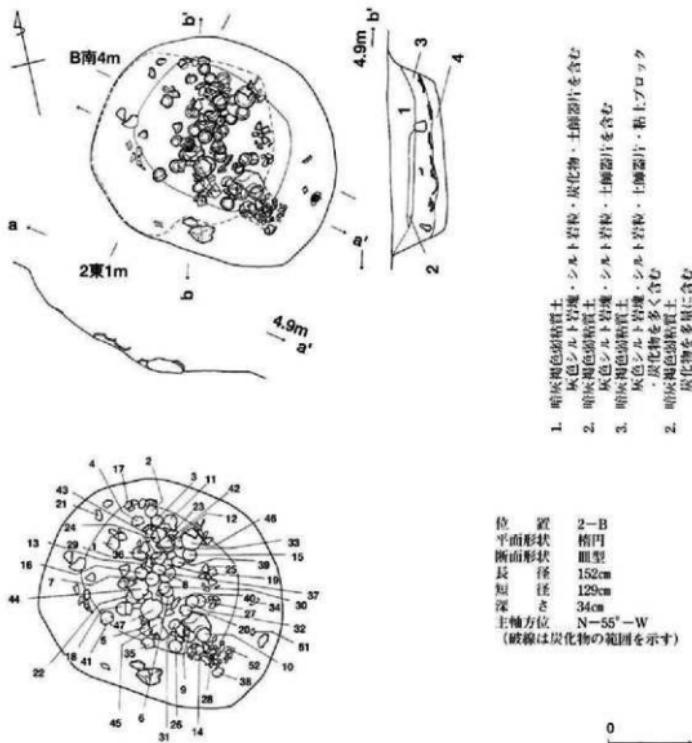


図11 土壤2

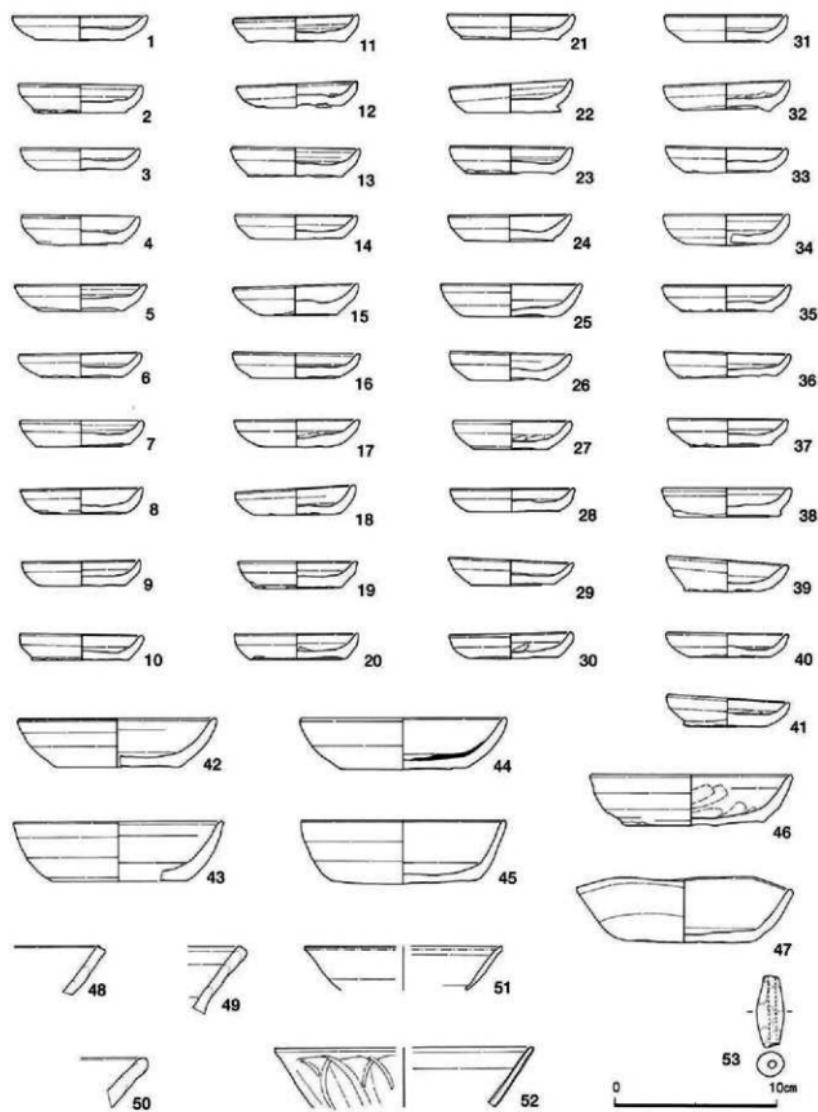


図12 土壇2 出土遺物

9	山茶碗窓系 こね跡	法量 器高(4.9cm) 焼成 良好	成形 輪轂後ロクロ	胎土 小石含む	微気孔有り	やや粗い	色調 灰色
10	山茶碗	法量 底径(13.0cm) 器高(3.2cm) 胎土 小石、長石含む	成形 ロクロ 高台貼り付け	胎土 小石含む	微気孔有り	やや粗い	色調 灰色
11	瀬戸 鉢	法量 底径(14.2cm) 器高(1.7cm) 素地 灰褐色 小石、長石含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 内面に灰緑色半透明	内面に灰緑色半透明	一部貫入有り	外側下位に飛沫 焼成 良好 二次焼成を受ける
12	青磁 龍泉窓 筒	法量 口径13.0cm 器高(3.2cm) 胎土 灰色半透明	成形 ロクロ	文様 外面板選択	胎土 小石、赤色小粒	黒色小粒含む	色調 灰白色
13	土製品	法量 器高(5.7cm) 色調 灰褐色 外面灰黑色	成形 輪轂	外面ナデ	内面指痕有り	胎土 小石、赤色小粒	黒色小粒含む
14	輪羽口	法量 最大径(7.6cm) 内径(3.0cm) 器高(5.3cm) 胎土 小石、砂粒、赤色小粒含む	成形 ロクロ	胎土 粘土を巻いて成形	胎土 粘土を巻いて成形	胎土 粘土を巻いて成形	外側ナデ 焼成 良好

表4 土壌1 出土遺物観察表(2)

1	土師器	法量 口径8.4cm 底径5.4cm 器高1.6cm 胎土 小石、砂粒、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
2	土師器	法量 口径7.8cm 底径5.7cm 器高1.8cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
3	土師器	法量 口径7.4cm 底径5.4cm 器高1.35cm 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
4	土師器	法量 口径7.4cm 底径5.25cm 器高1.85cm 胎土 小石、砂粒、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
5	土師器	法量 口径8.2cm 底径5.1cm 器高1.65cm 胎土 小石、針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
6	土師器	法量 口径7.7cm 底径5.0cm 器高1.5cm 胎土 小石、砂粒、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
7	土師器	法量 口径7.6cm 底径5.7cm 器高1.6cm 胎土 小石、砂粒、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
8	土師器	法量 口径7.5cm 底径5.5cm 器高1.5cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
9	土師器	法量 口径7.4cm 底径5.3cm 器高1.5cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
10	土師器	法量 口径7.7cm 底径5.0cm 器高1.6cm 胎土 砂粒、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
11	土師器	法量 口径7.8cm 底径6.15cm 器高1.5cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
12	土師器	法量 口径7.5cm 底径5.4cm 器高1.5cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
13	土師器	法量 口径8.0cm 底径5.9cm 器高1.8cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
14	土師器	法量 口径7.6cm 底径5.6cm 器高1.5cm 胎土 砂粒、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ
15	土師器	法量 口径7.8cm 底径5.0cm 器高1.8cm 胎土 砂粒、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部削除糸切り	胎土 灰褐色	板状圧痕有り	内底部ナデ

表5 土壌2 出土遺物観察表(1)

16	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径7.9cm 底径5.6cm 高さ1.55cm	成形 色調	ロクロ 淡灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける
17	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	口径7.8cm 底径5.0cm 高さ1.7cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	内底部ナデ 良好	二次焼成を受ける
18	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	口径7.5cm 底径5.3cm 高さ1.6cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける 備考 完形
19	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	口径7.4cm 底径5.5cm 高さ1.7cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける
20	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径7.7cm 底径6.0cm 高さ1.6cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける
21	土師器	法量 胎土 小石、砂粒、針状物質含む	口径7.9cm 底径6.1cm 高さ1.55cm	成形 色調	ロクロ 淡灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける
22	土師器	法量 胎土 小石、砂粒、針状物質含む	口径7.6cm 底径5.9cm 高さ1.85cm	成形 色調	ロクロ 淡灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける
23	土師器	法量 胎土 小石、砂粒、針状物質含む	口径7.6cm 底径5.6cm 高さ1.7cm	成形 色調	ロクロ 淡灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける
24	土師器	法量 胎土 小石、砂粒、針状物質含む	口径7.6cm 底径5.5cm 高さ1.7cm	成形 色調	ロクロ 淡灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける
25	土師器	法量 胎土 小石、砂粒、針状物質含む	口径7.8cm 底径6.0cm 高さ2.0cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける
26	土師器	法量 胎土 小石、砂粒、針状物質含む	口径7.6cm 底径4.8cm 高さ1.7cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける 備考 完形
27	土師器	法量 胎土 小石、砂粒、針状物質、雲母含む	口径7.4cm 底径4.5cm 高さ1.8cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける
28	土師器	法量 胎土 小石、砂粒、針状物質、雲母含む	口径7.8cm 底径5.5cm 高さ1.4cm	成形 色調	ロクロ 淡灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	内底部ナデ 良好	二次焼成を受ける
29	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	口径7.7cm 底径5.3cm 高さ1.6cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	内底部ナデ 良好	二次焼成を受ける
30	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径7.7cm 底径5.7cm 高さ1.6cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける
31	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径7.6cm 底径5.2cm 高さ1.7cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部軽いナデ 二次焼成を受ける
32	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径7.8cm 底径5.7cm 高さ1.7cm	成形 色調	ロクロ 淡灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける 備考 完形
33	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径7.6cm 底径5.0cm 高さ1.6cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	内底部ナデ 良好	二次焼成を受ける
34	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	口径7.8cm 底径4.9cm 高さ1.9cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける
35	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径8.0cm 底径5.6cm 高さ1.6cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける
36	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径7.9cm 底径6.0cm 高さ1.6cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	内底部ナデ 良好	二次焼成を受ける
37	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径7.4cm 底径5.1cm 高さ1.6cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	内底部ナデ 良好	二次焼成を受ける
38	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径8.0cm 底径6.6cm 高さ1.8cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部軽いナデ 二次焼成を受ける
39	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む	口径7.6cm 底径4.9cm 高さ1.9cm	成形 色調	ロクロ 灰褐色	外底部回転糸切り 燒成	板状圧痕有り 良好	内底部ナデ 二次焼成を受ける

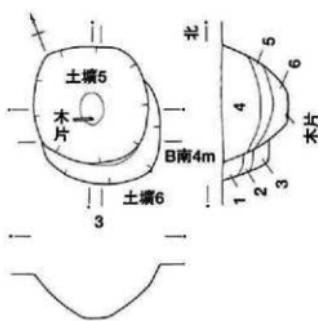
表 6 土蔵 2 出土遺物観察表 (2)

40	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径7.8cm 底径5.1cm 器高1.5cm	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色	焼成 良好 二次焼成を受ける	備考 完形
41	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	口径7.7cm 底径5.2cm 器高1.8cm	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 淡灰褐色	焼成 良好 二次焼成を受ける	
42	土師器	法量 胎土 小石、砂粒、針状物質含む	口径12.3cm 底径7.7cm 器高3.0cm	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 内底部ナデ 色調 淡褐色	焼成 良好	
43	土師器	法量 胎土 小石、砂粒、針状物質含む	口径13.1cm 底径8.3cm 器高3.7cm	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 内底部ナデ 色調 灰褐色	焼成 良好	
44	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径12.8cm 底径7.8cm 器高3.2cm	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 橙色	焼成 良好 二次焼成を受ける	
45	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む	口径12.7cm 底径9.0cm 器高4.9cm	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 橙色	焼成 良好	
46	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径12.5cm 底径8.8cm 器高3.1cm	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色	焼成 良好 二次焼成を受ける	
47	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	口径12.0～13.5cm 底径8.0cm 器高4.0cm	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ やや格円錐 色調 淡褐色	焼成 良好 二次焼成を受ける	
48	常滑 こね跡	法量 胎土 砂粒	器高(2.9cm) 内面に降灰	成形 輪積後ナデ 色調 茶褐色	胎土 灰色 小石 長石含む きめ細かい 焼成 普通	
49	常滑 こね跡	法量 胎土 砂粒	器高(4.2cm) 内面に降灰	成形 輪積後ナデ 色調 茶褐色	胎土 灰褐色 小石 長石含む やや粗い 焼成 普通	
50	山茶碗窓系 こね跡	法量 胎土 灰	器高(3.1cm) 焼成 良好	成形 輪積 胎土 砂粒、小石含む 気孔有り	色調 灰色 内面に数量に降	
51	白磁 口元皿	法量 胎土 灰白色半透明	口径(12.1cm) 器高(2.7cm) 貯入有り	成形 ロクロ 焼成 やや不良	素地 灰褐色 砂粒含む 二度焼成を受ける	
52	青磁 龍泉窓 碗	法量 胎土 灰褐色半透明	口径(16.0cm) 器高(3.7cm) 焼成 良好	成形 ロクロ 文様 外面複蓮弁	素地 灰白色 砂粒含む	
53	土蝶	法量 色調 砂粒	長さ4.4cm 最大径1.7cm 内径0.5cm 焼成 良好	成形 棒に粘土を巻いて成形 焼成 二次焼成を受ける	胎土 砂粒、針状物質含む	

表7 土壤2 出土遺物観察表(3)

1	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む	口径7.9cm 底径5.8cm 器高1.5cm	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 気孔有り やや粗い	色調 淡褐色	焼成 良好
2	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む	口径8.2cm 底径6.2cm 器高1.9cm	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 内底部ナデ 微気孔有り	色調 橙色	焼成 良好
3	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む	口径8.6cm 底径5.4cm 器高1.7cm	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 気孔有り	色調 淡褐色	焼成 良好
4	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む	口径8.6cm 底径7.0cm 器高1.5cm	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 橙色	焼成 良好	
5	土師器	法量 胎土 針状物質、小石含む	口径9.0cm 底径7.2cm 器高1.7cm	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色	焼成 良好	

表8 土壤5・6 出土遺物観察表(1)



1. 黄褐色土質  
2. 黄褐色土質  
3. 黄褐色土質  
4. 黄褐色土質  
5. 黄褐色土質  
6. 黄褐色土質

### 土壤5

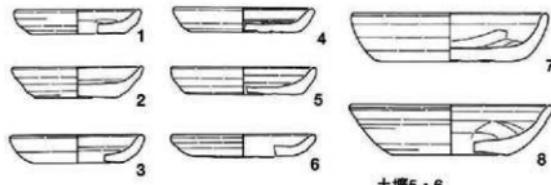
位 置	2・3-B
平面形状	卵丸方形
断面形状	すり鉢型
長	145cm
短	142cm
深	82cm
主軸方位	N-20°-E

### 土壤6

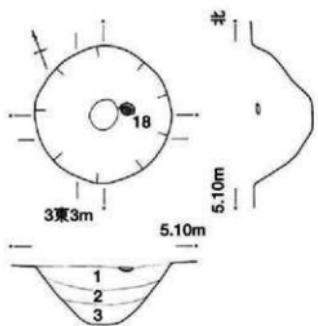
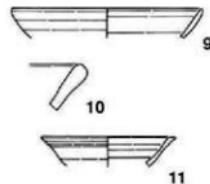
位 置	2・3-B
平面形状	卵丸方形
断面形状	逆台形
長	146cm
短	140cm
深	56cm
主軸方位	N-22°-E



12



土壤5・6



位 置  
平面形状  
断面形状  
径  
深さ

3-B

円形

すり鉢型

170cm

74cm

土壤7

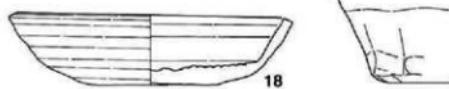
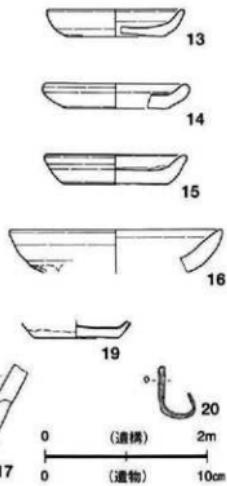


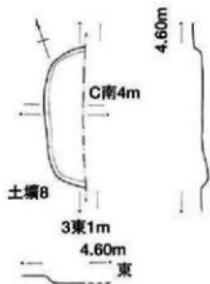
図13 土壌5・6・7 同出土遺物

6	土師器	法量 口径9.0cm 底径6.0cm 器高1.4cm 胎土 針状物質含む きめ細かい	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 橙色 焼成 良好
7	土師器	法量 口径12.2cm 底径9.4cm 器高3.0cm 胎土 砂粒、小石、 針状物質含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰橙色 焼成 良好
8	土師器	法量 口径12.3cm 底径7.8cm 器高3.5cm 胎土 砂粒、小石、 針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 淡橙色 焼成 良好 二次焼成を受ける
9	土師器 白色系	法量 口径11.8cm 器高(1.8cm) 焼成 良好	成形 ロクロ 胎土 砂粒含む きめ細かい 色調 白褐色
10	山茶碗窓系 こね跡	法量 器高(2.8cm)	成形 輪積後ナデ 胎土 砂粒、小石含む 色調 灰色 焼成 良好
11	青白磁	法量 口径8.4cm 器高(1.9cm) 素地 白色 きめ細かい	成形 ロクロ 口縁部外反 内面下位に沈線 釉薬 青白色不透明 焼成 良好
12	木製品 柄子	法量 長さ(14.5cm)	幅6.3cm 厚さ0.55cm 成形 板目取り

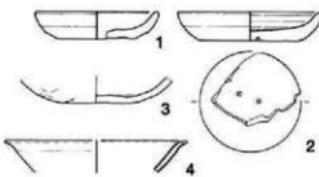
表9 土壌5・6 出土遺物観察表(2)

13	土師器	法量 口径8.5cm 底径6.0cm 器高1.7cm 胎土 砂粒、小石、 針状物質含む 粗い	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 橙色 焼成 良好
14	土師器	法量 口径8.1cm 底径6.7cm 器高1.55cm 胎土 砂粒、 針状物質含む やや粗い	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 灰橙色 焼成 良好
15	土師器	法量 口径8.8cm 底径6.9cm 器高1.8cm 胎土 砂粒、小石、 針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 淡橙色 焼成 良好
16	土師器	法量 口径13.2cm 器高(2.6cm) 色調 灰橙色 焼成 良好	成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 砂粒、小石、 針状物質含む
17	常滑壺	法量 底径(10.8cm) 器高(5.6cm) 胎土 小石、砂粒、長石含む	成形 輪積 外面下位竜方向へナデ 内面指頭痕有り 色調 茶褐色 内底面降灰 焼成 普通
18	瀬戸おろし皿	法量 口径16.6cm 底径8.3cm 器高4.8cm 胎土 黄白色 小石含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り後一部ナデ 釉薬 底面半透明 口縁部、内面にうすくハケ塗り 焼成 良好
19	白磁口元皿	法量 底径5.2cm 器高(1.1cm) 胎土 白灰色不透明 内面と外面中位まで施釉	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 素地 灰白色 砂粒含む 気孔有り 内面と外面中位まで施釉 外面下位と外底部に液化現象 焼成 良好
20	鉄製品 刃	法量 長さ(3.2cm)	最大幅0.35cm

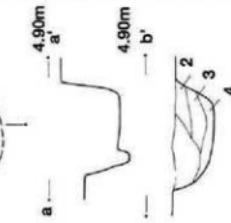
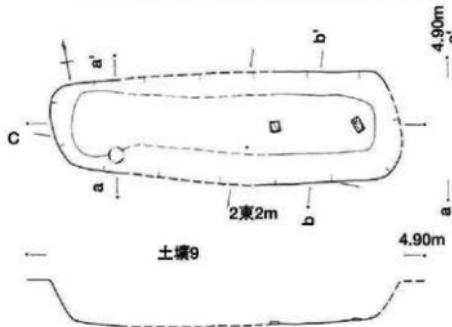
表10 土壌7 出土遺物観察表



位 置 3-CD  
平面形状 梶川  
断面形状 亂形  
長 度 174cm  
短 広 告 47cm以上  
深 底 さ 10cm  
主軸方位 N-20°-E



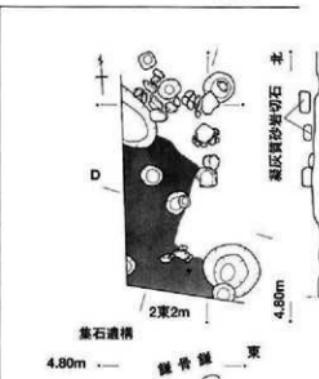
土壤8



土壤9

位 置 12-B・C  
平面形状 圓丸長方形  
断面形状 逆台形  
長 底 430cm  
短 底 140cm  
深 底 さ 74cm  
主軸方位 N-78°-W

1. 頂部斜面: 幅広いU字型の断面で、傾斜が緩やか。  
2. 斜面: 斜面の傾斜が急で、底面がV字型。  
3. 斜面: 斜面の傾斜が急で、底面がV字型。  
4. 斜面: 斜面の傾斜が急で、底面がV字型。



土壤9

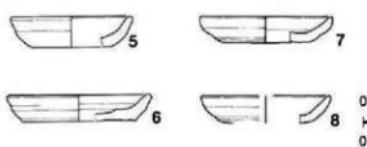


図14 土壤8・9 同出土遺物

1	土師器	法量 口径7.6cm 底径4.9cm 器高1.7cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
2	土師器	法量 口径9.0cm 底径6.2cm 器高1.8cm 所穿孔を試みた痕有り 胎土、砂粒、雲母、針状物質含む	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 内底部ナデ 外底部より2ヶ 焼成 良好 二次焼成を受ける 色調 灰褐色
3	吉備系土器	法量 底径4.6cm 器高(1.7cm) 胎土 砂粒、小石、雲母含む	成形 手づくね 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
4	白 感 口皿	法量 口径(10.8cm) 器高(2.0cm) 胎土 灰白色半透明 口縁部漏胎	成形 ロクロ 口縁部外反 素地 灰白色 きめ細かい 焼成 良好

表11 土境8 出土遺物観察表

5	土師器	法量 口径7.6cm 底径5.0cm 器高1.9cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
6	土師器	法量 口径9.0cm 底径7.0cm 器高1.85cm 胎土 砂粒、小石、針状物質含む やや粗い	成形 ロクロ 外底面回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 橙色 焼成 良好
7	土師器	法量 口径8.2cm 底径5.2cm 器高1.6cm 胎土 砂粒、雲母、針状物質含む	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
8	土師器	法量 口径(8.0cm) 底径(4.2cm) 器高(1.7cm) 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好

表12 土境9 出土遺物観察表

1	土師器	法量 口径12.8cm 底径5.6cm 器高3.15cm 胎土 砂粒、針状物質含む、ややきめ細かい	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 外底部板状圧痕有り 色調 橙色 焼成 良好
2	土師器	法量 口径(10.6cm) 底径(4.4cm) 器高2.2cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 暗灰褐色 焼成 良好
3	土師器	法量 口径(10.6cm) 器高(1.8cm) 色調 灰褐色 スス付着	成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 微量の砂粒含む きめ細かい 焼成 良好 二次焼成を受ける
4	土師器	法量 器高(3.2cm) 色調 灰褐色	成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 砂粒、針状物質含む きめ細かい 焼成 良好
5	常 盆 蓋	法量 底径17.0cm 器高(11.7cm) 胎土 小石、長石含む	成形 輪植 内面指頭痕とヘラの圧痕 外底部輪ヘラ押さえ 色調 茶褐色 焼成 普通
6	青 瓷 阿安窯 瓶	法量 器高(3.9cm) 素地 灰色 砂粒含む 激氣孔有り	成形 ロクロ 文様 内面上位沈線 中位櫛搔きとヘラ描き 輪裏 灰褐色透明 焼成 良好
7	踏板	法量 長さ(165.0cm) 幅(30.0cm) 厚さ2.5cm	備考 板目取り 焼けている

表13 土境10 出土遺物観察表

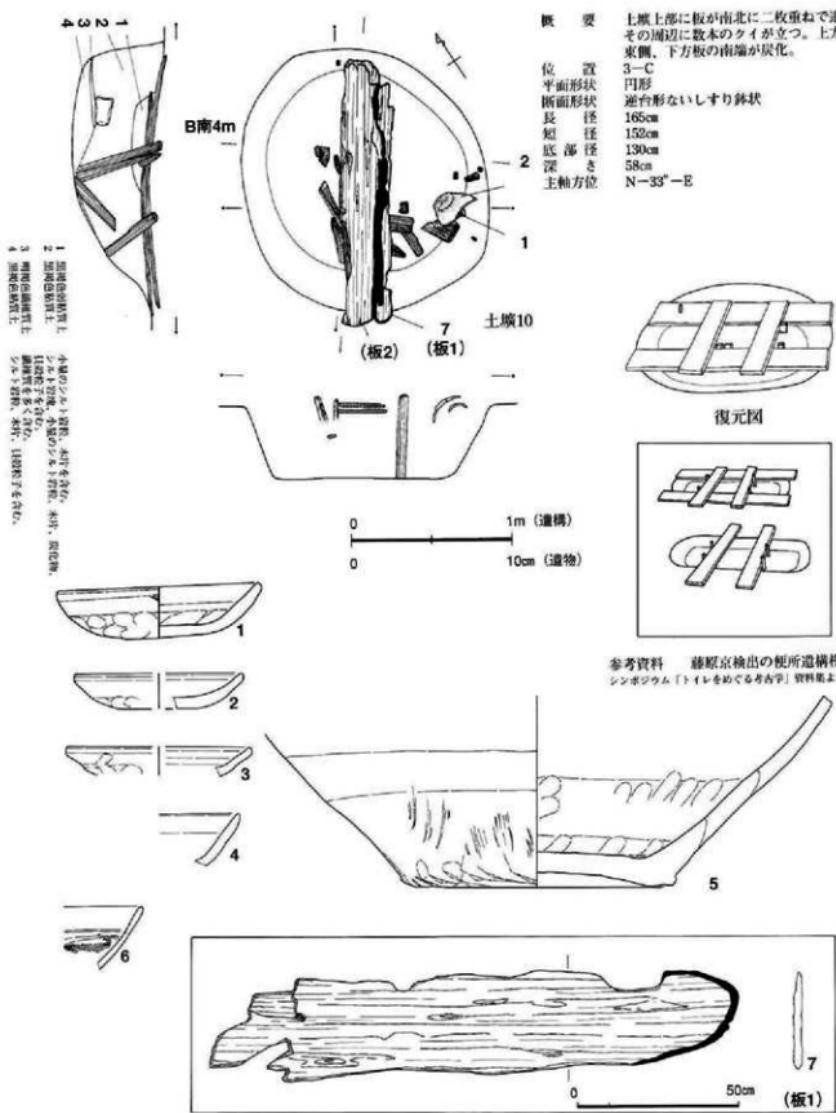
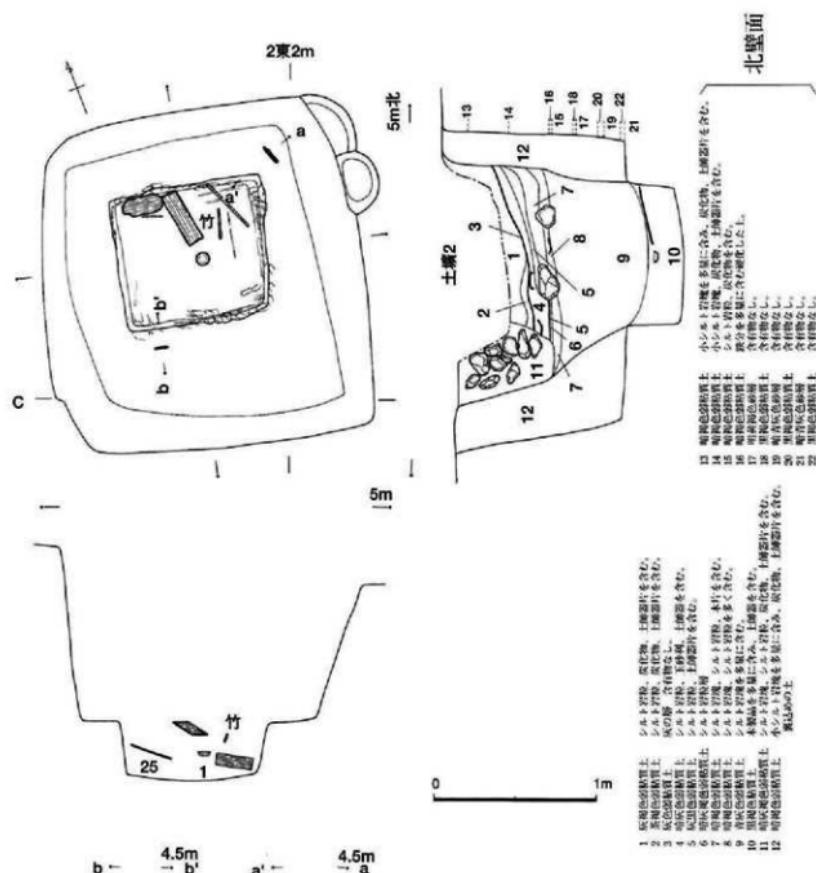


图15 土坡10 同出土遗物



**概要**

二段の堤方を持つ。上段下段とも方形。中位に段状部を持つ。上段堤方は、岩盤波撃台まで、下段は、波撃台を蘊める。波撃台上に井戸枠と思われる木質遺存。下部に息抜きの竹と、土器器が置かれている。

位置	堤方辺長	堤方底長	底深さ	主軸方位
南北	210cm	東西	198cm	
南北	174cm	東西	153cm	
南北	85cm	東西	92cm	
南北	80cm	東西	86cm	
	148cm			N-10°-E

図16 井戸 1

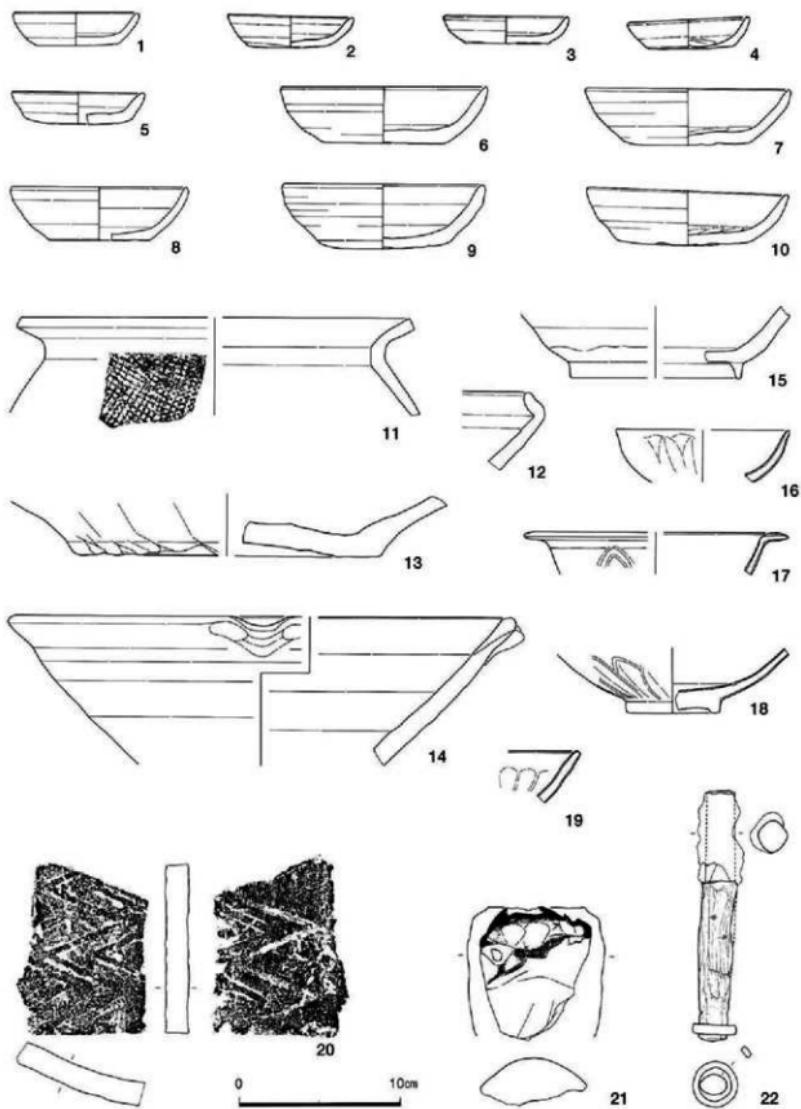


図17 井戸1 出土遺物(1)

1	土師器	法量 口径7.8cm 底径6.0cm 器高2.1cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 漆黒色 焼成 良好 備考 完形
2	土師器	法量 口径7.8cm 底径4.8cm 器高2.0cm 胎土 砂粒、小石、針状物質含む ややきめ細かい	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 暗灰褐色 焼成 良好
3	土師器	法量 口径7.8cm 底径5.2cm 器高1.7cm 胎土 砂粒、針状物質含む ややきめ細かい	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
4	土師器	法量 口径7.6cm 底径5.4cm 器高1.8cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
5	土師器	法量 口径8.2cm 底径5.5cm 器高2.0cm 胎土 砂粒、針状物質含む 色調	成形 手づくね 口縁部、内底部分 色調 漆黒色 焼成 良好
6	土師器	法量 口径12.8cm 径深8.0cm 器高3.5cm 胎土 砂粒、針状物質含む 色調	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 反褐色 焼成 良好 備考 完形
7	土師器	法量 口径12.7cm 径深7.3cm 器高3.5cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む 色調	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 完形
8	土師器	法量 口径11.0cm 底径6.2cm 器高3.3cm 胎土 砂粒、砂粒含む やきめ細かい	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
9	土師器	法量 口径12.6cm 径深7.4cm 器高4.0cm 胎土 小石、針状物質、赤色小粒含む ややきめ細かい	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
10	土師器	法量 口径12.4cm 底径8.2cm 器高3.4cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む 色調	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
11	龟山型	法量 口径(24.0cm) 器高(5.0cm) 胎土 瓦質 小石含む 色調	成形 輪積 口縁部、肩部構ナデ 外面格子の叩き目 輪積 焼成 良好
12	常滑鉢	法量 器高(4.8cm)	成形 輪積後ナデ 胎土 小石、長石含む 色調 黒灰色 焼成 普通
13	常滑鉢	法量 底径(19.0cm) 器高(3.7cm) 色調 茶褐色 内面に降灰 焼成 普通	成形 輪積 外面下位ヘラ削り 胎土 小石、長石含む
14	常滑鉢 こね鉢	法量 口径(31.4cm) 器高(9.1cm) 色調 灰系褐色 内面に少量の降灰 焼成 普通	成形 輪積後ナデ 口縁部指頭痕 胎土 小石、長石、砂粒含む
15	山茶碗窓 こね鉢	法量 底径(10.6cm) 器高(3.9cm) 胎土 小石、砂粒、長石含む 色調	成形 輪積 外面下位ヘラ削り 高台貼り付け 焼成 良好
16	青磁 龍泉窓 磁	法量 口径(10.8cm) 器高(3.2cm) 輪葉 漆青色半透明 気泡有り 焼成 良好	成形 ロクロ 文様 外面單蓮弁 素地 灰白色 微気孔有り
17	青磁 龍泉窓 鉢	法量 口径(15.0cm) 器高(2.6cm) 素地 灰白色 輪葉 漆青色半透明 気泡有り 焼成 良好	成形 ロクロ 口縁部外反 文様 外面二重の單蓮弁
18	青磁 龍泉窓 磁	法量 底径5.8cm 器高(4.0cm) 素地 灰色 やきめ細かい 気泡有り 輪葉 灰綠色透明 気泡有り 高台内側貼 焼成 良好	成形 ロクロ 高台削り出し 文様 外面複蓮弁 内面下位に沈線
19	青磁 龍泉窓 磁	法量 器高(3.1cm) 輪葉 暗緑色半透明 賞入有り 焼成 良好	成形 ロクロ 文様 内面陰刻の蓮弁 素地 灰褐色 微気孔有り
20	平瓦	法量 長さ(10.4cm) 幅(8.0cm) 厚さ1.4cm 胎土 瓦質 砂粒、小石含む 色調	成形 春日面二重の櫛文の叩き目 焼成 良好
21	繩羽口	法量 長さ(8.0cm) 成形 植木に粘土を巻いて成形 色調 漆黒色 外面灰黑色 焼成 良好	胎土 小石、砂粒、針状物質、赤色小粒含む
22	ノミの柄	法量 長さ15.4cm	成形 刃の部分は欠失 木質の柄が遺存
23	転用砥石	法量 長さ11.0cm 幅11.8cm 厚さ4.6~11.0cm	石材 玄武岩 色調 灰黒色 備考 2面が磁面
24	砥石	法量 長さ(4.2cm) 幅(3.7cm) 厚さ(1.1cm)	産地 天草 備考 中砥 2面と割口の一部が砥面
25	板卓麗	法量 長さ(19.0cm) 幅10.0cm 厚さ0.3cm	備考 板目取り
26	人形	法量 長さ18.5cm 幅0.95cm 厚さ1.05cm	備考 顔面が一部残る
27	人形	法量 長さ19.5cm 幅1.6cm 厚さ1.9cm	備考 顔面がはっきり残る

表14 井戸1 出土遺物観察表(1)

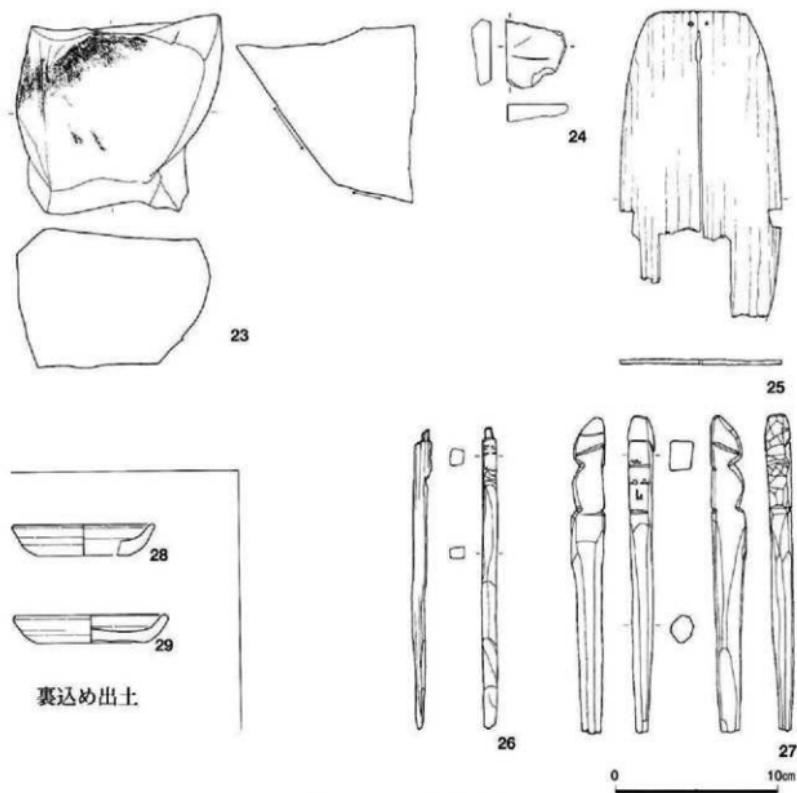


図18 井戸1 出土遺物(2)

28	土師器	法量 口径8.8cm 底径5.6cm 器高1.9cm 赤色小粒含む 色調 灰褐色 施成 良好	成形 ロクロ 外底部回転糸切り	胎土 砂粒、針状物質、雲母
29	土師器	法量 口径9.6cm 底径6.6cm 器高1.7cm 胎土 砂粒、雲母、針状物質含む やや粗い 色調 暗灰褐色 施成 良好	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り	内底部ナデ 胎土 砂粒、雲母、針状物質含む やや粗い 色調 暗灰褐色 施成 良好

表15 井戸1 出土遺物観察表(2)

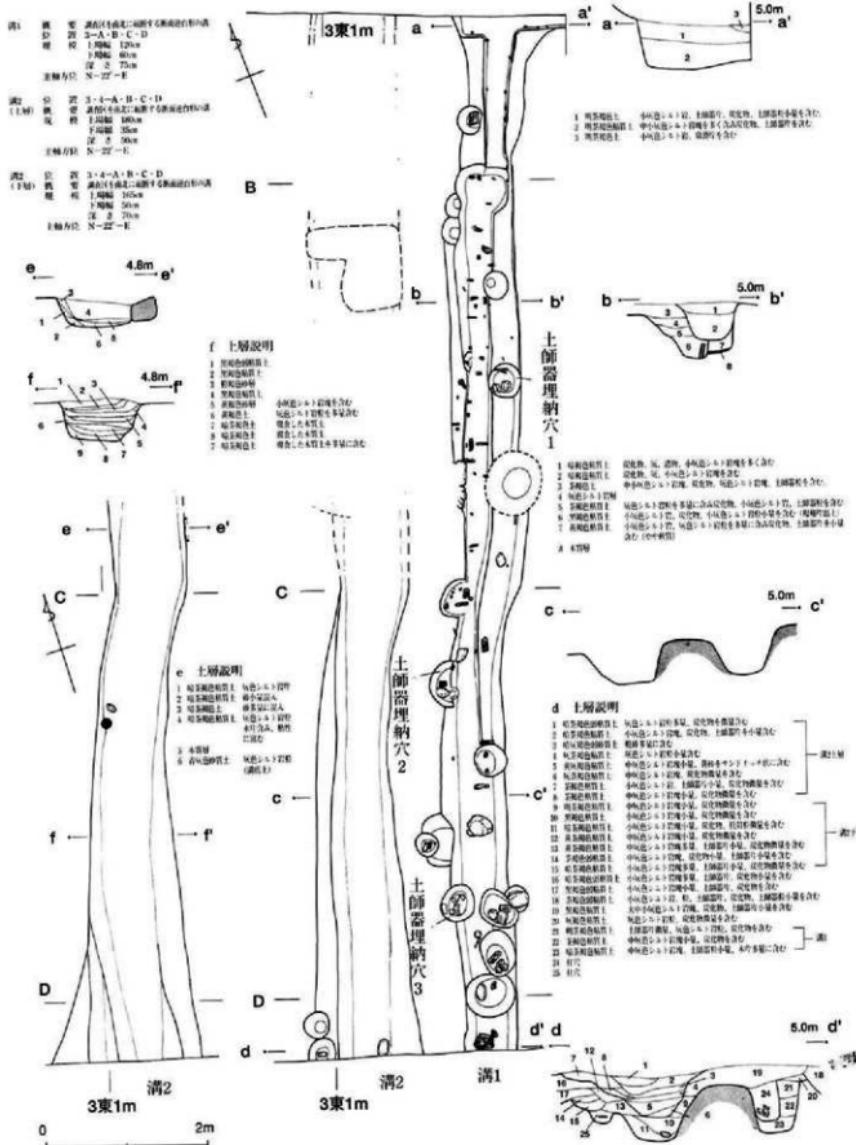


圖19 游1・2

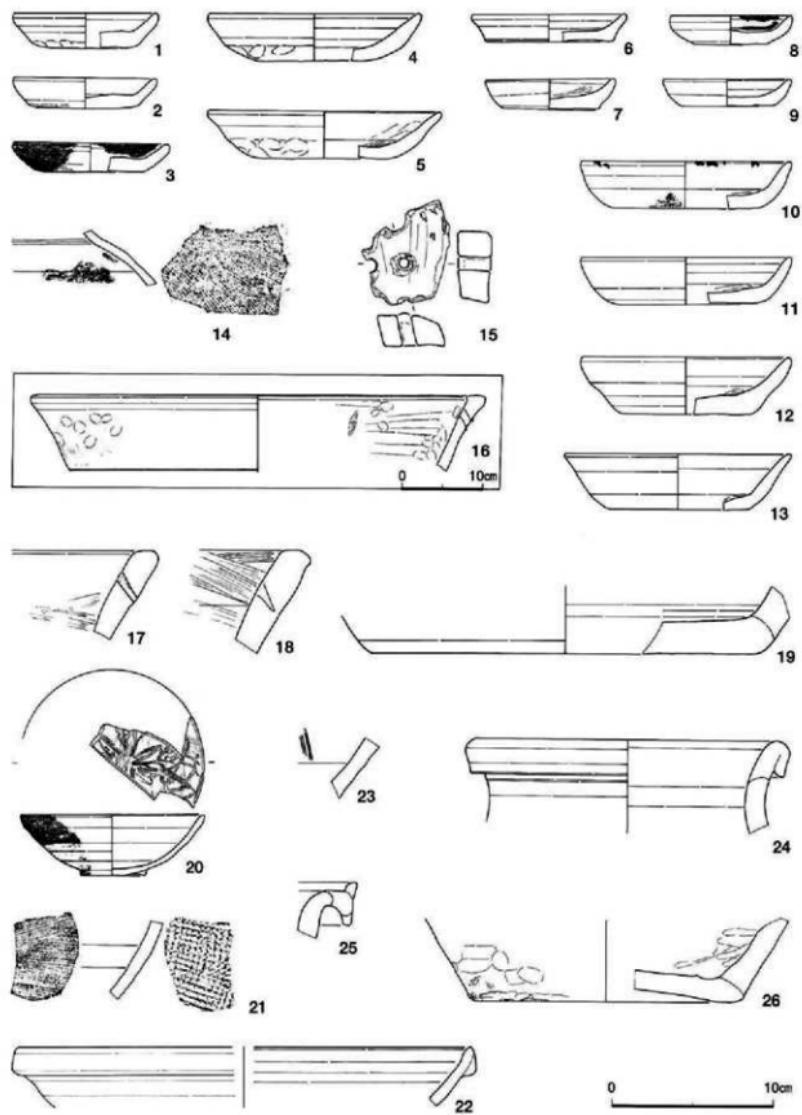


圖20 漢1上層出土遺物（1）

1	土師器	法量 口径9.0cm 底径6.3cm 器高2.2cm 色調 灰褐色 焼成 良好	成形 手づくね 口縁部ナデ 燒成 良好	胎土 砂粒、針状物質、雲母含む
2	土師器	法量 口径8.8cm 底径6.8cm 器高1.9cm 内面含む ややきめ細かい 色調 淡灰褐色	成形 手づくね 口縁部ナデ 燒成 良好	胎土 砂粒、赤色小粒
3	土師器 灯明皿	法量 口径9.6cm 底径6.3cm 器高1.8cm 内面含む ややきめ細かい 色調 灰褐色 スス付着	成形 手づくね 口縁部ナデ 燒成 良好	胎土 砂粒、針状物質含む やや きめ細かい
4	土師器	法量 口径13.2cm 底径9.5cm 器高2.9cm 内面含む ややきめ細かい 色調 灰褐色	成形 手づくね 口縁部ナデ 燒成 良好	胎土 砂粒、小石、針状物質、 雲母含む ややきめ細かい
5	土師器	法量 口径14.4cm 底径8.0cm 器高2.9cm 内面含む ややきめ細かい 色調 灰褐色	成形 手づくね 口縁部ナデ 燒成 良好	胎土 砂粒、小石、針状物質含 む ややきめ細かい
6	土師器	法量 口径9.6cm 底径7.6cm 器高1.7cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む ややきめ細かい	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 灰褐色	胎土 内底部ナデ 燒成 良好
7	土師器	法量 口径8.0cm 底径7.5cm 器高1.8cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 灰褐色	胎土 板状圧痕有り 内底部ナデ 燒成 良好
8	土師器	法量 口径7.4cm 底径4.4cm 器高1.8cm 胎土 砂粒、小石、針状物質含む 色調 灰褐色 スス付着	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 灰褐色	胎土 板状圧痕有り 内底部ナデ 燒成 良好 二次焼成を受ける
9	土師器	法量 口径8.0cm 底径5.5cm 器高1.7cm 内面含む ややきめ細かい 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 淡灰褐色	胎土 板状圧痕有り 内底部ナデ 燒成 良好
10	土師器 灯明皿	法量 口径13.0cm 底径9.0cm 器高2.9cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 灰褐色 スス付着	胎土 内底部ナデ 燒成 良好 二次焼成を受ける
11	土師器	法量 口径13.0cm 底径8.2cm 器高2.9cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 淡灰褐色	胎土 内底部ナデ 燒成 良好
12	土師器	法量 口径13.0cm 底径8.0cm 器高3.5cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む ややきめ細かい	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 淡灰褐色	胎土 内底部ナデ 燒成 良好
13	土師器	法量 口径14.0cm 底径8.6cm 器高3.5cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む ややきめ細かい	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 灰褐色	胎土 内底部ナデ 燒成 良好
14	伊勢系 土 瓢	法量 器高(3.3cm) 胎土 砂粒、小石含む 色調 灰褐色	成形 輪樋 内面ナデ 外面頭部横ナデ 外面斜方向ハケ目 燒成 良好 二次焼成を受ける	
15	手培り	成形 輪樋 穿孔が6ヶ所有 燒成 良好	胎土 砂粒、小石、赤色小粒含む 色調 灰褐色	胎表面灰白色
16	手培り	法量 口径5.6cm 器高(9.4cm) 胎土 砂粒、小石、雲母含む 色調 暗灰褐色	成形 輪樋後ナデ 指頭側有り 穿孔1ヶ所 燒成 普通 二次焼成を受ける	
17	手培り	法量 器高(5.4cm) 胎土 砂粒、小石、雲母含む 色調 灰褐色	成形 輪樋 内面横ナデ 外面頭部横ナデ 細い穿孔1ヶ所 燒成 普通 二次焼成を受ける	
18	手培り	法量 器高(6.3cm) 胎土 砂粒、小石含む 色調 灰褐色	成形 輪樋後ナデ 内面から1ヶ所穿孔を試みた痕有り 燒成 普通 二次焼成を受ける	
19	手培り	法量 底径23.6cm 器高(4.2cm) 色調 灰褐色 焼成 普通	成形 輪樋 内底面ナデ 燒成 良好	胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む
20	瓦 器 碗	法量 口径11.4cm 底径4.0cm 器高3.75cm 文様 内面暗文牡丹文か? 焼成 良好	成形 手づくね 口縁部、内面ナデ 高台貼り付け 胎土 キメ細かい 微気孔有り 色調 灰褐色 スス付着	胎土 良好
21	束縛? 甕	法量 器高(4.8cm) 色調 黒灰色 焼成 良好	成形 輪樋 内面横ナデ 外面格子の叩き目	胎土 小石、砂粒含む
22	魚 住 こね鉢	法量 口径(28.0cm) 器高(3.6cm) 焼成 良好	成形 輪樋後ナデ	胎土 砂粒、小石含む 色調 暗灰色
23	備 前 すり鉢	法量 器高(3.8cm) 色調 茶褐色 焼成 良好	成形 輪樋後ロクロ 内面条線1束3本以上	胎土 灰黒色 砂粒、小石含む
24	常 清 壺	法量 口径20.0cm 器高(5.7cm) 色調 深茶褐色 焼成 良好	成形 輪樋後ナデ 口縁部自然崩壊 燒成 普通	胎土 灰褐色 砂粒、小石含む

表16 溝1上層出土遺物観察表(1)

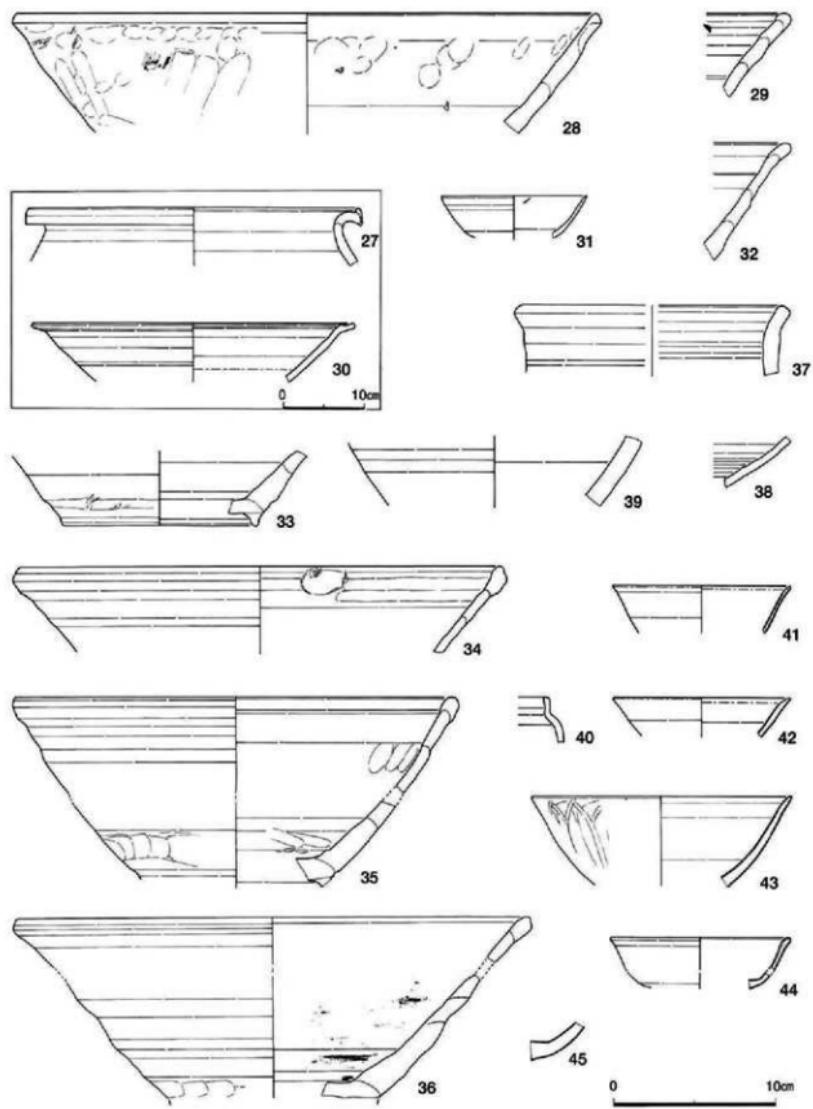


図21 層1上層出土遺物（2）

25	常滑 壺	法量 器高(3.4cm) 色調 暗茶褐色	成形 輪轍 口縫部ナデ 焼成 普通	胎土 灰褐色 砂粒、小石、長石、石英含む
26	常滑 壺	法量 底径19.0cm 器高(5.0cm) 色調 暗茶色 内面に降灰	成形 輪轍 指頭痕有り 焼成 普通	胎土 灰色 砂粒、小石、長石含む
27	常滑 壺	法量 口径42.0cm 器高(6.6cm) 色調 暗茶褐色	成形 輪轍後ナデ 焼成 普通	胎土 暗茶褐色 小石、長石含む
28	常滑 こね跡	法量 口径96.0cm 器高(7.4cm) 色調 茶褐色	成形 輪轍後ナデ 焼成 普通 二次焼成を受ける	胎土 灰色 砂粒、小石含む
29	常滑 こね跡	法量 器高(5.2cm) 焼成 普通	成形 輪轍後ナデ 焼成 普通	胎土 灰褐色 砂粒、小石、長石含む 色調 灰褐色
30	瀬戸 折脚鉢	法量 口径40.0cm 器高(7.2cm) 釉薬 黄褐色透明	成形 ロクロ 付け掛け 細かい貰入有り	胎土 黄灰色 微気孔有り 焼成 良好
31	瀬戸 入れ子	法量 口径9.0cm 器高(2.6cm) 色調 内面黄灰色 外面薄茶色	成形 ロクロ 口縫部に降灰	胎土 灰色 きめ細かい 焼成 良好
32	山茶碗窓系 こね跡	法量 器高(7.3cm) 焼成 良好	成形 輪轍後ロクロ 焼成 良好	胎土 小石含む 色調 暗灰色
33	山茶碗窓系 こね跡	法量 口径12.0cm 器高(4.7cm) 色調 灰色	成形 輪轍後ナデ 焼成 良好	高台貼り付け 胎土 小石、長石含む
34	山茶碗窓系 こね跡	法量 口径29.8cm 器高(5.2cm) 焼成 良好	成形 輪轍後ロクロ 焼成 良好	胎土 小石、長石含む 色調 灰褐色
35	山茶碗窓系 こね跡	法量 口径27.0cm 器高(11.6cm) 胎土 小石、長石含む	成形 輪轍後ロクロ 色調 灰褐色	高台貼り付け 焼成 良好
36	山茶碗窓系 こね跡	法量 口径31.4cm 器高(11.0cm) 色調 灰褐色 スス付着	成形 輪轍後ロクロ 焼成 良好	外底部脇へラ削り 胎土 小石、長石、石英含む
37	舶用品 壺	法量 口径(17.0cm) 器高(4.1cm) 色調 暗茶褐色	成形 輪轍後ナデ 焼成 普通	胎土 灰黒色 砂粒、小石含む
38	緑釉 壺	法量 器高(3.1cm) 焼成 良好	成形 ロクロ 口縫に少量の降灰	素地 緑～黃灰色 砂粒含む 釉薬 緑色透明 外面付け掛け
39	白磁 壺	法量 器高(4.3cm) 焼成 良好	成形 ロクロ 素地 灰白色	砂粒含む 気孔有り 釉薬 灰色透明 内外面施釉
40	青白磁 小壺	法量 器高(2.8cm) 口縫と内面一部露胎	成形 ロクロ 焼成 不良	素地 灰褐色 激氣孔有り 釉薬 淡青灰色透明 気泡有り
41	白磁 口丸瓶	法量 口径11.0cm 器高(2.9cm) 焼成 良好	成形 ロクロ 焼成 良好	素地 白褐色 釉薬 白褐色半透明 口縫部露胎
42	白磁 口丸瓶	法量 口径11.0cm 器高(2.4cm) 口縫部露胎	成形 ロクロ 焼成 良好 二次焼成を受ける	素地 白褐色 砂粒含む 釉薬 淡灰褐色不透明
43	青磁 龍泉窓 瓢	法量 口径16.1cm 器高(4.6cm) 釉薬 緑褐色透明 少量の貰入有り	成形 ロクロ 焼成 良好	文様 外面梅蓮弁 素地 灰褐色 微氣孔有り
44	青磁 小鉢	法量 口径11.0cm 器高(2.9cm) 焼成 良好	成形 ロクロ 焼成 良好	素地 灰色 微量の砂粒含む 釉薬 灰褐色半透明
45	青磁 龍泉窓 瓢	法量 器高(2.5cm) 焼成 良好	成形 ロクロ 高台割り出し	素地 灰褐色 釉薬 緑褐色透明 激氣泡有り
46	青白磁 瓶	法量 口径6.0cm 器高(1.0cm) 微量の砂粒含む	成形 型入れ 釉薬 淡水青色透明 気泡有り	高台脇へラ削り 文様 内面菊花文 素地 灰白色
47	青白磁 瓶	法量 径6.35cm 器高(1.8cm) 孔有り	成形 ロクロ 釉薬 淡水青色半透明 外面に施釉	上面片切形 焼成 良好
48	鉄製品 船釣	法量 長さ(9.8cm) 最大幅1.4cm 厚さ0.65cm	成形 凸面圓口 指頭ナデ 四面布目	胎土 灰色
49	丸瓦	法量 長さ(15.2cm) 幅(8.7cm) 厚さ(2.7cm) 瓦質 砂粒、小石含む	色調 暗灰色 焼成 良好	

表17 済1上層出土遺物観察表(2)

50	砥石	法量 長さ（4.5cm） 幅3.85cm 厚さ0.9cm 側面に切り出し痕がある	石材 京都系	色調 灰褐色	備考 仕上砥 上面が砥面
51	砥石	法量 長さ（5.0cm） 幅（3.3cm） 厚さ（1.0cm） 側面が砥面 上面上に使用痕	産地 天草	色調 黄灰色	備考 中砥 上面と
52	滑石錠	法量 番高（10.9cm） 成形 外側面に切り出し痕 色調 灰色～灰褐色 内面にスス付着	石財 滑石 鹽物質の結晶を含む		
53	骨製品 箕	法量 長さ（13.7cm） 最大幅1.75cm 厚さ0.3cm 成形 三角形の穿孔が1箇所有り			
54	曲物 底板	法量 径11.25cm 厚さ0.5cm 成形 畳目 片面にスス付着	備考 ススの付着した面に切り傷が残る		

表18 渕1上層出土遺物観察表(3)

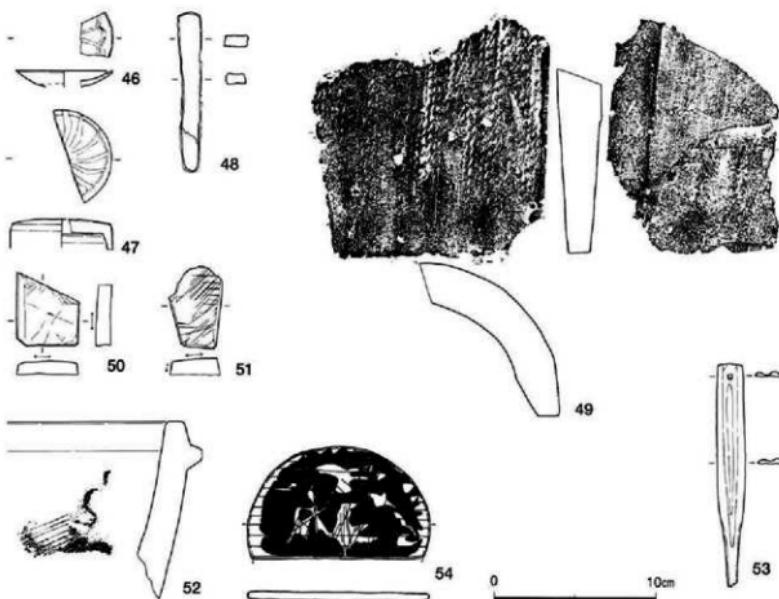


図22 渕1上層出土遺物(3)

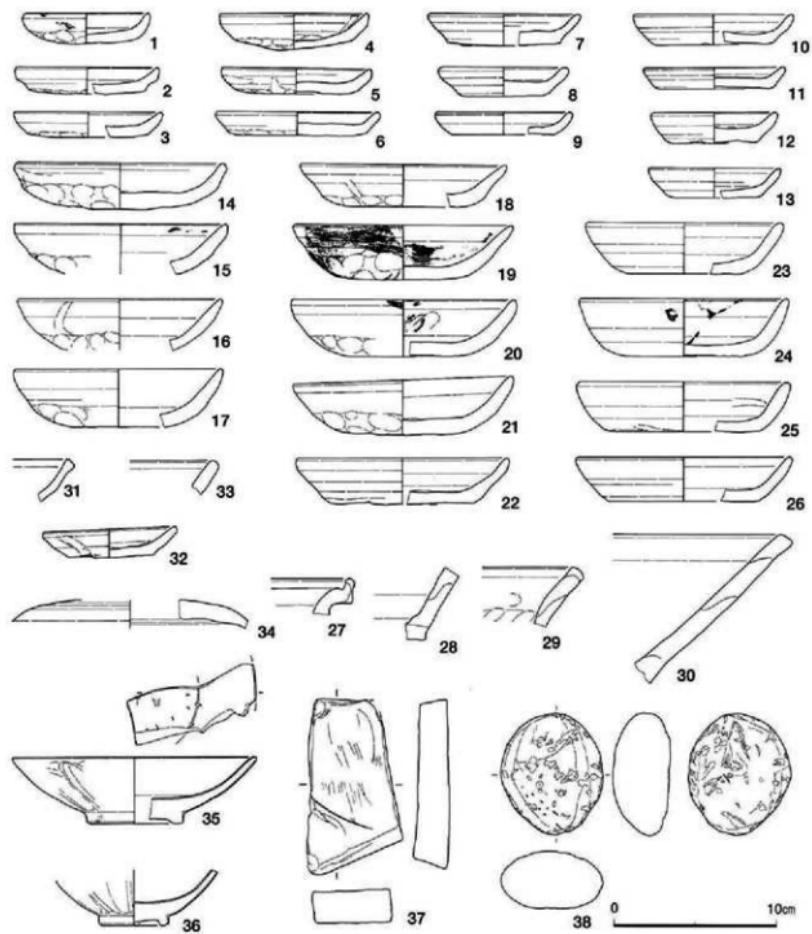


图23 漢1下层出土遗物

1	土師器	法量 口径7.9cm 底径7.15cm 器高1.9cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む 色調 橙色 スス付着	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 焼成 良好 二次焼成を受ける
2	土師器	法量 口径8.0cm 底径7.2cm 器高1.7cm 胎土 砂粒、針状物質含む ややきめ細かい 色調 灰褐色	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 焼成 良好
3	土師器	法量 口径9.2cm 底径7.4cm 器高1.6cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む ややきめ細かい	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 灰褐色
4	土師器	法量 口径9.2cm 底径7.3cm 器高2.2cm 胎土 砂粒、針状物質含む きめ細かい	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 内底部指痕麻有り 色調 灰褐色 焼成 良好
5	土師器	法量 口径9.3cm 底径7.6cm 器高1.65cm 胎土 砂粒、針状物質含む ややきめ細かい	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 灰褐色
6	土師器	法量 口径10.2cm 底径8.8cm 器高1.5cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む ややきめ細かい	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
7	土師器	法量 口径9.4cm 底径7.0cm 器高1.95cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む ややきめ細かい	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
8	土師器	法量 口径8.1cm 底径8.5cm 器高1.45cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む 粗い	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 橙色 備考 完形
9	土師器	法量 口径8.5cm 底径6.2cm 器高1.4cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む 色調	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 灰褐色 焼成 良好
10	土師器	法量 口径9.9cm 底径6.85cm 器高1.9cm 胎土 針状物質、雲母含む きめ細かい	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
11	土師器	法量 口径8.8cm 底径6.9cm 器高1.35cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母 赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
12	土師器	法量 口径7.8cm 底径5.1cm 器高1.95cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む 色調	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 淡褐色 焼成 良好 備考 完形
13	土師器	法量 口径8.2cm 底径5.6cm 器高1.85cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む 色調	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 灰褐色 焼成 良好
14	土師器	法量 口径13.2cm 底径12.1cm 器高2.9cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む 色調	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 灰褐色 焼成 良好
15	土師器	法量 口径12.2cm 器高(3.1cm) 成形 手づくね 口縁部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好 二次焼成を受ける	胎土 砂粒、針状物質含む
16	土師器	法量 口径12.7cm 器高(3.1cm) 成形 手づくね 口縁部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好	胎土 小石、針状物質含む きめ細かい
17	土師器	法量 口径12.9cm 底径10.9cm 器高3.6cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む ややきめ細かい	色調 灰褐色 焼成 良好
18	土師器	法量 口径12.8cm 底径10.0cm 器高2.65cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好	胎土 砂粒、針状物質含む
19	土師器	法量 口径13.6cm 底径11.4cm 器高3.4cm 成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 外底部線条痕有り 胎土 砂粒、針状物質含む 色調 灰褐色 スス付着 焼成 良好 二次焼成を受ける 備考 完形	
20	土師器	法量 口径14.0cm 底径11.6cm 器高3.55cm 成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 胎土 針状物質含む きめ細かい 色調 淡褐色 スス付着	焼成 良好 二次焼成を受ける
21	土師器	法量 口径13.6cm 底径11.45cm 器高3.4cm 成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 外底部板状圧痕有り 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む ややきめ細かい 色調 灰褐色 スス付着	焼成 良好
22	土師器	法量 口径13.2cm 底径8.8cm 器高2.85cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部軽いナデ 胎土 小石、針状物質含む ややきめ細かい 色調 灰褐色	焼成 良好
23	土師器	法量 口径12.2cm 底径7.0cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む 色調 橙色	焼成 良好
24	土師器	法量 口径13.0cm 底径8.4cm 器高3.55cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 胎土 砂粒、針状物質含む 色調 暗褐色 スス付着	焼成 良好
25	土師器	法量 口径13.2cm 底径9.5cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む 色調 灰褐色	焼成 良好

表19 第1層出土遺物観察表(1)

26	土師器	法量 胎土 針状物質含む	口径13.4cm 器高9.4cm 器底2.75cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ ややきめ細かい 色調 淡褐色	燒成 良好
27	常滑壺	法量 胎土 茶褐色 口縁に少量の降灰	器高 (2.2cm) 成形 輪積後ナデ 胎土 灰色 小石、砂粒含む 燒成 普通	
28	常滑壺	法量 胎土 茶褐色 内面に降灰	器高 (4.4cm) 成形 輪積 胎土 噴灰褐色 小石、砂粒含む 燒成 普通	
29	常滑こね鉢	法量 胎土 淡橙色 色調	器高 (3.6cm) 成形 輪積後ナデ 内面指摩痕 胎土 淡橙色 小石、砂粒含む 燒成 普通	
30	常滑こね鉢	法量 胎土 暗茶褐色 内面に降灰	器高 (9.1cm) 成形 輪積 口縁部ナデ 胎土 灰黒色 砂粒、小石含む やや粗い 焼成 普通	
31	瀬戸おろし皿	法量 胎土 灰褐色不透明	器高 (2.6cm) 成形 ロクロ 胎土 灰色 微気孔有り きめ細かい 内外面施胎 燒成 良好	
32	山皿	法量 胎土 砂粒、小石含む 色調	口径8.3cm 底径5.25cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 焼成 良好 二次焼成を受ける 備考 完形	
33	山茶碗窓系 こね鉢	法量 胎土 良好	器高 (2.1cm) 成形 輪積後ナデ 胎土 砂粒、小石含む 色調 灰色 口縁に少量の降灰 燒成 良好	
34	緑褐釉壺	法量 胎土 良好	器高 (1.7cm) 成形 ロクロ 胎土 噴灰色 砂粒含む 気孔有り 色調 暗灰色 焼成 良好 二次焼成を受ける	
35	青磁 龍泉窯 素地	法量 胎土 砂粒含む 氣孔有り	口径15.2cm 底径6.0cm 器高4.1cm 成形 ロクロ 高台削り出し 文様 外面複蓮弁 内底面線刻 燒成 良好	
36	青磁 龍泉窯 素地	法量 胎土 灰色 氣孔有り	器高 (3.6cm) 成形 ロクロ 高台削り出し 文様 外面複蓮弁 胎土 灰褐色半透明 高台内露胎 燒成 良好	
37	石製品	法量 長径7.4cm 幅 (5.9cm)	長さ (10.8cm) 幅 (5.9cm) 厚さ2.0cm 石材 灰色シルト岩 色調 黄灰色	
38	軽石	法量 長径7.4cm 幅 (6.3cm)	厚さ3.5cm 色調 灰褐色 備考 純物の結晶を含む 使用痕有り	

表20 第1下層出土遺物観察表（2）

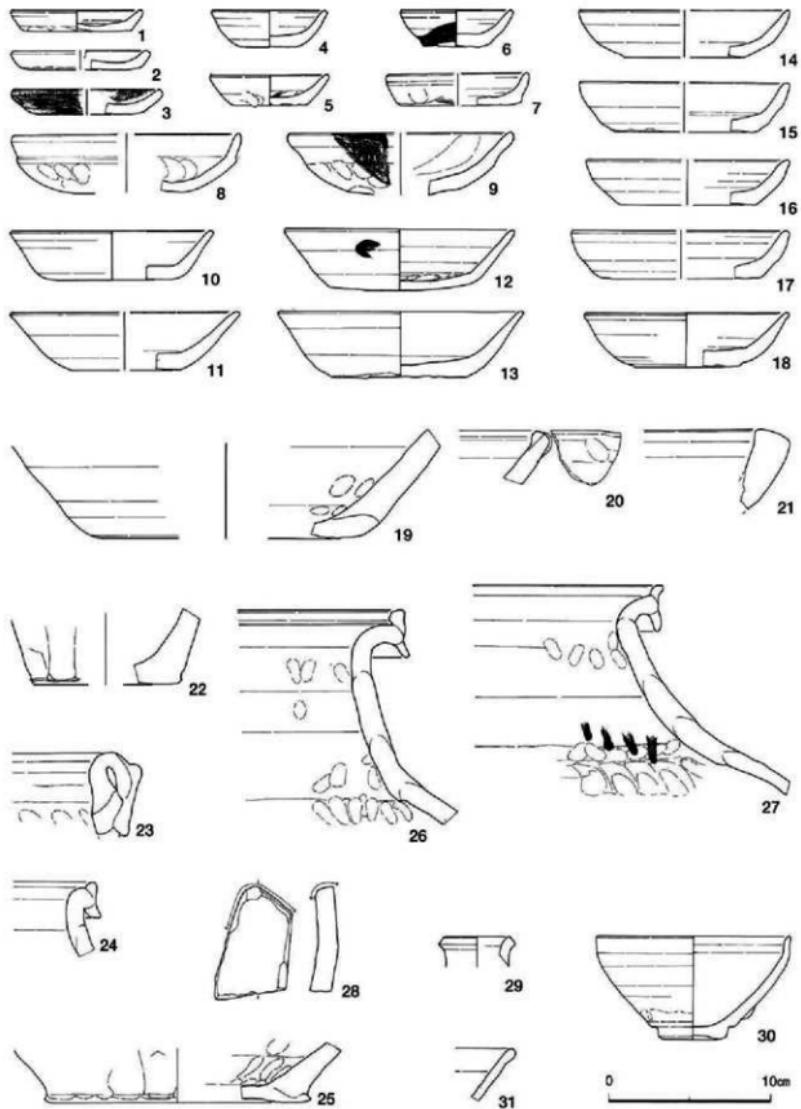


圖24 漢2出土遺物（1）

1	土師器	法量 砂粒、針状物質含む	口径8.2cm 底径6.8cm 器高1.3cm 成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 外底部板状圧痕有り 色調 灰褐色 焼成 良好
2	土師器	法量 砂粒、針状物質含む	口径8.6cm 底径7.0cm 器高1.2cm 成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
3	土師器	法量 砂粒含む	口径4.4cm 底径4.0cm 器高1.6cm 成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ やさきめ細かい 色調 灰褐色 スス付着 焼成 良好 二次焼成を受ける
4	土師器	法量 砂粒、針状物質含む	口径7.2cm 底径3.6cm 器高2.3cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
5	土師器	法量 砂粒、針状物質含む	口径7.4cm 底径4.7cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
6	土師器	法量 砂粒、針状物質含む	口径7.0cm 底径4.4cm 器高2.3cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 淡灰褐色 スス付着 焼成 良好
7	土師器	法量 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む	口径8.8cm 底径7.6cm 器高2.05cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
8	土師器	法量 砂粒、針状物質含む	口径(14.2cm) 底径(6.8cm) 器高(3.6cm) 成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ きめ細かい 色調 暗灰褐色 焼成 良好
9	土師器	法量 砂粒、針状物質含む	口径(14.0cm) 器高(3.8cm) 成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ やさきめ細かい 色調 灰褐色 焼成 良好
10	土師器	法量 砂粒、針状物質、雲母含む	口径12.6cm 底径7.8cm 器高3.05cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 位移、針状物質 色調 灰褐色 焼成 良好
11	土師器	法量 砂粒、針状物質含む	口径(14.2cm) 底径(6.8cm) 器高3.55cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 淡灰褐色 スス付着 焼成 良好
12	土師器	法量 砂粒、小石、針状物質	口径14.2cm 底径8.75cm 器高3.8cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 針状物質、雲母含む 色調 灰褐色 スス付着 焼成 良好
13	土師器	法量 砂粒、小石、針状物質含む	口径17.2cm 底径6.4cm 器高4.15cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好 程度 完形
14	土師器	法量 針状物質、雲母含む	口径(13.0cm) 底径(7.5cm) 器高2.9cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り きめ細かい 色調 暗灰褐色 焼成 良好
15	土師器	法量 砂粒、針状物質、赤色小粒含む	口径(13.0cm) 底径(8.6cm) 器高3.1cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 淡褐色 焼成 良好
16	土師器	法量 砂粒、針状物質、赤色小粒含む	口径(12.0cm) 底径(8.4cm) 器高2.8cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 針状物質、赤色小粒含む きめ細かい 色調 灰褐色 焼成 良好
17	土師器	法量 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む	口径(13.4cm) 底径(8.0cm) 器高3.0cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色孔有り 色調 灰褐色 焼成 良好
18	土師器	法量 針状物質含む	口径12.7cm 底径6.4cm 器高3.35cm 成形 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ きめ細かい 気孔有り 色調 淡灰褐色 焼成 良好
19	軟質陶器 こね跡	法量 色調	底径(16.0cm) 器高(8.8cm) 成形 輪積 内面指痕有り 胎土 砂粒、小石含む 灰褐色 焼成 普通
20	瓦質 こね跡	法量 色調	器高(3.4cm) 成形 輪積後ナデ 口縁部内側指痕痕 胎土 灰褐色 気孔有り 灰黒色 焼成 良好
21	瓦質 火 火 火	法量 色調	器高(4.9cm) 成形 輪積後ナデ 外面二次焼成のため剥離 胎土 灰色 砂粒、小石含む 気孔有り 灰黒色 焼成 良好 二次焼成を受ける
22	常滑 小壺	法量 色調	底径(8.3cm) 成形 輪積 内面ナデ 外面下位綫方向へラナデ 胎土 灰褐色 小石、砂粒含む 茶褐色 外底部スス付着 焼成 普通
23	常滑 壺	法量 色調	器高(5.0cm) 成形 輪積後ナデ 頸部内面指痕痕 胎土 喧褐色～暗灰色 砂粒、小石含む 気孔有り 茶褐色 口縁と肩部に陥灰 焼成 普通
24	常滑 壺	法量 色調	器高(4.6cm) 成形 輪積後ナデ 胎土 喧褐色 小石含む 気孔有り きめ細かい 茶褐色 口縁と肩部に陥灰 焼成 普通
25	常滑 壺	法量 色調	底径16.4cm 器高(3.8cm) 成形 輪積 内面指痕痕 外面下位綫方向へラナデ 灰黒色 小石含む 色調 茶褐色 内面に少量の陥灰 焼成 普通

表21 第2出土遺物観察表(1)

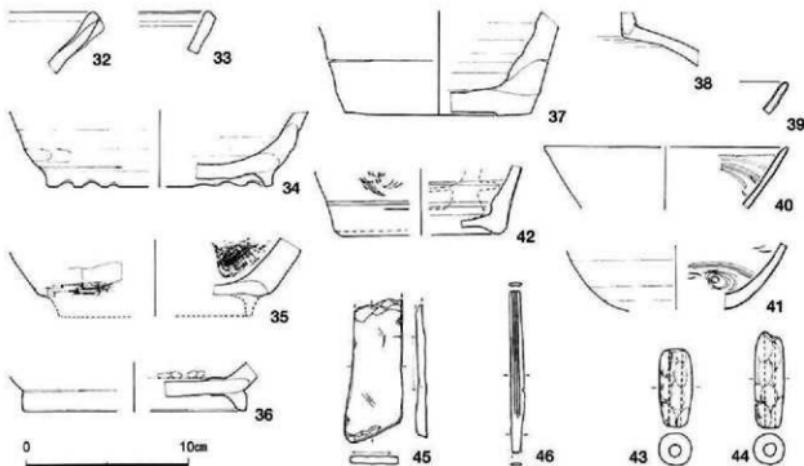


図25 溝2出土遺物(2)

26	常滑壺	法量 器高(13.1cm) 色調 黒褐色 口縁と肩部に少量の降灰	成形 輪轤後ナデ 指頭痕有り 焼成 普通	胎土 黒褐色 砂粒、小石含む 気孔有り
27	常滑甕	法量 器高(12.8cm) 色調 黒褐色 口縁と肩部に少量の降灰	成形 輪轤後ナデ 指頭痕有り 胎土 内面に墨様のものが付着	胎土 灰色 砂粒、小石含む 気孔有り 焼成 普通 二次焼成を受ける
28	転用常滑	法量 長さ6.5cm 幅4.3cm 厚さ1.3cm 色調 明茶褐色 焼成 普通	成形 ロクロ 備考 刻れ口にオリ麻有り	胎土 灰色 砂粒含む きめ細かい
29	瀬戸 仏卓瓶	法量 口径4.1cm 器高(1.6cm) 焼成 良好	成形 ロクロ	胎土 灰褐色 漆気孔有り 胎葉 緑褐色半透明
30	瀬戸 天目茶碗	法量 口径2.0cm 底径4.2cm 器高6.35cm 軸素 鉄輪不透明 内面と外面中位まで付け掛け	成形 ロクロ 高台削り出し 焼成 良好	胎土 素地 淡灰褐色 きめ細かい 備考 完形
31	山茶碗	法量 器高(3.3cm) 焼成 良好	成形 輪轤後ロクロ	胎土 砂粒、小石含む 微気孔有り 色調 淡灰褐色
32	山茶碗窓系 こね跡	法量 器高(3.8cm) 焼成 良好	成形 輪轤後ナデ	胎土 砂粒含む 色調 灰色 内面に微量の降灰
33	山茶碗窓系 こね跡	法量 器高(2.6cm) 焼成 不良	成形 輪轤後ナデ	胎土 砂粒、小石含む 気孔有り 色調 灰白色
34	山茶碗窓系 こね跡	法量 底径(14.0cm) 器高(4.6cm) 釉土 砂粒、小石含む 粗い 色調 灰色	成形 輪轤後ロクロ 焼成 良好	胎土 色付きにすり痕有り 胎葉 高台貼り付け
35	山茶碗窓系 こね跡	法量 器高(3.5cm) 色調 広褐色 スス付着	成形 輪轤後内面ナデ 焼成 不良	胎土 砂粒、小石含む 胎葉 底部磨へ削り
36	山茶碗窓系 こね跡	法量 底径(14.0cm) 器高(3.0cm) やきめ細かい 色調 灰色～灰褐色	成形 輪轤後ロクロ 焼成 不良	胎土 砂粒、小石含む や 胎葉 高台貼り付け
37	緑褐胎 壺	法量 底径12.4cm 器高(6.5cm) 気孔有り きめ細かい	成形 輪轤後ロクロ 釉葉 灰綠褐色半透明 外面上に施釉	胎土 暗灰色 砂粒、小石含む 胎葉 備考 内面に微量の降灰
38	白磁 壺	法量 器高(2.6cm) 焼成 良好	成形 ロクロ 素地 灰色、砂粒含む	胎葉 灰色半透明 貫入有り 内外面施釉

表22 溝2出土遺物観察表(2)

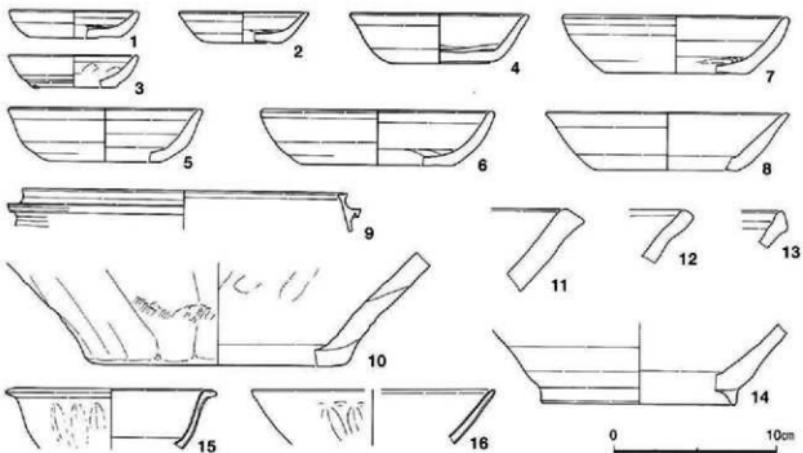


図26 溝3(破碎岩充填構造)出土遺物

39	青磁 龍泉窯 瓢	法量 器高(2.0cm) 釉薬 青灰色不透明	成形 ロクロ 焼成 良好	文様 外面單蓮弁	素地 灰白色	きめ細かい	
40	青磁 龍泉窯 碗	法量 口径(15.0cm) 釉薬 灰綠色透明	器高(3.8cm) 買入有り	成形 ロクロ 焼成 良好	文様 内面画花文	素地 灰色	きめ細かい
41	青磁 龍泉窯 碗	法量 器高(4.0cm) 釉薬 灰綠色透明	成形 ロクロ 焼成 良好	文様 内面画花文	素地 灰色	砂粒含む	
42	青白磁 梅瓶	法量 底径(10.0cm) 素地 灰白色	器高(3.9cm) 砂粒含む	成形 ロクロ 釉薬 淡水青色半透明	高台削り出し 外面に施釉 内面にも垂れる	文様 外面渦状文 焼成 良好	
43	土罐	法量 長さ4.8cm 色調 暗褐色	最大径2.0cm 内径0.7cm	成形 棒に粘土を巻いて成形	胎土	針状物質を含む きめ細かい	
44	土罐	法量 長さ5.9cm 色調 暗褐色	最大径1.9cm 内径0.8cm	成形 棒に粘土を巻いて成形	胎土	針状物質、雲母含む きめ細かい	
45	磁石	法量 長さ(9.0cm) 1面が紙面	最大幅3.5cm 側面に切り出し痕有り	厚さ0.65cm	石材	鹿馬座か? 参考 仕上げ砥	
46	骨製品 箕	法量 長さ(10.0cm)	最大幅0.8cm	厚さ0.15cm			

表23 溝2出土遺物観察表(3)

1	土師器	法量 口径8.0cm 底径5.7cm 器高1.7cm 胎土 砂粒、针状物質、雲母含む	成形 ロクロ 色調 淡灰褐色	外底面部軸条切り 燒成 良好	板状圧痕有り 内底部ナデ
2	土師器	法量 口径8.0cm 底径4.6cm 器高1.9cm 胎土 砂粒、小石、针状物質、雲母含む	成形 ロクロ 色調 暗褐色	外底面部軸条切り 燒成 良好	板状圧痕有り 内底部ナデ
3	土師器	法量 口径8.0cm 底径5.2cm 器高2.0cm 胎土 砂粒、小石、针状物質含む ややきめ細かい	成形 ロクロ 色調 底部暗褐色	外底面部軸条切り 燒成 良好	板状圧痕有り 内底部ナデ
4	土師器	法量 口径12.0cm 底径6.8cm 器高3.3cm 胎土 砂粒、小石、针状物質含む ややきめ細かい	成形 ロクロ 色調 淡褐色	外底面部軸条切り 燒成 良好	内底部ナデ
5	土師器	法量 口径11.0cm 底径6.8cm 器高3.1cm 胎土 砂粒、针状物質含む	成形 ロクロ 色調 灰褐色	外底面部軸条切り 燒成 良好	板状圧痕有り 内底部ナデ

表24 溝3出土遺物観察表(1)

6	土師器	法量 胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む	口径14.4cm 底径9.2cm 器高3.4cm	成形 ロクロ 内底部ナデ 色調 灰褐色	内底部ナデ 燒成 良好
7	土師器	法量 胎土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む	口径14.0cm 底径8.8cm 器高3.6cm	成形 ロクロ 外底面部輪糸切り 色調 淡褐色	内底部ナデ 燒成 良好
8	土師器	法量 胎土 小石、針状物質、赤色小粒含む	口径15.0cm 底径8.6cm 器高3.6cm	成形 ロクロ 外底面部輪糸切り 色調 淡褐色	内底部ナデ 燒成 良好
9	附 土器	法量 胎土 砂粒、茶灰色、小石、砂粒含む	口径20.0cm 器高(2.4cm) 色調 淡灰褐色	成形 輪積 燒成	外側横方向彫目 内底部ナデ 指頭痕有り 良好
10	常滑 こね跡	法量 胎土 茶灰色、小石、砂粒含む	底径15.0cm 器高(7.4cm) 色調 茶灰色	成形 輪積 燒成	内面ナデ 指頭痕有り 外面下位縫方向へラナデ ハケ目有り 普通
11	常滑 こね跡	法量 胎土 砂粒含む	器高(5.1cm) 色調 茶褐色	成形 輪積 燒成	口縫に微量の降灰 普通
12	山茶碗蒸系 こね跡	法量 胎土 砂粒含む	器高(3.8cm)	成形 輪積後ナデ	胎土 砂粒、小石含む 色調 灰色 口縫と内面に降灰
13	魚住 こね跡	法量 胎土 砂粒含む	器高(2.4cm)	成形 輪積	口縫部ナデ 胎土 砂粒、小石含む 色調 灰色 燒成 良好
14	山茶碗蒸系 こね跡	法量 胎土 砂粒含む	底径12.0cm 器高(5.0cm)	成形 輪積後ナデ	胎土 小石、砂粒含む 色調 灰色 内面に降灰
15	青磁 龍泉窯折縫鉢	法量 胎土 砂粒透明	口径10.5cm 器高(3.7cm) 色調 灰褐色透明	成形 ロクロ 燒成	多量の気泡有り 良好 文様 外面單蓮弁 素地 灰色 きめ細かい
16	青磁 龍泉窯 碗	法量 胎土 灰褐色不透明	口径(13.0cm) 器高(3.4cm) 色調 灰褐色不透明	成形 ロクロ 燒成	少量の貫入有り 良好 文様 外面單蓮弁 素地 灰白色 砂粒含む

表25 滝3出土遺物観察表(2)

1	常滑 器	法量 胎土 砂粒	底径20.6cm 器高(30.4cm) 色調 灰褐色	成形 輪積後ナデ 燒成	外面縫方向へラナデ 内面指頭痕 普通
---	---------	----------------	-------------------------------	-------------------	--------------------------

表26 摺壓出土遺物観察表

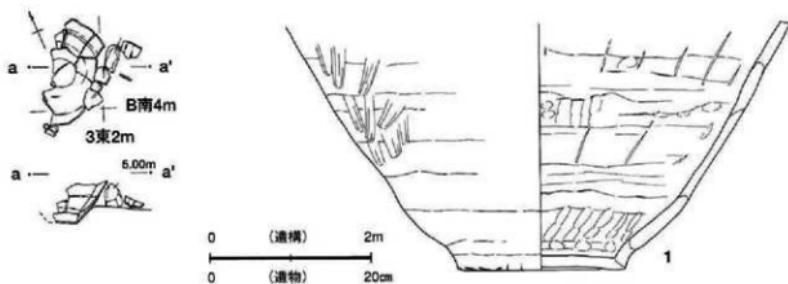


図27 摺壓、同出土遺物

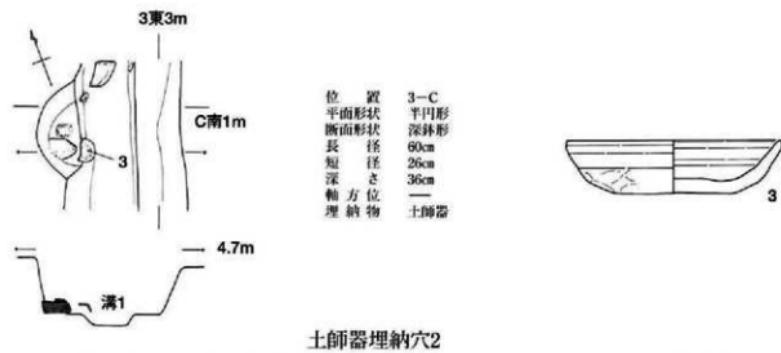


図28 土師器埋納穴・同出土遺物

1	土師器	法量 口径13.0cm 底径7.0cm 器高3.3cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 手づくね 色調 灰褐色	口縁部、内底面ナデ 外底面板状圧痕有り 焼成 良好
2	土師器 白色系	法量 口径12.6cm 底径8.5cm 器高2.9cm 胎土 砂粒、雲母含む	成形 手づくね 色調 白褐色	口縁部、内底面ナデ 外底面板状圧痕有り 焼成 良好
3	土師器	法量 口径12.8cm 底径7.4cm 器高3.3cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む	成形 手づくね 色調 暗紅褐色	口縁部、内底面ナデ 焼成 良好
4	土師器	法量 口径12.8cm 底径8.0cm 器高3.4cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む	成形 手づくね 色調 灰褐色	口縁部、内底面ナデ 焼成 良好 二次焼成を受ける
5	土師器	法量 口径8.7cm 底径6.3cm 器高1.4cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 色調 灰褐色	口縁部、外底面側縫糸切り 焼成 良好
6	土師器	法量 口径13.0cm 底径8.7cm 器高3.2cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母、赤色小粒含む	成形 ロクロ 色調 橙色	外底面側縫糸切り 板状圧痕有り 内底面ナデ 焼成 良好

表27 土師器埋納穴出土遺物観察表

1	土師器	法量 口径7.2cm 底径4.2cm 器高2.2cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 色調 淡灰褐色	外底面側縫糸切り 板状圧痕有り 内底面ナデ 焼成 良好
2	土師器 灯明皿	法量 口径7.3cm 底径5.1cm 器高3.0cm 胎土 砂粒、針状物質、氣孔有り	成形 ロクロ 色調 橙色 スヌ付着	外底面側縫糸切り 板状圧痕有り 内底面ナデ 焼成 良好
3	土師器	法量 口径7.7cm 底径4.5cm 器高2.2cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 色調 橙色	外底面側縫糸切り 板状圧痕有り 内底面ナデ 焼成 良好
4	土師器	法量 口径13.9cm 底径8.6cm 器高3.65cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 色調 橙色	外底面側縫糸切り 板状圧痕有り 内底面ナデ 焼成 良好
5	土師器 白色系	法量 底径4.2cm 器高(1.5cm) 色調 白褐色	成形 ロクロ	外底面側縫糸切り 胎土 砂粒含む 微気孔有り 焼成 良好
6	常 游 業	法量 口径14.4cm 器高(6.1cm) 胎土 灰黒色 砂粒、小石含む	成形 輪積後ナデ 色調 赤褐色	内面指印痕有り 肩部条線1本 焼成 普通
7	常 游 業	法量 器高(8.5cm) 縁部に微量の降灰 燃成 普通	成形 輪積後ナデ 胎土 灰黒色 小石、砂粒含む	色調 赤褐色~茶色 口
8	常 游 業	法量 底径9.0cm 器高(5.3cm) に多量の降灰 燃成 普通	成形 輪積 胎土 灰色 砂粒、小石含む	色調 灰緑色 内外面
9	常 游 業	法量 底径14.1cm 器高(8.0cm) 色調 灰褐色~茶色 内面に微量の降灰	成形 輪積後ナデ 燃成 普通	内面指印痕有り 胎土 灰褐色 砂粒、小石含む
10	瀬 戸 瓶 子	法量 口径7.4cm 器高(3.2cm) の買入有り	成形 ロクロ 燃成 良好	胎土 灰色 微気孔有り 釉薬 灰綠色透明 少量
11	瀬 戸 仏壇底	法量 底径4.5cm 腹部直径6.6cm 腹部深5.25cm 器高(8.3cm) かかった3重の条線	成形 ロクロ 胎土 灰褐色 小石、砂粒含む	外底面側縫糸切り 胴部につな 輪積 灰褐色半透明 焼成 良好
12	綠 鞍 輪	法量 器高(4.2cm) 輪輪 綠色不透明 輪輪 綠色現象有り	成形 輪積 胎土 灰色 砂粒、小石含む やや粗い 輪輪 細目半透明	輪輪 灰褐色半透明 焼成 良好 二次焼成を受けてるか?
13	白 瓶 口元皿	法量 口径11.0cm 器高(2.5cm) 輪輪 灰白色半透明 口縁部露胎	成形 ロクロ 燃成 良好	素地 灰白色 砂粒含む 気孔有り
14	青 瓶 龍泉窯無文輪	法量 底径3.4cm 器高(3.2cm) 輪輪 綠褐色透明 気泡有り 着付き露胎	成形 ロクロ 高台削り出し 燃成 良好	素地 灰色 微気孔有り
15	白 瓶 皿	法量 底径5.0cm 器高(1.0cm) 素地 灰色 砂粒含む 気孔有り	成形 ロクロ 外底面、底面輪へう削り 輪輪 灰色半透明 気泡有り 外底部露胎	文様 内底部刻線牡丹文 焼成 良好
16	青 瓶 龍泉窯折筋輪	法量 口径(20.0cm) 器高(2.7cm) 輪輪 綠褐色半透明 気泡 買入有り	成形 ロクロ 文様 猫刺繡弁文 燃成 良好	素地 灰色 砂粒含む

表28 上部包含層出土遺物観察表(1)

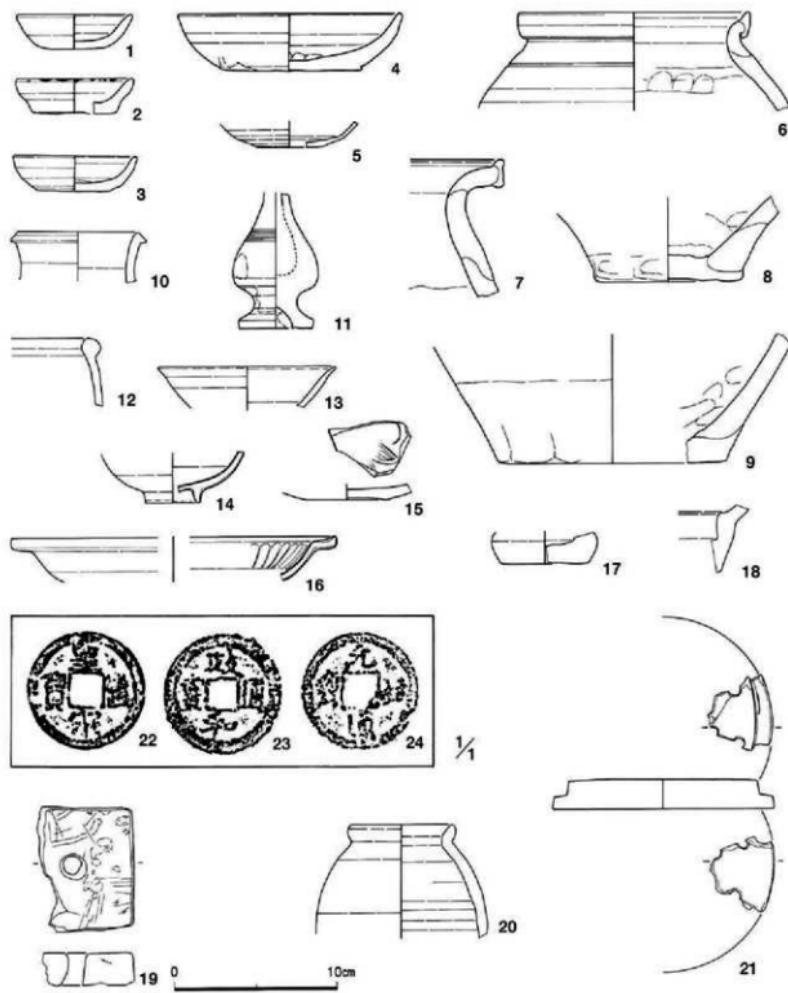


図29 上部包含層出土遺物

17	土製品	法量 底径5.4cm 器高(1.9cm) 色調 淡褐色 焼成 良好	成形 ロクロ 外底部四輪条切り	胎土 砂粒、雲母、赤色小粒含む
18	土製品 小型七輪か?	法量 器高(4.2cm) 色調 灰褐色 焼成 良好	成形 輪積後ロクロ	胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む
19	温石	法量 長さ(5.8cm) 幅(7.7cm) 厚さ2.0cm 色調 灰色	成形 穿孔が1ヶ所 側面に切り出し痕	石材 滑石

表29 上部包含層出土遺物観察表(2)

20	近世 壺	法量 口径6.2cm 類部径2.6cm 器高(7.7cm) 成形 ロクロ 脱土 灰褐色 砂粒含む 微気孔有り 釉薬 茶色不透明 内面に暗茶色 槌成 良好 調査 口縁に重ね焼きの痕有り
21	近世 土製品 七輪	法量 底径13.6cm 器高1.8cm 成形 ロクロ トレンチヘラ削り 穿孔が3ヶ所 釉土 サラリ、針状物質、雲母、鉄分含む 色調 灰褐色 烧成 良好 片面が焼けている
22	銭	皇宋通宝 北宋 初鑄1039 鎏書
23	銭	政和通宝 北宋 初鑄1111 鎏書
24	銭	元祐通宝 北宋 初鑄1086 行書

表30 上部包含層出土遺物観察表(3)

1	土師器 穿孔	法量 口径6.8cm 底径5.8cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部軽いナデ 釉土 底部中心と側面に1ヶ所穿孔有り 陶土 砂粒、針状物質、雲母含む ややきめ細かい 色調 橙色 焼成 良好
2	土師器	法量 口径7.2cm 底径4.25cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 釉土 サラリ、針状物質、雲母、赤色小粒、小石含む 色調 灰褐色 烧成 良好
3	土師器	法量 口径9.0cm 底径6.1cm 器高1.4cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 釉土 サラリ、針状物質、赤色小粒含む 色調 橙色 烧成 良好
4	土師器	法量 口径13.6cm 底径7.1cm 器高3.6cm 成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 釉土 サラリ、針状物質、雲母含む 色調 灰褐色 烧成 良好
5	土師器	法量 口径12.9cm 底径7.8cm 器高3.45cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 釉土 サラリ、シルト岩粒、針状物質、赤色小粒、雲母含む 色調 灰褐色 烧成 良好
6	土師器	法量 口径12.3cm 底径7.4cm 器高2.95cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 釉土 サラリ、シルト岩粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む 色調 灰褐色 烧成 良好
7	土師器	法量 口径14.2cm 底径8.3cm 器高3.0cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 釉土 サラリ、シルト岩粒、針状物質、雲母含む 色調 灰褐色 烧成 良好
8	土師器	法量 口径15.4cm 底径9.8cm 器高3.45cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 釉土 サラリ、小石、針状物質、雲母含む 色調 灰褐色 烧成 良好
9	吉備系土器	法量 器高(1.7cm) 成形 ロクロ 陶土 サラリ、小石含む 粗い 色調 白褐色 烧成 良好
10	瓦質 火鉢	法量 器高(5.5cm) 成形 梱積後ロクロ 口縁部、外部へラ磨き 陶土 灰白色瓦質 サラリ含む やや きめ細かい 色調 灰黑色 烧成 良好
11	渥美 こね跡	法量 器高(4.1cm) 成形 梱積後ナデ 陶土 サラリ、小石含む 色調 淡灰褐色 烧成 良好
12	備前 すり鉢	法量 器高(6.5cm) 成形 梱積後ナデ 内面に条線1束7本 陶土 暗灰褐色 小石、砂粒含む 色調 暗灰褐色 烧成 普通
13	常滑 壺	法量 口径(22.0cm) 器高(8.3cm) 成形 梱積 口縁部、頸部ナデ 内外面擦痕 釉土 暗灰褐色 サラリ、小石含む ややきめ細かい 色調 暗灰褐色 口縁と肩部に少量の降灰 烧成 普通
14	常滑 壺	法量 口径(12.0cm) 底径(10.0cm) 器高(25.0cm) 成形 梱積 口縁部、頸部ナデ 外面下位鏡方向へ ナデ 陶土 灰色 サラリ、小石含む ややきめ細かい 色調 暗灰褐色 烧成 普通
15	常滑 壺	法量 底径16.3cm 器高(3.2cm) 成形 梱積 外面下位鏡方向へラ削り 内面ナデ 釉土 灰茶色 サラリ、小石含む 微気孔有り 色調 灰茶色～暗褐色 内側面に少量の降灰 烧成 普通
16	常滑 こね跡	法量 口径30.2cm 器高(3.8cm) 成形 梱積後ナデ 陶土 暗灰色 小石、砂粒。長石含む 色調 茶色 烧成 普通
17	常滑 こね跡	法量 底径16.5cm 器高(7.0cm) 成形 梱積後ナデ 陶土 淡褐色 小石、砂粒。長石含む 色調 茶色 内面に降灰 烧成 やや不良
18	常滑 こね跡	法量 器高(4.8cm) 成形 梱積 口縁部ナデ 陶土 灰黑色 サラリ、小石。長石含む 色調 茶褐色 内面に降灰 烧成 普通

表31 炭化層上面出土遺物観察表(1)

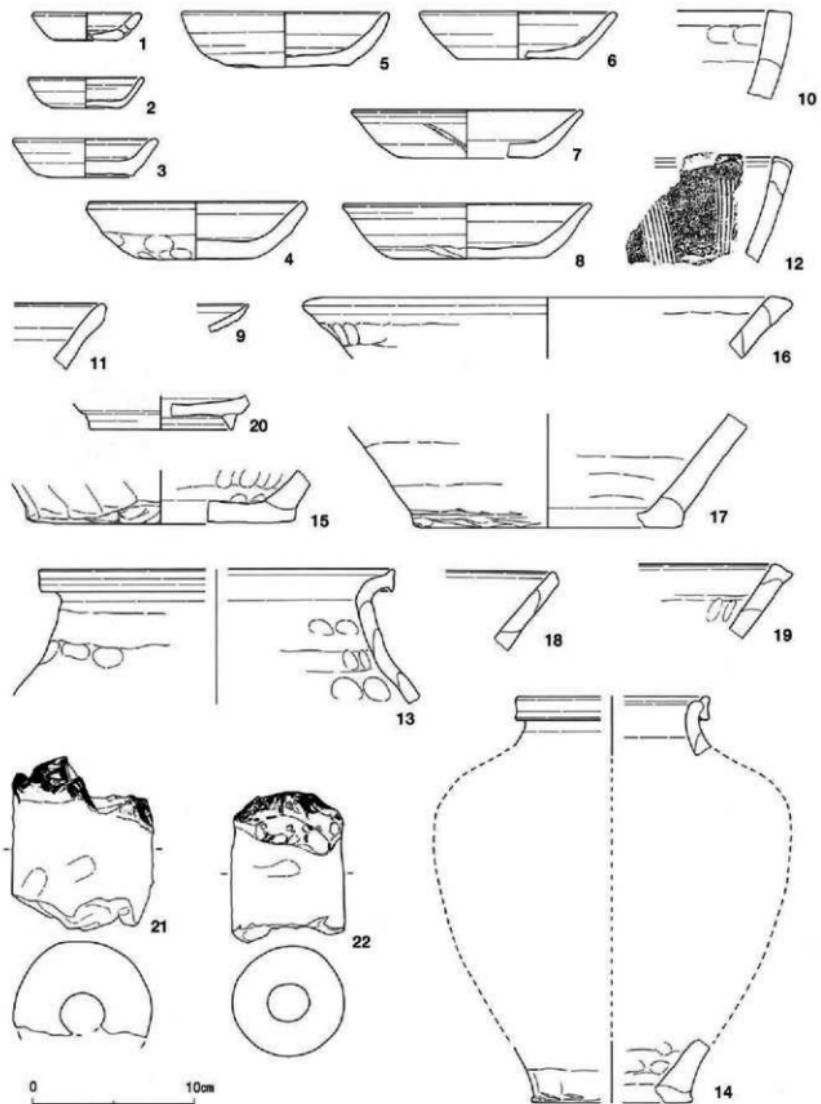


图30 炭化层上面出土遗物（1）

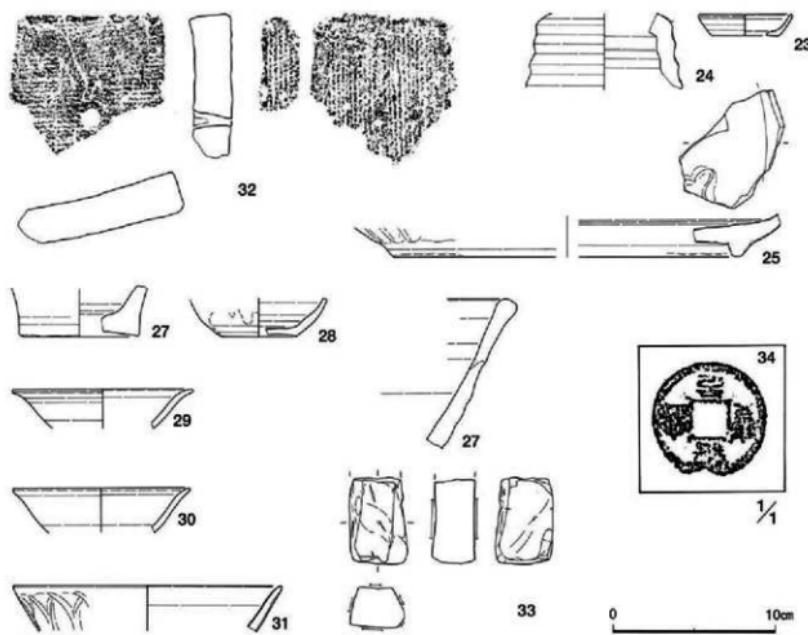


図31 炭化層上面出土遺物（2）

19 常滑 こね鉢	法量 器高 (4.5cm) 色調 茶色～茶褐色	成形 輪積 口縁部ナデ 焼成 普通	胎土 暗灰色 砂粒、小石、長石含む
20 常滑 山茶碗	法量 底径8.9cm 器高 (3.1cm) 胎土 暗灰色 小石含む	成形 ロクロ 外底部間隔糸切り 色調 茶褐色 焼成 良好	高台貼り付け
21 薩羽口	法量 長さ (10.7cm) 径8.5cm 内径2.75cm 胎土 砂粒、雲母含む	成形 棒に粘土を巻いて成形 色調 灰褐色～灰褐色	指頭痕有り 焼成 良好
22 薩羽口	法量 長さ (9.3cm) 径6.85cm 内径2.6cm 胎土 砂粒、雲母、赤色小粒含む	成形 棒に粘土を巻いて成形 色調 灰褐色	指頭痕有り 焼成 良好
23 瀬戸 入れ子	法量 口径5.8cm 底径4.1cm 器高1.85cm 胎土 淡灰色 キメ細かい	成形 ロクロ 外底部間隔糸切り 色調 淡灰色	内面に微量の降灰 焼成 良好
24 瀬戸 瓶子蓋	法量 器高 (4.7cm) 胎土 灰色半透明 貫入有り	成形 ロクロ 外面上に施釉	胎土 灰色 小石、砂粒含む 気孔有り 焼成 良好
25 瀬戸 鉢	法量 底径 (21.4cm) 器高 (2.6cm) 胎土 橙色 キメ細かい 気孔有り	成形 ロクロ 高台削り出し 釉薬 淡灰褐色不透明 覆付き施釉	文様 内底面双魚文 外面蓮弁文 焼成 不良
26 山茶碗窓系 こね鉢	法量 器高 (9.2cm) 焼成 良好	成形 輪積後ロクロ	胎土 砂粒、小石含む ややキメ細かい 色調 灰色
27 綠褐色 蓋	法量 底径7.4cm 器高 (3.0cm) 胎土 鐵輪不透明 外面に施釉	成形 ロクロ 無高台 内面に施塗れ	胎土 灰色～灰褐色 小石含む キメ細かい 焼成 良好
28 舶載品 茶入れ	法量 底径4.6cm 器高 (2.5cm) 胎土 鐵輪不透明 外面中位まで付け掛け	成形 ロクロ 胎土 暗灰色～茶色 キメ細かい 焼成 良好	

表32 炭化層上面出土遺物観察表（2）

29	白 磁 口元皿	法量 口径11.2cm 器高(2.4cm) 輪縁 灰白色半透明 口縁部露胎	成形 ロクロ 口縁部外反 焼成 良好	素地 灰白色 砂粒含む
30	白 磁 口元皿	法量 口径11.0cm 器高(2.7cm) 輪縁 灰白色半透明 口縁部露胎	成形 ロクロ 口縁部やや外反 焼成 良好	素地 白色 砂粒含む
31	青 磁 龍泉窯 碗	法量 口径16.6cm 器高(2.8cm) 素地 灰白色 砂粒含む 気孔有り	成形 ロクロ 文様 外面推進力 輪縁 灰綠色半透明	燒成 良好
32	平 瓦	法量 長さ(8.9cm) 幅(10.1cm) 厚さ2.2cm 釉土 灰褐色瓦質だが砂質 小石を多く含む かなり粗い 備考 背面、側面に文様がある。穿孔がある。円弧が殆ど無い。 磚か役瓦か。	成形 凸面縁目 凹面横位の開口 開口縁目 寸孔1~所	色調 灰黒色 焼成 良好
33	磁 石	法量 長さ(5.2cm) 幅3.5cm 厚さ2.4cm 備考 中底 5面が磁石	产地 上野?	色調 淡灰綠褐色
34	錢	照寧元宝 北宋 初鑄1068 篆書		

表33 炭化層上面出土遺物觀察表(3)

1	土師器	法量 口径8.4cm 底径6.0cm 器高1.6cm 釉土 砂粒、小石、針状物質含む	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 淡灰褐色	焼成 良好
2	土師器	法量 口径7.9cm 底径4.5cm 器高1.7cm 釉土 砂粒、小石、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 淡橙色	焼成 良好 備考 完形
3	土師器	法量 口径8.1cm 底径5.5cm 器高1.8cm 釉土 砂粒、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 灰褐色	焼成 良好 備考 完形
4	土師器	法量 口径7.5cm 底径4.5cm 器高2.2cm 釉土 砂粒、小石、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 淡橙色 スス付着	焼成 良好 備考 完形
5	土師器 灯明皿	法量 口径6.4cm 底径4.2cm 器高2.3cm 釉土 砂粒、小石、針状物質 蝶母、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 暗緑色	焼成 良好
6	土師器 灯明皿	法量 口径8.4cm 底径5.6cm 器高1.9cm 釉土 砂粒、針状物質、蝶母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 淡灰褐色	焼成 良好
7	土師器	法量 口径12.4cm 底径9.4cm 器高2.6cm 釉土 砂粒、小石、針状物質含む やや粗い	成形 ロクロ 外底部ナデで糸切り痕を消す 内底部ナデ 色調 灰褐色	焼成 良好
8	土師器	法量 口径11.8cm 底径6.0cm 器高3.55cm 釉土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 橙色	焼成 良好
9	土師器	法量 口径11.7cm 底径7.0cm 器高3.1cm 釉土 砂粒、小石、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色	焼成 良好
10	土師器 白色系	法量 口径(14.0cm) 器高(2.8cm) 釉土 砂粒含む ややきめ細かい	成形 手づくね 口縁部ナデ 色調 白褐色	焼成 良好
11	土師器	法量 口径13.4cm 底径8.22cm 器高4.2cm 釉土 砂粒、小石、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色	焼成 良好
12	土師器 白色系	法量 口径5.6cm 腹部径6.2cm 器高(1.2cm) 釉土 砂粒、小石含む ややきめ細かい	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 白褐色	焼成 良好
13	鉢 付 土 瓢	法量 口径20.3cm 器高(3.3cm) 釉土 砂粒、小石含む	輪積 内面指頭痕 外面横方向帶齒狀工具痕 色調 淡灰褐色	スス付着 焼成 良好
14	龜 山 瓢	法量 口径(25.0cm) 器高(5.7cm) 釉土 砂粒、小石含む	輪積 口縁部、内面ナデ 外面格子の叩き目 色調 増灰色	焼成 普通
15	常滑 磁口壺 (2破片)	法量 口径5.6cm 腹部径5.0cm 底径7.0cm 器高(4.0cm) 釉土 灰色 砂粒、小石、長石含む	成形 輪積後ナデ 内面指頭痕有り 色調 黒灰色~茶褐色	口縁と背面に陥灰 焼成 普通
16	常滑 瓷	法量 口径23.9cm 器高(3.0cm) 色調 暗灰褐色 口縁部に陥灰	輪積後ナデ 焼成 普通	粘土 灰色 小石、長石含む

表34 炭化層出土遺物觀察表(1)

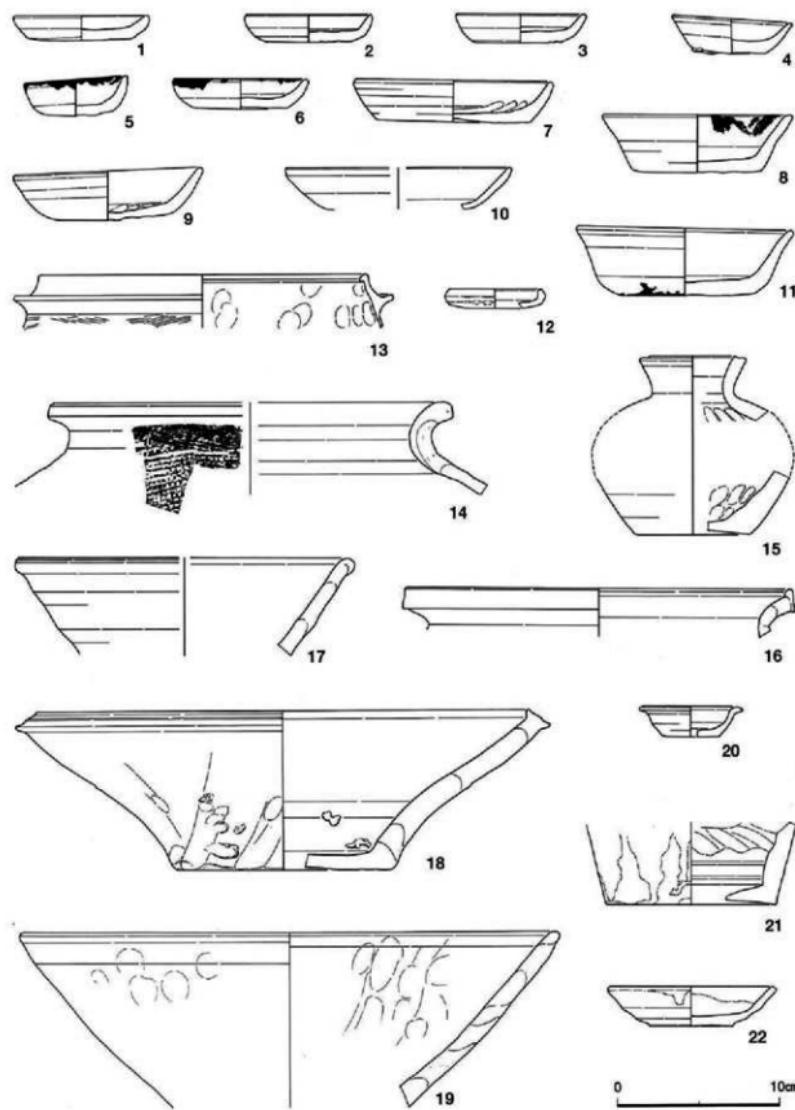


图32 炭化层出土遗物（1）

17	常滑 こね鉢	法量 口径(21.0cm) 器高(5.9cm) 色調 黒褐色 寸法 口縁と内面に降灰	成形 輪積後ナデ 胎土 灰黒色 小石、長石含む 気孔有り 焼成 普通
18	常滑 こね鉢	法量 口径33.6cm 底径14.0cm 器高9.7cm 胎土 灰黒色 小石、長石、砂粒含む 寸法 色調 茶褐色 内面に少量の降灰	成形 輪積 口縁部、内面ナデ 外面下位へラ当て 胎土 灰色 小石、長石、砂粒含む 焼成 普通
19	常滑 こね鉢	法量 口径33.4cm 器高(10.8cm) 色調 茶色 内面に降灰 寸法 烧成 普通	成形 輪積 口縁部、内面ナデ 胎土 灰色 小石、長石、砂粒含む
20	瀬戸 小皿	法量 口径6.4cm 底径3.8cm 器高1.86cm 胎土 淡灰褐色 微気孔有り キメ細かい 寸法 色調 茶褐色 内面に降灰が著しい	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 口縁部外反 胎土 無釉 内面に降灰が著しい 焼成 良好
21	瀬戸 皿子	法量 底径10.5cm 器高(5.0cm) 胎土 灰褐色透明 買入有り 外面に施釉 寸法 色調 茶褐色透明	成形 ロクロ 内面ナデ 胎土 淡灰褐色 小石含む 気孔有り 焼成 良好
22	瀬戸 皿	法量 口径10.4cm 底径5.2cm 器高2.45cm 胎土 灰褐色 砂粒 小石含む 寸法 色調 茶褐色不透明 口縁から内面にかけ施釉 備考 スス付着	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部軽いナデ 胎土 無釉 内面に降灰 焼成 良好
23	山茶碗	法量 口径15.0cm 底径5.0cm 器高5.4cm 胎土 小石、砂粒 長石含む 寸法 色調 灰色	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 高台貼り付け 胎土 灰色 焼成 良好
24	山茶碗窓系 こね鉢	法量 底径14.0cm 器高(6.7cm) 胎土 砂粒 小石、長石含む 寸法 色調 灰褐色	成形 輪積 内面ナデ 外面下位へラ削り 高台貼り付け 胎土 灰色 焼成 良好
25	山茶碗窓系 こね鉢	法量 口径21.2cm 底径11.8cm 器高9.1cm 胎土 砂粒 小石、長石含む 寸法 色調 灰色	成形 輪積後ナデ 高台貼り付け 胎土 灰色 内面に降灰 焼成 良好
26	白磁 口兜	法量 口径(12.0cm) 器高(2.5cm) 胎土 灰白色半透明 口縁部露胎 寸法 色調 灰褐色	成形 ロクロ 器壁が直立ぎみ 素地 白色 微気孔有り 胎土 灰色 半透明 施釉 焼成 良好
27	白磁 皿	法量 口径(11.4cm) 器高(1.9cm) 胎土 灰色透明 寸法 色調 灰色	成形 ロクロ 外面へラ削り 素地 灰色 キメ細かい 胎土 灰色透明 焼成 良好
28	青磁 龍泉窓折縫鉢	法量 口径14.0cm 底径6.4cm 器高4.5cm 胎土 砂粒含む 気孔有り 寸法 色調 灰色	成形 ロクロ 高台削り出し 文様 外面単蓮弁 胎土 砂粒含む 気孔有り 焼成 良好 二次焼成を受ける
29	青磁 龍泉窓折縫鉢	法量 口径(14.0cm) 底径(5.8cm) 器高(4.6cm) 胎土 砂粒含む 寸法 色調 灰色半透明 気泡有り 罩付露胎	成形 ロクロ 高台削り出し 素地 灰白色 砂粒含む 胎土 灰色半透明 焼成 良好
30	青磁 龍泉窓 瓢	法量 口径(16.0cm) 器高(4.4cm) 胎土 砂粒含む 寸法 色調 灰色	成形 ロクロ 文様 外面複蓮弁 胎土 砂粒含む 灰色半透明 焼成 良好
31	青磁 龍泉窓 瓢	法量 口径(16.3cm) 器高(3.7cm) 胎土 砂粒含む 寸法 色調 灰色	成形 ロクロ 文様 外面複蓮弁 胎土 砂粒含む 気孔有り 灰色半透明 焼成 良好
32	青磁 龍泉窓 瓢	法量 底径5.4cm 器高(2.9cm) 胎土 素地 寸法 色調 灰色 キメ細かい	成形 ロクロ 高台削り出し 文様 外面複蓮弁 内底面蓮華文押印 胎土 素地 内面灰綠色透明 外面緑褐色透明 高台内露胎 焼成 良好
33	青磁 龍泉窓 瓢	法量 底径5.2cm 器高(1.6cm) 胎土 素地 寸法 色調 灰白色 気孔有り	成形 ロクロ 高台削り出し 文様 内底面蓮華文押印 胎土 素地 灰褐色半透明 高台内露胎 焼成 良好
34	青磁 龍泉窓 瓢	法量 底径4.8cm 器高(2.7cm) 胎土 素地 寸法 色調 灰青色半透明 高台内露胎	成形 ロクロ 高台削り出し 素地 灰白色 キメ細かい 胎土 素地 灰青色半透明 高台内露胎 焼成 良好
35	青白磁 平口 盆	法量 腹部径2.2cm 器高(4.2cm) 胎土 淡水青色透明 気泡有り 寸法 色調 淡水青色透明 内外面施釉	成形 型押し 耳部貼り付け 素地 白色 微気孔有り 胎土 淡水青色透明 気泡有り 内外面施釉 焼成 良好
36	青白磁 広口小壺蓋	法量 口径9.2cm 器高(1.8cm) 胎土 淡水青色透明 外面に施釉 寸法 色調 淡水青色透明 外面に施釉	成形 型押し 文様 上部蓮弁文 素地 白色 気孔有り 胎土 淡水青色透明 外面に施釉 焼成 良好
37	鉢	法量 器高(2.6cm)	
38	鉢	熙寧元宝 北宋 初鑄1068 絹書	
39	鉢	政和通宝 北宋 初鑄1111 絹書	
40	鉢	聖宋元宝 北宋 初鑄1101 行書	
41	温石	長さ10.8cm 幅7.6cm 厚さ2.2cm 石材 温石	成形 ノミ底有り 穿孔1ヶ所 色調 灰色

表35 炭化層出土遺物觀察表 (2)



図33 炭化層出土遺物(2)

42	砥石	法量 長さ(4.8cm) 幅3.8cm 厚さ(0.4cm) 砥面 側面に切り出しが有り	产地 北関東?	色調 灰色	備考 仕上砥 上面が
43	土器	法量 長さ6.0cm 最大径2.1cm 内径0.6cm 胎土 針状物質含む きめ細かい	成形 棒に粘土を巻いて成形	指頭痕有り	
44	土器	法量 長さ(3.9cm) 最大径1.4cm 内径0.4cm 胎土 針状物質含む きめ細かい	成形 棒に粘土を巻いて成形	指頭痕有り	

表36 炭化層出土遺物観察表(3)

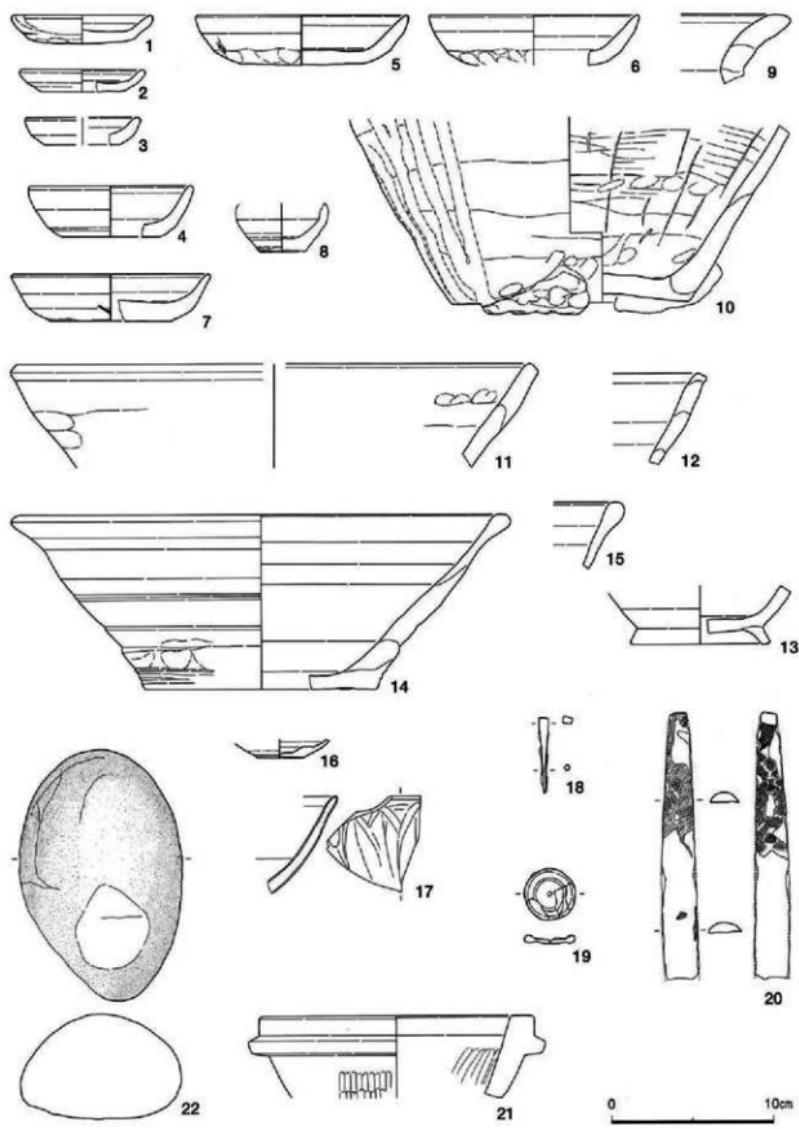


図34 下部包含層出土遺物

1	土師器	法量 口径8.7cm 底径5.0cm 器高1.8cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、金雲母含む	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 暗灰橙色	焼成 良好
2	土師器	法量 口径7.8cm 底径5.2cm 器高1.4cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底面部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 暗灰橙色	焼成 良好
3	土師器	法量 口径(7.2cm) 底径(4.6cm) 器高1.7cm 胎土 砂粒、針状物質含む	成形 ロクロ 外底面部回転糸切り 内底部ナデ 色調 橙色	焼成 良好
4	土師器	法量 口径10.2cm 底径6.0cm 器高3.2cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む ややきめ細かい	成形 ロクロ 外底面部回転糸切り 板状圧痕有り 色調 灰橙色	焼成 良好
5	土師器	法量 口径13.2cm 底径7.4cm 器高3.1cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 外底部板状圧痕有り 色調 橙色	焼成 良好
6	土師器	法量 口径13.0cm 器高(3.1cm) 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 手づくね 口縁部、内底部ナデ 色調 灰橙色	焼成 良好
7	土師器	法量 口径12.3cm 底径7.6cm 器高2.9cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底面部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 橙色	焼成 良好
8	土製品	法量 底径3.0cm 器高(3.2cm) 胎土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む ややきめ細かい	成形 ロクロ 外底面部回転糸切り 色調 淡橙色	焼成 良好
9	溜 美 甌	法量 器高(4.3cm) 成形 輪積 口縁部ナデ 胎土 灰色 砂粒、小石、長石含む 釉薬 黒色不透明 ハケ塗り	胎土 灰色 砂粒、小石、長石含む 焼成 雪道	
10	常 滑 甌	法量 底径14.6cm 器高(11.0cm) 色調 暗灰色 緑褐色の自然釉の流下が著しい	成形 輪積後ナデ 胎土 灰色 砂粒、小石、黒色小粒含む 気孔有り 焼成 普通 備考 外底部に焼成時の結晶に使った陶片が付着	
11	常 滑 こね鉢	法量 口径(32.6cm) 器高(6.3cm) 色調 暗茶色 内面に少量の降灰	成形 輪積 口縁部ナデ 胎土 灰色 小石、砂粒、黒色小粒含む 焼成 普通	
12	常 滑 こね鉢	法量 器高(5.6cm) 成形 輪積 口縁部ナデ 色調 茶褐色 焼成 普通	胎土 暗灰色 小石、砂粒、黒色小粒含む 焼成 良好	
13	瀬 戸 四耳壺	法量 底径8.6cm 器高(3.7cm) 色調 きめ細かい 微気孔有り 釉薬 灰綠褐色半透明	成形 ロクロ 外底部へラ調整 高台貼り付け 胎土 砂粒、小石、長石含む 気孔有り 外面にハケ塗り 焼成 良好 備考 内面に少量の降灰	
14	山茶碗窯系 こね鉢	法量 口径30.8cm 底径14.4cm 器高10.8cm 色調 灰色 焼成 良好	成形 輪積後ロクロ 胎土 砂粒、小石、黒色小粒含む	
15	山茶碗窯系 こね鉢	法量 器高(4.2cm) 成形 輪積後ロクロ 焼成 良好	胎土 砂粒、小石、長石含む 気孔有り 色調 灰色	
16	舶載品 茶入れ	法量 底径2.9cm 器高(1.2cm) 釉薬 暗茶褐色不透明 外面上位に施釉	成形 ロクロ 外底面部回転糸切り 焼成 良好	素地 茶色 きめ細かい
17	青 磁 龍泉窯 甌	法量 器高(5.8cm) 成形 ロクロ 釉薬 灰綠青色半透明 焼成 良好	文様 外面復讐弁 素地 淡灰色 気孔有り	
18	鉄製品 刃	法量 長さ(4.6cm) 幅0.6cm 厚さ0.4cm		
19	鉄製品 不明	法量 径3.2cm 中心部厚さ0.2cm 外縁部厚さ0.45cm	備考 絹いので中空か?	混入か?
20	鉄製品 やすり	法量 長さ16.3cm 最大幅2.1cm 中心部厚さ0.6cm	備考 混入か?	
21	滑石錠	法量 口径17.0cm 器高(5.0cm)	成形 内外面にノミ痕有り	色調 灰色～灰褐色
22	石	法量 長さ15.5cm 幅10.0cm 厚さ6.5cm	石材 砂岩 色調 暗灰色	備考 上面に打欠いた様な痕有り

表37 下部包含層出土遺物観察表

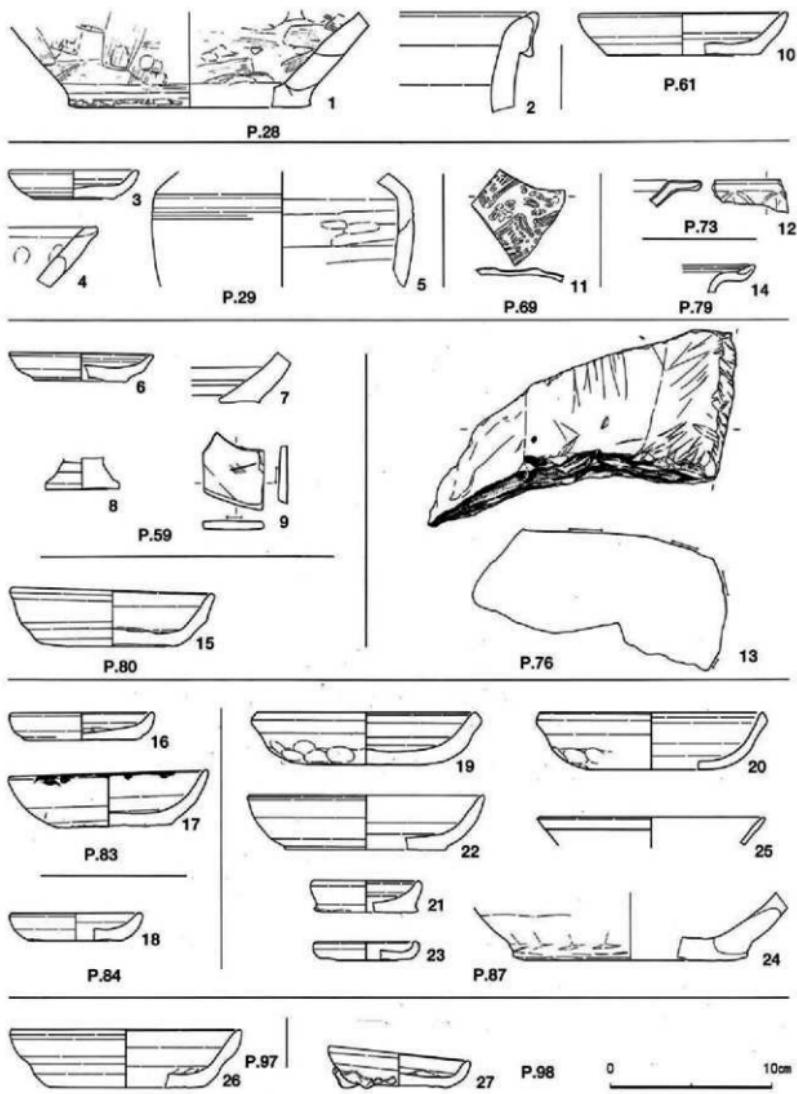


図35 その他遺構からの出土遺物

P 28	1	常滑 こね鉢	法量 底径15.0cm 器高(5.8cm) 胎土 明茶色 小石、長石、石英、黒色小粒含む	成形 輪積 内面横方向櫛目 外面縦方向櫛目 外底縦方向櫛目 外面明茶色 内面暗茶色 ス付着 焼成 普通
	2	常滑 要	法量 器高(6.2cm) 色調 赤褐色 □縁に少量の降灰	成形 輪積 □縁部ナデ 胎土 灰色 小石、長石含む 気孔有り
P 29	3	土師器	法量 口径8.0cm 底径5.1cm 器高1.8cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
	4	常滑 こね鉢	法量 器高(3.7cm) 胎土 茶色 砂粒、小石、長石含む	成形 輪積み □縁部ナデ 外面横方向櫛状工具痕 色調 外面茶褐色 内面暗茶色 焼成 普通
	5	常滑 要	法量 腹部径16.1cm 器高(7.1cm) 色調 暗茶褐色 角部に降灰	成形 輪積後ナデ 胎土 灰黑色 砂粒、小石、長石含む 焼成 普通
P 59	6	土師器	法量 口径8.8cm 底径5.8cm 器高1.7cm 胎土 砂粒、針状物質、シルト岩粒、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好 二次焼成を受ける
	7	常滑 こね鉢	法量 器高(3.1cm) 色調 茶灰色 内面に微量の降灰	成形 輪積 内面ナデ 胎土 灰色 砂粒、小石、黒色小粒含む きめ細かい 焼成 普通
	8	瀬戸 仏草瓶	法量 底径4.6cm 腹部径2.45cm 器高(1.9cm) 石含む 気孔有り 胎芯部灰褐色	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 胎土 灰色 小 輪葉 灰綠色半透明 外底部露胎 焼成 良好 二次焼成を受ける
	9	砥石	法量 長さ(4.9cm) 幅3.75cm 厚さ0.5cm 備考 住上砥 2面が砥面	産地 滝浦 色調 灰褐色
P 61	10	土師器	法量 口径13.0cm 底径9.2cm 器高2.6cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒。シルト岩粒含む やや粗い	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 淡橙色 焼成 良好
P 69	11	青白磁 合子蓋	成形 型入れ 天井部ナデ 素地 淡灰褐色 小石含む ややきめ細かい 胎葉 灰青色半透明 一部白濁する 外面に付け掛け 焼成 良好	
P 73	12	青磁 蓮弁文鉢	法量 器高(1.7cm) 胎葉 灰青色不透明 貫入有り	成形 ロクロ 文様 外面單蓮弁 素地 灰白色 気孔有り 焼成 良好
P 76	13	砥石	法量 長さ(9.2cm) 幅(19.0cm) 厚さ(11.0cm) 備考 中砥 3面が砥面 使用感が多く残る ス付着	産地 天草 色調 灰褐色～黄褐色 繊状に赤色
P 79	14	南伊勢系 土鍋	法量 器高(1.6cm) 色調 淡灰褐色 胎芯部暗灰色	成形 輪積後ナデ 胎土 砂粒、小石、雲母含む
P 80	15	土師器	法量 口径12.6cm 底径8.5cm 器高3.5cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、赤色小粒含む やや粗い	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 ス付着 焼成 良好
P 83	16	土師器	法量 口径9.7cm 底径7.3cm 器高1.7cm 胎土 砂粒、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 淡橙色 焼成 良好
	17	土師器	法量 口径12.4cm 底径7.2cm 器高3.35cm 胎土 砂粒、小石、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 ス付着 焼成 良好
P 84	18	土師器	法量 口径8.0cm 底径5.8cm 器高1.7cm 胎土 砂粒、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
P 87	19	土師器	法量 口径14.2cm 底径7.2cm 器高3.2cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む ややきめ細かい	成形 手づくね □縁部、内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
	20	土師器	法量 口径16.8cm 底径10.6cm 器高3.5cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む やきめ細かい	成形 手づくね □縁部、内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好 二次焼成を受ける
	21	土師器	法量 口径7.0cm 底径6.0cm 器高1.95cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 灰褐色 焼成 良好
	22	土師器	法量 口径14.6cm 底径10.0cm 器高3.4cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む 粗い	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 淡橙色 焼成 良好
	23	土師器 内折れ	法量 口径6.6cm 腹部径6.6cm 底径3.6cm 器高1.15cm 胎土 砂粒、雲母、赤色小粒含む ややきめ細かい	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 胎土 砂粒、雲母、赤色小粒含む ややきめ細かい 色調 灰褐色 焼成 良好
	24	常滑 要	法量 口径14.4cm 器高(3.3cm) 色調 灰褐色 ス付着 内面に降灰	成形 輪積 外面下段ヘラあて 胎土 暗褐色 砂粒、小石含む 焼成 やや不良 二次焼成を受ける
	25	青磁	法量 口径14.0cm 器高(1.8cm) 素地 灰色 砂粒含む	成形 ロクロ 文様 外面口縁下沈線 内面画花文 胎葉 灰綠色半透明 内外施釉 焼成 良好

表38 その他遺構からの出土遺物観察表（1）

P 97	26	土師器	法量 口径14.2cm 底径8.2cm 器高3.6cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母、シリカ岩粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 淡灰橙色 焼成 良好
P 98	27	土師器	法量 口径8.6cm 底径5.6cm 器高2.1cm 胎土 砂粒、小石、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状压痕有り 内底部ナデ 余切り板の切り直し

表39 その他遺構からの出土遺物観察表（2）

## 第四章 まとめ

本調査は掘削深度に制限があり、着実な成果を得たとは言いがたい面もあるが、それでもこの一帯の数少ない調査のひとつとして資料に加えることができる。簡単にまとめておきたい。

### 1. 变遷と年代について

第三章の冒頭に書いたように、調査地点は大きく三つに分けることができる。すなわち、北半部地業面、中央段状部、南半部低位面である。これらはそれぞれ、掘立柱建物群のある場所、土壌・井戸などの群集する場所、遺構の疎らな場所と、遺構分布からも明瞭な相違がみられる。性格からみれば、居住域、境界域、そして川岸近くの性格不明域と呼ぶこともできよう。

年代が推定できるのは、出土遺物の多い中央段状部の土壌群で、鎌倉時代初期（土壌10）からはじめり、13世紀後半を盛期とする。北半部地業面上の掘立柱建物自体の年代は不詳だが、土壌群との組合せが想定できるので、年代的にも平行していることになる。南半部についても同様である。

遺跡の詳しい性格について論じることはできないが、川岸近くの遺構の少ない一帯について簡単に触れておきたい。

ここからは集石遺構や溝、土壌などが検出されている。出土遺物には転滓などがある。遺跡全体でも縄羽口の出土がかなり目立つことと合わせ、製鉄関連の施設が近くにあることは確実であろう。この点で注目されるのは、本文中でも指摘した通り、今小路西遺跡扇ガ谷一丁目131番1地点検出遺構との類似である。ここでも大量の破碎礫の集積と、接近して平行する2本の溝があり、大量の縄羽口が出土している。鎌倉鎧冶伝承地の庵地でもあり、まさに相当規模の製鉄関係施設が存在しているのは間違いない（馬淵1989－本文前出）。あるいは、礫の集積などが鋳造遺跡の目安になる可能性があるという鍛柄俊夫の指摘（鍛柄1993）に、2本の平行した溝も付け加えることができるかもしれない。

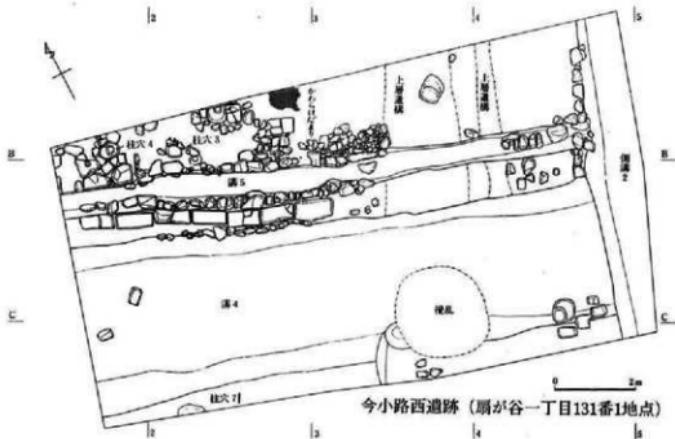


図36 類似遺構例

## 2. 便所遺構について

### はじめに

本文中でも書いたとおり、当遺跡で検出された土壙のうち土壙5・6・7・10などは、最近の研究成果に照らしてみると、便所である可能性が高い。これらの年代は、出土遺物からみて多く鎌倉時代前中期に属している。全国的にも当該期の便所遺構はきわめて少なく、本遺跡出土資料が稀な例であるのは確かであるが、近年鎌倉市内遺跡から、ほかにもいくつか便所の可能性を指摘できる遺構が検出されているので、ここでひとまず管見に入った遺構を集め、現段階での資料整理をおこなっておきたい。本地点検出例については本文を参照されたい。

### 事例紹介

#### a. 政所跡（宮田真他『政所跡』 政所跡発掘調査団 1991）

第2面土壙2・3・4に可能性が指摘できる。土壙2からは、側辺の一方に切れ込みの入った、踏板とおぼしい2枚の板が出土しており、3・4からは便所遺構に特徴的な自然遺物とされる小魚の骨・瓜科の種子などが出土しているからである。

3基は掘立柱建物群の南辺にいずれも近接して存在する。そのすぐ南側には横大路側溝が走っているので、この場所は居住域の縁辺に当たることが分かる。どの土壙からも土器・陶磁器類が出土しておらず年代を特定しにくいが、面の年代が手づくね成形土師器（土師器T種）の傾向からみておそらく13世紀前半までであり、土壙群もおそらくそのころに属していると考えられる。

遺跡は幕府政所に比定されている場所の南辺にあり、横大路にも面している。

土壙2は186cm×68cm、深さ50cmの細長い形状で、主軸をほぼ東西に持ち、掘立柱建物の一つと重複する。注目すべきは土壙中に落ち込んでいた2枚の板材で、いずれも一方の側辺の半ばに台形の切れ込みが入っている。この2枚の板の、切れ込みのある側辺同士を合わせると、ちょうど中央部に菱形の穴があく恰好になる。復元図に示したとおりである。穴の大きさは報文に書かれていらないが、写真などから判断するかぎり、20~30cmであろう。容易に想像できるように、これはおそらく便槽とその上にかけられた踏板であり、台形の切れ込みは排便時の落とし穴であろう。

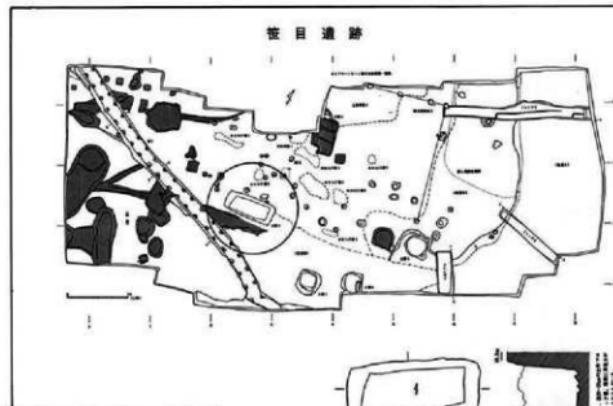
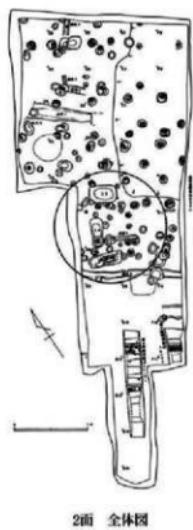
土壙3も主軸が東西にあり、156cm×94cm、深さ74cmで、箱形の断面形状を持つ。本址も掘立柱建物と重複する。下層に堆積した有機物混入土から瓜科やナス科の種子類が多く出土している。前記土壙2のような板材は出土していないが、以上のような自然遺物は便所遺構に特徴的な出土遺物とされるところから、本址も便所である可能性が高いと判断した。また下層の有機物混入土は、これまでにも鎌倉市内の中世土壙などで頻繁に確認されており、屋根葺き材の茅などと区別できれば、便槽に特有の堆積物として認定することができるのではないか。

土壙4は上記2土壙のあいだにあり、南北に主軸を持つ。164cm×50~70cm、深さ50cmで、断面はU字形である。堆積土中から土壙3同様、瓜科とナス科の植物種子のほか、小魚の骨が出土した。後者も前者同様、便所遺構に特徴的とされる自然遺物であるため、本址を便所と認めることができる。

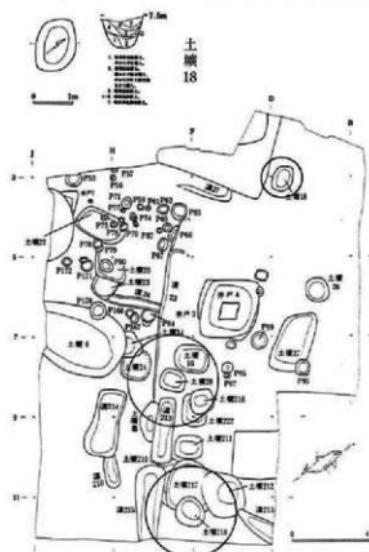
以上3基の状況について報告者宮田真は、位置の近接、形状の類似、土器類の出土のないこと、等の共通点に注目して次の点を指摘する。

すなわち、これらの土壙が同一者の手によって掘られたこと、比較的短期間内に連続して掘られたり埋められたりしたこと、である。

この指摘は、宮田がこの土壙群をゴミ穴と誤認しているにもかかわらず、おそらく正しい。というの



長谷小路周辺遺跡  
由比ヶ浜三丁目229番外地点



2面全体図

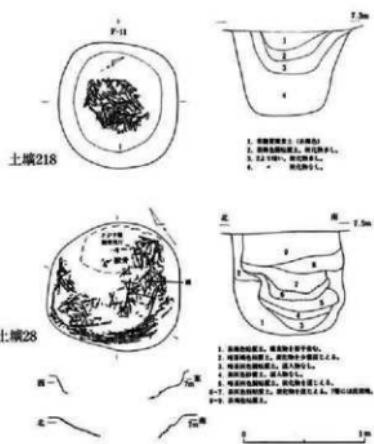


図37 篠倉市内における便所遺構類例

も、似たような状況は今回の米町遺跡（本地点）検出例でも認められるからである。これはあるいは、便所遺構に通有のあり方なのかもしれない。

b. 笹目遺跡（大河内勉『笹目遺跡発掘調査報告書』 笹目遺跡発掘調査団 1991）

報告者の大河内勉は、当遺跡のI区第1・2面土壤2が、一乘谷朝倉氏遺跡で検出されている便所に形状が類似しているところから、これもそうである可能性を指摘する。後述するような当該遺構周辺の状況からみて、その指摘は頗る。

遺跡中の相対年代ではII期（第2面）とIII期（第1面）にわたって使用されているという。岩盤を掘り下げて作られており、東西3.25m×南北1.4m、深さ1.9mと、政所や本地点報告よりふたまわりほども大きい。平面は長方形で、断面は箱形をしており、壁面には「つるはし状」の荒い工具痕を残す。堆積土は、報告文によれば「一時的に人為的に埋め戻された土砂で、径20~30cmの土丹ブロックと一部黒色土が堆積している」という。

遺構の属するII・III期の年代は、報文ではそれぞれ14世紀初頭・14世紀前葉中心とされているが、13世紀後葉と14世紀前半とするのが妥当なところだろう。遺跡の性格は寺院址が想定されている。

さて周囲の遺構分布状況をみてみよう。III期のほうは周辺に明確な建物などが認められないが、柱穴のいくつか存在する一帯が確かにあり、本址はその南側の境界域に位置する。建物との配置関係がよく分かるのはII期である。本址より北側には数棟の掘立柱建物や布掘り柱穴列などがあるのに対し、南側は明らかに屋敷地縁辺の、遺構のない場所になる。つまりここでも、境界域にある。注目すべきは本址のすぐ北側にある柱穴列で、主屋から本址を隠蔽するように並んでいる。この状況もあるいは、本址が便所であることの傍証になろうか。

c. 長谷小路周辺遺跡——由比ヶ浜三丁目229番外——（宗臺秀明『長谷小路周辺遺跡——由比ヶ浜三丁目229番外』 長谷小路周辺遺跡発掘調査団 1994）

2面のいくつかの土壤に、可能性が認められる。遺跡地は都市鎌倉の縁辺、いわゆる「前浜」と呼ばれる海岸砂丘地帯にある。面の年代は13世紀中葉とされているが、遺構個別では12世紀末～13世紀初頭のものや13世紀後半のものもあるよう見える。

I区土壤18は1×1.2mで深さ75cm、U字型の断面をもつ不整齊円形土壤である。本址の年代は常滑こね鉢（須恵質）や土師器T種の形態からみて、鎌倉時代初期、13世紀第1四半期以前だと考えられる。

ここからはタイ・マグロの歯骨・炭化米・種子などとともに、小魚（イワシ）の頭耳骨が出土している。ゴミ穴の可能性も依然消えないとはいえ、後者は便所遺構に特徴的とされる出土遺物であり、ゆえに蓋然性の高さを指摘しておきたい。そうすると、堆積土中に発見された「アンペラ様」とされる植物遺体についても、あるいは排便後の払拭具の集積である可能性も考えられるのではないか。もしそうであれば、同様の「アンペラ様の編みもの」の出土した土壤28と218についても、便所である可能性が高いことになる。海岸砂丘地帯は植物纖維が残りにくいのが残念だが、いずれにせよ前浜においても今後注意しておく必要があろう。

なおこの報告書中で宗臺が構と呼んでいる遺構のうちに、形の上からは明らかに土壤とすべきものも多く、そのなかに便所の可能性のあるものも認められるように思うが、ひとまず除外する。

### まとめと展望

以上、気付いた範囲でいくつかの便所遺構事例を紹介してきた。このほかにも最近筆者のもとには、名越ヶ谷遺跡（大町三丁目1271番1地点）などから可能性のある遺構の検出情報が寄せられている（菊

川英政示教)。おそらく過去の調査例のうちにも、注意してみれば例を抽出することが少なからずできるに違いない。中世都市における便所の検出は、住居のありかた、農村との互助体制など、さまざまの角度からの研究に大きな展望を開くが、ここでは以上の事例から特徴的な点を簡単にまとめておくにとどめる。

- ・形態や規模にさほど統一性があるわけではないこと。

このことはおそらく、適當な大きさを持つ穴でさえあれば便所として使用されたことを示すが、そればかりでなく次の点にも関連する。

- ・群集する傾向があること。

a例やc例、あるいは本調査例などにおいてこの傾向は明らかだが、このことは次のような事實を予想させる。すなわち、これらの穴はそれほど恒久的な施設ではなく、一杯になると隣に掘り直すことも多いのではないか。しかしこの点については逆に、b例のような単独例もあること、また群集するとはいえ、遺跡存続年代に比べ、1穴の容積からみて明らかに数が少なすぎると思えること、などの点から結論はもう少し慎重でいいたい。

ただし、単独で検出されたb例が、群集するa・c例よりも異例に大きく、しかも時代的に後出であることは注意してよい。それは長期使用に耐え、しかも、いまでもなく大量の蓄糞が可能であることを示すが、同時に次のような展望をも導くからである。

木村茂光は鎌倉時代中期から畿内の都市周辺で、畠作に施肥がおこなわれた可能性を指摘する(木村1992)。当初家畜糞が用いられ、次第に人糞も加わっていったのであろう。それは、恒久的な蓄便施設の存在を前提とする。とすればあるいは、a・c例からb例への変化が、その過程を示している可能性もあるのではないか。つまり、人糞肥料を媒体にした都市と周辺農村との交換体系が、中世鎌倉一帯においては13世紀中葉ごろに形成されていったことも考えられるのではないか。

これ以上の憶測は慎まねばならない。最後に、あるいは便所構造に特徴かもしれない出土遺物を一点指摘しておこう。それは鎌倉市内の遺跡から時に出土する白っぽい板状の固形物で、しばしば板など平べったいものの圧痕をとどめる。筆者らがそのひとつを、株式会社日本ゼオンの化学分析室に分析を依頼したところ、カルシウムと脂肪などの凝固したものであるとの結果を得た(若宮大路周辺遺跡群出土資料——詳細は当該報告書掲載予定)。長く使われた便槽内面には糞尿中に含まれるカルシウム分などが厚く付着するが、分析資料がそれであり、平べったいものの圧痕はまさしく便槽内壁の痕跡であるとみて間違いない。そうするとこの白っぽい凝固物こそ、今後は何にも増して便所構造抽出の有力な手掛かりになる可能性があると考える。

### 3. 出土遺物

破片点数による出土遺物組成表を次頁以下に提示しておくので参考されたい。

#### 引用文献

- 木村茂光1992 「日本古代・中世畠作史の研究」 松倉書房 251~253頁  
鶴柄俊夫1993 「中世丹南における職能民の聚落遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集

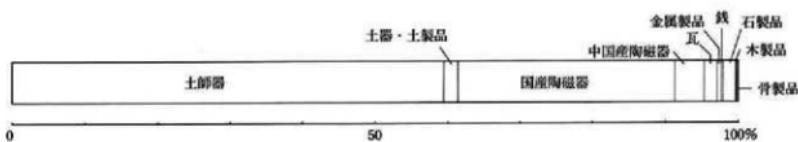


表40 調査区全体遺物構成

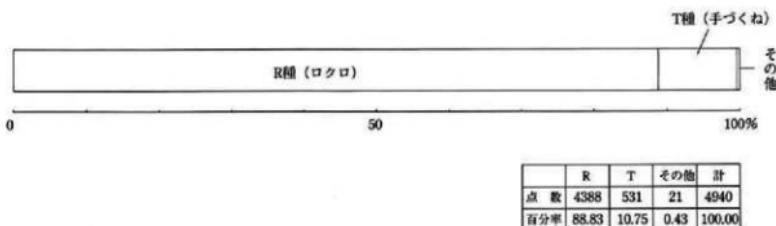


表41 土器器種構成



表42 国産陶磁器器種構成

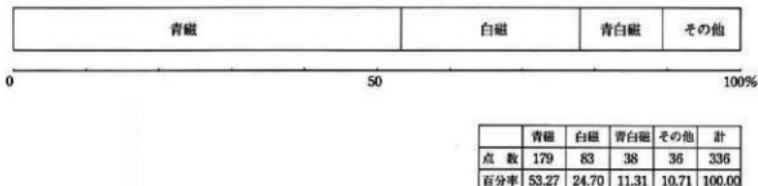


表43 中国産陶磁器器種構成

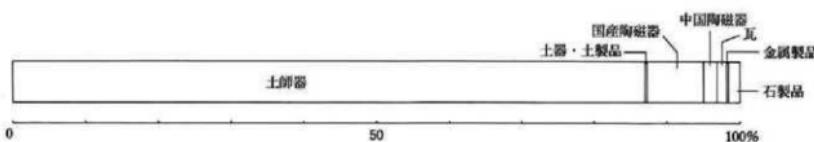


表44 土器類出土遺物構成

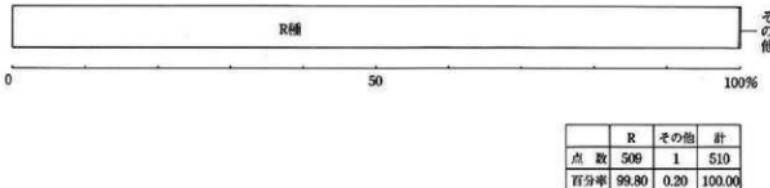


表45 同出土土器類技法別構成

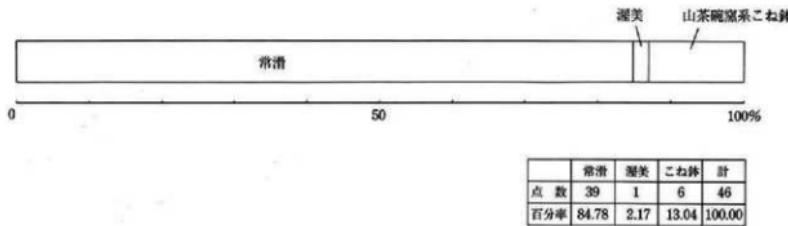


表46 同出土国产陶磁器器種構成

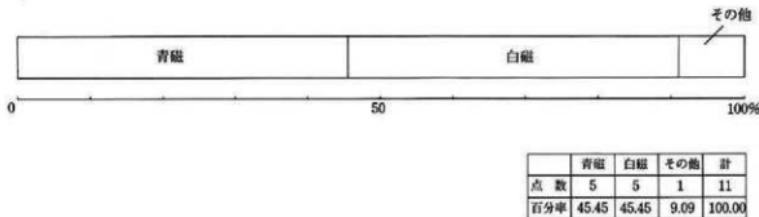


表47 同出土中国産陶磁器器種構成

調査地點から紙園山方面を望む



2

全景(南から)



図版2



1 土壌1(西から)

2  
摘要遺構



3  
土壌1内常滑窯口臺出土状況





4 土壌3(南から)



図版4



1 土壌7 潟戸卸皿出土状況

2 土壌9(西から)



3

土壌10(西から)

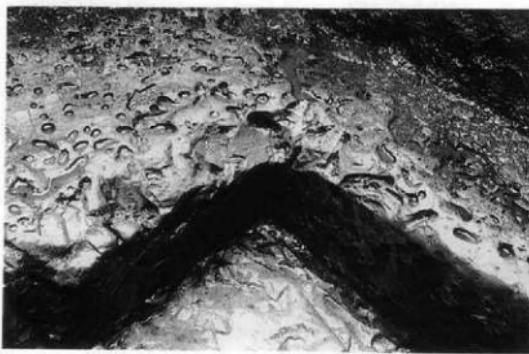




1  
井戸1(南から)



2  
井戸内竹出土状況



3  
井戸中段岩盤及詫合表面の  
貝殻生息

図版 6



1 溝1(北から)

2 溝3破碎岩充填状況



3 溝1北部分



図版8



図7建物1



図8建物3

図10土壤1

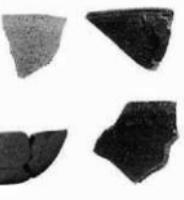


図10、11土壤2



図13土壤5・6

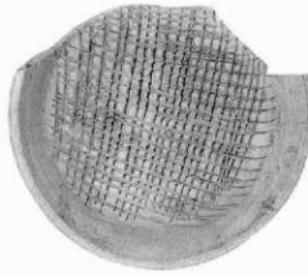


図13土壤7



図15土壤10



図16~18井戸1

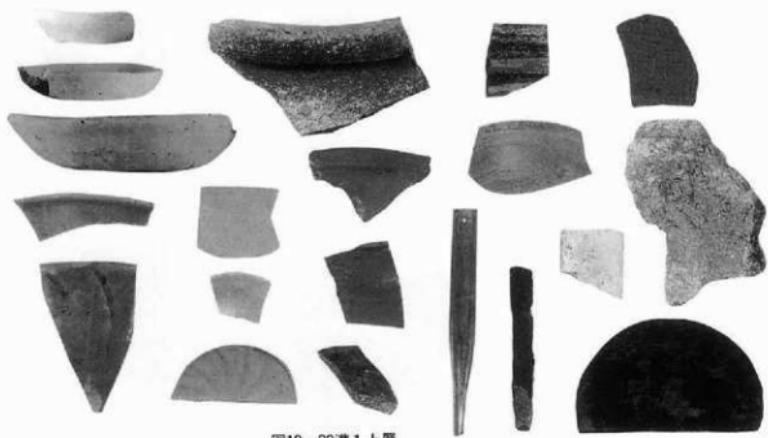


図19~22溝1 上層



図23溝1 下層

图版10



图24-25 满2



图26 满3

图27 据要



图28 土器埋纳穴

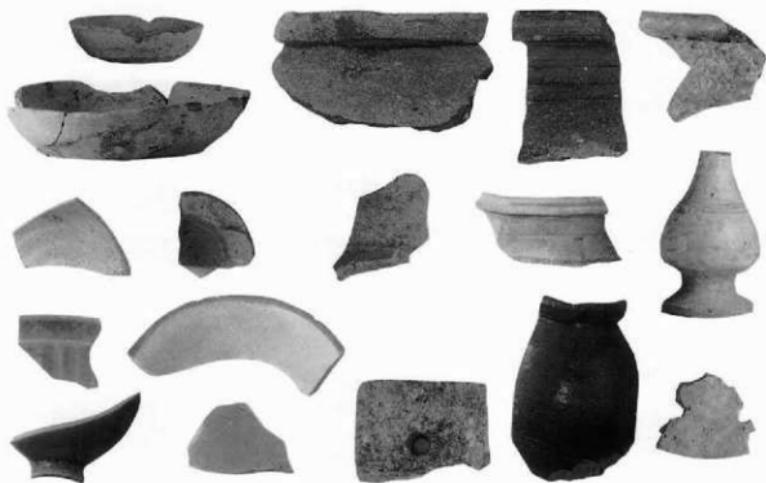


図29上部包含層



図30・31炭化層上面

図版12



図32・33炭化層



図34下部包含層



図35その他遺構

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名							
巻次	第1分冊						
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
シリーズ番号	11						
編集者名	菊川英政						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号						
発行年月日	西暦1995年3月						
ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
こめまちいせき 米町遺跡	神奈川県鎌倉市大町 二丁目	204	245		19930712～ 19930906	100	自己用住宅併用 共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
米町遺跡	中世都市遺跡	鎌倉時代	振立柱建物 礎石建物 溝・井戸・土壙・振築 集石・かわらけ埋納穴	3棟 1棟 かわらけ、常滑、古瀬戸、中国陶磁器、鉄製品、土製品、木製品等	鎌倉時代前期の便所遺構を検出。 テンバコ35箱		

4. 名越ヶ谷遺跡 (No. 231)

大町三丁目1217番1地点

## 例　　言

1. 本報は鎌倉市大町三丁目1217番1地点に所在する遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査期間は1993年7月7日～8月24日まで、調査面積は約 200m<sup>2</sup>である。
4. 本報の執筆・編集は菊川が行い、遺物実測には石丸運人、山本直孝の協力を得た。
5. 本報に使用した写真は、遺構を菊川が、遺物を石丸が撮影した。
6. 調査体制は以下の通りである。

主任調査員 菊川英政

調査員 石丸運人・野本賢二

調査協力者 佐藤仁彦・明木文吾・小林重子・浜野洋一・橋場君男・青木綾子・蒲谷由利子・穂山千恵子・山本直孝（遺物整理）

協力機関名 （社）鎌倉市シルバー人材センター

（株）戸井田工務店

7. 出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

※ 調査に際し施主・今村広司氏の御理解と御協力を賜ったことに厚く御礼申し上げ、記して感謝の意を表したい。

## 本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	145
第二章 調査の概要 .....	146
1. 調査の経過 .....	146
2. 調査方法 .....	146
3. 堆積土層と生活面 .....	147
第三章 検出された遺構 .....	149
1. 上層遺構群 .....	149
2. 下層遺構群 .....	151
第四章 出土遺物 .....	158
第五章まとめ .....	175

## 挿図目次

図1 調査地点位置図 .....	144
図2 グリッド設定図 .....	147
図3 試掘土層図 .....	147
図4 土層堆積図 .....	148
図5 上層遺構群全体図 .....	150
図6 下層遺構群全体図 .....	152
図7 井戸1 .....	153
図8 井戸2・土壤4 .....	154
図9 土壌2 .....	155
図10 柱穴配置図 .....	156
図11 溝1出土遺物 .....	158
図12 南端遺物集中部の遺物 .....	159
図13 井戸1出土遺物 .....	160
図14 土壌1・土壤2出土遺物 .....	161
図15 土壌4出土遺物 .....	163
図16 北半部地業層中の遺物（上層） .....	164
図17 北半部地業層中の遺物（下層） .....	165
図18 北半部地業層中の遺物（下層） .....	166
図19 北半部地業層中の遺物（下層） .....	167
図20 ピット40出土遺物 .....	169
図21 南半部地業層中の遺物（上層） .....	170
図22 南半部地業層中の遺物（下層） .....	171
図23 銭拓影 .....	172
図24 銭拓影 .....	173
図25 トレンチ・表採遺物 .....	174
図26 遺構配置想定図 .....	176
図27 検出遺構の現況位置図 .....	177

## 図版目次

図版1 調査地近景 .....	178
図版2 検出遺構全景 .....	179
図版3 井戸1 .....	180
図版4 井戸2/土壤4 .....	181
図版5 土壌2 .....	182
図版6 溝/通路状遺構 .....	183
図版7 遺物出土状態 .....	184
図版8 クジラ頭骨 .....	185
図版9 貝/骨/石英/鉄滓 .....	186

a. 遺跡範囲と調査地點



b. 調査地點と周辺部の遺跡

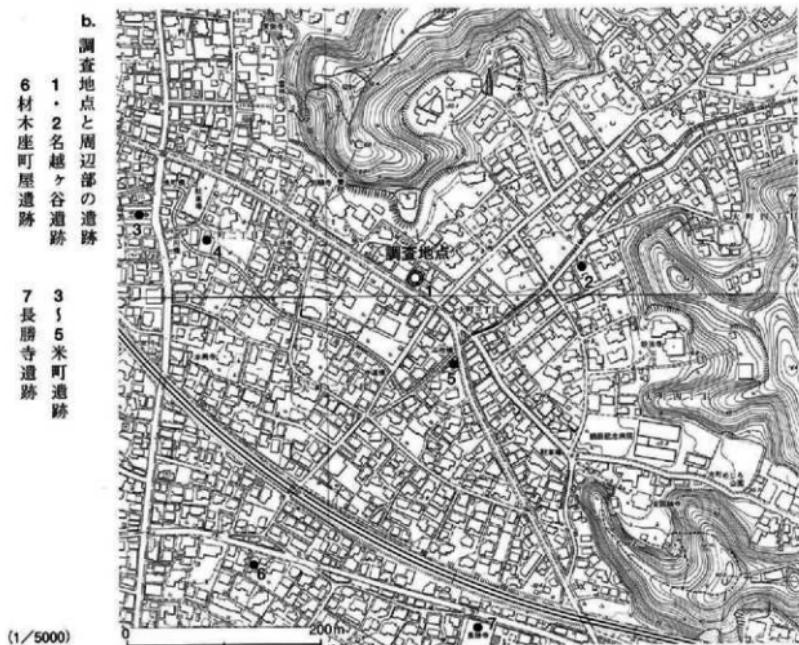


図1 調査地點位置図

# 第一章 遺跡の位置と歴史的環境

名越ヶ谷遺跡は、鎌倉市街地の東南方に位置し、衣張山（標高120m）西方の複雑に入り組む谷内平地部のほとんどを占めている。本調査地点は、谷開口部の西側山裾に近く、国道134号線と接する位置にある。

名越ヶ谷遺跡を囲む小支谷の中には、青磁割花文大鉢（東京国立博物館蔵）が出土したと伝えられる北条時政邸跡のほか、山王堂跡、慈恩寺跡と推定される遺跡が存在し、山王堂跡では寺院跡を裏付ける遺構・遺物が発見されている（斎木 1990年）。また、本調査地点の周辺では、1976年に長勝寺遺跡（図1b-7地点）で小規模な土間状遺構や土壙墓群などが発見され、中世庶民層に係わる遺跡として注目を集めた（大三輪 1978年）。その後、1988年には米町遺跡（同図-3・5地点）、1993年には本調査地点のほかに名越ヶ谷遺跡（同図-2地点）、米町遺跡（同図-4地点）、材木座町屋遺跡（同図-6地点）が相次いで調査された。

“名越ヶ谷”という名称が何を典拠とするかは不明であるが、“名越”は『吾妻鏡』に散見し、現在の大町・材木座辺りまでも含む鎌倉東南部一帯を指していたらしい。同書には、北条政子の御産所で濱御所とも呼ばれた「名越御館」（建久三年七月十八）をはじめ、北条義時・名越時章の「山庄」、問註所入道（三善信）、越後四郎時幸、町野加賀守康俊、加賀民部大夫康持、武田入道、備前三郎長頼らの「家（宅）」「亭」「宿所」があり、「名越御館」は時政・義時の後、“名越氏”とも称した朝時・時章・公時へと相伝したことが知られている。これらの家・屋敷がどこに所在したかは明確にできないが、北条一門の一党が鎌倉時代初期から名越に居を構えていたことは、遺跡東方の名越坂（切通し）が単なる交通路ではなく、軍事防衛上の要衝に位置づけられていることと併せて注意すべきである。なお、調査地点の北方、西方にある大宝寺と安養院についても触れておく必要があろう。大宝寺の地は、後三年の役（1083～87）後に新羅三郎義光が館を構え、その子孫佐竹秀義以来ここに住んだと伝えられ、別名“佐竹屋敷”とも称される。応永六年（1399）佐竹義盛は屋敷地の一画に多福寺を建てて廃寺となり、文安年間（1444～48）日出上人の開山で多福山一乘院大宝寺が建てられ今に至る。宝暦九年（1759）の境内図（大宝寺蔵）には、「問口三十三間余 奥行二十三間余、名越佐竹屋舗 大寶寺」と記され、二つの支谷をその寺域としていたことが分かる。一方、安養院はもと長谷佐々目谷にあり長樂寺と号していたが、鎌倉幕府滅亡後に名越善導寺の旧跡に移り祇園山長樂寺安養院になったと伝えられる。当地にあったという善導寺に関しては不詳であるが、『金沢文庫古文書』中に「名越善導寺」（弘安十年）・「名越鄉善導寺」（正応三年）の名が見えることから、1287～90年には存在していたことが確かである。

さて、『吾妻鏡』から名越に係わる記事をもう少しひろってみると、承元二年（1208）～弘長三年（1263）までに12回もの火災記録が残る。煩雑ではあるが列挙しておく。

承元二年（1208） 問註所入道名越家焼亡。

承久元年（1219） 鎌倉中焼亡。浜辺から出火、上は永福寺懸門、下は濱の庫倉前、東は名越山際、西は若宮大路を限る。

承久三年（1221） 町大路東失火、大夫属入道善信宅災。

安貞二年（1228） 由比民居から出火、越後守名越亭の後山際まで南北二十余町に災。

寛喜三年（1231） 名越辺失火、越後四郎時幸、町野加賀守康俊宿所等災。

宝治元年（1247） 名越尾張前司辺人家數十字焼亡。

- 建長二年（1250）名越辺焼亡。
- 建長四年（1252）焼亡。西は寿福寺前、東は名越山王堂前、南は和賀江、北は若宮大路上まで。
- 建長五年（1253）經師谷口失火、名越濱高御倉前に至る。焼死者十余人。
- 建長六年（1254）濱風早く町辺焼亡、名越山王堂に至る。人家数百戸災、焼死者数十人。
- 康元元年（1256）名越焼亡。備前三郎長頬亭災。
- 弘長三年（1263）名越辺焼亡。山王堂その中に在り。
- これら記事の内、特に承久元年・安貞二年・建長四年・建長六年の火災は大規模であり、本調査地点も被害を蒙ったことが十分考えられよう。
- 本調査地点を直接示す史料はないが、このような歴史的背景の中に遺跡地はある。

#### 《参考文献》

- 大三輪龍彦 1978 『長勝寺遺跡』 かまくら春秋社  
斎木 秀雄 1990 『名越・山王堂跡発掘調査報告書』 山王堂跡発掘調査団

## 第二章 調査の概要

### 1. 調査の経過

鎌倉市教育委員会からの発掘調査依頼は1993年7月1日であり、同月6日に施工業者との顔合せ後に試掘調査（4月22日・市教委が実施）のデータを受け取った。翌7日と8日には重機で表土掘削を開始したが、この時点では問題となつたのは調査面積が200m<sup>2</sup>近くに達しており、当初に説明を受けた調査予定（面積100m<sup>2</sup>強、生活面3枚、期間1ヶ月）では終了できないと予想されたことである。更に生活面数も試掘結果より多いことが後に判明したが、人員を増やすことで調査は開始せざるを得なかつた。10日に機材を搬入し、12日からは作業員を入れて発掘調査に着手した。7月中下旬の降雨に悩まされながらも調査を続行したが、予定された8月15日には終わらず、お盆休暇期間を利用して調査は延長される結果となつた。8月20日に機材を搬出し、24日を以て現地調査に係わるすべての作業を終了した。因みに7月12日～8月19日までの39日間で、雨天・祭日を除いた実働日数は27日間。延べ人数は調査（補助）員81人、作業員173人である。

### 2. 調査方法

重機による表土層の除去後、手掘りで調査は進められた。調査区南側に接して排土置場が確保できたため、全面を同時に掘り下げての調査である。

調査に使用する測量杭は任意に設定し、調査区中央の杭H0から東西南北それぞれの方向に7mの地点杭を落とした。杭H0の国土座標軸は(X-76479.242 : Y-24907.130)であり、杭HNと杭HSを結ぶ南北ラインは、磁北に対して44度東に傾いている。また、国道沿い（歩道端）にある地境杭との位置関係は図2に示した。

時間的制約の中で細かい方眼を組んだ測量は困難と考え、造構はすべて平板測量で実測したものである。レベル数値はすべて標高で示し、原点は3級水準点Na53229(11.154m)を使用した。また、出土遺物は調査区北半分と南半分を区別してとりあげた。

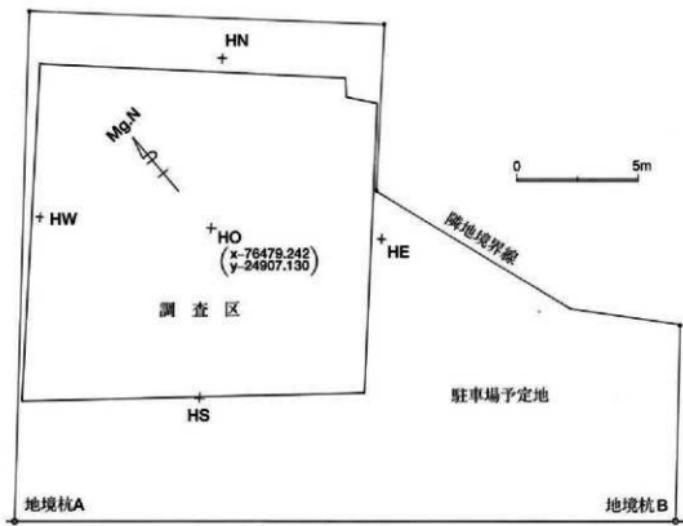


図2 グリッド設定図  
国道134号線・歩道

### 3. 堆積土層と生活面

試掘調査結果を図3に示した。これによると生活面は3枚(3・4・5層の各上面)で5層以下が地山となっている。しかし、実際は3層中に薄い泥岩版築層や炭層、硬化粘土面が幾重にも複雑に堆積しており、地山は5層ではなく6層以下と判明した。従って生活面は少なくとも5枚と考えた方が妥当である。(図4・面①～⑤) なお、本地点の建築深度は前面道路高より80cm下の標高6.80mであり、地山を確実に掘り込む深さとなるが、短い調査期間内では完掘できず3層上面～4層上面を調査したに過ぎない。

現地での土層観察は調査区北壁と東壁で行い、泥岩版築層の堆積状態はベルトを残して記録した。また、地山の状態は北壁と南北ベルト沿いに各々トレンチを設定して記録したが、地山自体を深く掘り下げていないため、中世以前の遺構の有無を確認することはできなかった。

図4の表土は近代以後、旧表土は近世以後の堆積土である。中世遺構確認レベルは調査区北側で標高7.80m前後(地表下30～60cm)、南側で標高約7.50m(地表下10cm～30cm)を測り、南側部分が近代以後に削平されたことは明らかである。

中世生活面が大略5枚(面①～⑤)あることは先に触れたが、面①と②については明確な広がりを把握できなかった。面①は泥岩版築層ないし硬化粘土面の最上部として調査区北西部に遺存し、試掘壙3層上面に相当する。面②は同じく版築層の何枚目かが該当するはずだが不明瞭である。面③は版築層最下部の4枚目で、試掘壙4層上面に相当する。面④と⑤は調査できなかつたが、面⑥は地山上面で中世最下面にある。

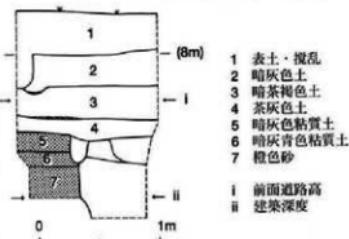


図3 試掘土層図

調査区北壁

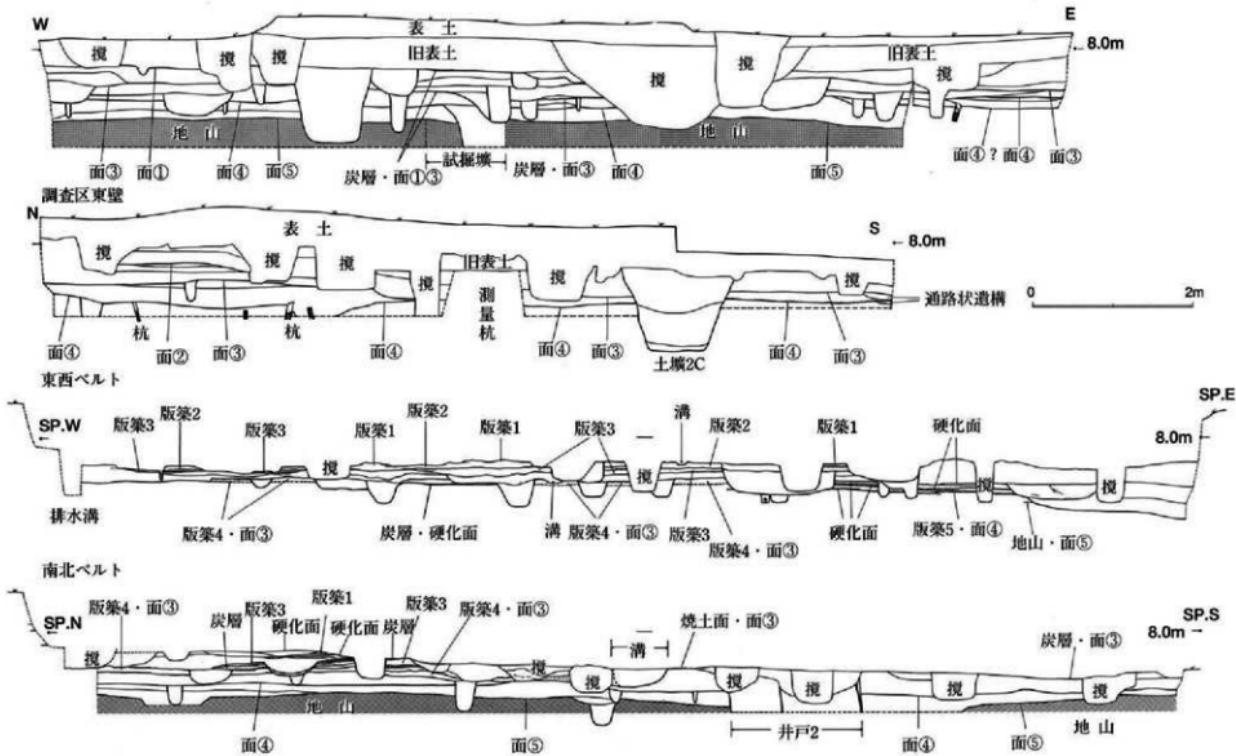


図4 土層堆積図

### 第三章 検出された遺構

#### 1. 上層遺構群

表土層を除去した後、調査区の北側から遺構検出作業を行なった。試掘場周辺部は最も高位に泥岩版築面が見つかり、これを中心に精査したが同一面の広がりを追うことはできなかった。上層遺構群として図5に示した状態は、同時期の遺構というよりも表土層下で確認できた遺構群と理解して頂きたい。なお、各遺構に関する説明は以下で行なうが、出土物および遺構の相関関係については後章に譲る。

搅乱の状況・・・中世面に掘り込まれた近世以降の生活痕を搅乱と総称した。表土層を除去する際に大半は消失するが掘り方の深いものは残存する。図5に輪郭線で表現したのは、近代～現代の建物基礎・排水溝・ゴミ穴などである。

建物基礎は調査区南半分に展開している。基礎壇の一辺は約30cmの方形を呈し、深さは40cm前後を測る。内部には破碎された泥岩塊が突き込まれ、基礎壇どうしの間隔は90cmを基準としている。こうした工法は昭和30年代頃まで続いていると言われるが、明確ではない。将来的には正確な記録を残す必要がある。なお、この建物跡の北西角には勝手口らしき切石敷（砂質凝灰岩）がみられ、西側には水桶あるいは床下収納庫を思わせる木組施設が付随する。木組施設は短辺90cm、長辺180cm、深さ43cmの箱形にホゾ組みされた板材を直接地中に埋め込んだもので、付近からは常滑焼の土管が出土している。

この建物跡の北辺と西辺には、柱通りと一部重複する形で杭列が検出された。杭は幅1～1.5mの廊状に2列打ち込まれ、太いもので直径10cm程の丸太材を使用している。また、一箇所に5本前後の杭を集中させたところもある。こうした例は湧水の多い軟弱な地盤を縛める場合に用いられ、やはり明治～昭和初期に盛行した工法の一つである。

排水溝は調査区東側を南北に並走する二本が検出された。東側の溝には塩化ビニール管、西側の溝には竹樋をそれぞれ埋設し、竹樋の接続部には加工した鎌倉石（砂質凝灰岩）が置かれていた。竹樋は遺存状態が悪く、細かな計測はしていない。

これらの他にも大小のゴミ穴や浄化槽などがみられるが、特筆すべきこともないで省略する。

北西部泥岩版築面・・・版築層は薄く部分的ではあるが4枚まで確認された。各層の間に薄い炭層を挟んだり、泥岩版築していない部分に硬化面が認められるなどその状態が一様とは言えないが、寺院跡にみられる基壇遺構や長勝寺遺跡でみつかった土間状遺構とは別種のものである。むしろ、各版築面がそれぞれ生活面として構築されており、短期間のうちに頻繁な建て替えと地業が行なわれた結果と考えられる。また、その範囲も調査区北西部から外方へと広がっていることは十分予想できる。

図5には明瞭な版築面を残して下部まで掘り下げた状態を記録している。本来ならば各面ごとの広がりと遺構の有無を探る必要があるが、対応する生活面が調査区内に見つけられなかったこと、間層が薄く精査段階で下の版築面がすぐ露出してしまうためにこの方法をとることにした。最上部版築面は試掘場周辺にあり、面上には15cm四方の焼け赤色化した部分が認められた。丁度、柱材だけが焼けたようにも見えるが対応するものはない。版築面の東端、浄化槽の近くには幅20cm、深さ5cm程の窪みが南北方向に約1m分検出された。雨落ち溝であろうか。上から2枚目の版築層上面である。この他に柱穴や不定形の落ち込みもみられるが、柱並びの明らかなものはない。基礎板の痕跡が確認できた箇所は図中に記号で示した。

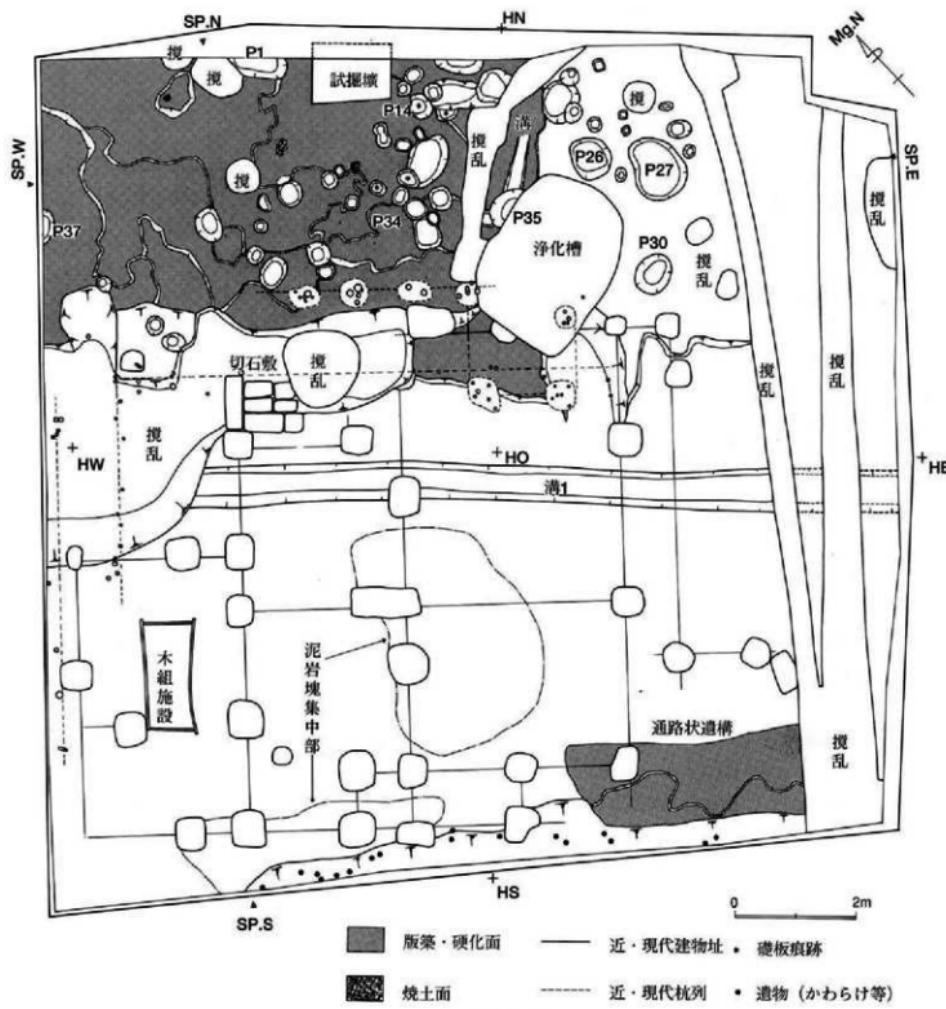


図5 上層達構群全体図

溝1・・・調査区中央を東西に横切る区画溝である。幅約60cm、深さ約20cmのU字形断面を呈し、主軸方位はN-46度-Wを測る。溝の東西両端を擾乱壌に切られて明確ではないが、出土遺物からみる限り最も新しい時期に属す造構である。プラン確認の段階では北側にもう少し広がる溝と考えられたが、実際に掘り始めると途中で壁状に立ち上がるという。南北ベルト(図4)にも明瞭な切り合いは観察できないが、作業員の経験と技量を重視した。

通路状造構・・・調査区の南東端にあり、幅約1.40m、長さ4m分が検出された。主軸方位は溝1と同じである。通路東端は擾乱壌に切られるが、更に調査区外東方へと続く。西端は図の位置で途切れるが、これは下層まで掘り下げた時点で明らかとなったように、西側に柵列(板塀)が存在していたためと考えられる。通路面は泥岩を版築して作られ、薄い間層を挟んで上下2枚が確認された。両面とも南へ向けてわずかに傾斜しており、市街地で発見される一般的な道路造構とは趣が異なる。調査区東壁の土層堆積状態(図4)をみると、上の通路は3番目の生活面(面③)に貼られており、調査区北西部の泥岩版築層最下面と対応する。つまり、調査区の南半分は既に上位2枚の生活面が削平・消失し、北半分の造構とは同一面として一括できないことを示している。

泥岩塊集中部・・・建物基礎(搅乱)群のほぼ中央と南壁寄りの2箇所で確認された。前者は3.50×2.50mの範囲に広がるが造構ではなく、後に井戸1の埋め土と判明した。井戸1については下層造構群の項で述べる。この範囲の西側では薄い炭層と赤色化した部分が確認され、面③の時期に火災があったことが判る。後者は調査区南壁に沿うように広がっている。一見、通路状造構の続きに思えるが版築されていない点で大きく異なる。下层面で検出できた柵列(板塀)がこの北縁に接する位置にあることから推測すると、板塀を押さえるための盛り土か板塀際に捨て置かれた排土である可能性が強い。

南端遺物集中部・・・通路状造構周辺の精査を進めるうち、調査区南壁際が浅く落ち込んでいることに気がついた。溝の北側肩口の可能性はあるが、現状では不明と言わざるを得ない。覆土および底面上の遺物は完形のかわらけ皿を主体とし、落ち込み内に投棄された状態で出土した。地表下わずか20cm程度の深さにして良好な状態を保ち、通路状造構および面③の時期決定を行なう上で重要な資料と言えよう。

## 2. 下層造構群

調査区北西部では泥岩版築層の最下面(面③)を指標としたが、北東部は精査中にやや下げ過ぎた感がある。また、調査区南半分は版築層最下面と対応する生活面が部分的には露出していたが、造構確認を容易にするために若干掘り下げた部分もある。しかし全体的にみれば、下層造構群として図6に示した状態は、面③およびそれ以後の造構配置を表わすものと考えている。

北西部泥岩版築面・・・試掘壌の東西両側にみられ不定形に広がっている。上層の版築面にも共通するが、泥岩を貼る範囲は部分的であり北西部一帯に及ぶものではない。また、その間隙にある硬化粘土面は、明確な範囲として線引きしきが困難である。こうした造構の性格としては土間や通路が想定されるが、建物を含めた構造まで明らかにすることはできなかった。

東側の版築面上には、数口の柱穴と雨落ち溝らしき小溝が検出された。この溝は幅約25cm、深さ3cm前後、長さは約2.50mまで確認でき、上層造構群でみた同種の溝より1.40m程(内間隔)西へ寄った位置にある。また、版築面の端部はそのまま南へ伸びて幅約1.40mの通路状を呈している。これらは調査区南東部の通路状造構と同じ値であり、両者の位置関係からみても一連の造構である可能性が強い。つまり、調査区南東角から西へ伸びる通路は調査区のほぼ中央で途切れるが、これと接続するように北

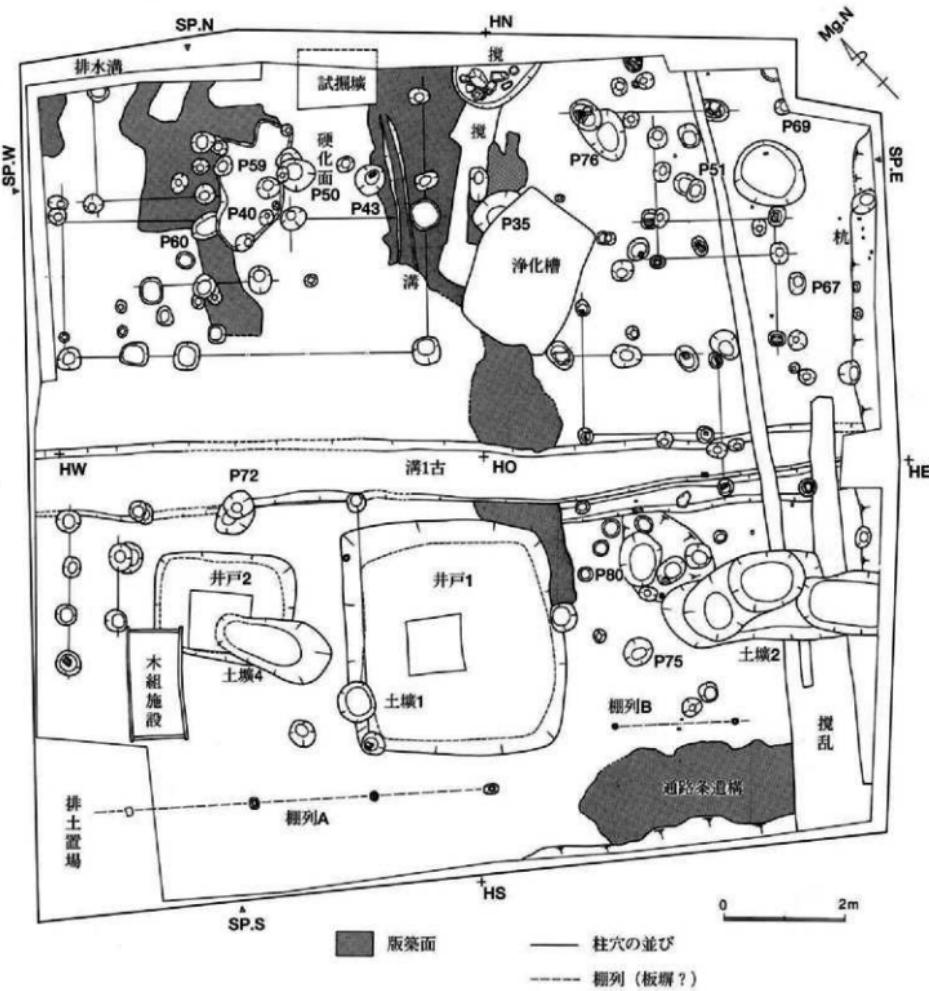


図 6 下層造構群全体図

方から通路が伸びていたと考えられる。両者の主軸には90度の差があり、直交する位置関係にある。

西側の版築面は柱穴に多く切られ、その性格は判然としない。しかし、調査区の北西角辺りを精査中に半拳大あるいはそれ以下の小砾が多く出土し、特に敷つめた様子は見られないが、遺構の性格に係わるものではないかと考えている。西側版築面の東端を切る不定形の落ち込み（ピット40）は、底面に凹凸が多く深さ10cm前後を測る。覆土中に炭化物を多く含み、側壁際に杭痕らしき小穴を伴うことから、当初は囲炉裏ではないかと考えた。鎌倉で発見される囲炉裏は一辺1m前後の正方形を呈し、側板を残すものが多い。本例に側板はなく形態的にも無理があるため、囲炉裏であるとの確証は得ていない。なお、覆土中から骨製の釣り針ソケットが1点出土している。

北東部の状況・・・旧地形が東方の逆川へ向かって下がるためか、薄い硬化粘土層の貼り増しがみられた。精査中に剥がれ易く、一帯は下部生活面（面④）近くまで下がった状態である。検出遺構としては柱穴が最も多く、礎板や柱根の残るもののがみられた。建物を復元するには至らないが、柱並びの推定できるものは一括して後述することにした。また、北東部～南東部土壤2の北辺にかけては杭が多く検出され、東壁近くでは集中する箇所もある。杭は板端材を加工してつくり、寸法や打ち込む間隔はまちまちである。どのような構築物になるかは明らかにできなかった。

溝1古・・・調査区中央部で通路状版築面を分断して東西に伸びる。幅約90cm、深さ約15cmを測る。上層遺構群・溝1と同じ位置にあり、東半分では二本接して検出された。南側の細い溝は幅40cm前後、深さ約12cmを測る。通路状版築面の近くで消滅するが、掘り過ぎのため図6では南へ寄って描かれている。溝の切り合いがあったと推測できるが、溝1古自体がこの生活面（面③）に伴うかは疑問が残る。一つには、上層面でおぼろげではあるがプランを確認できたこと。二つには、出土遺物が面③より新しく、溝1と溝1古は単なる覆土の差か、溝1がもっと新しい時期に属した可能性を指摘できるからである。更に言えば、面③の時期に通路状版築面を分断してまでここに区画溝を作る必要があったのか、遺構配置からみても調査区南側には井戸と土壤（便所？）しかなく、簡易な目隠し塀程度で十分と考えられるからである。

井戸1・・・調査区の南半部中央で検出された。既に上層面でプラン（泥岩塊集中部）が確認でき、面③より新しい時期の井戸と判る。

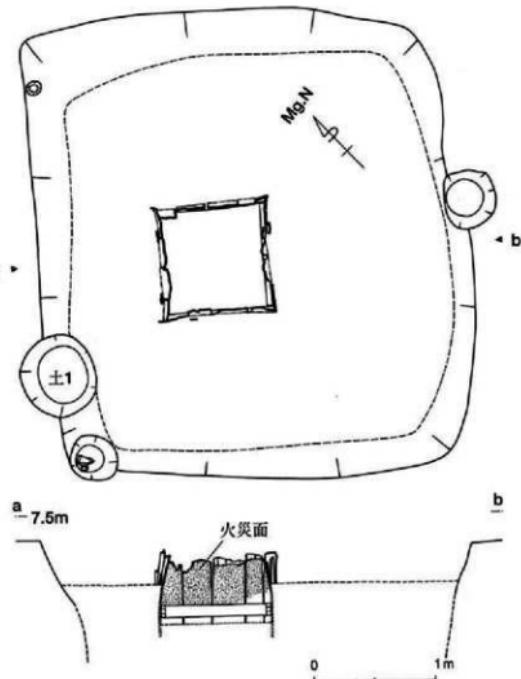


図7 井戸1

井戸の掘り方は $3.20 \times 3.50\text{m}$ の正方形に近く、一般的な掘り方と比較してかなり大形である。北東角で通路状版築面を切り、南西角寄りの壁は土壌1に切られている。

井枠は一辺 $90\text{cm}$ の正方形を呈し、方形横桟支柱型式とよばれる構造である。横桟は $4.50 \times 9\text{ cm}$ 角の材を用い、両端にホゾを切って連結する。確認できた範囲では、井戸南北面に凹材、東西面に凸材を使用している。支柱は井戸内に転落したためか、検出されなかった。横桟とほぼ同規格の角材を四角に立てていたと考えられる。側壁は厚さ $0.60 \sim 1.20\text{cm}$ 、幅 $20 \sim 25\text{cm}$ の縦板材を使用する。各辺に4枚づつ立て並べるが、北辺を除く3辺には縦板材どうしの隙間を塞ぐように、外側から補強用の板材をあてた箇所がみられた。

この井戸で特筆すべきことは、井枠内面が火熱を受けて炭化している点にある。恐らく遺跡地で起きた火災が井戸廃絶の直接的原因であり、井戸内には火事場整理の際に投げ込まれた遺物が埋まっていると推測されるが、残念ながら建築深度(GL=80cm、標高6.80m)以下にあるため調査はしていない。

井戸2・3・4井戸1の西側で検出され、面③に伴う遺構と考えられる。南西角は木組施設(近・現代)に切られ、南東角は土壌4に壊されている。井戸掘り方は $1.50 \times 2.20\text{m}$ の東西に長い長方形を呈し、その南壁に接して井枠が設置される。

井枠は一辺 $95\text{cm}$ の正方形で、井戸1と同様に方形横桟支柱型式と呼ばれる構造である。横桟はホゾ切りした $7.50\text{cm}$ 角の角材を使用し、1段目は井戸の南北面に凸材、東西面に凹材、2段目では逆に南北面に凹材、東西面に凸材を配している。更に側壁上位の火災痕をみると、同間隔でもう一段上に横桟が組まれていたことが判る。横桟のホゾ組みを交互に替えるのは、内部への倒壊防止を強化する工夫であろう。支柱は北東角部を除いて検出された。 $7.50 \times 5\text{ cm}$ 角、長さ $45\text{cm}$ の横桟より少し細目の角材で、横桟上に立てるだけ、ホゾや釘といった固定方法はみられない。側壁は幅 $10 \sim 40\text{cm}$ 、厚さ $1.50 \sim 2\text{cm}$ の縦板材を使用する。各面4枚づつで構成されるが、土壌4に壊された東壁と南壁の一部は遺存しない。

井枠内面の被熱痕から、井戸2も火災後に廃絶したことが判る。ただし、本来横桟の外側にあるべき側壁材が抜き取られ、井枠内に投棄されていた状況から推測すると、井戸を完全に埋め戻す前に土壌4が掘られたか、土壌4掘削時に横桟だけを残して井枠内が掘り起こされたと考えられる。検出レベルと出土遺物からみて後者の可能性が強いが、どちらにしても、井枠内上位で出土した遺物は土壌

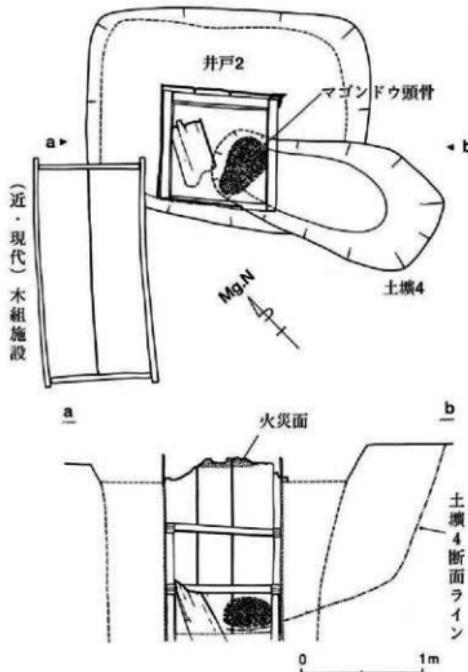


図8 井戸2・土壌4

4に投棄されたものであろう。建築深度以下ではあるが、井戸と土壤との関係を探るために土壤下底面まで発掘を行なった。

土壤1・・・井戸1掘り方の南西角近くを切っており、面③および井戸1より新しい時期の遺構である。直径約65cmの円形プランを持ち、底面はほぼ平坦、深さは確認面から56cmを測る。柱穴にしては大形で組み合うものもないことから、土壤として扱った。覆土の状態や出土遺物に特筆すべき点はなく、遺構の性格・用途は不明である。

土壤2・・・井戸1の東、調査区壁に一部かかって検出された。プラン確認が不十分なまま発掘を開始したが、土層観察ベルトや底面の状態から3つの土壤(2A+2B+2C)が切り合っていると判明した。個々の土壤の深さはまちまちであるが、その形態は短径1m、長径2m程の楕円形を呈していたらしい。同一場所に同一形態の土壤を継続的に掘るということは、土壤の性格・用途がかなり共通していたとも考えられる。

2Aは土壤2とした範囲の中央南寄りにある。2Bを切って構築されるが、2Cとの新旧関係は掴めなかった。確認面からの深さは約50cmである。覆土中には小形の泥岩塊が多く含み、中層には炭化物粒、下層には青灰色に変化した粘土の堆積がみられた。

2Bは西寄りの位置にある。下底面レベルは東西で異なり、東側が約6cm深く掘られている。確認面からは80cmの深さである。2Aおよび2Cに切られ、土壤2とした中で最も古い時期に属している。覆土は他の土壤と大きく異なり、下底部近くに箸?を含む多量の木質腐食土が堆積している点に特徴がある。特に、最下部では薄い粘土層と互層状をなしているのが観察できた。この腐食土の正体が何であるかは分析する機会を待つほかはないが、土壤サンプル中に昆虫(ハエ幼虫?)の外皮・殻が多量に混入しており、土壤2Bが便所であった可能性を示唆している。

2Cは調査区壁に一部かかって検出された。2Bを切って構築されるが、2Aとの新旧関係は不明である。下底面レベルは確認面から約60cmの深さを測るが、調査区壁面を精査したところ深さ1m以上、面③を切り、掘り込み面は面②あるいはそれより上であることが判った。覆土は2Aと同様に小形の泥岩塊が多く含み、最下部には薄い粘土層が堆積する。

土壤3・・・プラン確認の段階で、井戸1が大形の方形土壤と誤認したために付けた名称である。調査終了時点をもって欠番扱いとした。

土壤4・・・井戸2の南東角部で検出された。井戸2廃絶後に掘られた遺構で、

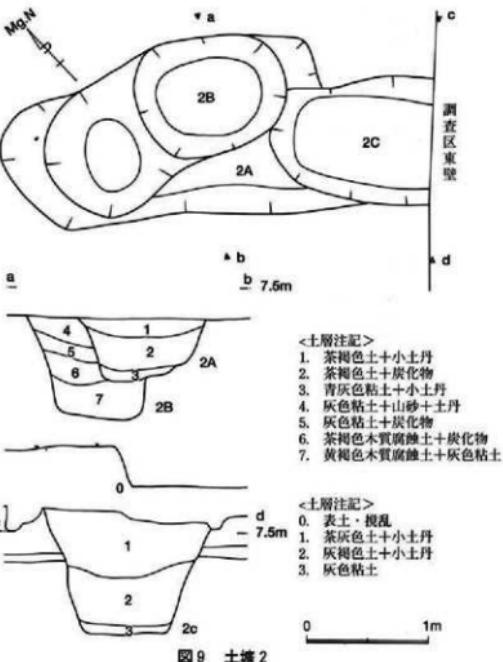
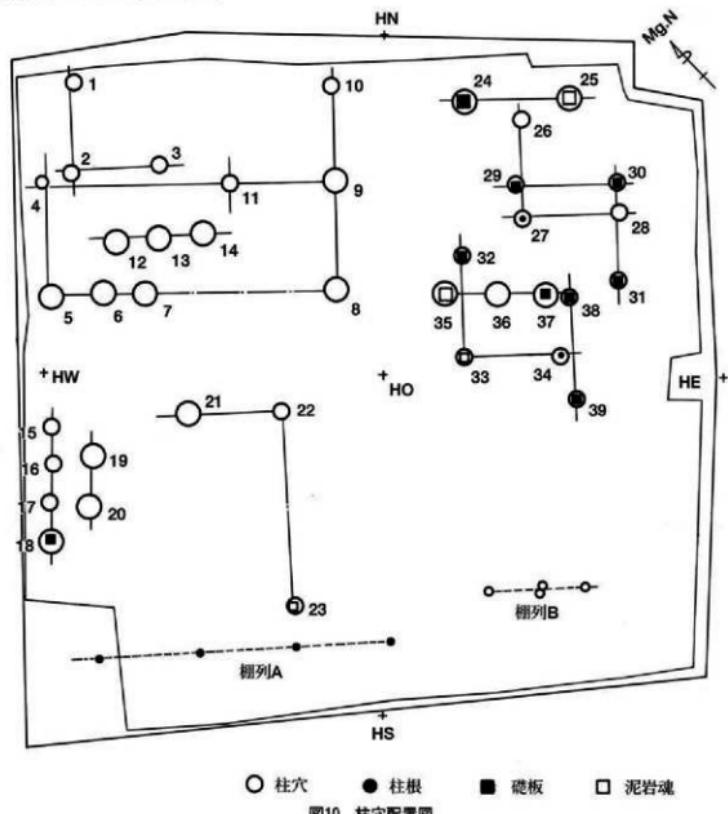


図9 土壤2

井枠内を土壤の一部として利用している。短径約1m、深さ1.10~1.50mを測り、底面が井枠内へ向かって緩やかに傾斜している。土壤の規模や平面形態と調査区内における造構配置などからみて、土壤2とした一群の造構と同じ性格・用途を持っていたと推測される。覆土中には小形の泥岩塊が多く、土構2A・2Cと極めて類似した状態であった。遺物としてマゴンドウクジラの頭骨（下顎骨を除く）が井枠内から出土しており、食用・採油用あるいは珍しさゆえの觀賞用に入手し、投棄されたと考えられる。

通路状造構・・・調査区の南東角部にある。既に上層造構群で確認できた版築面の下面を精查した状態である。幅・長さ・主軸方向とも上面と変化なく、通路として継承されていたことが判る。調査区壁の土層図（図4）からみると、この版築面は面③より一時期古い状態と考えられる。

東端部落ち込み・・・調査区東壁に沿って検出された。南北方向に伸びる溝の落ち際とも思えるが、旧地形が東方の逆川へと傾斜していることからすると単なる地業の一部かもしれない。北寄りのところで杭が集中して検出されたが、この杭は面④に伴うものである。従って、この落ち込みも面④あるいは面④構築時のものと考えられる。



**柵列A、B**・・・調査区南壁寄りで検出された東西方向の柵列である。板もしくは網代を組んだ柵と考えられ、西側をA、東側をBとして区別した。両柵列は一直線上には繋がらず、通路状造構が途切れる位置で約1mのずれをみせる。造構配置からすると、この部分が通用口として機能していたと考えられる。なお、A・Bとも面④に近いレベルで確認されているが、上層造構群にみる通路状造構や泥岩塊集中部の状態からみて、この柵列が面③に伴うものであり、面④以後継承された可能性を示している。

柵列Aの柱根は4本検出されたが、更に調査区外西方へ続くと思われる。柱間隔は約2m。柱根は一辺12cmの角柱で、長さ36cm程が遺存していた。柱を埋め込む掘り方は小さく、柱サイズとほぼ同じ方形を呈している。

柵列Bは杭穴状の小穴として確認され、調査区外東方へ続く可能性がある。柱穴は一辺約5cmの方形を呈し、確認面からは15cm前後の深さをもつ。柱根は遺存しない。柱間隔は約2mを測るが、その中間位置に2本一对の杭穴を伴う。恐らく、柵の表裏から杭を打ち込み、挿むようにして固定したものと思われる。

柱穴列・・・南北に伸びる通路状版築面を挟んで分布し、礎板ないし泥岩塊を内底面に据えるもの、柱根が遺存するものなどがある。数棟の掘立柱建物が存在していたと推測できるが、残念ながら建物として復元できたものはない。柱並びの確認できる例は12例あり、各柱穴ごとに確認面からの深さ、底面の標高、柱間距離などを一覧表に示した。なお、以下に気づいた点を二、三記しておく。

柱穴4～11列は1棟の建物としては組合せに無理がある。柱穴各個の大きさや柱間距離からすると、むしろ柱穴5～8列は柱穴35～37列と関連がありそうに思える。

柱穴12～14列では、既に上層（上から3枚目の版築層上面）で柱穴14が確認され、面③より新しい時期の柱穴列と考えられる。

柱穴21～23列は井戸2を囲むように並ぶが、柱穴23が井戸1掘り方を切っており、面③より新しく、井戸2とは関連性を持たない。

柱穴	深さ：cm	標高：m	備 考
1	-12	7.36	柱間 1.8m
2	-22	7.26	
3	-32	7.31	
4	-21	7.25	
5	-25	7.18	柱間1, 2, 2.1m 柱穴10は上層で確認
6	-17	7.28	
7	-23	7.18	
8	-30	7.08	
9	-13	7.35	
10	-10	7.37	
11	-27	7.22	
12	-21	7.27	柱間 0.9m
13	-16	7.34	柱穴14は上層で確認
14	-17	7.33	
15	-13	7.19	
16	-23	7.08	
17	-15	7.17	
18	-7	7.24	
19	-30	7.00	
20	-25	7.07	柱間 1m

柱穴	深さ：cm	標高：m	備 考
21	-55	6.85	柱間 2m
22	-18	7.24	柱穴23は井戸1を切る。
23	-48	6.80	
24	-13	7.20	柱間 2m
25	-4	7.25	
26	-15	7.16	柱間 2m
27	?	?	柱根は6×10cm角
28	-32	7.02	長さ 7cm
29	-4	7.25	柱間 2m
30	-14	7.22	
31	-20	7.10	
32	-5	7.30	柱間 2m
33	-5	7.24	柱根は4×6cm角
34	-15	7.12	長さ 15cm
35	-9	7.25	柱間 1m
36	-22	7.12	
37	-6	7.26	
38	-13	7.18	柱間 2m
39	-3	7.10	

## 第四章 出土遺物

出土した遺物の総量は、テンパコ（内法：33×54cm、深さ15cm）にして22箱分となった。そのほとんどが地表層中に混入していた遺物であり、遺構覆土や生活面直上の遺物はごく僅かである。

測図した遺物は完形品と1/4以上を残す破片を基準としたが、小片であっても年代的指標となるもの、搬入された器種の豊富さを示すものは極力図示するように努めた。また、石英（火打ち石）や自然遺物（貝・骨）は写真を掲載した。本来ならば、器種ごとに破片点数（個体数）を数えて統計処理すべきであるが、層位的に良好な資料とは言えないため省略している。

溝1出土遺物・・・1~13は溝1、14~20は溝1古として取りあげた遺物であるが、大きな時期差は見られない。

1~7はかわらけ皿（3のみ白かわらけ）。すべて糸切り底である。

8・9は瀬戸窯製品。ともに灰釉がかかる。8は行平、9は瓶子と思われる。

10は常滑窯製品。捏ね鉢口縁部の小片である。体部外面は無調整。

11は滑石鍋の底部片。2種類（小刀状・鋸状）の再加工痕が見られる。

12・13は瓦器質の製品。12は燭台底部。内面ヘラケズリ、外面下端ヘラミガキを行い、据部上面にはスタンプ文を押捺する。器表は灰白色。13は土風炉であろうか。口縁部内面ヘラナデ、体部内面ハケ調整を行い、外面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。

14~16はかわらけ皿。14は手捏ね成形で、口縁部内外面にタール状の付着物が見られる。

17は常滑窯製品。捏ね鉢である。体部外面無調整、内面下位に磨耗痕がみられる。

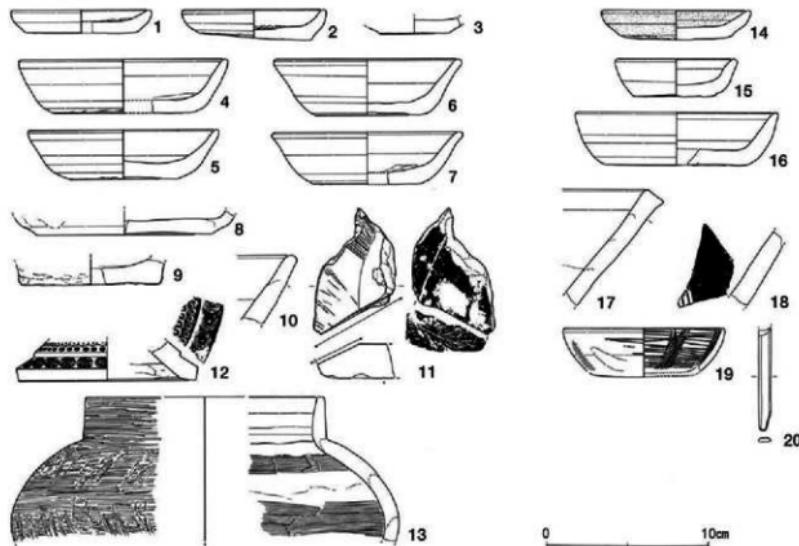


図11 溝1出土遺物

18は備前窯製品。掘り鉢の体部小片である。

19は瓦器。五弁輪花形の皿で、体部外面無調整、内面にはミガキ状の暗文を施す。

20は骨製品。笄の先端部である。

これらの他に獸骨・鉄滓が溝1古とした覆土中から出土している。(写真図版参照)

南端遺物集中部の遺物・・・完形に近いかわらけ皿が多く出土した点に特徴がある。

21~43はかわらけ皿。すべて糸切り底である。32・38は灯明皿として使用。

44・45は舶載磁器。44は青磁無文碗。45は青白磁水注の把手と思われる。

46・47は山茶碗窯系の製品。46は捏ね鉢。比較的精製された胎土を持ち、体部外面下位にヘラケズリ調整を行なう。内面は磨耗。47は碗。高台は粗雑でほとんどが剥離している。内底面は磨耗。大粒の長石・石英を混入し、常滑地方の産と思われる。

48は常滑窯製品。捏ね鉢である。体部外面下位にヘラケズリ、内面は磨耗。高台は欠失している。

49は磁石。灰白色粘板岩製、産地不明。

50は伊勢型土器。頸部に指頭圧痕を残し、体部外面にハケ調整を行なう。

これらの他に鉄滓1点が出土している。(写真図版参照)

井戸1出土遺物・・・掘り方と井戸枠内を区別して取りあげた。51~58が掘り方内出土、59~70が井

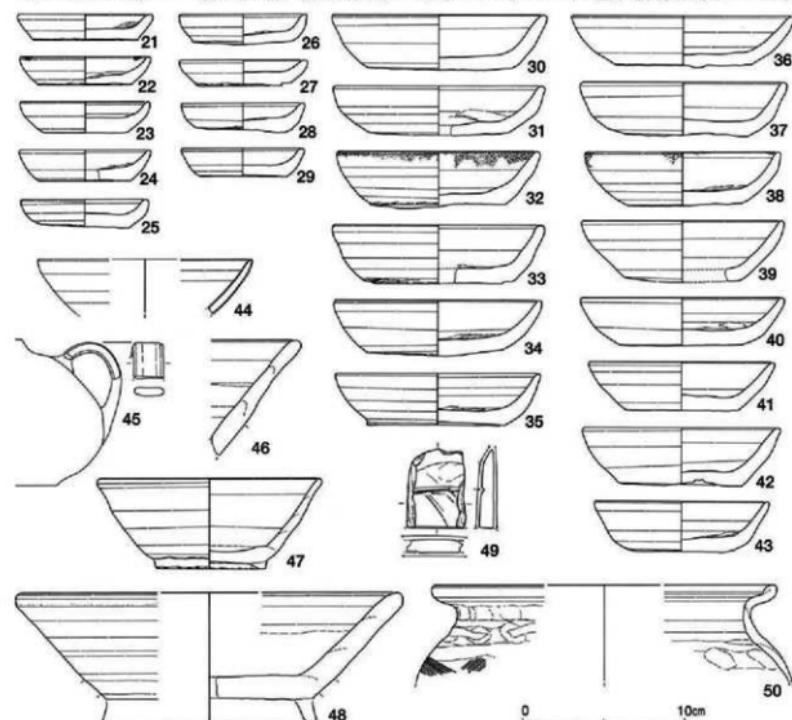


図12 南端遺物集中部の遺物

戸枠内から出土した遺物である。

51～64はかわらけ皿。54、55、64は手捏ね成形である。

65は青磁錦運弁文碗。

66は山茶碗窓系の捏ね鉢。

67は砥石。黄灰白色粘板岩製で京都府鳴瀬産と思われる。

68は板草履。69は折敷。

これらの他に掘り方内で貝、井戸枠内で貝と錢(図24～38)が出土した。(写真図版参照)

井戸2出土遺物・・・井戸2に伴う確実な遺物はない。井戸枠内から出土した遺物は、土壌4の遺物として捉えている。(土壌4の項参照)

土壌1出土遺物・・・遺物が少なく、測図できたのは2点である。

70・71は常滑窯製品。70は捏ね鉢。71は中型の甕であろう。推定口径34cm前後と思われる。

土壌2出土遺物・・・3つの土壌が切り合うが、土層観察ベルト中の遺物だけは区別して取りあげることができた。72は土壌2A、73～83は土壌2B、84～85は土壌2Cの出土である。86～114は2A・2B・2Cの遺物が混在している。

72は手捏ね成形のかわらけ皿。小片である。

73～76はかわらけ皿。75はほぼ完形。76は手捏ね成形の小片で、灯明皿として使用している。

77～81は著状木製品。82は板杭であろうか。83は漆器皿。内外面に黒色系漆を塗っている。

84・85は手捏ね成形のかわらけ皿。

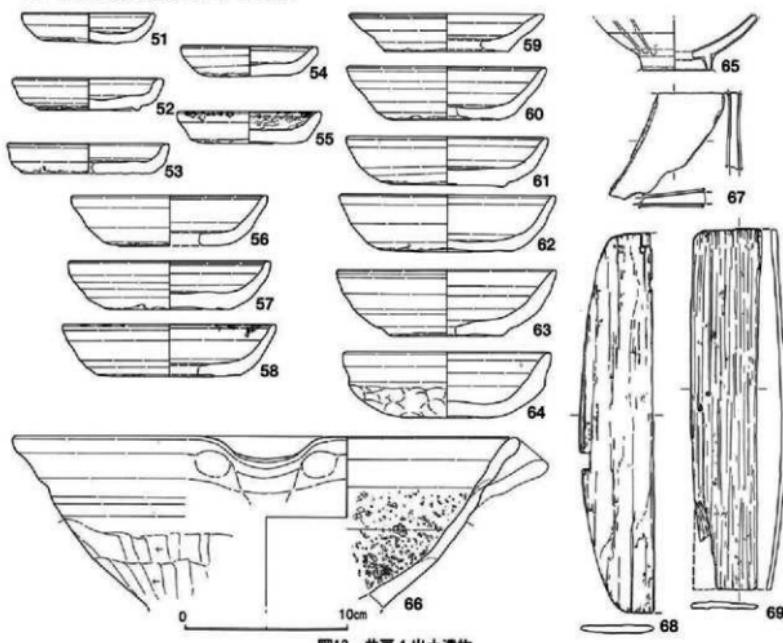


図13 井戸1出土遺物

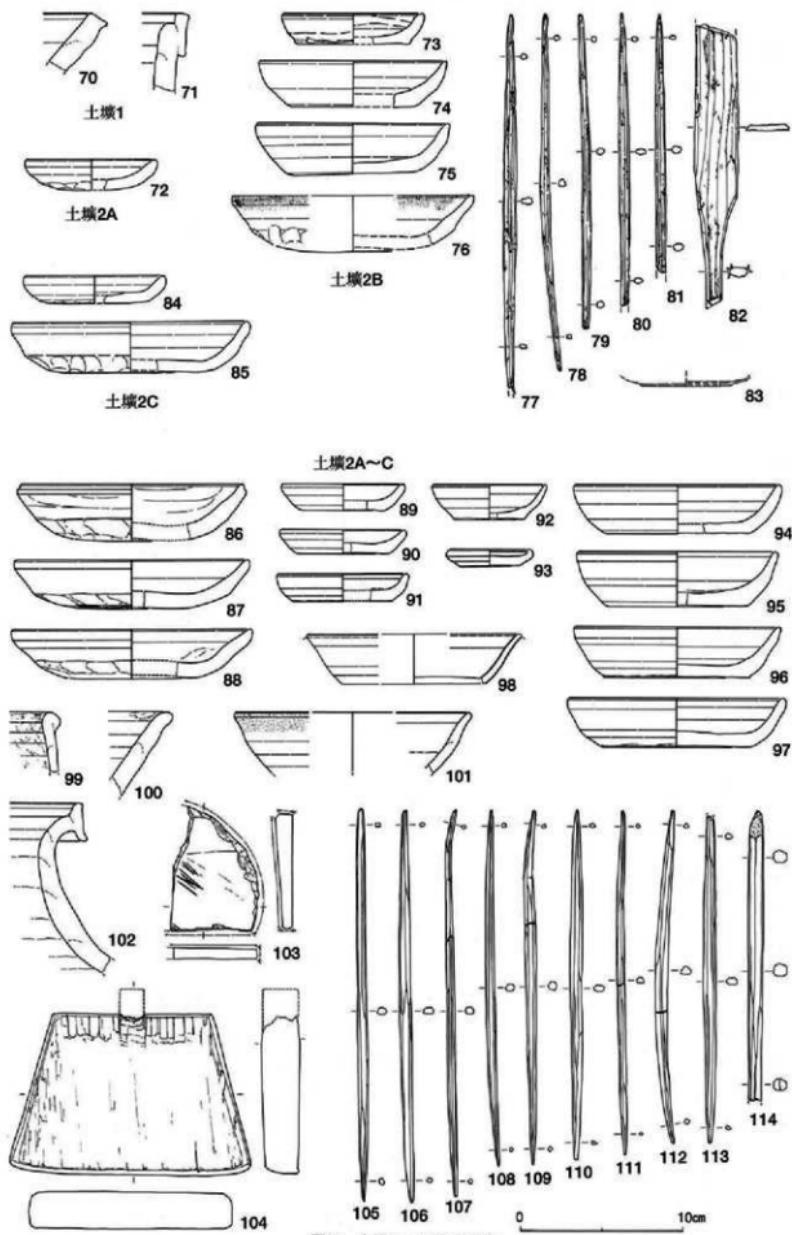


図14 土壌1・2出土遺物

86~97はかわらけ皿。86~88は手捏ね成形。93は内折れ型の完形品、糸切り底である。

98・99は船載陶器。98は白磁口禿皿。99は緑釉盤と思われる。

100・101は山茶碗窯系の製品。100は捏ね鉢。101は比較的精良な胎土の碗で、口縁部がやや灰黒色を帯びる。

102は常滑窯製品。口径38cm前後の壺である。

103は砥石。側縁部を細かく打ち欠き二次調整を行なう。白色地に褐色の流紋が入る凝灰岩で熊本県天草地方の石材と思われる。

104~114は木製品。恐らく土壤2Cの出土であろう。104は下駄の歯。差し込み部は欠損している。105~113は箸状木製品。114は不明。先端部が焼け焦げている。

これらの他に獸骨が出土している。(写真図版参照)

土壤4出土遺物・・・井戸2と切り合っているため、遺物の取りあげは①井戸2掘り方確認作業中の遺物(115~118・121・128)、②井戸2の井枠内から出土した遺物(133~135)、③土壤4内出土遺物に3区分して行なった。ほとんどの遺物が土壤4内で出土し、②も土壤4の遺物として考えることができる。(第三章 井戸2の項参照)ただし、①については井戸2掘り方と土壤4の遺物が混在している可能性がある。

115~126はかわらけ皿。115・116のみ手捏ね成形。126は焼成前に底部穿孔を行なっている。

127・128は船載磁器。127は青白磁瓶。128は青磁浮牡丹文水差の胴部片であろう。

129・130は山茶碗窯系の製品。捏ね鉢である。130の推定口径は26cm前後。口唇端部の特徴から瀬戸地方の産と思われる。

131~134は常滑窯製品。131~133は捏ね鉢。131は体部外面無調整、内面磨耗。132は外面に木口状のヘラナデ、内底面中央のみ磨耗。133は外面下位ヘラナデ、内面が磨耗している。134は壺。

135・136は磨り常滑。壺の体部片を再利用したもので、周縁部が磨耗している。

137・138は木製品。137は板草履。138は曲げ物の底板であろうか。

139は茶臼。下臼受け皿の一部と思われる。安山岩製。

140は平瓦。表裏面に繩目が残る。

これらの他にマグンドウクジラ頭骨・貝が井戸枠内から出土し、鉄津状の焼けた壁体は井戸2掘り方確認作業中に出土している。(写真図版参照)

北半部地業層中の遺物・・・上層(141~188)と下層(189~360)に区分してまとめた。既に第三章で述べたように、上層は2枚目の泥岩版築面までの遺物であり、下層は4枚目の版築面までの遺物を指す。

141~160はかわらけ皿。151は内折れ型、糸切り底の小皿。152は手捏ね成形の小皿であるが、外底中央に二次的穿孔痕が見られる。153は灯明皿。

161~166は船載陶器。161は青磁碗。162・163は青磁鉢。163の内面には陰刻蓮弁状の溝みが見られる。164は白磁口禿皿。165・166は緑釉陶器盤。165は稜花型の口縁部で、器表の釉は銀化している。口縁部上面の文様は葡萄唐草か。166は底部片。内底側に沈線文様を配す。

167・168は土師質の製品。167は三脚付きの土釜か。脚部は下層(283)で出土している。瓦器皿と同様に畿内地方からの搬入品と思われる。168は手培り脚部、差し込み式である。

169~173は山茶碗窯系の製品。169・170は碗。169は比較的均質な胎土で内面が磨耗している。171~173は捏ね鉢。いずれも内面が磨耗し、171は内底面に火熱を受けて黒色化している。

174~184は常滑窯製品。174~178は捏ね鉢。体部外面無調整。175の推定口径は38cm前後。178の内底

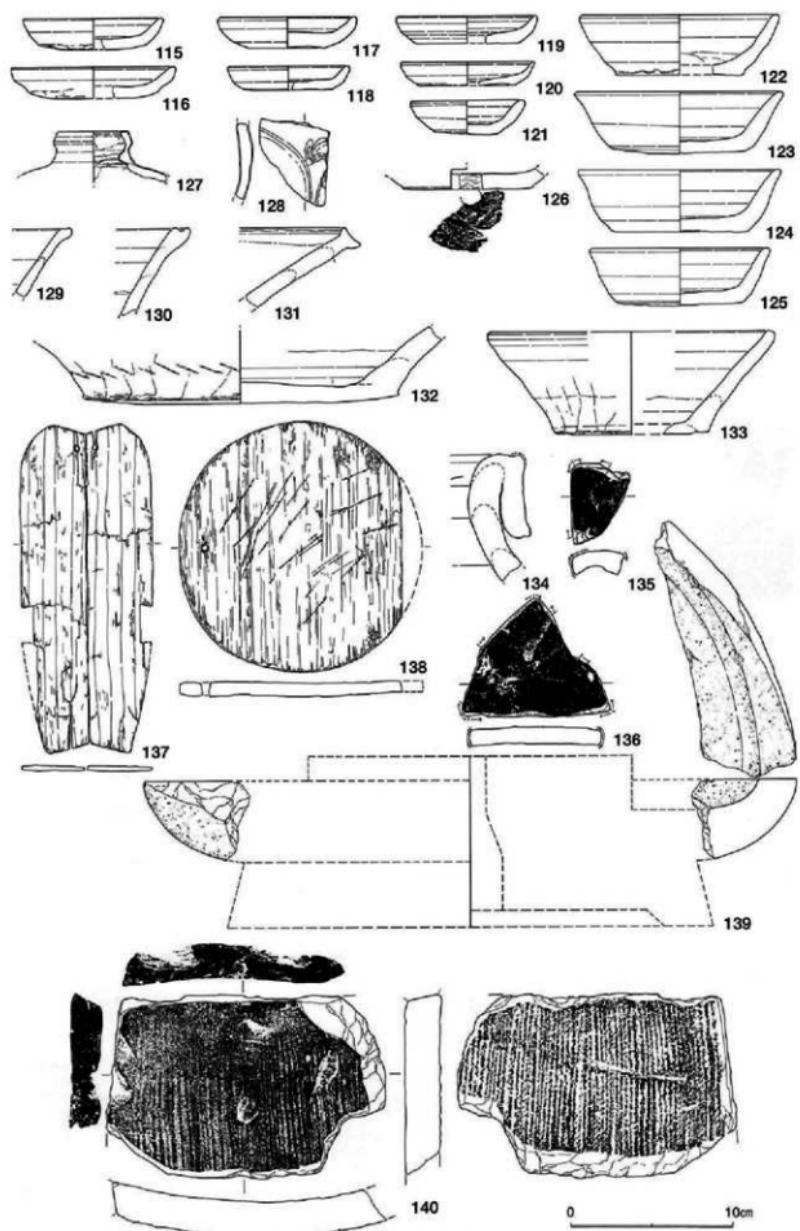


图15 土壤4出土遗物

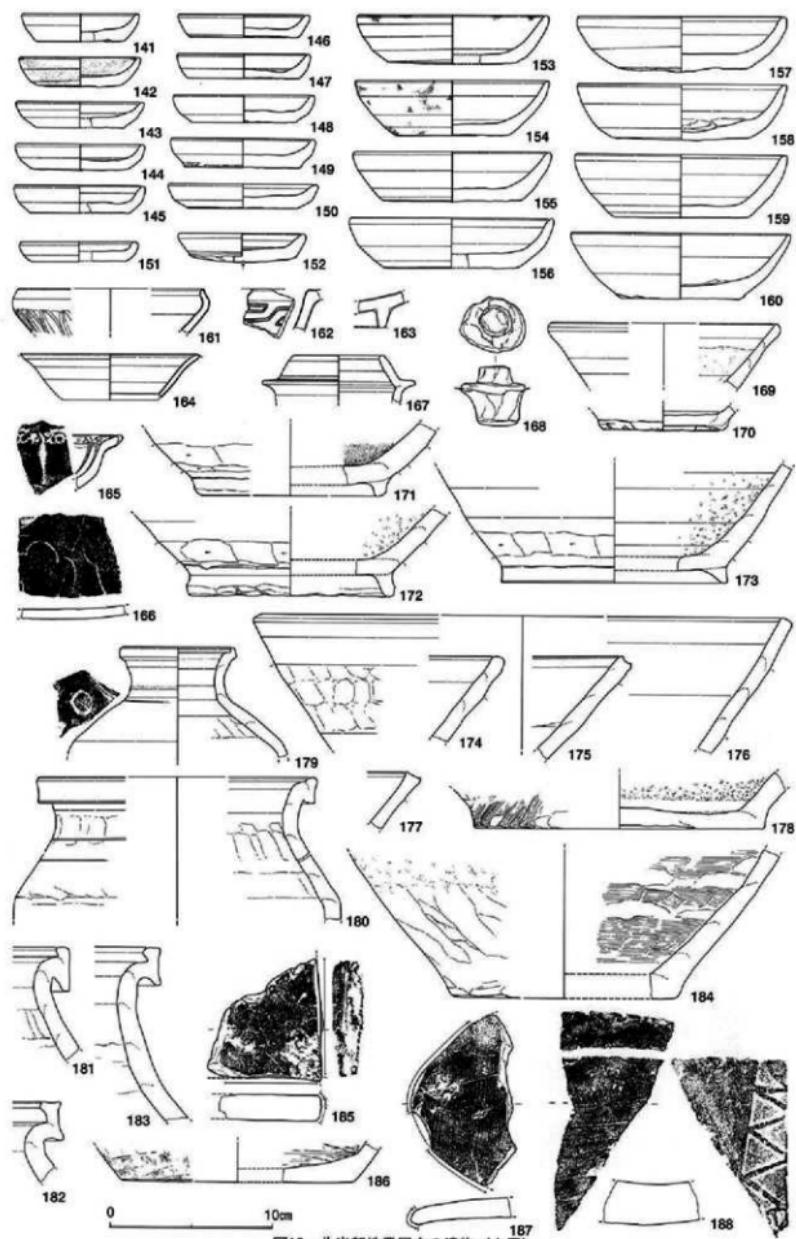


図16 北半部地蔵層中の遺物（上層）

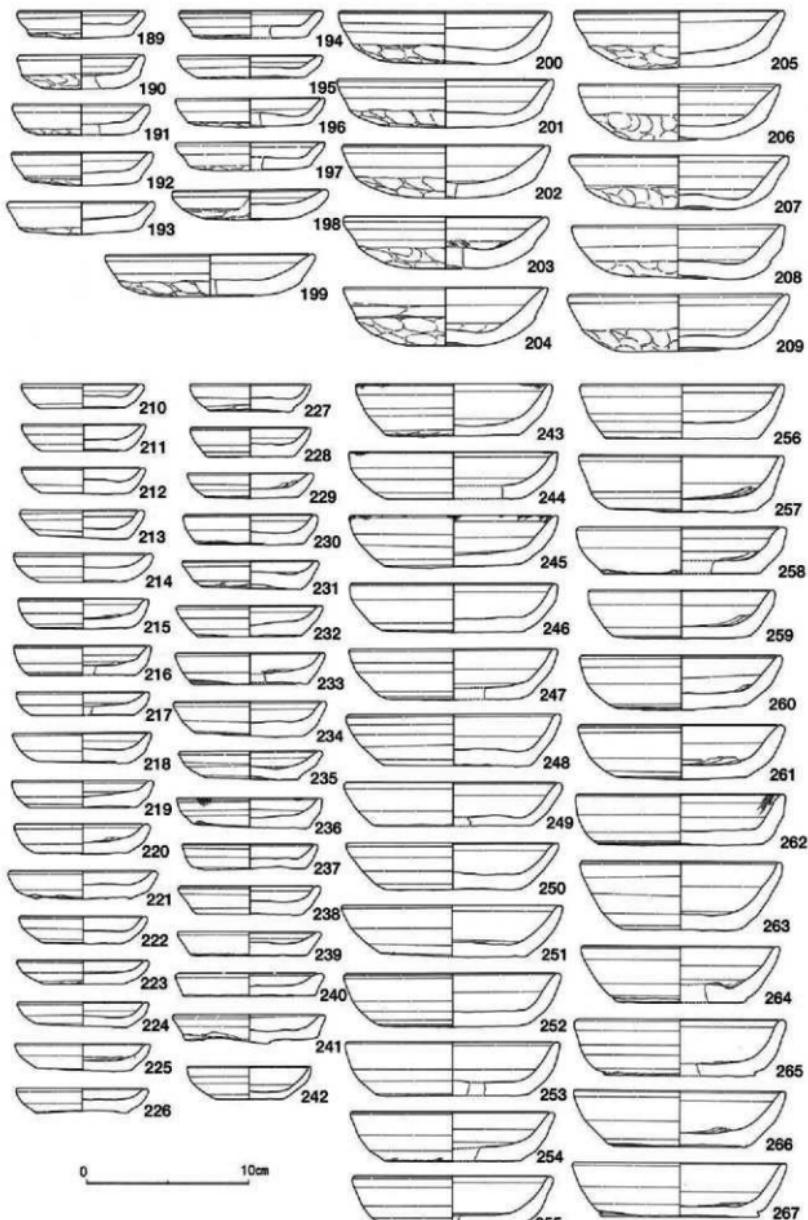


図17 北半部地表層中の遺物（下層）

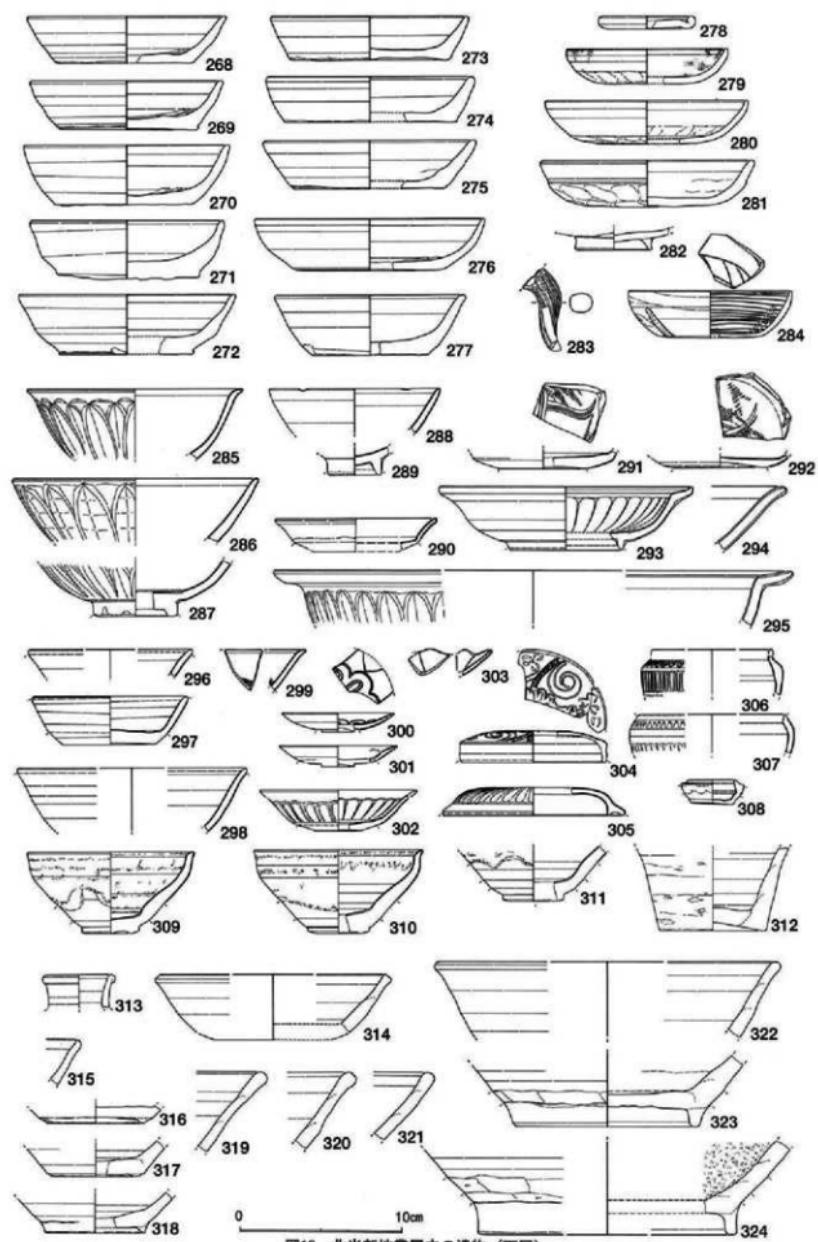


図18 北半部地業層中の遺物（下層）

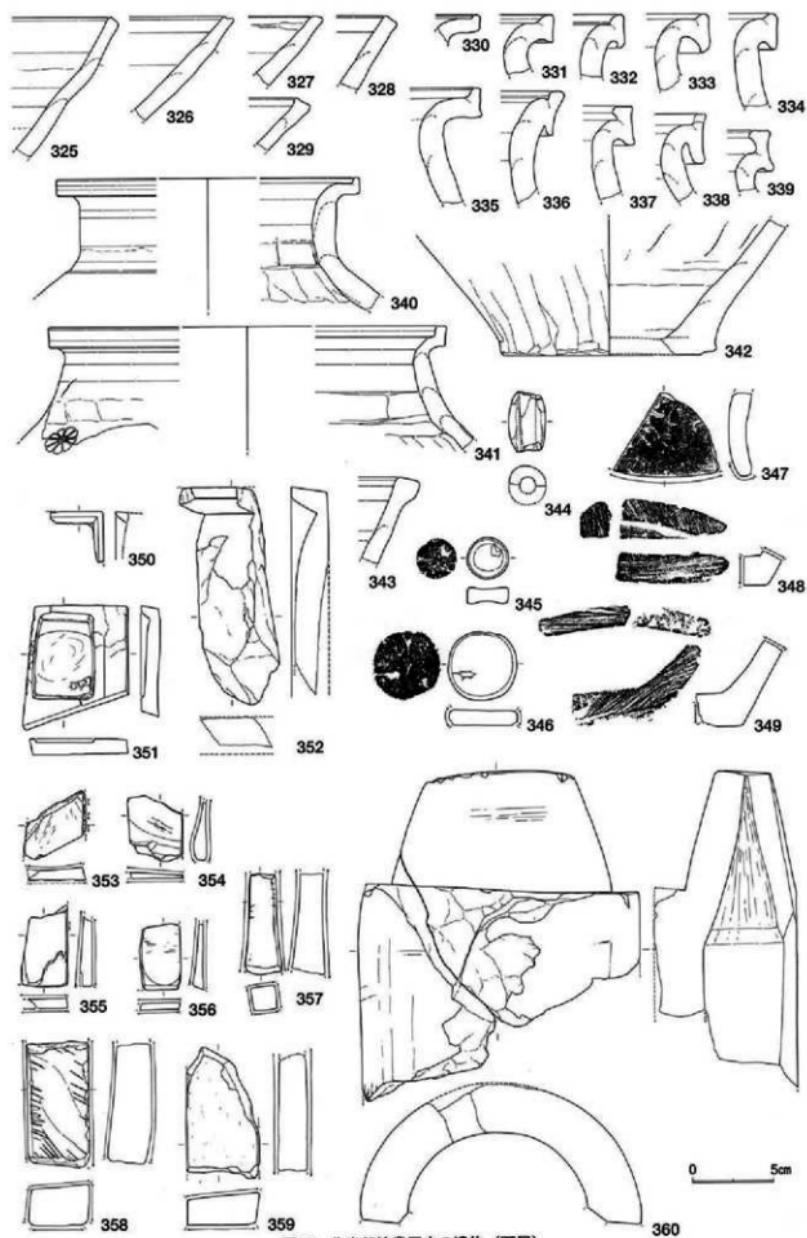


図19 北部地業層中の遺物（下層）

面は著しく磨耗している。179は壺。頸部に沈線、肩部にヘラ記号を配す。180~184は中型ないし大型の壺。183の推定口径は58cm前後である。

185・186は滑石製品。185は温石か。石鍋底部を転用し、側縁に2種類（小刀状・鋸状）の再加工痕が残る。186は石鍋の底部片。細かい擦痕と煤が付着。

187は磨り常滑。実際は渥美窯の壺片であるが、同じ用途に使ったものであろう。

188は平瓦。凸面に格子目の叩き具痕が残る。

これらの他に、北半部上層からは石英（火打ち石）1点と銭15点が出土した。銭の内には10枚が銹着し縮錢状態のものも見られた。（図-23・写真図版参照）

189~277はかわらけ皿。189~209までが手捏ね成形の皿である。236・243・245・262は灯明皿として使用している。

278~281は白かわらけ。278は内折れ型、糸切り底。279は灯明皿として使用される。

282は吉備系土師質皿。手捏ね成形の白かわらけ皿に高台を貼り付けたもので、吉備地方からの搬入品である。

283は土師質の製品。上層で出土した土釜の脚部と思われる。外面ヘラミガキ調整。

284は瓦器。五井輪花型の皿で、同一個体と思われる底部片には木葉状の暗文が見られる。

285~312は船載陶磁器。285~287は青磁錦運弁文碗。288は青磁無文輪花碗。289は青磁碗の底部。290~292は青磁櫛搔画花文皿。293~295は青磁鉢。293の体部内面には型押しの陰刻蓮弁文、295の外面上には鷄蓮弁文が見られる。

296・297は白磁口禿皿。298は白磁口禿碗。

299~308は青白磁。299は碗。内面に櫛搔状の沈線文様を持つ。300・301は小皿。高台部欠損。型押しの花弁状浮文を持つ。302は皿。内面に陰刻蓮弁文を強く型押しする。303は輪花皿。内面に花弁輪郭状の浮文を型押しする。304は合子蓋。天井部に型押しの草花浮文を配す。同一個体片が南半部下層で出土している。305は小壺蓋。天井部は型押しの蓮弁浮文。306・307は小壺。外面の文様は型押し浮文である。308は小型の合子。

309~311は黒釉天目茶碗。309はやや禾目状となる。311は腰部のケズリが2段あり、福建省飛鷺窯産の可能性がある。

312は青磁釉壺。

313・314は瀬戸窯製品。313は小型の四耳壺か。314は鉗し皿。

315~324は山茶碗窯系の製品。315~318は碗。319~324は捏ね鉢である。319・321の推定口径は32cm前後と思われる。

325~342は常滑窯製品。325~329は捏ね鉢。体部外無調整。330~342は壺。推定口径のわかるものは、325(43cm)、327(24cm)、328(28cm)、329(26cm)、332(57cm)、333(57cm)である。

343は土師質手焼り。内外面に白色化粧土がわずかに残る。

344~346は土製品。344は土錘。345・346は土製円盤であるが、345が粘土を丸めて焼成したのに對し、346はかわらけ皿の底部周縁を磨って成形している。

347は磨り常滑。実際には渥美窯の体部片を使用している。

348・349は滑石鍋の底部片。体部と底部を切り取った際の鋸状の加工痕が残る。

350~352は頁岩製の硯。350は海部の縁のみ。351は剥片周囲を磨り切っただけの未製品状態であるが、陸部にはかすかに使用痕が残る。

353～359は砥石。353～356は淡赤色、灰白色、黄灰白色の粘板岩製。京都府鳴滝産か。357は緑灰色の凝灰岩製。群馬県上野産か。358・359は白色地に褐色の斑、流文が入る凝灰岩製。熊本県天草産であろうか。357・358の縁には刃物状の傷が多く見られる。

360は丸瓦。凸面は繩目叩き後ヘラナデ、凹面は布痕が残る。焼成は軟質。

これらの他に北半部下層からは鉄滓1点、石英（火打ち石）1点、銭9点が出土した。（図-23・写真図版参照）

柱穴出土遺物・・・北半部と南半部を合わせてかなりの数の柱穴を検出できたが、測図可能な遺物が出土したのは図5・6に示した柱穴（調査時のPit番号を使用）だけである。遺物としてはかわらけ皿が最も多く、常滑窯の壺・甕、山茶碗窯系捏ね鉢などもある。いずれも小片で特筆すべきものがないため割愛し、ここではピット40出土遺物のみ掲載した。ピット40については第三章2／北西部泥岩版築面の項を参照されたい。

361～364はかわらけ皿。362は完形に近い。

365は渥美窯製品。甕の口縁部小片である。

366は骨製品。釣り針のソケットと思われる。

これらの他に獸骨（写真図版参照）、魚鱗、魚骨が検出されたが、獸骨を除いた小物は水洗作業の不手際で流失している。

南半部地業層中の遺物・・・上層(367～404)と下層(405～454)に区分して取り上げたが、その基準は曖昧で確実な層位によるものではない。むしろ、上層・下層を併せて北半部下層の遺物群と対比させるのが妥当と思われる。

367～385はかわらけ皿。367～371は手捏ね成形であるが、371のみ内折れ型の白かわらけ。

386～387は船載磁器。386は青白磁皿。内底面に型押しの蓮魚文を配す。387は白磁口禿皿。

388～389は瀬戸窯製品。388は黒釉天目茶碗。茶褐色に流下する釉色が禾目状を呈す。389は灰釉鉢。折り線もしくは玉縁の洗・盤形であろうか。

390～393は常滑窯製品。391は肩部に2条の沈線を廻らせる壺。393は推定口径25cm前後の捏ね鉢である。口縁部付近まで磨耗している。

394～396は山茶碗窯系の捏ね鉢。394・396の内面は磨耗。

397は土師質の手培り。内面ハケ後ナデ、外面下位はヘラケズリ。円柱状の脚部は、168と同様に凸部を作って差し込むものである。

398は滑石鍋の体部片。側縁を平滑に切っており、温石に転用した可能性がある。

399～404は砥石。399～402は緑灰色凝灰岩製、群馬県上野産か。403は黄灰白色粘板岩製、京都府鳴滝産か。404は暗灰色頁岩製、産地不明である。399・402には刃物状の傷が多く残る。

これらの他に南半部上層からは獸骨、石英（火打ち石）、銭が出土した。（図-24・写真図版参照）

405～442はかわらけ皿。405～415は手捏ね成形である。422は内折れ型、糸切り底。423は焼成後に底部穿孔を行なっている。424～426は白かわらけであるが、426のみ糸切り底である。灯明皿として使用されたのは428・431。

443～446は船載磁器。443は白磁口禿皿。口唇端部に煤が付着する。444は白磁口禿碗。445は青白磁

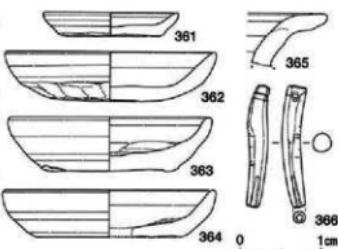


図20 ピット40出土遺物

小壺の蓋。無文。446は青磁鏡蓮弁文鉢。

447は山茶碗。小片である。

448～451は常滑窯製品。448は甌。449～451は捏ね鉢。451の内底面はかなり磨耗している。

452は土師質の手培り。体部に凸帯を巡らせ、口縁部に2種類の花文スタンプを押捺する。器表には白色化粧土がわずかに残る。

453～454は砥石。453は頁岩製。自然礫を利用し、微妙な曲面をそのまま砥面にしている。454は454は粗粒質砂岩製。産地不明である。

これらの他に、南半部下層からは錢5点が出土している。(図-24参照)

トレンチ・表探遺物・・・地山確認用のトレンチ(北壁沿・南北ベルト沿)から出土した遺物と搅乱

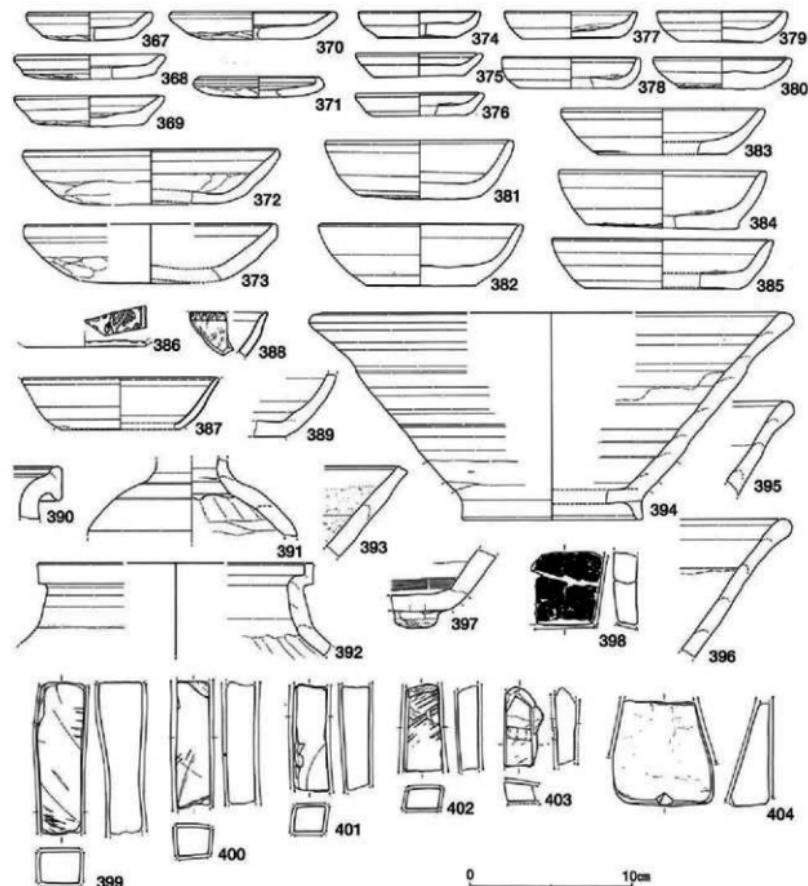


図21 南半部地業層中の遺物(上層)

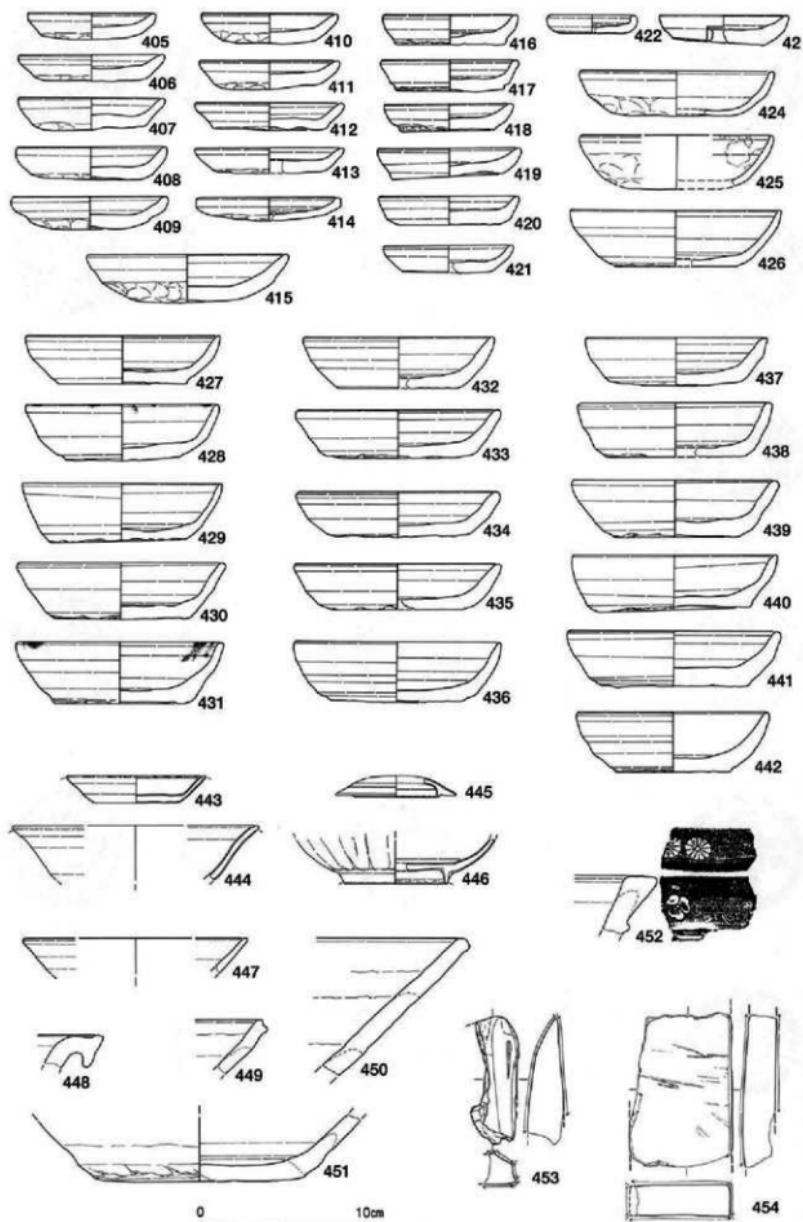


図22 南半部地業層中の遺物（下層）

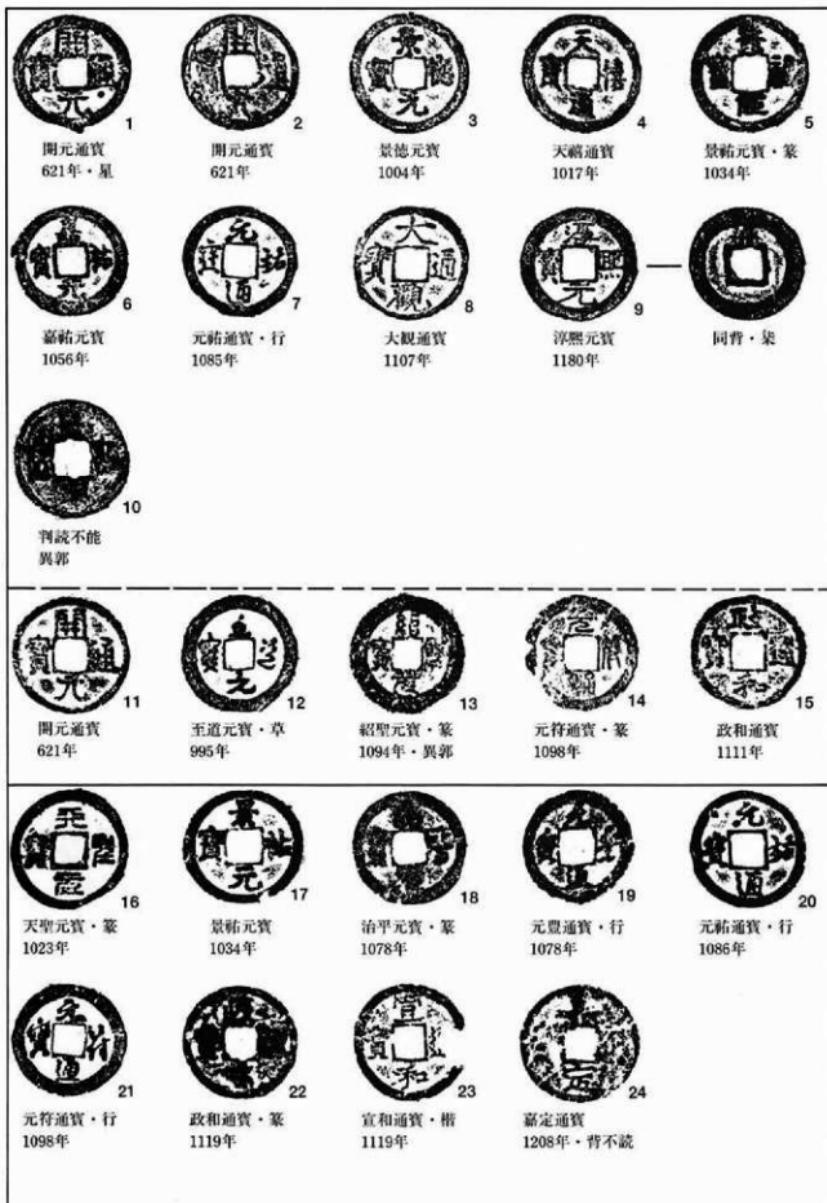


圖23 錢拓影

 25 開元通寶 621年	 26 祥符通寶 1009年	 27 皇宋通寶・篆 1038年	 28 元豐通寶・行 1078年	 29 元豐通寶・行 1078年
 30 元豐通寶・篆 1078年	 31 元祐通寶・行 1086年	 32 判說不能 異郭		
 33 祥符元實 1009年・加工	 34 皇宋通寶 1038年	 35 皇宋通寶 1038年	 36 元豐通寶・行 1078年	 37 判說不能
 38 政和通寶・楷 1111年	 39 元祐通寶・篆 1086年			 40 祥符元實 1009年
 41 元豐通寶・行 1078年・異形				

1~15 北半部地業層中（上層遺構群）  
 1~10は縷  
 16~24 北半部地業層中（下層遺構群）  
 25~32 南半部地業層中（上層遺構群）  
 33~37 南半部地業層中（下層遺構群）  
 38 井口1・井枡内  
 39 ピット34  
 40 ピット50  
 41 ピット80

図24 錄拓影

壇、排土中に混入した遺物を一括した。出土層位が不明であり、帰属する生活面は明らかでない。

455～456は白磁口禿皿。455の口唇部には煤が付着している。

457は青白磁梅瓶の底部。

458は山茶碗蒸系の捏ね鉢。無高台である。

459～460は常滑窯製品。壺の口縁部小片である。460の推定口径は30cm前後と思われる。

461は瓦質の手焼りか。体部内面を除いてヘラナデ調整（口縁部は横位、体部外面は斜位）を行い、黒色処理を施す。胎土中に雲母細粒を含み、中世遺物であるか疑わしい。

462は真岩製の硯。裏面にも硯面らしき曲面が残り、再加工品と思われる。

463は磨り常滑。壺の体部片である。

464～465は砥石。464は白地に褐色の流文が入る石材で、熊本県天草産であろうか。465は暗灰色頁岩製で产地不明。底面に刃物状の傷が多く残る。

466は土師器。脚部内面ヘラナデ、外表面ナデ調整。裾端部には沈線状の窪みが巡る。高坏ではなく、平安期の台付き壺脚台部と思われる。

467～468は須恵器。壺の体部片である。

以上で出土遺物の説明を終えるが、遺物全般にわたる特色や実年代に関しては、第五章で触れることにしたい。

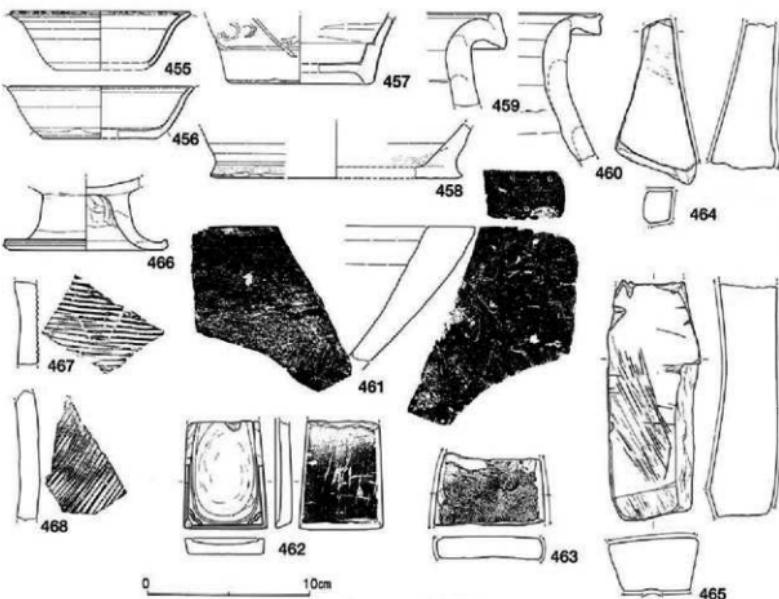


図25 トレンチ・表探遺物

第五章 まとめ

遺跡の年代

遺跡の上限年代は地山面まで調査できなかったため明らかではない。しかし、地表層に混入していた土器類・須恵器（図25-466～468）は、遺跡地周辺が既に平安時代には拓かれていた事を示している。

中世遺物の年代比定には、鎌倉におけるかわらけ皿の編年案（河野 1986）を使用した。近年公表された常滑窯編年（赤羽・中野 1994）も参考としたが、指標となる鉢・壺が長期耐用する性格上、大きな矛盾のない限りかわらけ皿による実年代比定を重視した。それによると、出土したかわらけ皿の中には12世紀末～13世紀初頭に比定できるものではなく、遅っても13世紀前半までと考えられる。主体となるのは調査が及んだ13世紀中頃～14世紀前半であり、14世紀中葉～終末には遺跡自体が一時衰微したのであろうかこの時期に特徴的な薄手丸深タイプのかわらけ皿はほとんど出土していない。また、15世紀代になると遺構数は増加するが、生活面は削平されて遺存しないという状況であった。各遺構の年代観については以下のように考えている。

- 13世紀中頃～後半・・・・・ 戸井2, ピット40  
 (13世紀中頃～14世紀前半) ・・・ 壟地2A～2C  
 13世紀末～14世紀前半・・・・・ 戸井1, 南端遺物集中部  
 15世紀代・・・・・ 壟地1, 壟地4, 溝1 (溝1古)

なお、北半部地業層中の遺物群は下層が13世紀中頃～後半に、上層が13世紀末～14世紀前半に比定できる。つまり、面③とした最下の泥岩版築面を構築した後、およそ100年間（最大）に少なくとも4回の整地地業を行なったことになる。単純計算では25年ごとの建て替えで掘立柱建物の耐用年数にも近いといえるが、現実には數枚の薄い炭層が確認されており、不慮の火災によって建て替えざるを得ず一生活面の存続期間は更に短かったのではなかろうか。

赤羽一郎・中野晴久 1994 「生産地における編年について」 常滑市民俗資料館シンポジウム資料  
河野真知郎 1986 「鎌倉における中世土器様相」 『神奈川考古』第21号

## 遺物の特徴

破片数・個体数を統計的に処理していないため明確な数値では示せないが、出土遺物全般を通して気づいた点を記しておく。先に述べたように出土遺物の主体は13世紀中頃～14世紀前半にある。この間は造構配置に大きな変化がなく、連続した生活が営まれていたと考えている。従って、出土遺物の特徴はそのまま居住者の階層や暮らしぶりを反映するものといえよう。

日常用品としてかわらけ皿・常滑壺・捏ね鉢が多く、瀬戸窯の製品が少ないことは市街地で検出される同時期の遺跡と同じである。しかし、舶載品の中で最も多い青磁編連弁文鏡が少なく、青白磁小物類や錢の出土点数が多いことはこの遺跡（調査地点）の特色と考えられる。また、天目茶碗と茶臼の出土は居住者が喫茶を嗜んでいたことを示し、磁石や再加工硯、切断された石鍋片や鉄滓は屋敷地内における職能民の活動を裏付けている。気になる遺物としてはピット40出土の釣り針ソケットがある。同形態のものは古墳時代中期以降、遅って弥生時代後期でも使用していた可能性があり、現在では“ツノ”と呼ばれる擬似針にその形態を留め、春先から秋口にかけての螺漁で使用されている。土錐と同様に1点だけの出土であるが、海から離れた遺跡で出土する漁具の意味を考える必要があろう。

### 遺構の配置

図26には版築最下面（面③）、13世紀中頃～後半の遺構配置を整理して示した。調査区南側は堀で限られ、泥岩を潰した通路がL字形に作られている。通路の東西両側には井戸とゴミ穴（便所？）が掘られ、ここが屋敷地の正面ではないことを示唆している。掘立柱建物も通路の東西両側に想定できるが、西側の建物には不明な点が多い。東側の建物は柱穴列32～34（図10）をもとに復元したが、更に東方および北方に広がる可能性がある。井戸の位置はその後東方へと移され南北通路の一部を切るが、基本的な遺構配置に変化はなく、13世紀末～14世紀前半まで継承されている。

区画変更を伴う大きな変化は15世紀代であり、調査区中央を東西に横切る溝1で遺跡地は二分されてしまう。生活面が遺存しないため、残念ながらこの時期の遺構配置は不明と言わざるを得ないが、図27で示したように検出遺構全体図と現況平面図を合成すると、溝1による区画は現代にまで踏襲されていることが判る。

なお、本調査終了後に国道沿いの地点（図27－塗印）で井戸が検出された。出土遺物は実見していないが、表土層直下（GL-40cm）で確認され、確実に面③よりも新しい時期の遺構である。

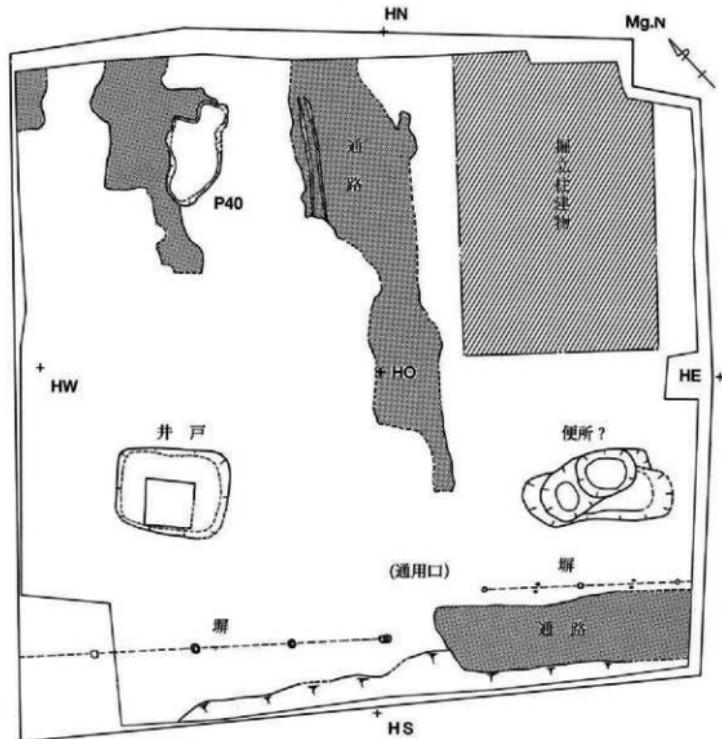


図26 遺構配置想定図

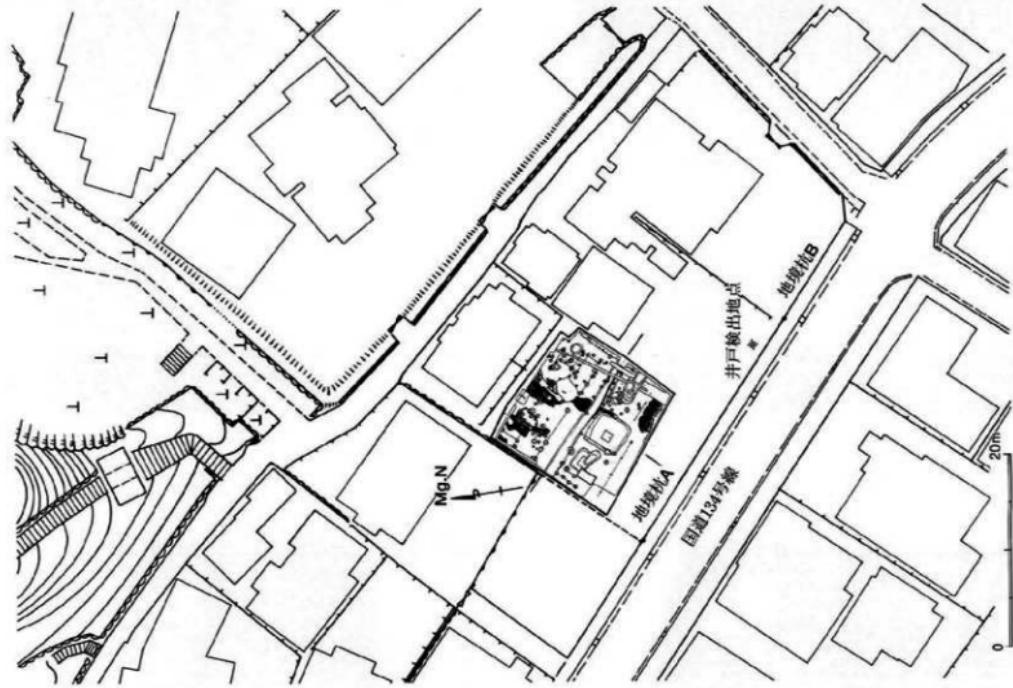


図27 検出地の現況位置図

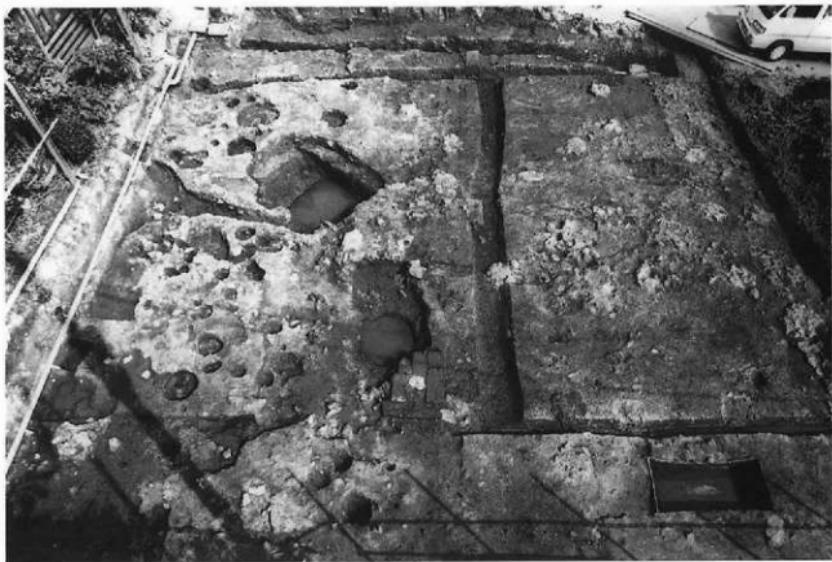
図版 1



調査地点近景（調査前）

周上（調査終了時点）





上層造構群全景（西から）

下層造構群全景（西から）



図版3



井戸1近景（南から）

同 井戸枠内部（東から）





井戸2・土壤4近景（南から）

井戸2内部、クジラ頭骨出土状況（北から）



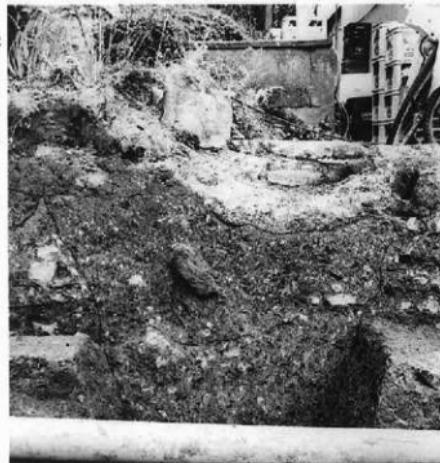
図版5



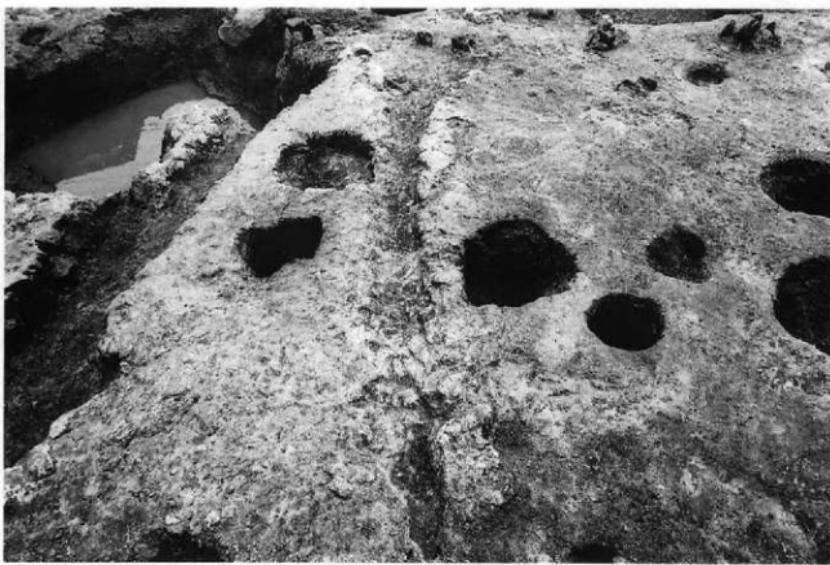
土壤2近景  
(北から)



2A  
2B  
土層堆積状態



2C  
土層堆積状態



北半部版築面（面③）上の溝（北から）

南半部通路状造構（東から）



図版7



柱根（ビット27）



かわらけ皿出土状態



南端遺物集中部の状態  
(西から)

図版8

井戸2(土壤4)出土

マゴンドウクジラ頭骨・上面



同・側面



同・下面



(スケール目盛りは25cm)

図版9



a・b 井戸1出土 c 井戸2（土壤4）出土

貝



石英（火打ち石）

d 南半部地表層（上層）出土

e 挿乱堆内出土

f 南半部地表層（上層）出土

g 北半部地表層（下層）出土

歯骨



鉄滓・壁体

h 南半部地表層（上層）出土

i ピット40出土

j 溝1（古）出土

k 土壌2出土

石材（片岩？）



l ピット14出土 m 南端遺物集中部出土

n 北半部地表層（下層）出土 o 溝1（古）出土 p 井戸2（土壤4）出土



q ピット54出土

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさはうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名							
卷次	第1分冊						
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
シリーズ番号	11						
編集者名	菊川英政						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号						
発行年月日	西暦1995年3月						
ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市大町 三丁目	204 231		19930706～ 19930824	200	自己用店舗併用 住宅	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
名越ヶ谷遺跡	中世都市遺跡	13世紀中頃～ 14世紀前半	通路状遺構 井戸 土壙 樋列(擬) 柱穴群	2条 2基 3基 2条	土師器、須恵器、かわ らけ、常滑、瀬戸、舶 載陶磁器、瓦、砥石、 硯、木製品、鉄、貝、 骨、鉄滓等	通路と堀を持つ屋敷地 の一画を検出。 15世紀代に大きな区画 変更が行われている。	
		15世紀	溝 土壙	1条 1基		テンバコ22箱	

5. 由比ヶ浜南遺跡 (No. 315)

鎌倉市長谷二丁目188番2外地点

## 例　　言

1.本報は鎌倉市長谷二丁目188番2外に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2.発掘調査は鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成6年2月17日～3月18日である。

3.本報の執筆・編集は瀬田哲夫が行った。また、出土遺物の実測、拓本、トレスには吉田桂子、水上桂子、瀬田浩美の協力を得た。

4.本報に使用した写真は遺構・遺物ともに瀬田が撮影した。尚、遺構全景写真はリモコン式高所撮影装置により木村美代治が撮影したものである。

### 5.調査体制

調査員 瀬田哲夫

調査補助員 野本賢二、丹行正、吉田桂子、桑健一、瀬田浩美

作業員 香川尚美、高井富三、寺平義夫、長島三男、増田保、蓑田考善、渡辺鉄雄

6.発掘調査、及び、報告書作成にあたり次の諸氏より御協力・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)

中野晴久(常滑市民族資料館)、後藤健一(湖西市教育委員会)、藤沢良祐(瀬戸市教育委員会)、手塚直樹、斎木秀雄、馬淵和雄、宮田真、大河内勉、菊川英政、沙見一夫(鎌倉考古学研究所)

7.本遺跡に関する発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

# 本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	193
第二章 調査の経過と堆積土層 .....	196
第1節 調査の経過 .....	196
第2節 堆積土層 .....	197
第三章 検出された遺構と出土した遺物 .....	198
第1節 中世の遺構と遺物 .....	198
I. 中世遺構 .....	198
II. 中世遺物 .....	201
第2節 古代の遺構と遺物 .....	207
I. 古代遺構 .....	207
II. 古代遺物 .....	208
第四章 まとめと考察 .....	214

# 挿図目次

図1. 鎌倉市全図と調査地点 .....	192
図2. 調査地点及び周辺の遺跡 .....	194
図3. グリット軸設定模式図 .....	196
図4. グリット割付図 .....	197
図5. 中世遺構全体図及びセクション図 .....	199
図6. トレンチ出土遺物（中世） .....	201
図7. 搅乱壙出土遺物（中世） .....	202
図8. イコウ48出土遺物（中世） .....	203
図9. イコウ49出土遺物（中世） .....	205
図10. イコウ50出土遺物（中世） .....	206
図11. 古代遺構全体図及びセクション図 .....	207
図12. 出土古代遺物（1） .....	209
図13. 出土古代遺物（2） .....	211
図14. 出土古代遺物（3） .....	212
図15. 出土遺物構成 .....	214

# 写真図版目次

図版1 1. 調査前状況 2. 調査区北部遺構検出状況 3. 同、A・B-3付近 .....	216
図版2 1. 作業状況スナップ 2. 中世遺構全景（北から） 3. 同、（南から） .....	217
図版3 1. イコウ49（南から） 2. 同、（東から） 3. A・B-6付近 .....	218
図版4 1. イコウ66（東から） 2. B-3遺物出土状況 3. 同、（西から） .....	219
図版5 1. イコウ64検出状況 2. 動物骨出土状況 3. 調査区西壁セクション .....	220
図版6 1. 西壁セクション（A-1） 2. 同、A-2・3 3. 同、A-4・5 .....	221
図版7 1. 西壁セクション（A-5～7） 2. 同、A-6 3. 東壁セクション（B-2） .....	222
図版8 1. 東壁セクション（B-2・3） 2. 同、B-4 3. 同、B-6 .....	223
図版9 出土遺物（1） .....	224
図版10 出土遺物（2） .....	225

図1 献食市全圖上調査地点



# 第一章 遺跡の位置と歴史的環境（図1、2）

本調査地点は鎌倉旧市街地の南部に位置しており、JR鎌倉駅から南へ約800m、西へ約800m、江ノ電由比ヶ浜駅から南へ約100mの距離にある。地番は鎌倉市長谷二丁目118番2外である。調査地点は鎌倉旧市街地の南部に形成された砂丘上に位置している。現地表面の海拔レベルは約10.0mであり、周囲に比べ標高が高い地点である。

調査地点の北方約200mには現在、国道134号線が東西に走っている。この道筋は中世においては長谷小路（大町大路）と考えられ、鎌倉七口のうち大仏坂、極楽寺坂から都市中心部へと繋ぐ重要な道筋である。この長谷小路をはさんだ北側の山沿い地域は「甘禪」と呼ばれ、甘禪神明社、長楽寺、万寿寺などの寺社の他に安達一族の屋敷をはじめ、多くの御家人や被官がその居宅を構えた場所である。長谷小路の南側は由比ヶ浜とその背後に広がる砂丘地帯であり、滑川河口西岸は「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡」と称される区域である。この地域一帯は「前浜」と呼称され、その支配権は和賀江島を含め忍性以来、極楽寺長老に与えられている。「由比ヶ浜南遺跡」は「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡」の西側に位置している。

中世以前におけるこの地は、稻村ヶ崎の先端から御靈神社（権五郎社）、甘禪神明社、元八幡付近をぬけ、逗子・三浦方面へと通じる古東海道の道筋にあたり、交通の要所であったと考えられる。稻瀬川（水無瀬川）は『万葉集』に詠まれ、和田塚あたりには、人物埴輪を出土した妥女塚を含む「下向原古墳群」が明治頃まで存在していたという。

長谷小路の南側（長谷小路周辺遺跡、由比ヶ浜南遺跡）では既に10箇所で発掘調査が実施されており、古代、中世における数多くの成果が得られている。以下、代表的な調査地点を概観していきたい。

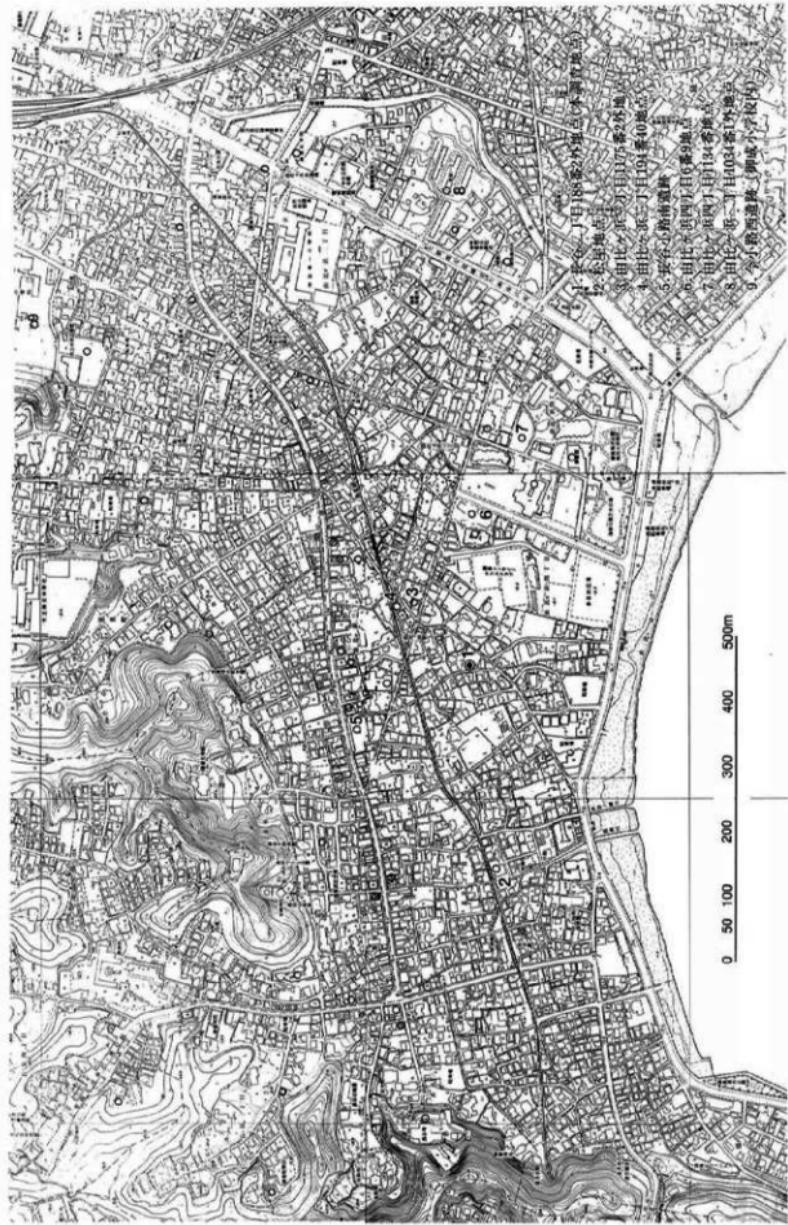
「由比ヶ浜南遺跡」における発掘調査は、本地点の他に「松屋地点（図2-2）」の1箇所で実施されている。海岸まで約230mであり、中世造構の基盤層は海拔2.5m程で検出されている。井戸、土壙、溝、方形堅穴建築址などが検出されているおり、14世紀代の年代が考えられる。中世以前では多くの遺物が出土しているが、造構は検出されていない。海拔1.8m前後には、ほぼ平坦な「波蝕台」が検出されている。

次に本地点の北側で調査が行われている「長谷小路周辺遺跡」について触れておきたい。「由比ヶ浜三丁目1175番2外地点（図2-3）」では、ピット、大型の長方形土壙、溝状の細長い土壙、土壙などが検出されており、13世紀後半～14世紀いっぱいの年代が与えられている。掘削深度の規定から中世以前の造構は確認されていないが、8～10世紀代の遺物が出土している。また、特筆すべきは、古代官吏が身につける石帶の部材－鉈尾－の出土である。「今小路西遺跡－御成小学校－（図2-9）」では8～10世紀代の郡衙、および郡衙関連造構が確認されており、非常に興味深い遺物である。

「由比ヶ浜三丁目194番40地点（図2-4）」では道路、及び道路側溝群、井戸、方形堅穴建築址等が検出されている。また、正嘉元年（1257）あるいは永仁元年（1293）の地震により発生したと考えられる液状化現象（噴砂）の痕跡が確認されている。中世造構の年代は14世紀代、中世以前の造構は8～10世紀代と考えられるが、詳細は報告書は報告書の刊行を待ちたい。

「長谷小路南遺跡（図2-5）」では方形堅穴建築址、土壙、ピット、井戸等の中世造構を検出しており、14世紀を中心とする年代が考えられている。出土遺物には骨・角を原材料とする未製品や、鑄造関係の遺物が出土しており、生産活動の痕跡が確認されている。中世以前の造構としては土壙墓、8～

図2 地震地点及び周辺の遺跡



9世紀代の堅穴住居址、古墳時代初頭（五領期）の祭祀遺構が検出されている。

「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡」では既に9地点で調査が行われているが、ここでは、代表的な3地点を紹介していくことにする。

「由比ヶ浜四丁目6番9地点（図2-6）」では、3期にわたる中世遺構群が確認されている。1期ではほぼ直交する幅2.0m程の道路と、塩田の可能性をもつ遺構が検出されており、15世紀前半頃～18世紀初めの年代が考えられている。2期では1期で検出された道路とはほぼ同じ位置から、最大幅約9.0mの道路と幅2.0m程の脇道が検出されている。この道路により敷地は区画され、方形堅穴建築址、井戸、土壙、掘立柱建物、礎石建物が配されている。13世紀後半～14世紀いっぱいの年代が考えられている。3期は掘立柱建物のみで構成されている。2期とは明確な時期差を有しており、浜地に方形堅穴建築址が構築される以前～13世紀後半から遺構が営まれていたことが確認された。尚、当該地では土壙墓（埋葬人骨）は確認されていない。掘削深度の規定から、中世以前の遺構に関しては未確認であるが、8～10世紀代の遺物が出土している。

「由比ヶ浜四丁目1134番地点（図2-7）」では14世紀前半～15世紀初頭頃の方形堅穴建築址、礎石建物、土壙、土壙墓、火葬址等を検出している。土壙墓では和鏡、漆器碗、かわらけ等を副葬品とした例も確認されている。中世以前では7世紀後半～10世紀頃の堅穴住居址、掘立柱建物、貝塚状遺構等を検出している。特徴的な遺物としては、鑽を有するト骨片が65点出土している。

「由比ヶ浜二丁目1034番1外地点（図2-8）」では2時期の中世遺構が確認されている。上層遺構群では調査区の西と東に道路が検出されている。西側の道路は幅20m以上の幅を有し、南北に通じている。建物は方形堅穴建築址が主体であり、井戸、土壙、ピット、土壙墓、遊離人骨、集積人骨土壙などが検出されている。下層遺構では掘立柱建物、柵状遺構、土壙墓が検出されている。上層遺構は14世紀代、下層遺構は13世紀中～後半の年代が考えられる。中世以前の遺構は、堅穴住居址、土壙、祭祀遺構を検出している。出土遺物から7世紀後半～10世紀代の年代が考えられる。

以上、周辺の遺跡について概略を述べてきた。本遺跡の周辺では、古墳時代頃から本格的に土地利用が開始される。鎌倉に郡衙が置かれる律令期には、多くの住居址が築かれ、集落を形成していった。しかし、律令体制が崩壊する平安時代後期になると遺構が検出されなくなる。この地が再び利用されるのは13世紀中頃であり、掘立柱建物を主体とした遺構群と考えられる。そして、14世紀を前後する時期になると方形堅穴建築址を主体とする遺構群が活発に展開される。しかし、15世紀前半頃には鎌倉府は滅亡し、中世都市としての機能を失い、以後、農・漁村へと変貌していく。

#### 【参考文献】

- ・『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9』 鎌倉市教育委員会 1993.3
- ・『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10』 鎌倉市教育委員会 1994.3
- ・『長谷小路南遺跡』 長谷小路南遺跡発掘調査団 1992.2
- ・『由比ヶ浜4-6-9 地点発掘調査報告書』 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団 1994.3
- ・『由比ヶ浜三丁目199番1地点遺跡発掘調査報告書』 同発掘調査団 1990.7
- ・大河内勉 「神奈川県由比ヶ浜中世集団墓地遺跡」『日本考古学年報39』 日本考古学協会 1988.3
- ・大河内勉他 「鎌倉市長谷小路周辺遺跡の液状化跡」『第四紀研究 第32巻第1号』 1993.2
- ・『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』 同発掘調査団 鎌倉市教育委員会 1990.1

## 第二章 調査の経過と堆積土層（図3、4）

### 第1節 調査の経過

本調査は開発事業に伴う道路の拡幅に係る国庫補助事業緊急調査として平成6年2月17日から3月18日にかけて実施された。地番は鎌倉市長谷二丁目118番2外である。調査区は東西約3.0m×南北約2.40mの長方形を呈し、面積は約60m<sup>2</sup>である。また、掘削深度規定により調査は海拔8.1mの深さまでとした。現地表の海拔は約10.0m～10.6mであり、調査区内では現代の盛り土のため南側が高いが、調査地点の南外は海に向かって傾斜している。

鎌倉市教育委員会による試掘調査の結果から、現地表から60cmほどは近・現代の客土と判断され重機を用いてこれを除去した。調査区北半部にはガラス、プラスチックetc.を多量に含む大型の搅乱壟が集中しており、中世遺物包含層上面（海拔9.6m前後）を第1面と呼称し造構の確認を行った。さらに、20～40cmほど堆積した中世遺物包含層を除去し、中世基盤層に相当する白黄色砂上面（第2面）において造構の検出を行った。海拔は9.3m前後である。検出された造構はピット：15口、土壙：2基、方形堅穴建築址：3棟である。

試掘調査時より古代遺物（8～9世紀代）の出土量が多く、また焼土、炭化物層等が確認されており該期の堅穴住居址の検出が期待された。しかし、調査区は狭く、また、近・現代の搅乱壟、中世の方形堅穴建築址などにより調査区は大きく削平され、古代遺構のプラン確認を難行させた。古代の遺構として検出されたものは、堅穴住居址：4棟である。しかし、いずれも部分的な検出であり住居址として捉えるにはやや無理があるかもしれない。各遺構には焼土層内に土器片が散在するものや、カマド構築に用いられたと考えられる粘土塊などが検出されている。

出土した遺物は古代：土師器、須恵器等。中世：かわらけ、国内諸窯の製品、船載陶磁器、金属製品、骨製品、獸骨、貝類等テンバコ15箱ほどである。

調査にあたり、調査敷地内に4.0mの方眼を設定した。設定の基準には鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市4級基準点を使用した。鎌倉市4級基準点E131（X-76659.829、Y-26304.034）とE112（X-76708.184、Y-26302.021）とを結んだ直線を基準軸とし、E131を中心にして東に角度を93°41'43"振り、東へ3.0mの地点をB-4グリット・ポイントとした。このE131とB-4とを結んだ

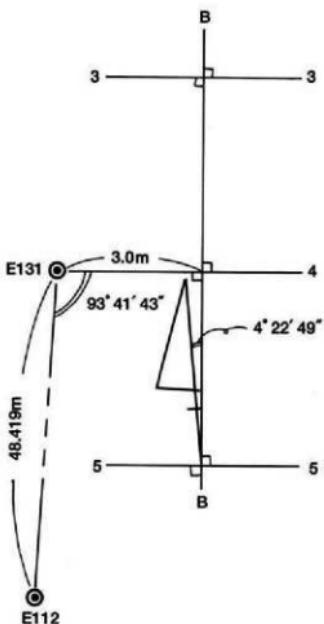


図3 グリット軸設定模式図

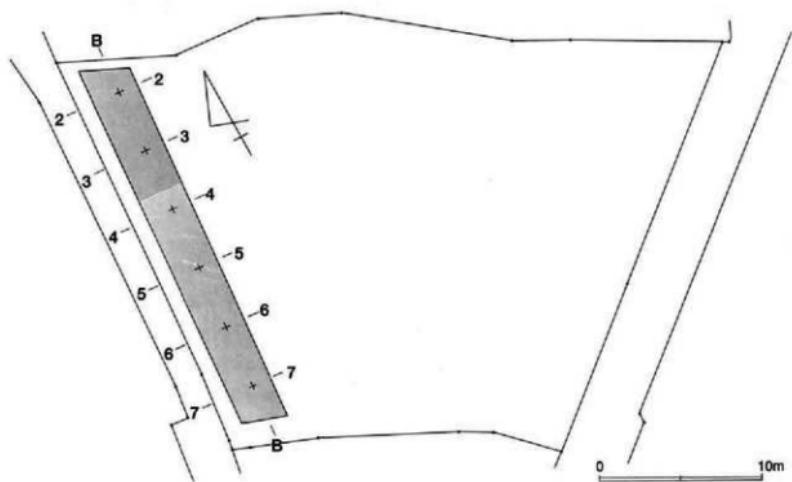


図4 グリット割付図

直線を東西基準軸（4ライン）とし、B-4を中心とし南北基準軸（Bライン）を設定した。方眼は4.0mとし、東西方向にアルファベット、南北方向に算用数字を付し、それぞれの方眼区画の呼称には北西角の軸線交点を使用した。尚、このグリット南北基準軸は磁北に対して $4^{\circ} 22' 49''$ 西に傾いている。

## 第2節 堆積土層

前節で述べたように、本調査地点における地表の海拔レベルは10.0m前後であり、掘削深度規定である海拔約8.1mまでの約2.0mを調査した。検出された堆積土層は、表土、中世遺構基盤層、古代遺構基盤層、遺構覆土の4つに区分することができる。

古代遺構基盤層は、灰褐色、もしくは黄味がかった褐色を呈した砂層であり、粗粒砂・中粒砂が互層を成している。確認レベルは調査区南部で8.4m、中部で8.7mであり、各層はほぼ水平に堆積している。狭い調査区内の検出であり、古代遺構を平面的に確認することは不可能であった。しかし、粘土層、炭粒混入層などをセクションにより確認し、該期の遺構群が存在することが判明した。

中世遺構基盤層は、古代遺構が埋没した後に堆積した砂層であり、黄色を主体とした褐色、白色、灰色を呈している。粗粒・中粒・細粒砂が互層を成しており、確認レベルは調査区南部、北部ともに9.5m前後である。各層はほぼ水平に堆積しているが、調査区中央部あたりでは9.3mであり、浅い窪地状を呈している。中世遺構の主体は方形堅穴建築址であり、古代遺構の覆土を大きく掘り抜いている。このため、中世遺構からの古代遺物片の出土量が多い。

表土は現代の盛り土であり、ビン・ガラス等を含む多くの大型擾乱層が掘り込まれている。

尚、堆積土の詳細については第三章-図5において触れていくたい。

# 第三章 検出された遺構と出土した遺物

本章では検出した遺構と、出土した遺物について述べていきたい。まず、中世に属する遺構群と遺物について言及し、次に、古代に属する遺構群と遺物について説明を加えていきたい。

## 第1節 中世の遺構と遺物

### I. 中世遺構（図5）

中世基盤層に相当する灰褐色黄色砂上面において検出された遺構群である。確認レベルは海拔9.3m前後である。調査区北半部は現代のゴミ穴やマンホール等により、大きく搅乱されているが、ピット：15口、土壤：2基、方形堅穴建築址：3棟の遺構群を検出した。

各遺構についての説明を加える前に、図5におけるセクション図の土層注記を以下に記す。

- |                  |                    |                   |
|------------------|--------------------|-------------------|
| A. 表土。           | 10. 黒褐色砂、暗灰黄色砂混入。  | 34. 灰黄色粗砂。        |
| B. 暗灰褐色黄色砂。      | 11. 暗灰黄色砂。         | 35. 灰黄色細砂。        |
| C. 灰褐色中砂。        | 12. 灰褐色黃色細砂。       | 36. 灰黄色粗砂。        |
| D. 灰褐色黄色細砂。      | 13. 暗褐黄色砂。         | 37. 暗灰褐色黄色砂。粘土混入。 |
| E. 灰白黄色中砂。       | 14. 暗褐黄色砂。         | 38. 灰黄色砂。しまり良好。   |
| F. 灰白黄色粗砂。       | 15. 暗褐黄色砂。         | 39. 灰褐色黄色砂。粘土混入。  |
| G. 灰白黄色細砂。       | 16. 暗褐黄色砂。         | 40. 灰褐色黄色砂。       |
| H. 黄色粗砂。炭粒を含む。   | 17. 黑褐色砂。          | 41. 灰褐色黄色中砂。土丹混入。 |
| I. 灰褐色黄色細砂。      | 18. 灰褐色砂。          | 42. 暗褐黄色砂。粘土混入。   |
| J. 灰褐色中砂。        | 19. 黑褐色砂。          | 43. 明褐黄色粗砂。炭粒混入。  |
| K. 暗褐色黄色中砂。      | 20. 灰褐色砂。          | 44. 暗褐色黄色中砂。      |
| L. 暗灰褐色粗砂。       | 21. 暗褐色砂、灰褐色砂混入。   | 45. 灰黄色粗砂。        |
| M. 暗灰褐色中砂。       | 22. 灰褐色砂。          | 46. 暗褐色細砂。        |
| N. 暗灰色粘質砂。       | 23. 暗褐色砂質土。        | 47. 暗褐色中砂。        |
|                  | 24. 暗褐色粘質砂。        | 48. 灰黄色中砂。        |
| 1. 暗褐色砂質土。土丹粒混入。 | 25. 灰褐色黄色砂。        | 49. 淡褐色砂。         |
| 2. 暗褐色砂質土。       | 26. 白黄色砂、灰褐色黄色砂混入。 | 50. 灰黄色中砂。        |
| 3. 黑褐色粘質砂。土丹粒多し。 | 27. 暗褐色粘質砂。        | 51. 灰黄色粗砂。        |
| 4. 暗褐黄色砂。土丹粒を含む。 | 28. 灰褐色黄色砂。        | 52. 灰黄色中砂。        |
| 5. 暗灰褐色黄色砂。      | 29. 灰褐色黄色中砂。       | 53. 暗褐色黄色中砂。      |
| 6. 暗灰褐色中砂。       | 30. 灰褐色黄色中砂。       | 54. 暗褐色中砂。        |
| 7. 暗灰褐色砂中砂。遺物多し。 | 31. 灰黄色中砂。         | 55. 暗褐色黄色細砂。      |
| 8. 黑灰色砂。         | 32. 灰黄色粗砂。         | 56. 白黄色粗砂。        |
| 9. 黑褐色細砂。        | 33. 灰黄色細砂。         | 57. 白黄色細砂。        |

[調査区西壁セクション図]

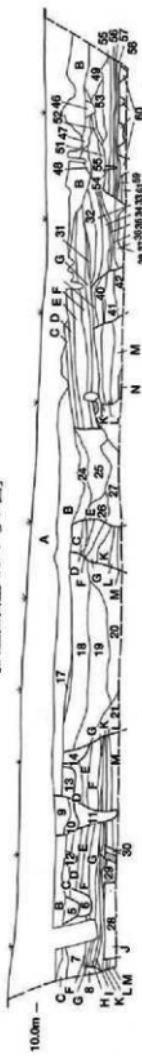
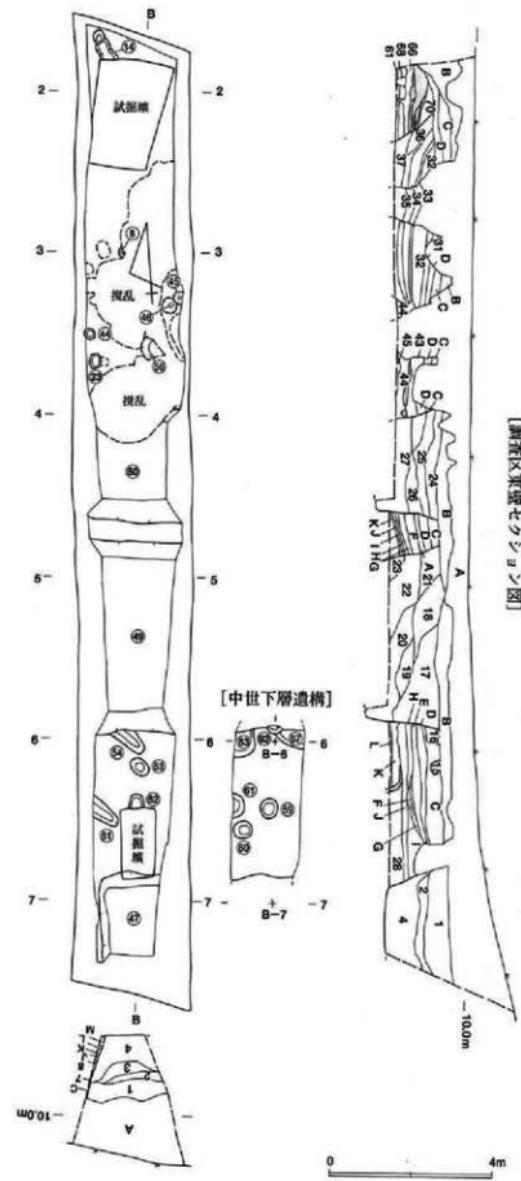


図5 中世遺構全体図及びセクション図

-199-



- |                  |                   |                  |
|------------------|-------------------|------------------|
| 58. 暗褐色粘土。       | 63. 暗褐色粘土、灰黄色砂混入。 | 67. 白黄色細砂。       |
| 59. 灰黄色中砂。       | 64. 暗褐色砂。         | 68. 暗青色粗砂。       |
| 60. 灰黄色粗砂。       | 65. 暗褐色砂、灰黄色砂混入。  | 69. 灰褐色砂、白黄色砂混入。 |
| 61. 暗灰褐色細砂。粘土混入。 | 66. 灰褐色砂。黑褐色砂混入。  | 70. 暗灰黄色中砂。      |
| 62. 灰白色細砂。       |                   |                  |

A層は現代の盛り土、及び、搅乱層である。C～J層は中世造構基盤層、K～Nは古代造構基盤層であり、基盤層は風成砂により構成されている。

中世造構は1～4層がイコウ48覆土、9～10層がイコウ51覆土、11層がイコウ61覆土、12層がイコウ60覆土、17～23層がイコウ49覆土、24～27層がイコウ50覆土である。古代造構としては28～30層がイコウ64を含んだ住居址、31～38層がイコウ70とした住居址、40～45層が住居址、47～58・60・62～70層が住居址としての可能性がある。

中世造構はイコウ8、14、23、44、45、46、52、53、56、59、60、61、62、63、67の15口がピット、イコウ51、54が土壤、イコウ48、49、50が方形堅穴建築址である。

### 1. ピット

本遺跡から検出されたピットは、円形、楕円形、隅丸方形の平面形を呈し、確認面からの深さは20～30cmほどである。覆土は暗褐色砂を主体としており、土丹粒、炭粒を含んでいる。全て柱穴と考えられるが、狭い調査区内からの検出であり、建物を復元することはできない。

### 2. 土壌

土壤として捉えたものは、A・B-6グリットから検出されている。おそらく、溝状を呈するものと考えられるが、部分的な検出であり詳細は不明である。イコウ51・54は並走しており、芯～芯の距離は約1.9mである。主軸方位はN-50°00'00"-Wであり、覆土は灰黄色砂である。

### 3. 方形堅穴建築址

イコウ48はA・B-6・7グリットから検出された。方形堅穴建築址の北東部分が検出されている。確認面からの深さは1.7m前後であり、掘り形底面の海拔レベルは約8.0mである。覆土は暗褐色砂を主体としており、中層で検出された黒褐色粘質砂からは、多量の遺物片が出土している。掘り方底面は平坦であり、鎌倉石（凝灰岩切石）・伊豆石（安山岩）等の礎石や、柱穴は検出されていない。主軸方位は磁北とほぼ一致する。

イコウ49はA・B-4・5グリットから検出された。方形堅穴建築址の北壁と南壁とが検出されている。東、西壁は調査区外である。南北規模は上端で約4.8m、確認面からの深さは約1.8mであり、掘り形底面の海拔は約7.5mである。覆土は灰褐色砂を主体としている。掘り方底面はイコウ48と同じく平坦である。主軸方位もおそらく磁北と一致するものであろう。尚、イコウ49はイコウ54を切っている。

イコウ50はA・B-4グリットから検出された。方形堅穴建築址の北壁と南壁とが検出されている。本址の東、西壁も調査区外である。南北規模は上端で約2.7mであり、他の方形堅穴建築址と比べやや小規模なものと考えられる。確認面からの深さは約1.5mであり、海拔レベルは約7.7mである。覆土は

暗褐色粘質砂を主体としている。掘り方底面は平坦であり、主軸方位も他の方形窓穴建築址と同様に磁北と一致するものであろう。

## II. 中世遺物（図6～10）

本遺跡からは貝・動物骨を除き、破片数で4240点の中世遺物が出土している。ここでは出土した中世遺物についての説明を加えていく。尚、かわらけの法量については、図版中に口径一底径一器高（単位cm）を記載した。（ ）内は復元数値である。

### （1）トレンチ出土遺物（図6）

トレンチ掘り下げ時に出土した遺物をここに集めた。

1～6は瀬戸窯製品である。

1は縁釉小皿。復元口径9.9cm。胎土は灰色を呈し、やや粗雑である。釉は灰釉。調査区北部出土。

2は灰釉の皿。口縁部である。胎土は橙色を呈し、やや粗雑である。調査区北部出土。

3は鉄釉の香炉。体部である。胎土は灰白色を呈し緻密。外面には花文が押印される。表土出土。

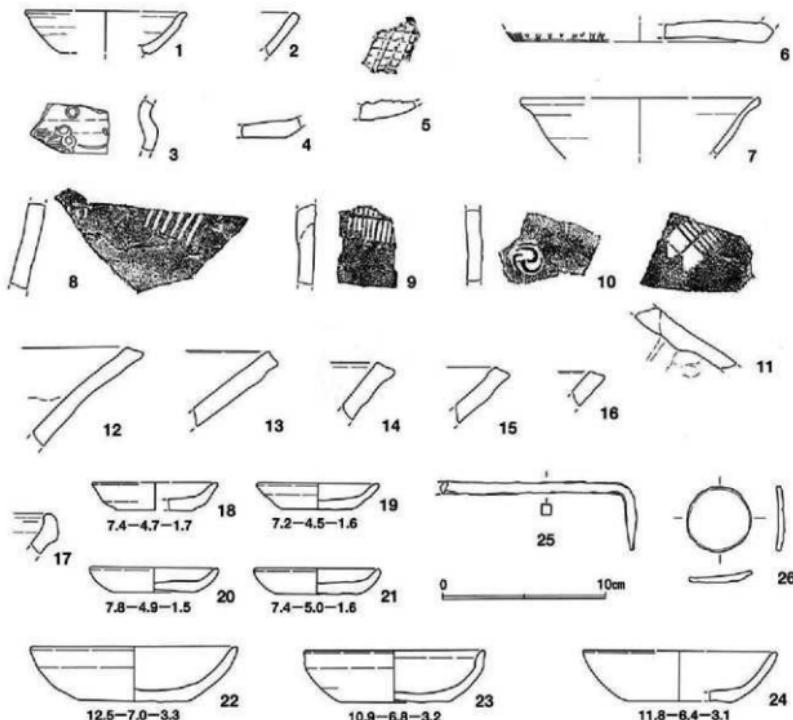


図6 トレンチ出土遺物（中世）

- 4は灰釉皿。底部である。胎土は灰白色を呈し緻密。外底面は糸切りである。表採遺物。
- 5は灰釉卸し皿。底部である。胎土は灰白色を呈し緻密。外底面は糸切り。表土出土。
- 6は灰釉折れ縁鉢。底部である。胎土は乳灰色を呈し緻密。外底面は砂底。確認面出土。
- 7は東濃型山茶碗。口縁部である。復元口径14.6cm。胎土は灰白色を呈し緻密。確認面出土。
- 8~11は常滑窯の体部押印の拓本である。10は巴文、他は格子文である。8、11は表土、9、10は調査区北部確認面出土。
- 12~16は常滑窯捏鉢の口縁部である。いずれも胎土は粗く、端部は角張り、外方へやや張り出している。12、13は調査区南部確認面、14~16は表土出土。
- 17は魚住窯捏鉢。口縁部である。胎土は灰色を呈し粗雑。表土出土。
- 18~24はかわらけである。18~21は小皿、22~24は大皿であり、いずれもロクロ成形である。19、20、24は表土出土。他は調査区南部確認面出土である。
- 25は鉄製品。鎌である。調査区北部確認面出土。
- 26は貝製品。アワビの殻を丸く加工している。鏡の形代であろうか。直径4.0cm。南部確認面出土。

## (2) 撲乱塙出土遺物(図7)

- 1はかわらけ大皿である。ロクロ成形。
- 2はかわらけ小皿である。ロクロ成形。
- 3は常滑窯盤である。肩部押印の拓本である。
- 4は常滑窯捏鉢である。胎土は灰黒色を呈し緻密。口縁端部は角張り、内・外に引き出される。
- 5・6は加工痕を有する動物骨である。
- 5は両側面、及び、頂部に削痕を有する。頂部は山型に削られており、端部は粗雑に折られている。
- 6はウシ、もしくはウマの中足骨からU字形の骨材を採取した残片である。U字の幅は4.5cm、高さは3.4cmである。削り面にはノコギリ挽きの痕跡が明瞭に観察される。

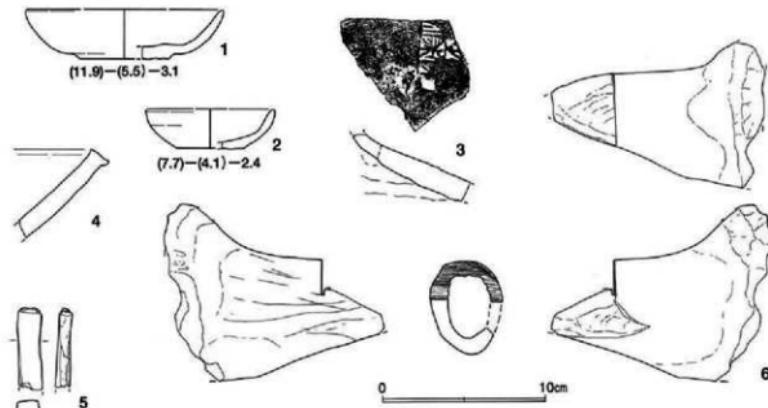


図7 撲乱塙出土遺物(中世)  
— 202 —

(3) イコウ48(方形堅穴建築址)出土遺物(図8)

- 1～3は瀬戸窯製品である。
- 1は灰釉の折縁小鉢である。口縁部。胎土は淡橙灰色を呈し緻密。
- 2は灰釉の卸し皿である。口縁部。胎土は灰白色を呈し緻密。
- 3は灰釉の卸し皿である。底部。胎土は灰白色を呈し緻密。外底面は回転糸切り。
- 4～8は常滑窯窯変である。
- 4～6は口縁部であり、N字形の線帯をもつ。胎土は灰白色を呈し、やや粗雑である。
- 7・8は体部片であり、押印の拓本である。格子文を有する。
- 9・10は常滑窯捏鉢である。口縁部。口縁端部は外方に引き出される。胎土は灰白色を呈し粗雑。
- 11は備前窯捏鉢である。体部内面の拓本である。胎土は粘性強く、灰白色を呈する。
- 12～14は瓦質手焼きの口縁部である。いずれも輪花型を呈するものであり、12・14の外面には菊花のスタンプが押印されている。
- 15は魚住窯捏鉢である。復元口径28.3cm。胎土は灰色を呈し粗雑である。
- 16～22はかわらけである。いずれもロクロ成形であり、16～20は小皿、22・23は大皿である。16は口

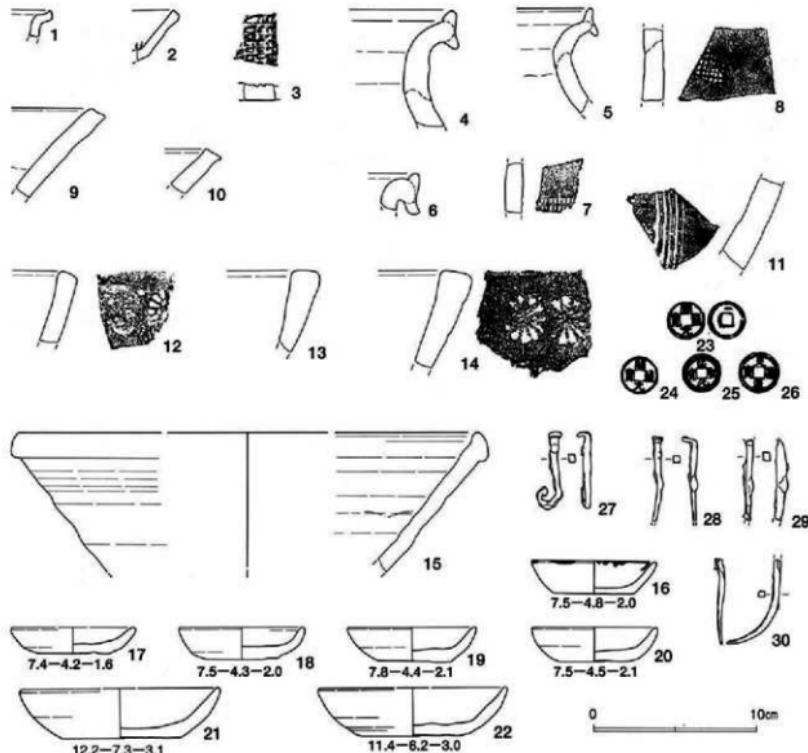


図8 イコウ48出土遺物(中世)

縁部に煤が付着しており、灯明皿として使われたものである。

23~26は銅鏡である。23・24は開元通寶で、23には背文が見られる。25は紹聖元寶。26は天禧通寶。

27~30は鉄釘である。頂部は平たくされ、折り曲げられている。27は釣り針状を呈する。

#### (4) イコウ 4 9 (方形堅穴建築址) 出土遺物 (図9)

- 1は青白磁梅瓶の体部片である。外面には渦文が見られる。胎土は灰白色を呈し緻密。
- 2は黄釉陶器。盤の口縁部である。胎土は粘性強く、灰白色を呈する。口縁端部は玉縁となる。
- 3は瀬戸窯灰釉の花瓶。口縁部である。復元口径6.6cm。胎土は淡橙灰色を呈する。
- 4は瀬戸窯灰釉の卸し皿。底部片である。外底面は回転糸切り。胎土は淡橙灰色を呈する。
- 5は備前窯搗鉢。体部片である。胎土は灰色を呈し、粘性は弱い。
- 6・7は常滑窯捏鉢。口縁部である。口縁端部は内・外に引き出される。胎土は灰色を呈し粗雑。
- 8~11は山茶碗窯系捏鉢である。8~10は口縁部、11は底部である。8・9は口縁端部に沈線状の溝を有する。胎土は灰色を呈し粗雑である。
- 12は常滑窯壺。口縁部である。縁帯幅は4.4cmを測る。胎土は灰色を呈し粗雑である。
- 13は瓦質輪花型手焙り。口縁部片である。外面に菊花文の押印を有している。
- 14は軒平瓦である。瓦当は貼り付けであり、瓦当面には下向き剣頭文を有する。平瓦部四面には布目痕を有する。器表は灰黒色、芯部は灰色を呈する。胎土は粘性強く緻密である。厚さは1.8cm前後。
- 15~24はロクロ成形のかわらけである。15は極小皿、16~21は小皿、22~24は大皿である。16・17の口縁部には煤が付着しており灯明皿として使われたものである。21の体部には5mm程の穿孔を有する。
- 25は土錠である。長さ6.0cm、幅3.3cm。胎土には白色針状物質を多量に含む。
- 26は観の小片である。
- 27は砥石である。中砥。各面ともに研磨されている。
- 28・29は研磨痕を有する常滑片である。側面を研磨している。
- 30は切断痕を有する鹿角である。
- 31~35は鉄釘である。いずれも頂部は平たく叩かれ、折り曲げられている。35は長さが13.4cmを越えるものである。
- 36は鎧である。

#### (5) イコウ 5 0 (方形堅穴建築址) 出土遺物 (図10)

1・2は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。体部外面に錦通弁文を有する。釉調は1が深緑色、2が水青色。胎土はともに灰白色を呈する。

3~6は瀬戸窯製品である。

3は灰釉折縁深皿。底部片である。復元底径14.4cm。外底面は砂底。内底面には3重の同心円を有する。胎土は淡灰橙色を呈する。

4・5は灰釉卸皿。底部片である。外底面は回転糸切り。胎土は淡灰橙色を呈する。

6は入子。底部片である。底径3.6cm。外底面は回転糸切り。胎土は灰白色。内面には紅が付着する。7~9は常滑窯壺である。いずれも口縁部である。

7は口径18.9cm。7・8はN字の縁帶を、9は受け口状の縁帶を有する。胎土は灰色を呈する。

10~12は山茶碗窯系捏鉢である。10・11は口縁端部が丸くなる。胎土は10が灰白色、11が灰色を呈す

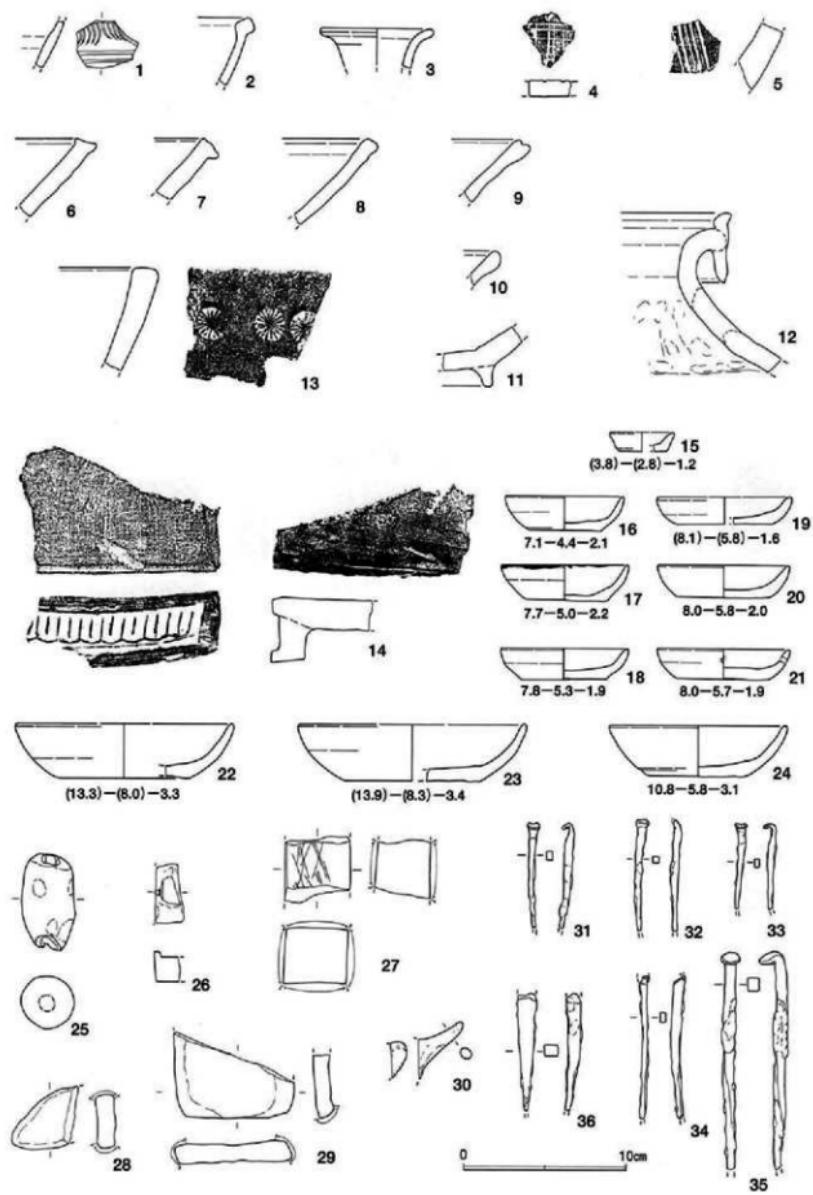


図9 イコウ49出土遺物（中世）

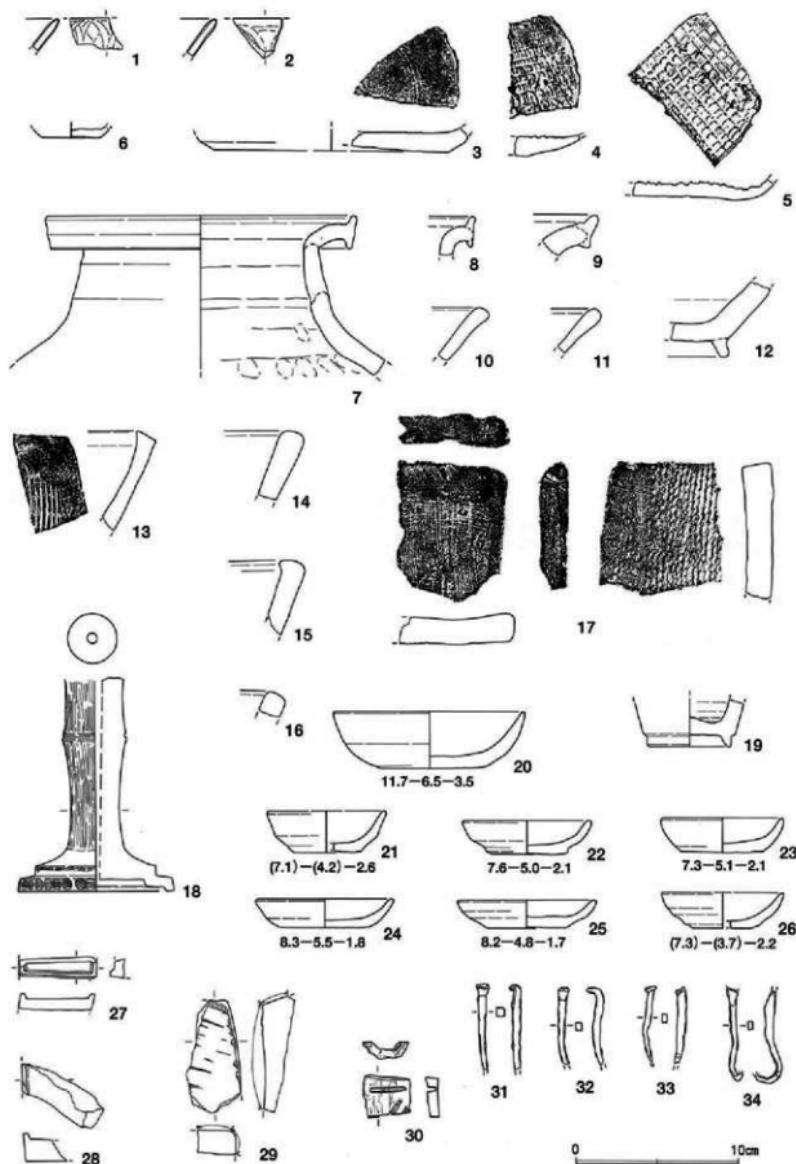


図10 イコウ50出土遺物（中世）

る。12は底部片であり、体部外面下位はヘラ削り。砂底の外底面には高台が貼りつけられる。

13は備前窯搗鉢である。口縁部。端部は角張り内側に突出する。胎土は灰白色を呈する。

14~16は瓦質輪花型手焙りの口縁部である。内・外面には継位・横位のミガキが行われる。

17は平瓦である。凸面には繩目のかき、凹面には布目を有し、離砂が認められる。端面・側面はヘラ切り。胎土は黒色砂粒を含み灰色を呈する。厚さは1.7cm前後である。

18は瓦質獨台。竿部は竹を模しており、節をリアルに表現している。表面は継位のヘラミガキが行われる。中心には直径6mmの穿孔を有する。台部は二段になっており、スタンプが連続して押印される。

19は土製品の底部である。壺であろうか。高台は削り出し。高台径4.9cm。

20~26はかわらけである。いずれもロクロ成形であり、20が大皿、他は小皿である。21~26は体部外側中位に稜を有するものである。

27~28は観である。いずれも小片である。

29は砥石である。中砥であり、砥面には刃物傷が明瞭に観察される。

30は角製品のチップである。鹿角。ノコギリ挽きの痕跡を有する。

31~34は鉄釘である。頭部は平らたく叩かれ、折り曲げたものである。34は釣り針状を呈する。

## 第2節 古代の遺構と遺物

### I. 古代遺構（図11）

本遺跡からは試掘調査時より多くの古代遺物が出土し、該期（8~9世紀代）の遺構群の検出が期待された。しかし、調査区は狭く、また、近・現代の擾乱層や中世の方形竪穴建築址などにより大きく削平を受けており、遺構確認は難行した。しかし、堆積土層の観察から、中世遺構と古代遺構とでは明らかに間層（風成砂）を挟んでおり、明確に時期差を把握することができた。

[調査区北壁セクション]

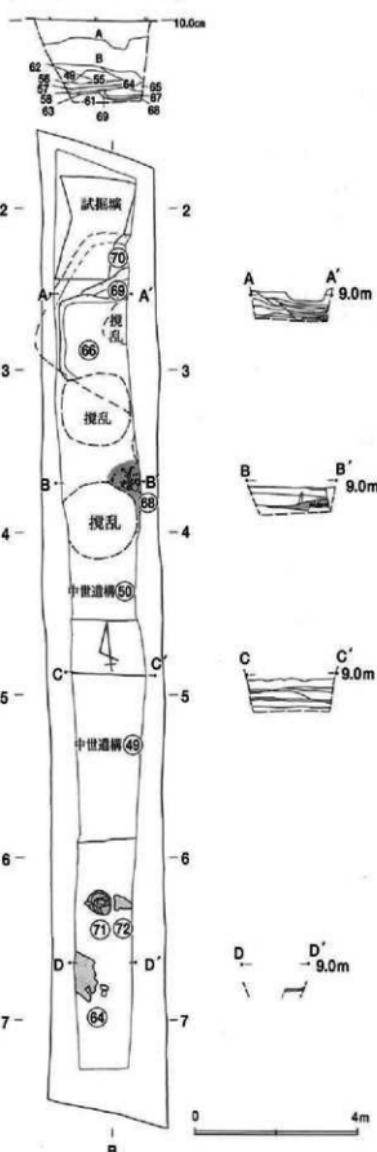


図11 古代遺構全体図及びセクション図

古代遺構として検出されたのはイコウ64、66、68、69、70、71、72である。

このうちイコウ66、69、70の覆土は灰黄色砂を主体としており、同一の造構と考えられる。平面的な調査は不可能であったが、南北規模約4.0mほどの竪穴と推測される。カマドは検出されていない。

イコウ68は褐色黄色砂・灰褐色粘土混入層内から、土師器壺洞部片がまとまって出土した地点であり、造構としては不明な点が多い。しかし、住居址としての可能性は高いと考えられる。

イコウ64、71、72は灰褐色粘土が検出された部分である。特に、イコウ64はセクションの検討から、住居址に伴うカマドの痕跡と考えられる。

以上の造構の他に、土師器片を含む暗褐色粘土層がA・B-1・2グリットから検出されており、竪穴住居址の可能性が高いと考えられる。古代遺構群について触れてきたが、各造構についての詳細は不明と言わざるを得ない。しかし、該期の造構群が確実に存在していたことは指摘し得よう。

## II. 古代遺物（図12～14）

本遺跡からは貝・動物骨を除き4537点の古代遺物片が出土している。先にも触れたが、近・現代の搅乱壙や、中世の方形竪穴建築址の覆土からの出土量が多く、また、古代遺構の詳細についても明らかではないため、ここでは造構別ではなく、種類別に古代遺物について説明を加えていく。尚、碗・壺の法量は図版中に口径-底径-器高（単位cm）を記した。（ ）内は復元数値である。

### （1）須恵器・灰釉陶器（図12）

1～3は須恵器碗である。1・2は口縁部、3は底部である。

1は体部外面に強い陵を持つ。胎土は灰白色を呈し、白色針状物質に富む。イコウ49出土。

2は体部中位に屈曲を有し、端部は外反する。胎土は灰白色を呈する。イコウ49出土。

3は外底面を全面へラケズリしたものである。胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。イコウ66出土。

4～17は須恵器壺である。4～9・12は底部、他は口縁部である。

4は高台を有する。胎土は灰色を呈し、白色粒子に富む。イコウ50出土。

5も高台を有する。4に比べ低いものである。胎土は灰白色を呈する。イコウ50出土。

6は外底面の外周を回転へラケズリ調整したものである。胎土は灰橙色を呈し精良。搅乱壙出土。

7～9は外底面の全面を回転へラケズリ調整したものである。胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。いずれもイコウ50からの出土である。

10～13は外底面を回転糸切り後、無調整のものである。10・12にはヘラによる一条の沈線を有する。10の胎土は灰橙色を呈し白色針状物質に富む。10・11はイコウ49、12は調査区北部出土である。

13は体部にやや丸みをもつ。胎土は灰白色を呈し、白色針状物質を含む。調査区北部出土。

14も体部に丸みをもつ。胎土は灰褐色を呈し、白色針状物質を含む。調査区南部出土。

15は口縁端部が外反するものである。胎土は灰色を呈し、白色針状物質を含む。調査区北部出土。

16は口縁端部の外反が弱いものである。胎土は灰色を呈し精良。搅乱壙出土。

17も外反の弱いものである。胎土は灰色を呈し緻密。搅乱壙出土。

18～20は須恵器壺である。18・19は口縁部、20は底部である。

18は復元口径19.8cm。胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。調査区北部出土。

19は復元口径19.8cm。胎土は灰白色を呈する。調査区北部出土。

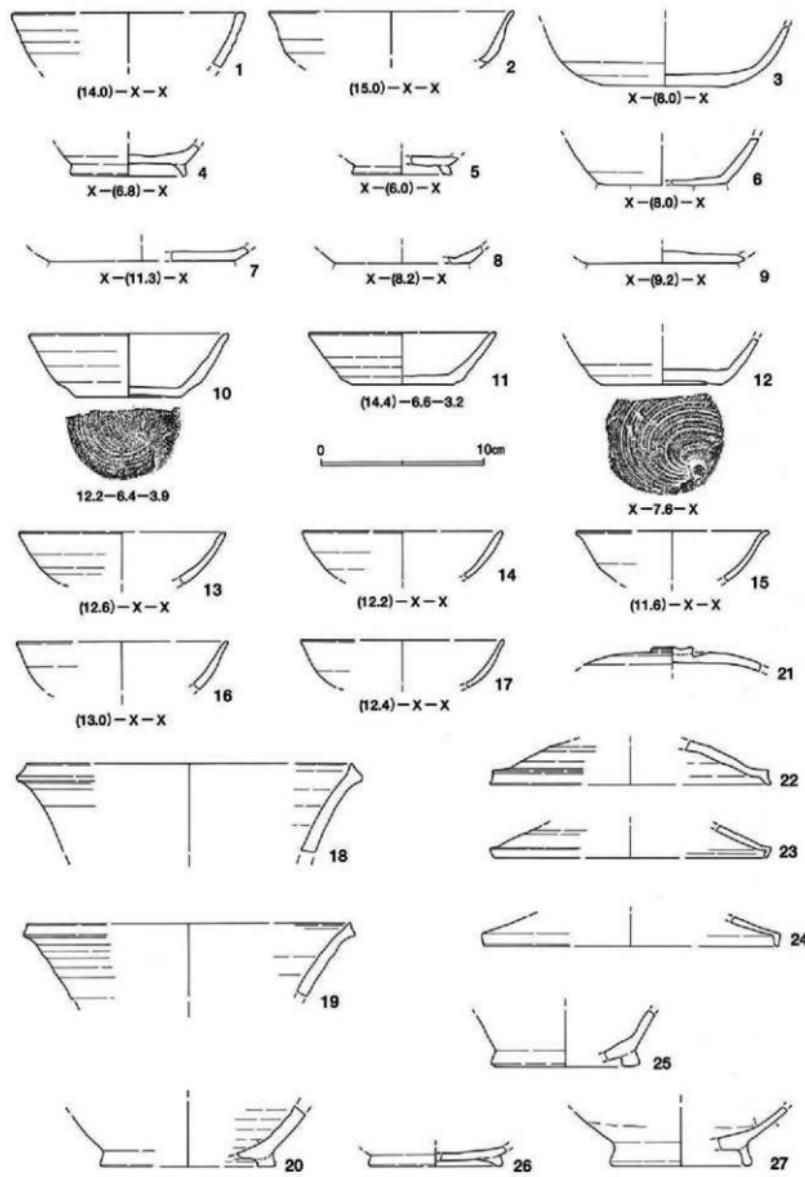


图12 出土古代遗物 (1)

- 20は復元高台径10.8cm。胎土は灰色を呈する。イコウ50出土。
- 21～24は須恵器坏蓋である。
- 21のつまみ中央部は突出している。天井部は1段の回転ヘラケズリ。胎土は灰白色を呈し、白色針状物質を含む。調査区北部出土。
- 22は復元口径16.9cm。胎土は灰白色を呈し緻密。調査区北部出土。
- 23は復元口径16.6cm。胎土は暗灰色を呈する。調査区北部出土。
- 24は復元口径17.9cm。胎土は灰色を呈し、白色針状物質を含む。表探遺物。
- 25～27は灰釉陶器である。
- 25は壺底部。復元高台径9.1cm。胎土は灰白色を呈し緻密。イコウ49出土。
- 26は碗底部。復元高台径8.2cm。胎土は灰白色を呈し、やや粗雑。遺構確認面出土。
- 27は碗底部。復元高台径8.7cm。釉は漬けがけされている。胎土は灰白色を呈する。表探遺物。

## (2) 土師器、及び、骨製品・石製品・貝類(図13・14)

- 1・2は盤状坏である。
- 1は口縁部内面に1条の沈線を有する。体部内面には斜方向の暗文を有する。体部外面はヘラミガキ調整である。胎土は橙色を呈し精良。イコウ50出土。
- 2は口縁部内面に1条の沈線を有する。体部内・外面はヘラミガキ調整である。胎土は暗橙色を呈し精良。イコウ49出土。
- 3～10は甲型と呼ばれる土師器坏である。3以外は体部内面、及び、内底面には環状暗文が放射状に配される。体部外面下位は斜位のヘラケズリ調整を行う。外底面は中央に回転糸切り痕を有し、周縁部をヘラケズリする。胎土は暗橙色を呈し精良。3はイコウ50、4はイコウ68、5はイコウ70、6・9・10は調査区北部、7はイコウ56、8は擾乱壙出土である。
- 11～19は相模型の土師器坏である。11・13は体部外面中位に明瞭な段差を有しており、下半はヘラケズリである。12の体部外面はヘラミガキ調整である。14～19の体部外面は中位よりや上方からヘラケズリ調整が行われている。11・17は調査区中部、12は調査区南部、13はイコウ48、14・18・19は調査区北部、15はイコウ50、16は表土からの出土である。
- 20～23は土師器短頸壺である。所謂「類似塗土器」と称されているものである。胎土は暗橙色を呈し、白色粒子を含む。20は復元口径26.0cmを測る。20～22はイコウ49、23は表土からの出土である。
- 24～26は土師器台付壺である。
- 24は復元口径19.4cm。体部外面はヘラケズリ調整。胎土は灰橙色を呈する。イコウ50出土。
- 25は復元口径12.4cm。体部外面はヘラケズリ調整。胎土は暗橙色を呈する。調査区中部出土。
- 26は台部である。台径10.4cm。胎土は暗橙色を呈する。イコウ70出土。
- 27～46は土師器壺である。27～40は口縁部、41～46は底部である。いずれも小片である。
- 27～29は体部外面をヘラケズリ調整するものである。前代(鬼高峰期)からの特徴を残すもので、8世紀前半までの年代が考えられる。
- 27は復元口径19.0cm。胎土は灰橙色を呈し、白色針状物質を含む。調査区南部出土。
- 28は復元口径19.8cm。胎土は暗橙色を呈し、白色粒子を含む。調査区北部出土。
- 29は復元口径21.0cm。胎土は赤橙色を呈する。調査区南部出土。
- 30～40は相模型の壺であり、体部外面はナデ調整である。8～9世纪代のものと考えられる。

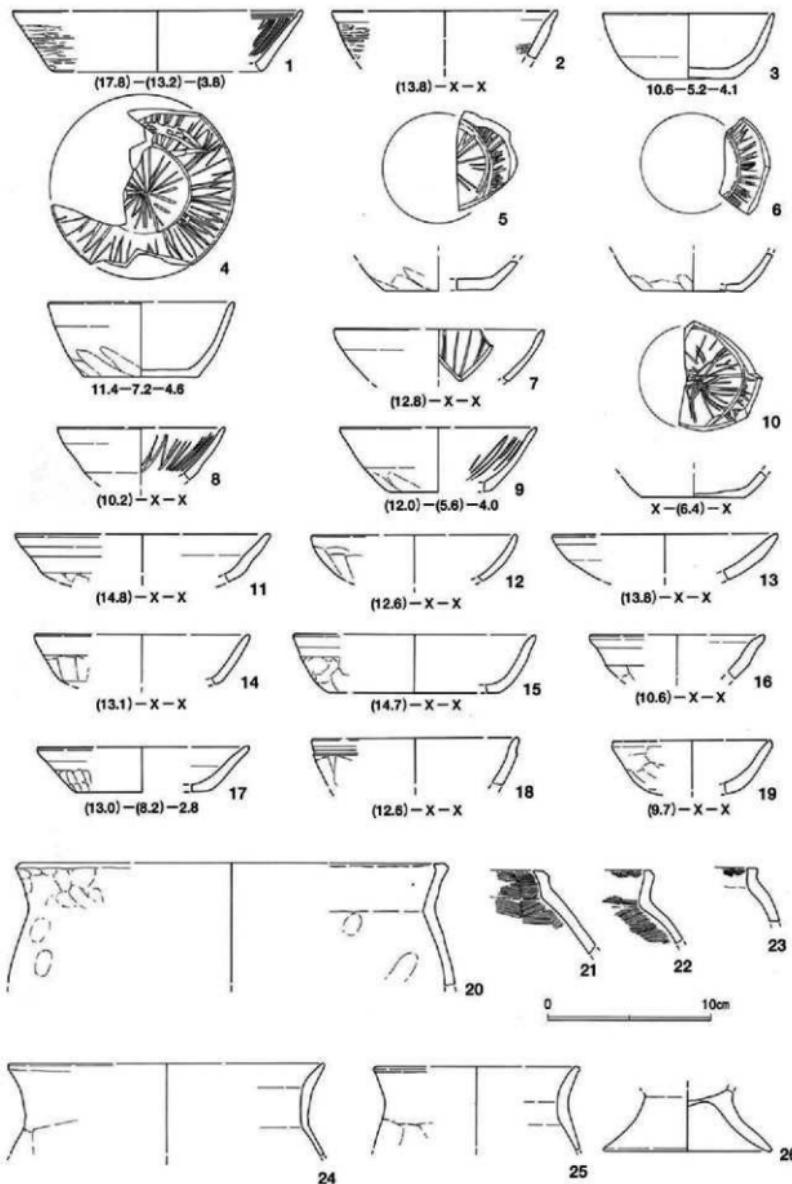


图13 出土古代遗物 (2)

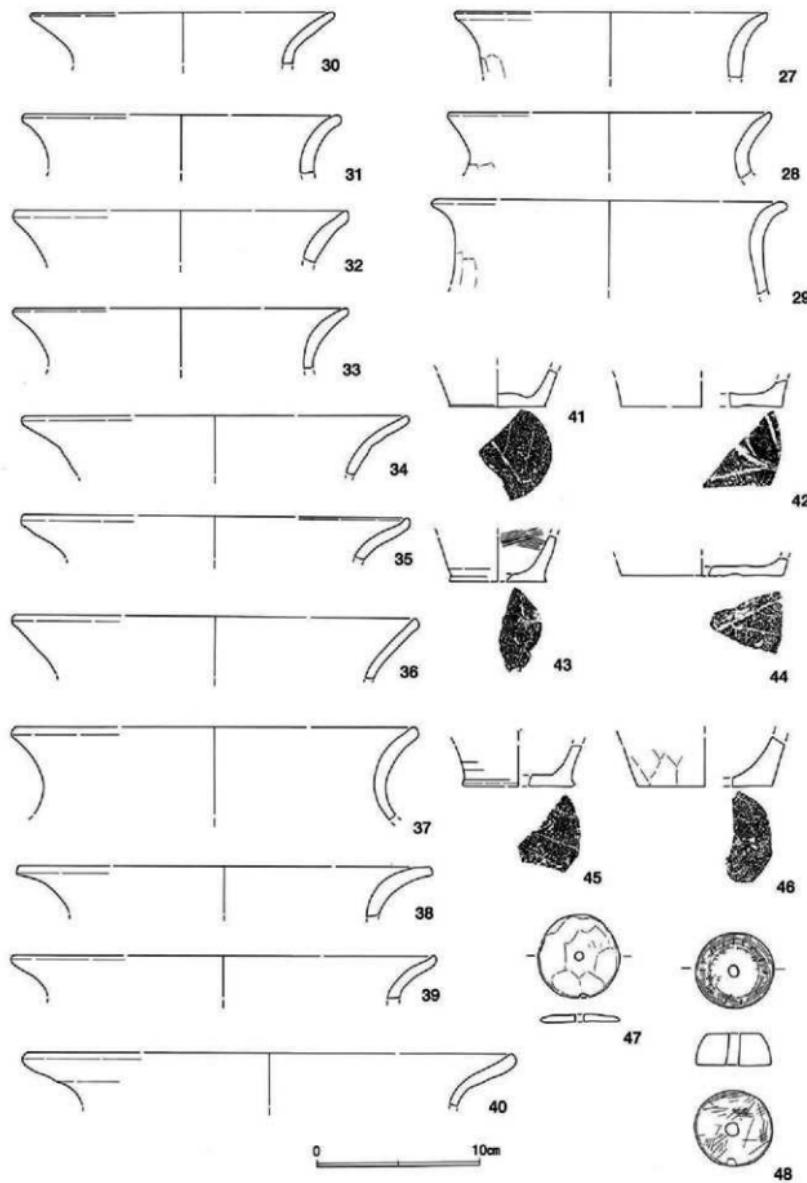


図14 出土古代遺物 (3)

- 30は復元口径18.4cm。胎土は暗橙色を呈し、白色粒子を含む。イコウ49出土。
- 31は復元口径19.2cm。胎土は灰橙色を呈する。調査区北部出土。
- 32は復元口径20.4cm。胎土は橙色を呈し、白色粒子を含む。調査区南部出土。
- 33は復元口径20.4cm。胎土は橙色を呈する。表探遺物。
- 34は復元口径23.4cm。胎土は灰橙色を呈する。攪乱壟出土。
- 35は復元口径23.6cm。胎土は灰橙色を呈し、口縁内・外面には煤が付着する。調査区中部出土。
- 36は復元口径24.6cm。胎土は灰橙色を呈し、白色針状物質を含む。調査区南部出土。
- 37は復元口径25.0cm。胎土は灰橙色を呈す。調査区南部出土。
- 38は復元口径25.0cm。胎土は橙色を呈す。イコウ50出土。
- 39は復元口径26.0cm。胎土は橙色を呈する。調査区中部出土。
- 40は復元口径30.0cm。胎土は暗橙色を呈す。口縁内・外面には煤が付着する。調査区中部出土。
- 41～46は外底面に木葉痕を有する。
- 41は復元底径 6.0cm。胎土は灰橙色を呈し、白色粒子を含む。外面には煤が付着する。攪乱壟出土。
- 42は復元底径10.0cm。胎土は灰橙色を呈し、黒色粒子に富む。外面には煤が付着する。攪乱壟出土。
- 43は復元底径 6.0cm。胎土は橙色を呈す。内面はハケ調整。外面に煤が付着する。調査区北部出土。
- 44は復元底径10.0cm。胎土は橙色を呈し、黒色粒子に富む。外面に煤が付着する。調査区北部出土。
- 45は復元底径 7.0cm。胎土は暗橙色を呈す。外面には煤が付着する。イコウ50出土。
- 46は復元底径 8.4cm。胎土は白橙色を呈し、白色粒子を含む。体部外面はヘラケズリ調整である。外面には煤が付着している。調査区北部出土。
- 47は骨製品である。直徑5.0cmの円盤状を呈し、中央に直徑0.5cmの穿孔を有する。厚さ0.4cm。上面はやや雑に、下面是平坦に削られている。紡輪であろう。イコウ70出土。
- 48は滑石製品である。直徑4.7cm。厚さ2.0cm。中央に直徑0.8cmほどの穿孔を有している。全面にわたり無数のキズが観察される。紡輪であろう。イコウ70出土。

本調査からは狭い面積にもかかわらず、総数2026点に及ぶ貝類を出土している。以下、生息環境別に各種類の出土点数を記載していくが、古代・中世の層位別ではなく、調査区内一括の数値である。

- ・ [内湾泥底群集] …二枚貝類一トリガイ：2、バカガイ：39、巻き貝類一アカニシ：17、バイガイ：124、モミジボラ：1。
- ・ [内湾砂底群集] …二枚貝類一アサリ：164、オノガイ：1、オキシジミ：67、カガミガイ：5、サルボウガイ：4、シオフキガイ：39、ハマグリ：525、ビョウブガイ：1、マテガイ：3、巻き貝類一イボキサゴ：60、ツメタガイ：30。
- ・ [湾外砂底群集] …二枚貝類一イタボガキ：1、ウチムラサキガイ：1、エゾワスレガイ：1、オオトリガイ：3、サトウガイ：7、タマキガイ：3、巻き貝類一ツノガイ：9、マガキ：23、カニモリガイ：5、キサゴ：237、ダンベイキサゴ：228。
- ・ [岩礁群集] …二枚貝類一イワガキ：2、巻き貝類一アワビ：13、イシダタミガイ：4、イボニシ：12、エビスガイ：1、オオベビガイ：14、クボガイ：15、コシダカフジツガイ：1、コシダカサザエ：4、サザエ：217、サザエ（フタ）：109、スガイ：3、トコブシ：3、ナガニシ：5、バティラ：23。

## 第四章　まとめと考察

今回の調査からは狭い面積に拘らず、中世・古代の遺構・遺物を検出し、新たな知見を得ることができた。本章では調査の成果を踏まえ、若干の考察をあたえまとめとしたい。

### 1. 検出遺構と年代

本遺跡の中世基盤層は海拔9.5m前後で確認されている。これは遺跡地周辺区域の中でも高い位置にあり、由比ヶ浜の北側に形成された砂丘の頂部に近い場所に営まれた遺跡と考えることができる。

中世遺構としてはピット：15口、土壙：2基、方形堅穴建築址：3棟を検出している。ピットは全て柱穴と考えられるが、建物を復元することは不可能である。土壙は溝状を呈するものが並走して検出されている。このうち1基は方形堅穴建築址と切り合い関係にあり、後者の方が新しい。方形堅穴建築址の主軸方位は磁北とほぼ一致しており、土壙の主軸方位とは50度前後異なっている。しかし、いずれの遺構も部分的な検出にとどまり、全体の配置や規模等については不詳と言わざるを得ない。出土した中世遺物のうち最も新しいものは、遺構外出土の瀬戸窯縁釉小皿であり15世紀中頃の年代が考えられる。また、最も古いものは常滑窯甕であり13世紀中頃の年代が考えられるが、中世遺構には14世紀代という幅広い年代を考えたい。

古代遺構として検出されたのは堅穴住居址の可能性を持つものが4棟である。しかし、狭い調査区内からの検出であり、更に、現代搅乱壙や中世の方形堅穴建築址により大きく削平を受け、詳細は不明と言わざるを得ない。出土した土師器では前代（鬼高期）からの特徴を残す壊・甕や、盤状壊、甲斐型の壊、相模型の壊・甕などが出土している。須恵器では図12-10・11が南武藏御殿山59号窯式のものと考えられる。相対的には7世紀末～10世紀代のものが見られ、遺跡地周辺域の事例と一致している。

### 2. 遺物構成について

本遺跡からは接合後の破片数で10803点の遺物が出土している。圧倒的多いのは土師器4330点であり、全体の36%を占める。第2位はかわらけ3819点(35%)であり、全てロクロ成形である。次いで貝類2026点(19%)である。貝類を除いた古代遺物と中世遺物との出土点数は4537点と4240点であり、古代遺物の出土点数のほうが多い。

かわらけ、貝類を除いた中世遺物の構成をグラフ化したものが図15である（総数421点）。国産陶磁器は273点出土している。最も多いのは常滑窯製品であり223点、次いで瀬戸窯製品24点、山茶窯窯製品21点、備前窯製品5点、魚住窯製品1点である。常滑窯では甕201点、鉢13点、山茶碗5点、壺2点、

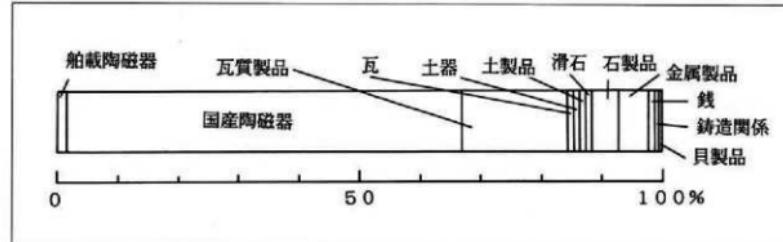


図15 出土遺物構成  
— 214 —

研磨痕を有する甕胴部片2点であり、圧倒的に甕の出土点数が多い。瀬戸窯では、壺17点、卸し皿4点、鉢1点、入子1点、香炉1点である。山茶碗窯系製品は全て鉢であり21点出土している。備前窯では鉢5点、魚住窯では鉢1点がそれぞれ出土している。

舶載陶磁器類は非常に少なく6点だけである。青磁はいずれも龍泉窯系の製品であり、鎌蓮弁文碗1点、無文碗1点、鉢2点である。青白磁は2点出土しており、梅瓶1点、合子1点である。

瓦質製品は手培りが72点と多く、燭台も1点出土している。瓦では平瓦が3点出土している。土器類では白かわらけが4点、土製品では土鉢2点と壺1点が出土している。滑石製品では石鍋1点と、削痕を有する破片が2点程出土している。石製品では砥石8点、軽石4点、硯3点、火打ち石1点が出土している。鉄製品では鉄釘30点、鎧2点が出土しており、銭は4点出土している。鋳造関係ではスラグが1点出土している。貝製品では鏡の形代と考えられるものが1点出土している。

中世の遺物で特徴的なのは、手培り・鉄釘の出土量の多いことが挙げられる。鉄釘は方形堅穴建築址の建築材として多量に使用されたと考えられるが、手培りについては周辺遺跡における出土状況との比較・検討が必要であろう。

古代遺物については先にも触れたが、年代的には7世紀末～10世紀代の遺物が混在しており、あくまでも目安としての数値の提示にとどめる。

4537点出土した古代遺物の内訳は土師器4330点、須恵器199点、灰釉陶器6点、骨製品1点、滑石製品1点であり、圧倒的に土師器の出土量が多い。土師器では壺433点、甕3889点、壺8点が出土している。須恵器では壺152点、壺蓋11点、甕33点、壺3点が出土している。灰釉陶器では壺3点、甕3点が出土している。

注目すべき遺物は骨製・滑石製の紡輪の出土であろう。供膳・貯蔵具以外の遺物であり、本遺跡を含む集落における生活の一端を示すものと考えられる。

図版1

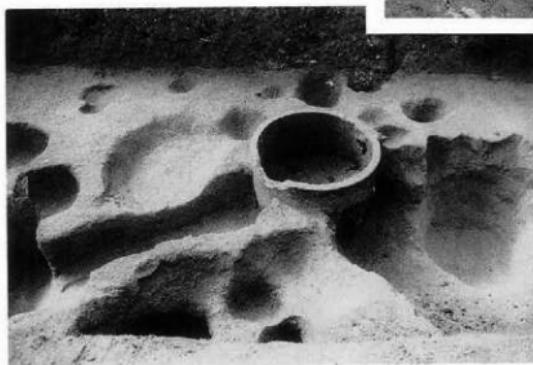


▲1. 調査前状況（東から）



►2. 調査区北部遺構検出状況  
(北から)

▼3. 同上、A・B-3グリッド（東から）





◀1. イコウ66（東から）

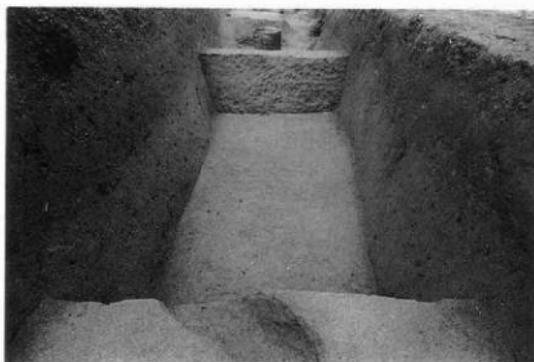


◀2. B-3遺物出土状況  
(東から)



◀3. 同上（西から）

図版3



◀1. イコウ49（南から）



◀2. イコウ49（東から）



◀3. A・B-6グリット  
(東から)



▲1. 作業状況スナップ  
(北から)



▲2. 中世造橋全景 (北から)

▼3. 中世造橋全景 (南から)



図版5



◀1. イコウ64  
(東から)



◀2. 動物骨出土状況  
(北から)



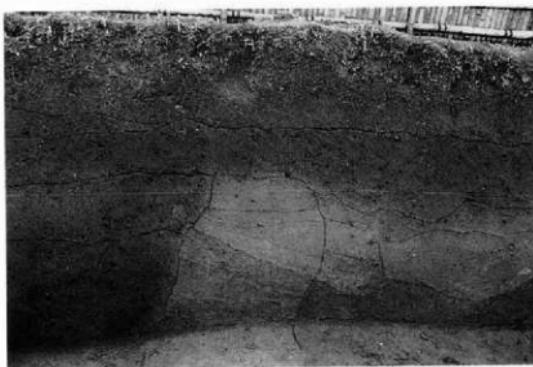
◀3. 西壁セクション  
(東から)



◀1. 西壁セクション  
A-1グリッド  
(東から)



◀2. 同上、A-2+3グリッド  
(東から)



◀3. 同上、A-4+5グリッド  
(東から)

図版7



◀1. 西壁セクション、  
A-5~7グリット  
(東から)



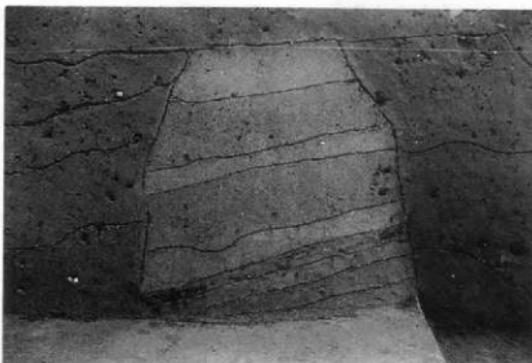
◀2. 同上、A-6グリット  
(東から)



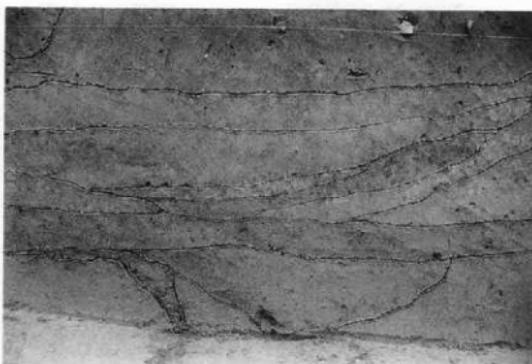
◀3. 東壁セクション、  
B-2グリット  
(西から)



◀1. 東壁セクション、  
B-2・3グリット  
(西から)



◀2. 同上、B-4グリット  
(西から)



◀3. 同上、B-5グリット  
(西から)

図版9



▲船載陶磁



▲山茶碗

▲瀬戸



▲常滑窯捏鉢

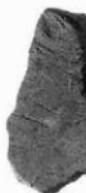
▲常滑窯



▲魚住窯捏鉢



▲備前窯擂鉢



▲砥石



▲品貝



▲瓦質製品



▲軒平瓦



▲瓦



▲骨製品



▲須恵器壺



▲須恵器壺



▲須恵器壺



▲須恵器壺



▲灰釉碗



▲土師器盤状壺



▲滑石製品



▲相模型土師器壺



▲甲斐型土師器壺



▲土師器短頭壺



▲土師器台付壺

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさはうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名							
巻次	第1分冊						
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
シリーズ番号	11						
編集者名	瀬田哲夫						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御町18番10号						
発行年月日	西暦1995年3月						
ふりがな	しょざいち	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "	m <sup>2</sup>	
ゆいがはまみなんいせき 由比ヶ浜南遺跡	神奈川県鎌倉市長谷 二丁目	204	315		19940217～ 19940318	60	自己用住宅 (塀の築造)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
由比ヶ浜遺跡	中世都市遺跡	14世紀代 (中世)	方形堅穴建築址 土壤 ピット	3棟 2穴 15穴	土師器、須恵器、かわ らけ、常滑、瀬戸、船 転陶磁器、貝、骨、鉄 滓等	古代遺構面は現代の擾 乱、及び中世遺構によ り大きく削平されてい る。 方形堅穴建築址を確認。	テンバコ14箱
		7世紀末～ 10世紀 (古代)	堅穴住居址	4棟			

6. 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)

由比ヶ浜一丁目123 番5 外地点

## 例　　言

1. 本報は、鎌倉市由比ヶ浜一丁目123番5外地点における住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2. 発掘調査は国庫補助事業として、1994年3月10日から同月16日まで鎌倉市教育委員会が行った。

3. 調査体制は次のとおり。

担当者　馬淵和雄

調査員　太田美知子

調査補助員　折茂由利・丹行正・岡陽一郎

調査協力者　川村四志男・富岡真之・松崎靖弘・

西川秋雄・鈴木英次・森本康二・

及川加代子・渡部律子・兼行俊枝

4. 本報の図版作成はおもに丹が担当した。また執筆・編集には馬淵があたった。

5. 出土遺物等、本発掘調査に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

## 本文目次

例 言 .....	228
目 次 .....	229
第一章 調査地点の位置と歴史的環境 .....	231
第二章 調査の概要 .....	234
第三章 調査結果 .....	237
1. 概要 .....	237
2. 遺構と遺物 .....	237
第四章 まとめ .....	246

## 挿図目次

図 1 調査地点近辺の主な発掘調査地点・旧跡 .....	232
図 2 調査地点の位置 .....	233
図 3 調査区設定図 .....	234
図 4 遺構全図 .....	折込み
図 5 堪穴建物 1・2、同出土遺物 .....	238
図 6 堪穴建物 3、同出土遺物 .....	239
図 7 堪穴建物 4、土壤 1・2、同出土遺物 .....	240
図 8 土壤 3・4・5、同出土遺物 .....	242
図 9 包含層出土遺物 .....	243

## 表目次

表 1 堪穴建物 1 出土遺物観察表 .....	239
表 2 堪穴建物 3 出土遺物観察表 .....	243
表 3 堪穴建物 4、土壤 1・2 出土遺物観察表 .....	244
表 4 土壤 3・4 出土遺物観察表 .....	244
表 5 包含層出土遺物観察表 (1) .....	244
表 6 包含層出土遺物観察表 (2) .....	245
表 7 調査区全体遺物構成 .....	245

## 図版目次

図版 1	1. 全景（南から） .....	247
	2. 竪穴建物 2（南から） .....	247
図版 2	1. 竪穴建物 3（南から） .....	248
	2. 竪穴建物 3 銭出土状況 .....	248
	3. 竪穴建物 4・4'（南から） .....	248
	4. 同上 土層断面 .....	248
図版 3	1. 土壌 3・4・5（西から） .....	249
	2. 土壌 3（北から） .....	249
	3. 土壌 4（北から） .....	249
	4. 土壌 5（東から） .....	249
図版 4	1. 東壁際深掘り部土層断面（南西から） .....	250
	2. 北壁際深掘り部土層断面（南東から） .....	250
図版 5	出土遺物 .....	251

## 参考資料・同図版目次

参考資料	若宮大路周辺遺跡群——由比ヶ浜一丁目	
	118番地点——の発掘調査について .....	252
図 1	造構全図・土師器溜り・井戸 1 .....	253
図 2	竪穴建物 1・同出土遺物 .....	254
図版 1	1. 全景（北から） .....	255
	2. 竪穴建物 1（南から） .....	255
	3. 土師器溜り .....	255
	4. 井戸 1 .....	255
図版 2	出土遺物 .....	256

# 第一章 調査地点の位置と歴史的環境

鎌倉市内を南北に通じる幹線道路は3本ある。若宮大路を中心として、東側に小町大路、西に今小路（大路？）である。これに直交するのが、鶴岡八幡宮社頭を通る横大路と、下馬四つ角で若宮大路と交差する大町大路である。ごく簡単に言って、中世期の鎌倉では、若宮大路以外のこれら4本の道路に囲まれた長方形区画の内側が都市の中核部であったと考えられる。そしてこの区画の東北と西南の角には、大三輪龍彦が指摘するように（大三輪1989）、おそらく界隈の標識としての塔が立っていた。西南の角付近に今も残る「塔ノ辻」の地名はそのことを語る。調査地点はこの西南の角から50mほど東進した大町大路の南側にある。地番は鎌倉市由比ヶ浜一丁目123番5号。

大町大路は西の佐助山山裾にある現在の御成中学校門前から、東の名越山山裾にいたる。東半分は東端近くを除いてほぼ奈良時代の東海道（現在の国道134号線旧道）を踏襲するが、西半分は鎌倉時代にあらたに敷設されたものだろう。下馬四つ角とこの西半分は、第2次大戦後のある時期までは直線的につながっていたが、今は寸断されている。

さて、この大町大路を境にして北と南で、地下の様子はまったく異なる。まず、ここより南では海岸砂丘地帯が広がるが、北側は西の佐助ヶ谷から流れてきた佐助川の形成する湿地帯となる。そして中世期にはあたかもそれに呼応するかのように、砂丘上に堅穴建物が群集するが、北側は掘立柱建物中心の街並みとなる。大町大路と若宮大路の交差点である下馬四つ角は、ここで騎乗の者が下馬の礼をとる場所である。いわばその先が八幡宮の聖域であることを示す。つまりこの道を境にして、鎌倉の内と外が分かれることになる。塔ノ辻に置かれたらしい塔（石塔か）は、大三輪の指摘どおり、おそらく聖域裏鬼門の境界標識である。堅穴建物と掘立柱建物の分布範囲の違いはそのことを遺構の上で象徴するが、もうひとつ、天狗堂なる堂宇の存在も見逃すことはできない。

佐助山山裾と塔ノ辻とのあいだの北側には、御成山という山がある。この山の南端近くの山上にはかつて「天狗堂」があったという。また近辺には愛宕社があったとも伝わる。これらについて分かっていることはほとんどないが、これもあるいは境界鎮守に関わりがあるかもしれない。対称位置にある大町四つ角には境界の都市神である祇園天王社（現八雲神社）が置かれているので、天狗堂や愛宕社の意味についてもっと注意されてよい。

塔ノ辻の北約150～200mにある市立御成小学校校庭からは、律令期の鎌倉郡衙と中世の高級武家屋敷が発見されている。前者について言えば、当時この一帯が鎌倉郡の中心であったことを示す。古墳時代には海岸砂丘地帯に古墳が築かれ（下向原古墳群——現在の和田塚か）、広い範囲にわたって集落が営まれているが、石井進は古墳被葬者と『古事記』にみえる「鎌倉之別（ワケ）」との関係を指摘する（石井1989）。当否はともかく、「別」は天皇と強い関わりのある名であり、あるいはそのことが、のちにここに郡衙が設けられるきっかけになった可能性はある。後者については、すでに私はそれが鎌倉時代後期の幕府最高実力者安達泰盛の館であろうこと、またそうすると、そこに見られた火災痕が弘安八年（1285）の霜月騒動のものであろうことも何度か指摘したので（馬淵1994・1995）、ここでは繰り返さない。

調査地点近くでは、約50m東で発掘調査がおこなわれたことがある。そこからは、大町大路からほんの数mのところに堅穴建物が検出され、また砂丘地帯ではきわめて稀な、土師器の一括投棄事例も発見されている。これについては、本編末に参考資料として概要を掲載しておいた。

## 引用文献

- 石井進1989 「都市としての鎌倉」『武士の都 鎌倉』(『よみがえる中世』3) 平凡社 29頁  
大三輪龍彦1989 「都市鎌倉の道と地域」『中世日本の諸相』下巻 吉川弘文館 314頁  
馬淵和雄1994 「鎌倉」『歴史読本』'94年11月号 新人物往来社 67・68頁  
馬淵和雄1995 「今小路西遺跡(御成小学校内)の再検討」『鎌倉』77号 鎌倉文化研究会



図1 調査地點近辺の主な発掘調査地點・旧跡

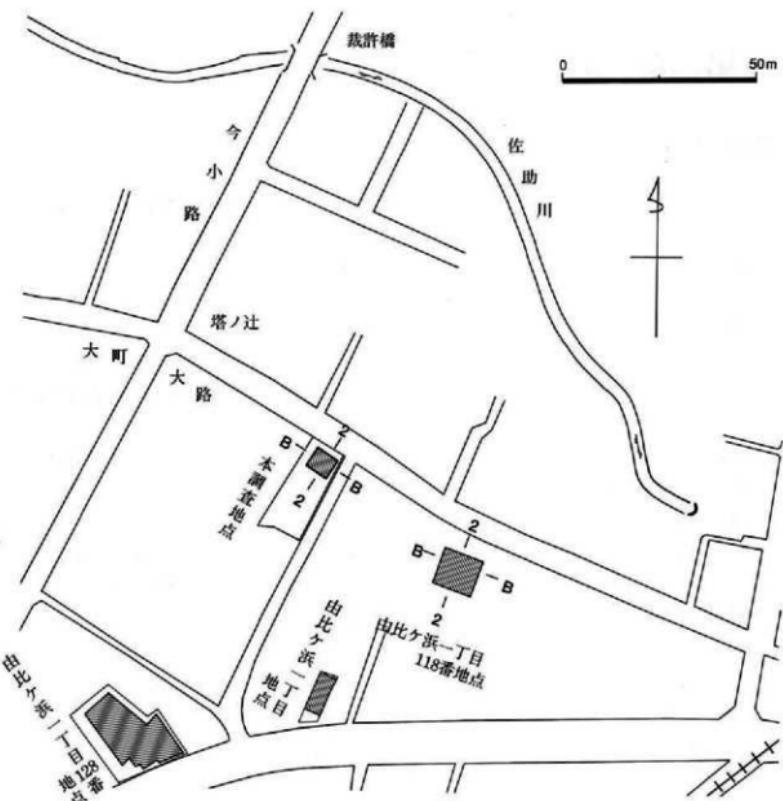


図2 調査地点の位置

图1 地点名

1. 本調査地点、2. 若宮大路周辺遺跡群（由比ヶ浜一丁目118番8地点） 3. 若宮大路周辺遺跡群（由比ヶ浜一丁目地点）
  4. 下馬堀跡遺跡（由比ヶ浜三丁目18番12地点） 5. 由比ヶ浜中世集落墓地遺跡（鎌倉文化用地附近） 6. 若宮大路周辺遺跡群（由比ヶ浜一丁目地点） 7. 長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目223番11地点） 8. 長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目229番外地点） 9. 小路西遺跡（由比ヶ浜一丁目213番3地点） 10. 今小路西遺跡（由比ヶ浜一丁目148番11地点） 11. 今小路西遺跡（福祉センター用地） 12 今小路西遺跡（廻(廻)学校内） 13. 佐助ケ谷遺跡 14. 千葉地遺跡 15. 千葉地東遺跡 16. 千葉地東遺跡（御町町228番2地点） 17. 賑防東遺跡 18. 御町町806番外地点 19. 津成町811番地点 20. 御町町1番2地点 21. 藤原東遺跡 22. 若宮大路周辺遺跡群（御町町968番外地点） 23. 津成町872番14地点 24. 小町一丁目83番1地点（早見芸術学園用地） 25. 小町一丁目75番1地点 26. 藤原東遺跡 27. 小町一丁目116番4地点 28. 小町一丁目106番地点 29. 小町一丁目65番21地点 30. 二ノ鳥居西遺跡 31. 若宮大路周辺遺跡群（小町一丁目325番イ外地点） 32. 大巧寺境内遺跡 34. 若宮大路周辺遺跡群（スマミングクラブ用地） 35. 小町一丁目319番2地点 36. (推定) 藤内定員邸跡（藤山堂富ル用地） 37. (推定) 藤内定員邸跡（中央公民館用地） 38. 本覚寺旧境内遺跡 39. 米町遺跡（大町二丁目2315番外地点）

## 第二章 調査の概要

### 調査にいたる経緯

この点に関しては、下記の文献を参照されたい。

「平成5年度調査の概観」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10』鎌倉市教育委員会 1994

### 調査方法と経過

この場所は、第2次大戦中の軍事施設により、深く攢乱されている。調査に当たってはまず、重機によって攢乱土を除去することにした。攢乱は調査区の東側3分の2を占めており、深さは場所によっては2m以上におよぶ。この部分で確認された遺構はたいてい底部しか残っていない。攢乱されていないところでは、近・現代の客土層は40~60cm程度であり、遺構は良好に検出できた。調査面積は約40m<sup>2</sup>である。

中世面の調査後、それ以前の遺構を確認するために、調査区の北・東壁際を平均1mほど深掘りしたが、乱れのない水平堆積を示し、遺物や炭化物などもまったく含まれていなかったため、それ以下に遺構はないものと判断した。

測量方眼は調査区外北西角の任意の一点から東と南に向かって5mごとの軸線を設け、それぞれ算用数字とアルファベットの名称を付した。南北軸の方位はN-32.5°-Eで、若宮大路に平行させた。

調査は1994年3月10日から始められ、同月16日に終了した。

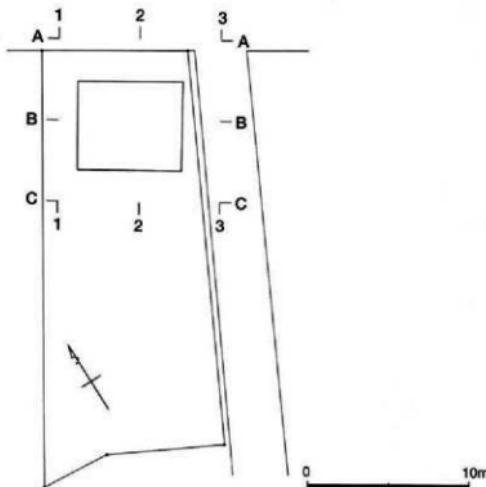


図3 調査区設定図

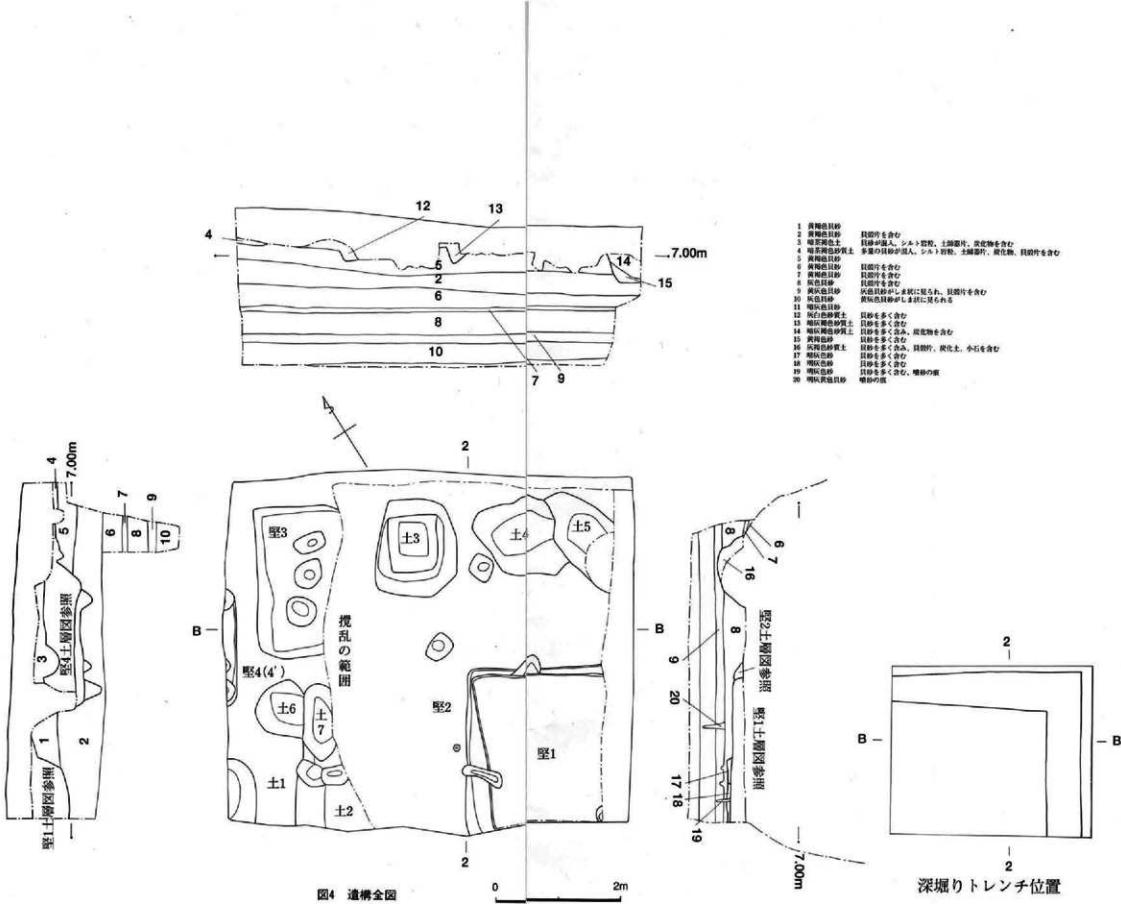


図4 造構全図

## 第三章 調査結果

### 1. 概要

前章でも述べたように、調査区の東側3分の2は戦前の軍事施設によって2m近く擾乱されており、この部分の遺構は、ほとんどが底部付近しか残っていないかった。しかし、西側3分の1については擾乱を受けていないため、地表下40cmほどで遺構を検出できる。前者の検出面は標高6.15m前後、後者は7.4m前後である。またこのような事情により、ほとんどの遺構が同一面上で検出されることとなり、層序から先後関係を捉えることが困難になった。

検出された遺構は次のとおり。

竪穴建物	4軒
土壙	7基
その他落込み	6口

土壙のうちの1基については、後述するように井戸の底部である可能性がある。

### 2. 遺構と遺物

#### 竪穴建物1

調査区東南部で検出された。東南辺は調査区外に出ていて、西辺と北辺は直角ではなく、やや鋭角になっている。竪穴建物2の中にすっぽりと収まっているが、本址が新しい。このように、ほぼ同じ場所に掘りなおされる現象は、浜地の竪穴建物の重複にしばしば見られる。おそらく、当該遺構が恒久的施設でないことを証左である。

詳細数値などは図5上段を見ていただきたい。現況最大値は234cmである。深さは、検出面からは20cmに満たないが、擾乱による削平を割り引くと1.45m前後になる。主軸方位はN-33°Eで、若宮大路や大町大路にはほぼ平行、または直交する。

土層断面には下層の砂が細く上に伸びた、地震による噴砂ではないかと思われるものも観察できる（土層番号4）。

出土遺物は決して多くないが、磨耗した常滑片や数点の鉄釘がある。とくに後者については、後述する竪穴建物3でもいくつか出土が認められることもあり、竪穴建物の構築方法を知る上で、意味は小さくない。

#### 竪穴建物2

上記竪穴建物1とほぼ同じ場所にあり、大半を1によって削られている。あるいは、前述の恒常施設ではないという理由により、1との時間差はそれほどないのかも知れない。西北辺はほぼ直角で、整った（長）方形をしている。

平面規模は現況で南北240cmほどだが、西辺は南壁際で角に近い観があり、250cmを大きくは越えないと思われる。深さは、擾乱を考慮すれば、1.45m前後であろう（現況約20cm）。主軸方位はこれも若宮大路や大町大路を意識して設定されている。

西壁には細長い溝状の落ち込みがある。これも噴砂の可能性があろう。

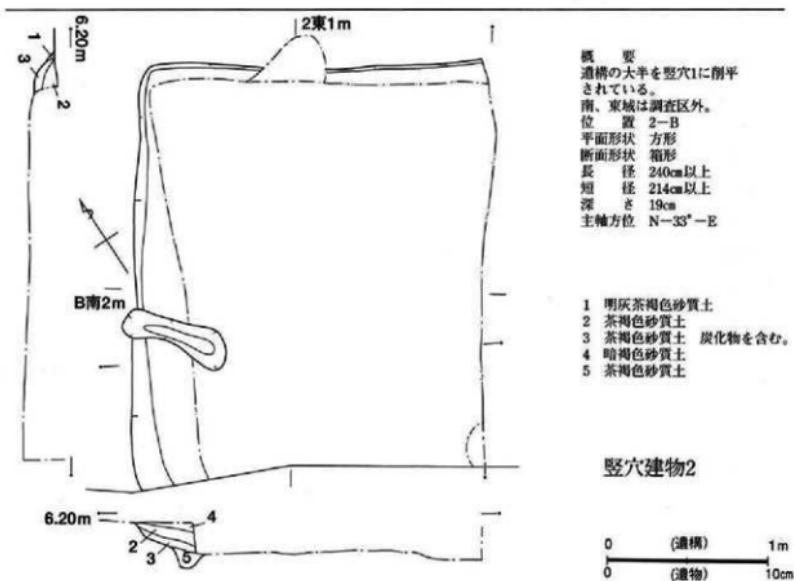
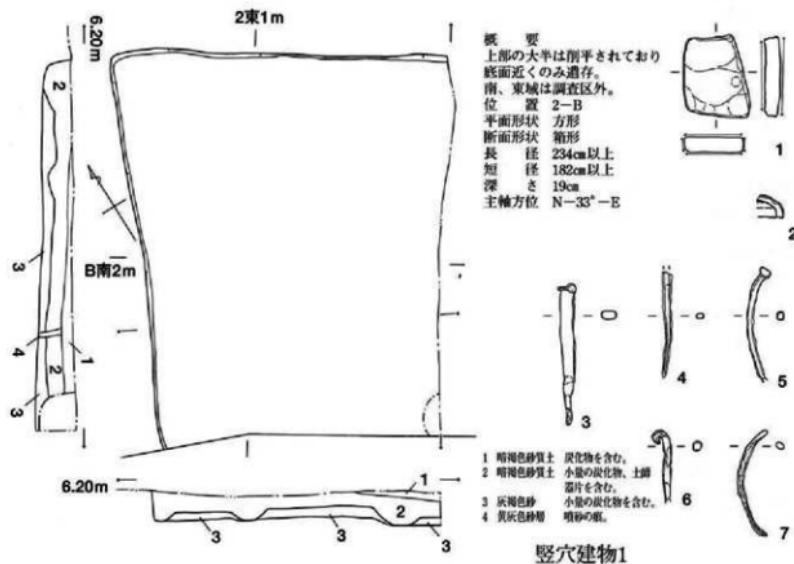


図5 豊穴建物1・2、同出土遺物

1	転用常滑 色調	法量 長さ5.0cm 最大幅4.0cm 厚さ0.95cm 外面茶色 内面暗茶色 機械 良好 備考 刻れ口に擦り痕有り	勝土 橙色、砂粒、小石、長石含む
2	青 瓦 蓋	法量 茄高(1.35cm) 成形 型入れ? 内側へラ削り 軸柔 灰緑色半透明 気泡有り 外面に施釉 焼成 良好	素地 灰色 きめ細かい
3	鉄製品 釘	法量 長さ8.7cm 幅0.9cm 厚さ0.5cm	
4	鉄製品 釘	法量 長さ(6.5cm) 幅0.4cm 厚さ0.3cm	
5	鉄製品 釘	法量 長さ(7.0cm) 幅0.4cm 厚さ0.3cm	
6	鉄製品 釘	法量 長さ(4.3cm) 幅0.5cm 厚さ0.4cm	
7	鉄製品 釘	法量 長さ(7.3cm) 幅0.5cm 厚さ0.35cm	

表1 穹穴建物1 出土遺物観察表

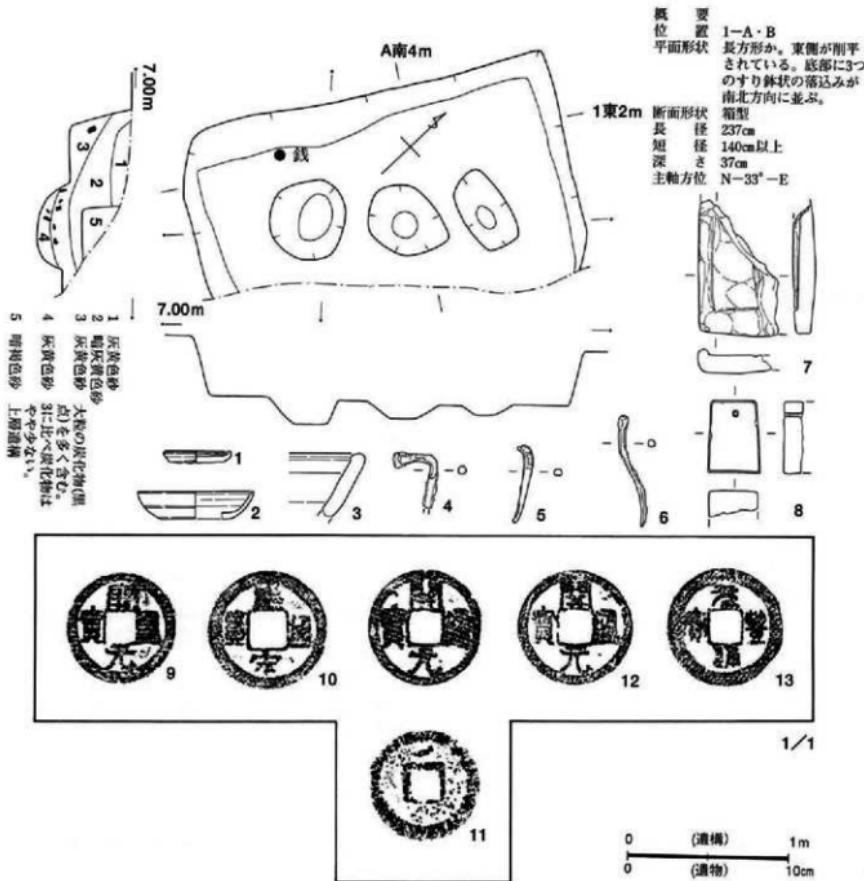
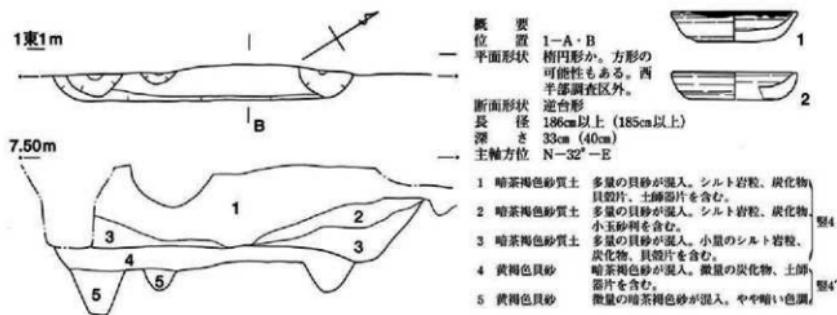


図6 穹穴建物3、同出土遺物



豊穴建物 4 (4')

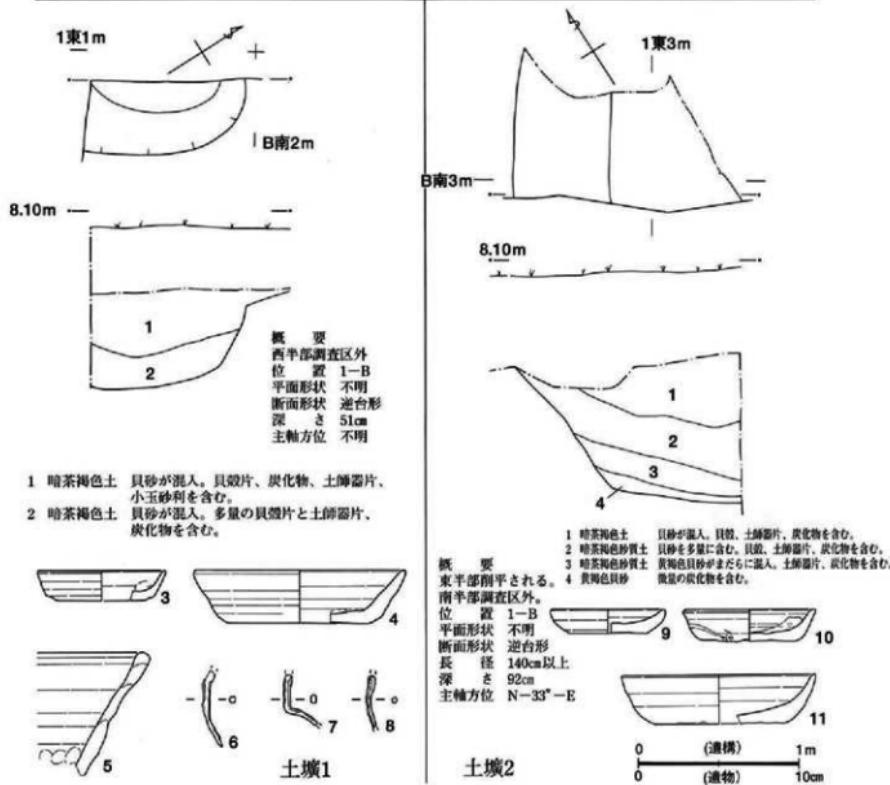


図7 豊穴建物 4、土壤 1・2、同出土遺物

出土遺物なし。

#### 豊穴建物 3

調査区西北域にあり、東半部を擾乱により失っている。現在の道路南辺から2m弱しかなく、中世期大町大路の側溝などのありかたが興味深いところである。

南北237cmで、東西は不明だが、東側の土壌3までは伸びないと思われる所以、おそらく2m以内に収まるであろう。したがって平面は長方形になると予想される。深さは40cm弱(37cm)と浅い。

底面には不整円形もしくは円形の土壌が3基並んでいる。用途は不明だが、あるいは甕を据える施設のようなものかも知れない。断面はすり鉢状、あるいは皿状で、深さ8~16cmほど。

堆積土の下層には、大粒の木材炭化物が多量に含まれている。土層断面には上層遺構の切込みも観察できるが、平面上は検出にいたらなかった。

出土遺物には土師器・常滑こね鉢・滑石鏡・同温石状製品・鉄釘・銭などがある。土師器は13世紀第4四半期から14世紀前半に属している。銭は西壁際の床面直上から、4枚が重なって出土した。開元通宝2・皇宋通宝1・元豐通宝1である。豊穴掘削、あるいは廃棄時の儀礼に関係するのだろうか。

#### 豊穴建物 4・4'

調査区西壁際にわずかに東辺がのぞいている。現況の長さ186cmで、大体2m前後に収まとみられる。深さ33cmだが、床面下にさらにもう1基、同形態とみられる遺構があり、4'とした。4'のはうは長さ185cm、深さ約40cmほど。この2軒もまた、1と2のように、あまり時期差なく同じ場所に掘りなおされる関係が認められるかもしれない。

4の底面はおむね平坦だが、4'のはうには3口の落ち込みが認められる。主軸方位はともに大町大路に直交している。

4から土師器R種(ロクロ成形)の小型品が2点出土している。年代的には13世紀第3四半期ごろと考える。

#### 土壌1

調査区西南角にかかるて検出された梢円形土壌。規模はほとんど分からぬが、深さ52cmあまりで、断面は逆台形に近い形状をしている。

出土遺物には土師器R種のほか、須恵器質の常滑こね鉢(山茶碗窯系こね鉢)・鉄釘などがある。年代的には、こね鉢や土師器の形態から13世紀第3四半期であろう。

#### 土壌2

土壌1の東にあり、東半部は擾乱に切られ、南半は調査区外にある。断面は逆台形で、深さは92cmあまりある。土層堆積からみてかなり大型のようだが、詳細は分からぬ。

出土遺物には土師器R種があり、年代は13世紀第3四半期ごろである。

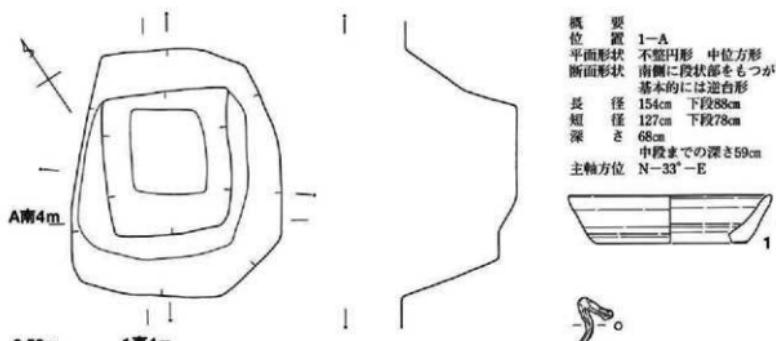
#### 土壌3

調査区北寄りに3基並んだ土壌のうちのひとつ。全体の平面形は不整円形だが、内側には方形の落ち込みがある。底面の標高は5.6mで、擾乱分を割り引くと深さ1.8mほどになり、形状とあわせて考えるところ戸である可能性がある。方形部分の大きさは南北90cm、東西80cmである。

出土遺物には土師器R種や鉄釘がある。

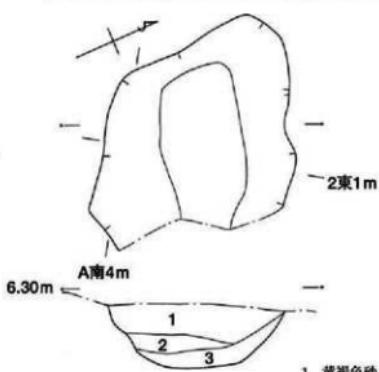
#### 土壌4

調査区東北部にあり、土壌5と重複するが、新旧は確認できなかった。東西に長い不整形で、深めの皿状の断面をしている。推定復元による深さは1.6mほどになる。



1 黄褐色砂  
2 暗黄褐色砂  
3 暗褐色砂質土  
4 暗灰褐色砂質土

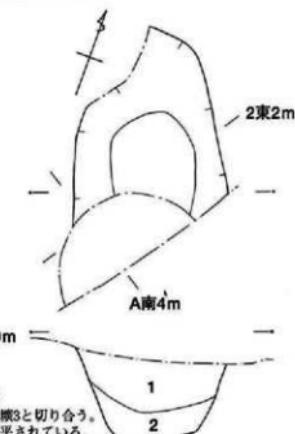
土壤3



1 黄褐色砂  
2 黄褐色砂  
3 暗褐色色



土壤4



1 灰褐色砂  
2 暗灰褐色砂

土壤5



図8 土壤3・4・5、同出土遺物

1	土器 内折れ	法量 口径4.1cm 腹径4.2cm 底径3.4cm 器高0.7cm 胎土 砂板、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 焼成 良好
2	土器	法量 口径7.2cm 腹径4.2cm 器高1.7cm 胎土 砂板、針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 色調 棕色 焼成 良好
3	常滑 こね跡	法量 器高(3.9cm) 色調 暗茶色～黒灰色	成形 輪積後ナデ 胎土 暗茶色 小石、長石含む やや粗い 口縁に陶灰 焼成 普通
4	鉄製品 釘	法量 長さ(5.5cm) 幅0.5cm 厚さ0.45cm	
5	鉄製品 釘	法量 長さ4.8cm 幅0.5cm 厚さ0.4cm	
6	鉄製品 釘	法量 長さ6.9cm 幅0.4cm 厚さ0.4cm	
7	滑石銅軸用環	法量 長さ(8.4cm) 幅(4.9cm) 厚さ1.5cm	石材 滑石 色調 黄灰色 成形 ノミ痕が残る
8	温石	法量 長さ4.4cm 幅2.8～3.3cm 厚さ(1.6cm)	石材 滑石 色調 灰色 成形 穿孔1ヵ所
9	錢	開元通宝 唐 初鑄621 楷書	
10	錢	皇宋通宝 北宋 初鑄1039 楷書	
11	錢	開元通宝 唐 初鑄621 楷書 背文有り	
12	錢	開元通宝 唐 初鑄621 楷書	
13	錢	元豐通宝 北宋 初鑄1078 隋書	

表2 整穴建物3出土遺物観察表

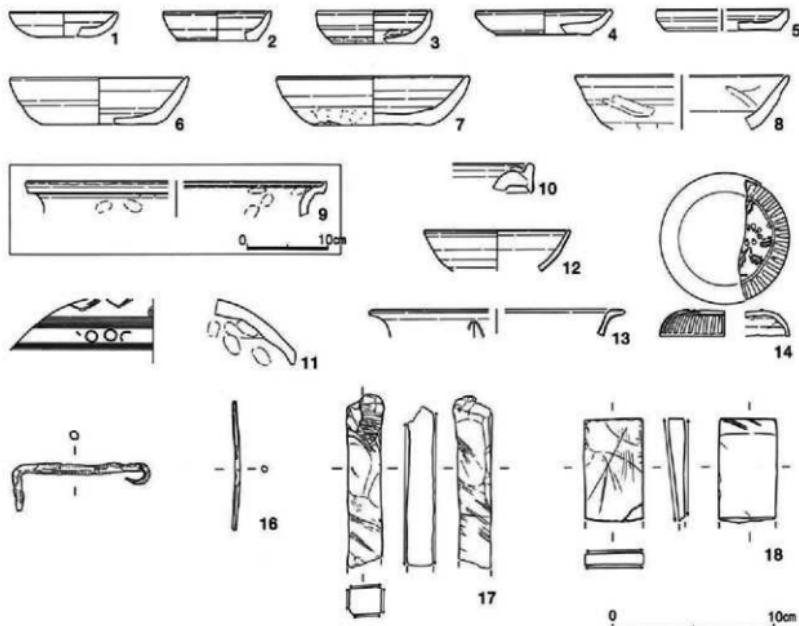


図9 包含層出土遺物

堅穴 4	1	土師器 灯明皿	法量 口径7.8cm 底径4.8cm 器高1.9cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 灰褐色 ストッピング 焼成 良好
	2	土師器	法量 口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.7cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好 二次焼成を受ける
土壌 1	3	土師器	法量 口径8.0cm 底径5.5cm 器高1.85cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母、小石含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好 二次焼成を受ける
	4	土師器	法量 口径13.1cm 底径6.5cm 器高3.3cm 胎土 砂粒、針状物質、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 橙色 焼成 良好
山茶碗底系 こね林	5	山茶碗底系 こね林	法量 器高(7.5cm) 色調 灰色 口縁と内面に薄灰	成形 輪積後ロクロ 胎土 砂粒、小石、長石含む 気孔有り 焼成 良好
6	鉄製品 釘	法量 長さ(5.0cm)	幅0.35cm 厚さ0.35cm	
7	鉄製品 釘	法量 長さ(4.0cm)	幅0.5cm 厚さ0.35cm	
8	鉄製品 釘	法量 長さ(3.2cm)	幅0.3cm 厚さ0.3cm	
土壌 2	9	土師器	法量 口径12.5cm 底径9.3cm 器高3.0cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
	10	土師器	法量 口径8.2cm 底径5.6cm 器高2.0cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
	11	土師器	法量 口径12.0cm 底径8.0cm 器高3.0cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好

表3 堅穴4、土壌1・2 出土遺物観察表

土 3	1	土師器	法量 口径12.5cm 底径9.3cm 器高3.0cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 橙色 焼成 良好
	2	鉄製品 釘	法量 長さ(5.0cm)	幅0.4cm
土 4	3	鉄製品 釘	法量 長さ(4.2cm)	幅0.5cm 厚さ0.4cm

表4 土壌3・4 出土遺物観察表

1	土師器	法量 口径6.7cm 底径3.6cm 器高1.5cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
2	土師器	法量 口径6.7cm 底径5.0cm 器高1.8cm 胎土 砂粒、針状物質含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
3	土師器	法量 口径6.2cm 底径5.0cm 器高2.0cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
4	土師器	法量 口径5.5cm 底径4.8cm 器高1.5cm 胎土 砂粒、針状物質、雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
5	土師器	法量 口径5.2cm 底径6.9cm 器高1.3cm 胎土 砂粒、針状物質、シルト岩粒含む 気泡孔有り	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
6	土師器	法量 口径11.1cm 底径7.9cm 器高2.9cm 胎土 砂粒、針状物質含む 気泡孔有り きめ細かい	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
7	土師器	法量 口径11.95cm 底径7.2cm 器高3.0cm 胎土 砂粒、針状物質含む 気泡孔有り	成形 ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕有り 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
8	土師器	法量 口径(13.2cm) 器高(3.3cm) 胎土 砂粒、針状物質、雲母、赤色小粒含む	成形 手づくね 口縁部ナデ 色調 橙色 焼成 良好

表5 包含層出土遺物観察表(1)

出土遺物にはここにも鉄釘がある。

#### 土壤 5

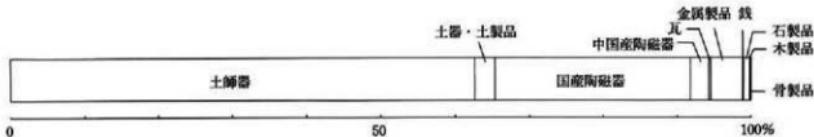
調査区東北角にある。土壤 4 と重複するが新旧不明。深さは推定で 1.7 m である。性格は不明だが、土壤 4 と同様か。

#### 包含層出土遺物

土師器・常滑・瀬戸・中国産磁器類・鉄製品・砥石などが出土している。図化した土師器はすべて R 種で、T 種（手づくね）は細片が 1 点あったのみである。また常滑のうちには 13 世紀前半の様相を持つものもあるが（9）、国産陶器類はおむね 13 世紀半ばごろの様相を呈していると言える。

9	常滑 甕	法量 口径 (37.2cm) 器高 (9cm) 胎土 灰褐色 砂粒 大きめの小石含む	成形 輪積 口縁部ナデ 頭部内外面指頭痕有り 色調 暗茶色 口縁に障灰 燃成 雪通
10	常滑 甕	法量 器高 (1.8cm) 色調 茶色 口縁部 外面に障灰	成形 輪積 口縁部ナデ 胎土 灰色 小石含む ややきめ細かい 焼成 普通
11	瀬戸 瓶子	法量 器高 (3.2cm) 条線 3 本	成形 輪積 内面指頭痕有り 文様 脣部連弁押印 その下に条線 4 本 丸文押印 胎土 灰褐色 砂粒 小石含む 色調 純白 透明 施釉 燃成 不透明 外面に施釉 燃成 良好
12	青磁 小甕	法量 口径 9.05cm 器高 (2.55cm) 輪裏	成形 ロクロ 素地 灰色 微気孔有り 輪裏 灰暗緑褐色透明 外面に施釉 燃成 良好
13	青磁 折縁盆	法量 口径 (15.8cm) 器高 (1.7cm) 素地	成形 ロクロ 文様 外面單蓮弁 灰白色 きめ細かい 輪裏 灰暗緑褐色半透明 少量の買入有り 燃成 良好
14	青白磁 蓋	法量 径 9.0cm 器高 1.6cm 白色	成形 型入れ 口縁部面取り 文様 上面花文 側面蓮弁 微気孔有り 色調 淡緑青色半透明 気泡有り 外面に施釉 燃成 良好
15	鉄製品掛金具	法量 長さ (11.5cm)	幅 0.5cm 厚さ 0.5cm
16	鉄製品 火箸	法量 長さ (7.9cm)	径 0.35cm
17	砥石	法量 長さ (10.8cm) 備考 仕上げ砥？	幅 2.0cm 厚さ 1.7cm 産地 喜海 色調 黄灰色
18	砥石	法量 長さ (6.4cm) 備考 仕上げ砥	幅 3.5cm 厚さ 0.4~1.0cm 産地 上野 色調 灰綠褐色

表6 包含層出土遺物観察表 (2)



	土師器	埴土器	瓦	中國陶器	瓦	金屬製品	鉄	石製品	木製品	骨製品	計
点数	1325	57	557	53	5	92	1	18	3	2	2111
百分率	62.67	2.70	26.39	2.51	0.24	4.36	0.05	0.85	0.14	0.19	100.00

表7 調査区全体遺物構成表

## 第四章　まとめ

調査範囲は40m<sup>2</sup>と狭かったが、本調査ではそれなりの成果が得られた。以下に要点を列挙する。

### 年代について

第三章で示した各遺構の年代は、おおむね13世紀後半に属している。ここからは土師器T種や竈泉窯割花文青磁碗など、13世紀前半で終末を迎える遺物はほとんど出土していない。また、14世紀代、特に中葉以後の遺物もみられない。すると、この地点は鎌倉時代後半に集中的に使われたことになる。これは浜地の堅穴建物の性格について、次項のような示唆を与えるだろう。

### 堅穴建物の性格について

別稿にも書いたが（馬淵1994）、堅穴建物はいずれも深く、日常的に出入りするには、仮に梯子を想定しても余りに不便であるとみられるところから、大半がおそらく倉庫だと考える。そして、土層堆積から人為的に埋め戻された痕跡が発見されること、また同じような場所に何度も作りなおされる例が多いこと、などの点から、これらはおそらく非恒久施設であると考える。つまり、これらの堅穴建物は貨物の一時集積施設とみるのが妥当だろう。その貨物とは和賀江島や由比ヶ浜に陸揚げされた海上輸送品であることが容易に想像される。堅穴は船の接岸に応じて作られ、転送が終わると壊されたのではないか。だとするとその造営年代も、北条得宗が海上交通を独占していたという鎌倉時代後期の半世紀ごろに集中しているのではないか。当調査検出遺構の年代観も、それに合致している。

### 大町大路との関係、派生する問題など

堅穴建物3・土壤3～5の位置をみると、大体横並びになっており、そこより北に突出するものはない。おそらく大町大路による規制が働いているが、大路までの距離については不明である。

さて、以上で明らかのように、若宮大路より西では、堅穴建物の分布は大町大路まで止まる。そしてそれより北には、今小路西遺跡（御成小学校内）の高級武家屋敷前面を除き、掘立柱建物などが主体的に分布する。ところで大町大路以南が砂丘地帯であるのはもちろんだが、今小路西遺跡（御成小学校内）の堅穴建物分布域も砂堆の範囲内にある。奇妙な符合と言わねばならない。おそらく短期間の造営と破壊の繰り返しは、砂地にして初めて可能なことなのであろう。

### 噴砂について

本地点では、地震による液状化現象の痕跡らしきものを検出した。これは鎌倉市内では、過去に由比ヶ浜などにおいてこの現象が確認されている（大河内他1993・瀬田1994など）。本地点との同時性などは不明だが、年代決定の有力な手掛かりになるのは確かだろう。資料の蓄積を待ちたい。

### 引用文献

- 大河内勉他1993 「鎌倉市長谷小路周辺遺跡の液状化跡」『第四紀研究』第32巻第1号  
瀬田哲夫1994 「6. 長谷觀音堂周辺遺跡（No.296） 長谷三丁目41番イ地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10』鎌倉市教育委員会  
馬淵和雄1994 「武士の都鎌倉—その成立と構想をめぐって—」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』（『中世の風景を読む』2）  
新人物往来社



1. 全景（南から）

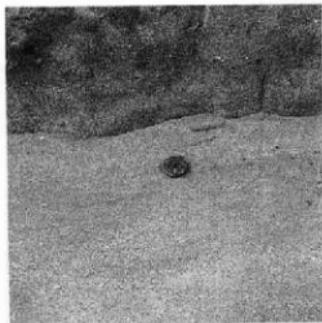


2 穴建物2  
（南から）

図版2



1. 積穴建物3（南から）

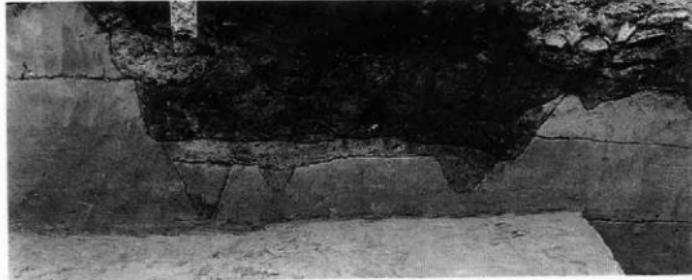


2. 積穴建物3出土状況



3. 積穴建物4・4'（南から）

4. 同上 土層断面





1. 土壌3・4・5（西から）



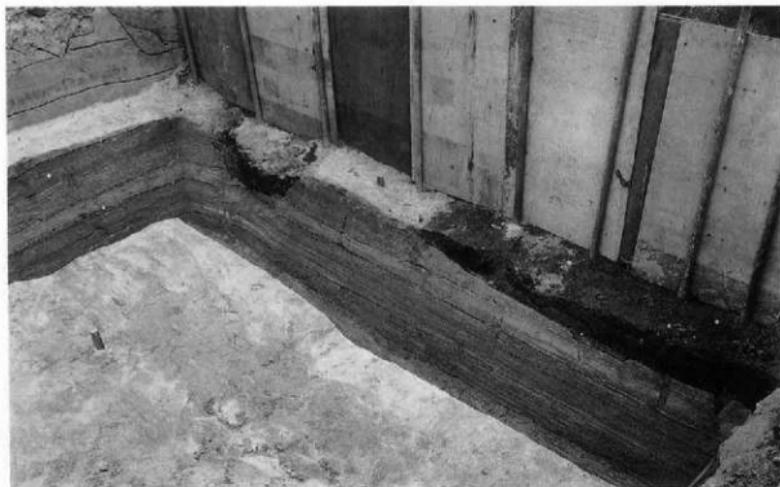
2. 土壌3（北から）



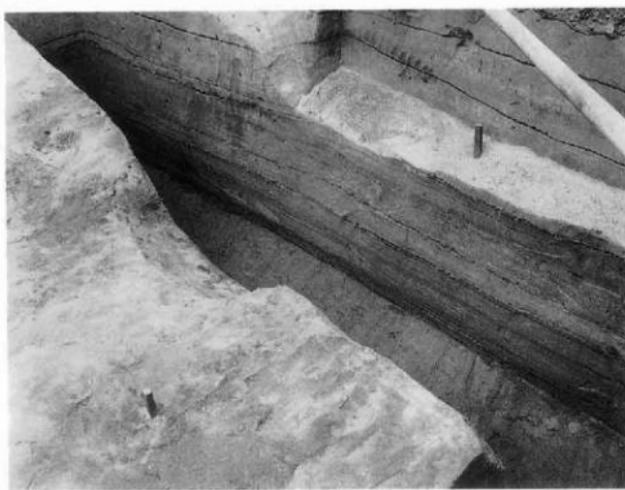
3. 土壌4（北から）



図版4



1. 東壁際深堀り部土層断面（南西から）



2 北壁際深堀り部土層断面  
（南東から）



図5  
竪穴1、2

図6竪穴4

図7竪穴4、土坪1、2



図8土坪3、4、5



図9包含層



出土遺物

## 参考資料

### 若宮大路周辺遺跡群——由比ヶ浜一丁目118番地点——の発掘調査について

#### はじめに

1987年12月3日から翌年1月18日にかけて、馬淵らは上記地点において発掘調査をおこなった。この場所は本編報告地点である由比ヶ浜一丁目123番5外地点からは、東約40mと大変近い。ここもまた同様に大町大路に臨む位置にあり、検出遺構からみてもきわめて類似した性格をもっている。そこでここでは、本編地点をはじめとする一帯の理解を深めるためにも調査概要とおもな資料を示し、とりあえづの責を果たしておきたい。

なおこの調査は、住宅建設にともなう緊急調査として実施した。調査には主任馬淵和雄・調査員新国哲也・調査補助員渡部律子・社団法人鎌倉市高齢者事業団有志ほかがあつた。資料整理はおもに丹行正がおこない、馬淵が本稿を執筆した。調査面積は100m<sup>2</sup>である。位置などの概要については本編第一章を参照されたい。

#### 遺構と遺物

遺構には竪穴建物4基・井戸1基・土壙12基・溝状遺構1条などがある。全面に砂層が拡がる。

竪穴建物1(図2) 東西5.6m×南北5.3m、切込み面からの深さ1m前後の規模があり、四周の壁際に真々4.4m四方の凝灰質砂岩製切石列を持つ。底部には根太の痕跡とおぼしい細い筋や、柱穴らしい穴がある。西壁近くの中ほどには外方向に斜めに掘られた穴があり、その東側の数穴と共に階段様の施設を構成していた可能性がある。堆積土中には凝灰質砂岩切石がいくつも投げ込まれていた。出土遺物には、土師器(1・2)や常滑窯(5)・瀬戸(6・7)のほか、土釜(3)・瓦質香炉(4)・骨鐵(9)・掛け金具(8)などがある。西壁近くに細い板状の鉄製品が出土しているが、8と合わせ銛前の部材の可能性があり、この種の竪穴建物の性格を知る材料になる。6は底部ヘラ削りで、13世紀第4四半期ごろとみてよい。

土師器溜まり(図1中段) 直径1.13mの円形土壙に、土師器が一括投棄されている。東半部は調査区外に出ているが、土師器はすべてR種(ロクロ成形)で、大・小の比率は121対28である(破片点数)。竪穴建物3に切られる。年代は13世紀第4四半期ごろか。砂丘地帯における土師器一括投棄のまれな例として、注目される。

井戸1(図1下段) 大町大路とも竪穴建物とも異なる軸線の方形井戸枠を持つ。下層は湧水のために崩落がひどく、掘削は底部まで達していない。井戸枠は一辺90cmほどの木枠で、木質が一部残る。土師器(3・4)・常滑(5・6)・鉄製火打金具(7)など出土。常滑の年代は13世紀中葉だが、土師器にもう少し新しい要素が認められる。

ほかにも、図は省略するが、ホゾをもつ切石を隅に置く竪穴建物2、大型の舟形土壙などがある。

#### まとめ

ここからは土師器T種(手づくね成形)や竜泉窯画花文青磁などの、13世紀前半代までに属する遺物は一点もなく、明らかにそれ以後に街区形成年代の主体がある。また、今の大町大路まで、調査区からはほんの5mほどしかなく、そのような場所ですでに竪穴建物が密集する状況が確認できた。大町大路の北側には御成小学校校庭の砂丘地帯を除き竪穴建物などは検出されない。つまり本資料は大町大路を境にして街区の様子が画然と異なることを示す例である。

## 遺構全図

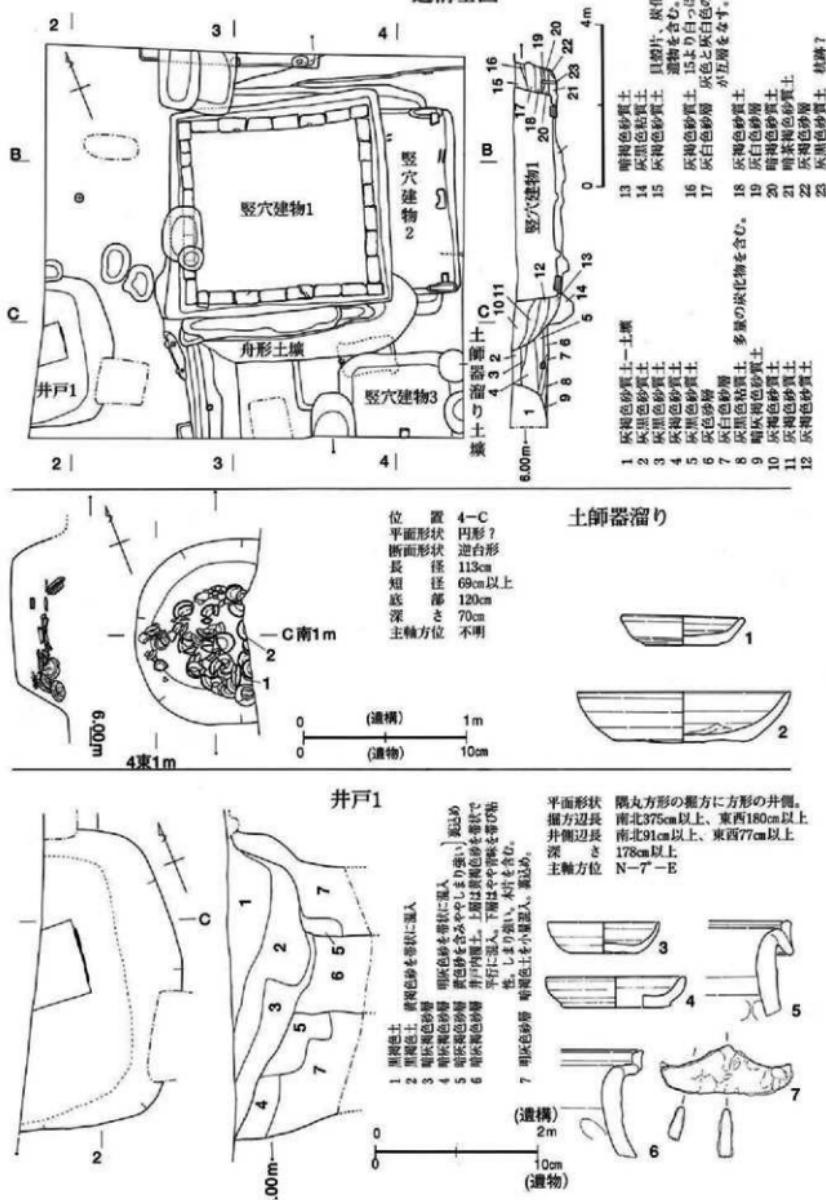


図1 遺構全図・土師器溜り・井戸1

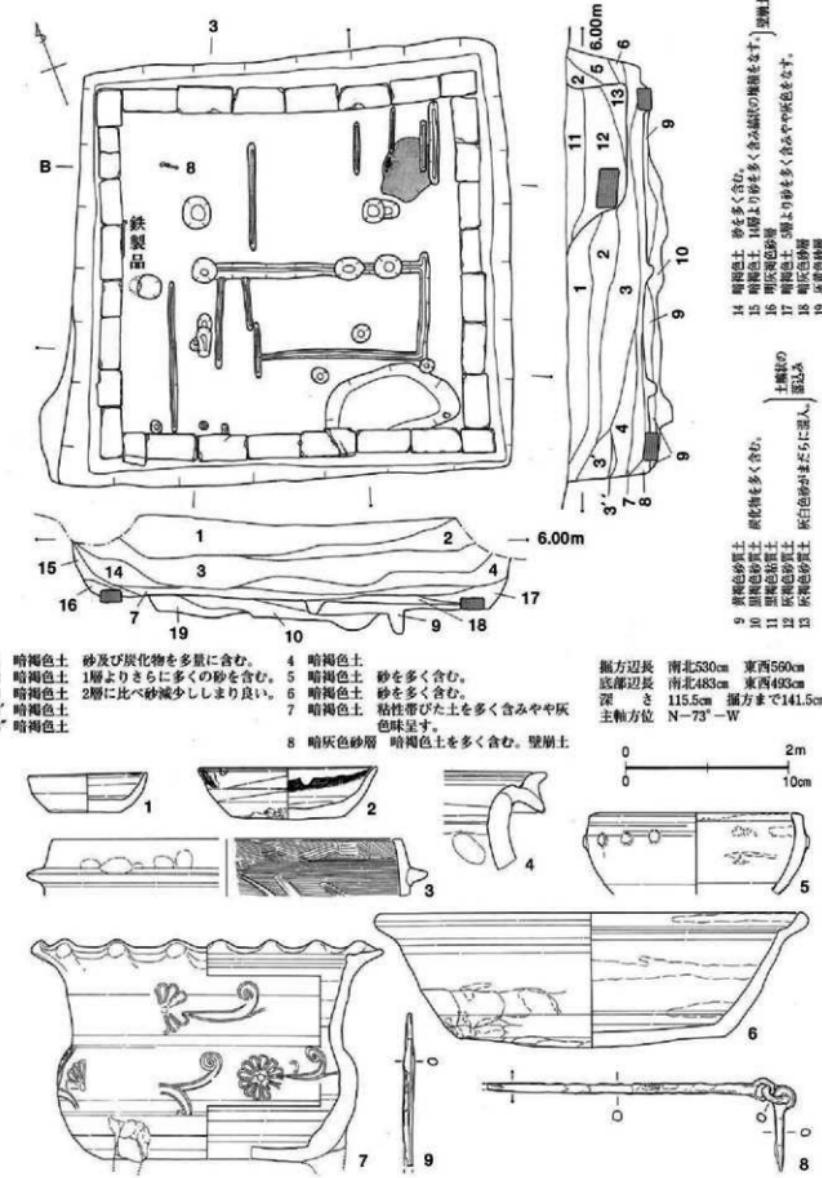


図2 穂穴建物1・同出土遺物



1. 全景（北から）



2. 竪穴建物I（南から）



3. 土師器漬り



4  
井戸  
1

図版2



出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名							
巻次	第1分冊						
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
シリーズ番号	11						
編集者名	馬淵和雄						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号						
発行年月日	西暦1995年3月						
ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所 在 地	コ ー ド	北 梅	東 經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
わかみやおおじゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市由比 ヶ浜一丁目	204	242		19940310～ 19940326	40	自己用住宅
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
若宮大路周辺遺 跡群	中世都市遺 跡	鎌倉時代後半	堅穴建物 土壙 慣砂底	4棟 5穴 2ヶ所	かわらけ、常滑、青白 磁、瓦、手焼り、鉄製 品、貝等	大町大路に近接する。 テンバコ 3箱	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11

平成 6 年度 発掘調査報告(第 1 分冊)

発 行 日 平成 7 年 3 月

編 集 鎌倉市教育委員会  
発 行

印 刷 朝日オフセット印刷株式会社